

---

# バラバラマジカル～魔法使いと殺人鬼～

人間狂愛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バラバラマジカル〜魔法使いと殺人鬼〜

### 【Nコード】

N8926X

### 【作者名】

人間狂愛

### 【あらすじ】

嘔吐き少年、南愛姫。またの名を零崎愛識。彼は呪われて、違う世界に移動させられ、振り回されて、殺人鬼のくせに平和な日常を過ごし、たまにちよっぴり殺伐な世界に巻き込まれながら、それでも毎日を、ただ流されるままに、流れに任せて生きていく。その命の灯が消え、その身体がただの肉の塊になるその日まで平凡に、明確な目的も持たず、世界に選択を委ねていく。

昔書いていた不人気小説のリメイク版(?)です。過度な期待は

しないでください。小説を読む時はある程度離れて読んでください。  
視力は大切にね、ジロジロ。

## 第零幕 零崎

いつも通りの時間、いつも通りの帰り道、いつも通りの町並み、いつも通りの友達と三人で下校。

けれど、この日は全てがいつも通りとは限らなかった。

通り魔。

ニュースでよく見る、近いけど遠い現実。

昨日だって通り魔の話を聞いて、京都の通り魔なんてあの《人間失格》のようだななんて、自分が被害に遭うとは思わずに、僕達は笑っていた。

走る、走る、走る。

襲い掛かる悲劇から逃れる為に僕達は必死に走る。

それでも逃げ込んだ路地裏で、さっきまで笑っていた友人は死んだ。だ。

何の容赦もなく、何の躊躇もなく、何の価値もなく、僕の友人だった彼は、その凶刃に貫かれて死んでしまった。

「くひひひひ……、俺を認めない世界が悪い！ 社会が憎い！ 俺は何も悪くないんだっ！！」

通り魔は笑う。滅多刺しにされて、血塗れで息のない僕の友人を踏み付けながら叫ぶ。何もかも自分以外のせいにして、子供が駄々

をこねるように喚く。

「お前も殺してやる！ 俺を認めない世界の住人なんて一人残らず殺してやるっ！！」

そして通り魔は僕を指差し吠える。

どうやら次のターゲットは僕に決まったようだ。

振り上げた拳に銀色が鈍く光る。

僕はこちらに突っ込んでくる血塗れのナイフを見つめながら、クビツリハイスクール途中までしか読んでないのになあ、なんて全く関係のない事を考えながら無抵抗で死を待つしかなかった。

しかし気付いた時には、死んでいたのは通り魔の方だった。

「……あれ？」

首から上と下が別れて絶命している通り魔を見て、僕は腑抜けた声を出す。

手元を見ると、先程まで通り魔が僕に突き刺そうとしていた血塗れのナイフが手の平の中にあった。

「うあ……愛姫ッ、お前……」

先程まで通り魔に怯えていた友人の声が聞こえた。

彼は今、僕に怯え恐れ、目の前の現実が信じられず、必死に声を

絞り出してながら否定できない現実に苦しんでいる。

僕はとりあえずこいつを安心させた後自首しに行くかなあ、なんてついさっき人を殺したとは思えないほど、呑気な事を考えながら振り向いた。

「ひっ  
」

彼は屍餅をついて後退る。

先程友人が殺され、もう一人の友人がその殺した相手を殺したんだから、その態度は当然か。

これは彼の望まぬ非日常なのだ。

非日常を求める人間は多いが、それは日常の大切さに気付いてないからだ。

だから実際に遭遇するとみんなそれから逃げだそうとする。

「とりあえず落ち着いて。これから僕は警察に出頭して裁判的な  
」

と、僕は彼を安心させるように手を差し延べる。

しかし、気付いた瞬間には僕は先程と同じように彼を殺していた。彼の心臓部に銀色を突き刺していた。

「えっ  
」

彼の口から真つ赤な液体が溢れ出す。

彼の瞳は僕の行動が信じられず、自分の状態が信じられないと訴えかけている。

「あれ？　なんで？」

僕は困惑する。

何故殺した。

何故殺してはいけない。

何故殺す。

何故殺さない。

何故。何故。何故。何故。

思考を深める。

罪悪感が沸いてこない。

悲壮感が沸いてこない。

人を殺してしまったのに。

人が死んでしまったのに。

「えっと……、通り魔を殺してしまった。別に復讐心や恐怖心からではなく、気付いた時には死体に変えていた。友人を殺してしまった。何の理由もなく、当たり前のように気付いたら、自然にナイフを突き刺していた」

状況整理。ナイフを持ったまま頭を抱え右往左往する僕。

日常から非日常へ変化。  
通常から異常へ変質。

一般人から連続殺人鬼に職業変更。  
クラスチェンジ

さっきまでの自分とは明らかに別人のような、まるで自分が作り変えられたような気分だ。

南愛姫（自分）ではなくなってしまったような、人間とは違う恐ろしい何かに変身してしまったような。

「なにこれ？ とりあえずこのまま警察に行った方がいいのかな？ それとも先に救急車と警察に連絡してからの方がいいのかな？」

唯一の家族である姉に言っても「またいつもの嘘？ アホな事言っていないでさっさと帰ってきなさい」なんて言われてしまうだろう。

狼少年は嘘を付きすぎて、信じてもらえなくなったのだ。

日常的に嘘を並べる僕の言葉を、しかも有り得ない非日常を、いくら優しく麗しいあのお姉様でも、簡単に信じてはくれないだろう。

それに血塗れで帰って驚かせるのもシスコンの僕としては遠慮したい。

てゆうか未来のことだけではなく、現在の事をしっかり考えよう。  
出会う人出会う人をさっきの友人みたいに殺してしまう事も有り



得るのだから。

「　　って、あれ？　これじゃあ舞織ちゃんみたいだね。まるで零崎みたい」

その時、僕の中にあるピースがカチツと嵌まったような気がした。

その瞬間、僕の意識は深い闇の中に落ちていく。

そして僕は生まれ育った世界に突然の別れを告げた。

目が覚めるとそこは白い空間だった。

上も白、下も白、右も白、左も白、何処を見ても影すら見当たらない真っ白い空間。

一面の白によって僕が浮いているのか、もしくは地面に足を付けているのかすらわからない不思議な空間。

広いのか狭いのか、長いのか短いのかすらわからない、ただ白いだけの世界。

「　　やあ、呪われた少年よ。悪魔の操り人形よ。気分はどうだい？　突然の事に驚いたりなんかしているかな？」

その空間に声が響く。男かも、女かも、子供かも、大人かも、老

人かもわからない不確かな声。

けれど一つだけわかる事がある。

その声は清らかで、優しくて、澄んでいて、心に響くような声だという事だ。

僕は声の主の正体を尋ねようと、この空間の事を尋ねようとするが、何故か声が出せない。パクパクと、間抜けに口を開いて閉じてを繰り返す事しか出来なくなっていた。

「ああ、少し声を出せないようにさせてるだけだから心配しないでいい」

声は当たり前のように自然に告げる。

「さて、とりあえず説明した方がいいかな？ 私は君達が神と呼ぶ者、或いは世界の管理人と呼ぶ者、或いは世界の意思と呼ぶ者。まあ、適当に呼んでくれたまえ。悪魔に呪われた哀れな無神論者」

声は僕の心を読んだかのように言葉を続ける。

神なんて人が作り出したものじゃなかったのか。

僕は想像上の物としか考えていない。

死後の世界も存在すら否定している。

てゆうか悪魔に呪われたっていったい何の話だろうか。

次々に疑問が浮かんでいくのだが、尋ねる為の手段が僕にはない。

「悪いけど時間がないから手っ取り早くいくよ。此処は私の住み処であり、居場所であり、仕事場である場所だ」

声は僕の心情を無視しながらも、僕の疑問にドンドン答えていく。

「そして悪魔が君にかけた呪いは“何の感情もなく呼吸をするかのように殺人を犯す”というものだ。君の持つ知識の中だと　零崎一賊というものが似ているね」

その言葉で此処に来る前の事を思い出す。

首を飛ばされた通り魔。

心臓に穴を開けられた友人。

何の理由もなく殺す殺人鬼。

僕八零崎二ナツタノデシタ。

「もちろん似ているというだけで完全に同じな訳ではない。もし全く同じなら覚醒した君に人を殺さないという選択肢は持てないからね」

声は補足する。

つまり僕は殺さないという選択肢を持てるという事なのだろうか。

「その通り。だから私は君をあの世界から引き離れた。その選択ができるようになるまであの世界で殺し回られるのは厄介だからね。あの世界は特別なんだ」

声の話を聞いても、僕には悪魔への怒りも、好きな小説の人物と同じ存在になれた喜びも、神様への感謝の気持ちも、通り魔や友人への罪悪感も一切浮かばなかった。浮かべなかった。

何処か壊れてしまったんだろうか。変質してしまった僕にはわからない。僕が愛姫<sup>ぼく</sup>のままだったのならわかったのだろうか。

「私は人間を平等に愛し、平等に何もしいないが、イレギュラーによる異常に対しては行動しなければならぬ。それが君を此処に招いた理由、君は別の世界に送り出す理由」

別の世界？

「そう別の世界だ。私が管理する世界の一つ。その世界の裏側は日常的に戦いがあり、君の世界にはいなかった特別な存在もいる」

声の話を何処か他人事のように聞きながら僕は別の世界というものに興味を抱いていた。

違う世界。違う住人。違う環境。違う技術。違う法則。違う時間。

新しい物に溢れた世界。

「私には悪魔の呪いは解けない。だから君をその世界に送り、君にその世界で生きていける力を与えよう」

声は申し訳なさそうに話を続ける。

「まずは君がその衝動を抑えられるように戦争の時代に送ろう。零崎であって零崎でない君なら抑えられるはずだ。そしてある程度抑

えられるようになったら平和な時代に送る。その世界の物語の主軸になる世界へね」

戦争。

僕は何人殺すのだろうか。

愛する人間を愛するからこそ物言わぬ肉塊に変えてしまうのだろうか。

「もちろん呪いに抗うか受け入れるかは君の自由だけどね」

声の言葉に僕は苛立ちを感じる。

簡単に負けを認めるなんてごめんだ。

「さて、そろそろお別れの時間だ」

自称神様はもう説明は終わったとばかりに突然別れの言葉を告げる。

「じゃあね、呪われた子供よ」

それを聞いて僕は心の中で呟いた。

「ばいばい。僕を救えなかった神様」

それは何故か言葉に、声にすることができた。

口を動かした訳ではないのに白い空間に響き渡った。

「ふふふ、君の人生に幸福が溢れる事を願おう」

そして僕の意識はまた暗転した。

新しい世界への期待と不安を心に宿しながら。

## 第一幕 新世界

目が覚めたらそこは戦場だった。

少し離れた場所には大勢の人間と、絵本や小説や漫画、空想の世界でしか見た事ない亜人。

その人間達が雷や、炎や、氷なんかを自由に操って戦っている。

燃える草原、ひび割れた大地、凍てつく木々、切り裂かれた死体、鳴り響く雷鳴。どうやらファンタジーも現実<sup>リアル</sup>になれば、ファンシーではなくなるみたいだ。ただの戦う手段の一つでしかない。

僕は考える。

彼等は所謂魔法使ってやつかな？ もしくは魔法使いの格好をした超能力者？ まあ、とりあえず此処は魔法使いの戦場の中みたいだね。

周りの現状確かめた後、僕はとりあえず自分の状況を確認する事にした。

身体は十六歳の自分から十歳ぐらいの身長にまで縮んでいる。視界の低さに少し慣れない。

服装は真っ黒なズボンに真っ白なシャツを着ていて、その上に黒いジャケット。

クセラレータ  
ヴィジュアル系のような、厨二病のような服装を見て「まるで一<sup>ア</sup>

方通行ようだ」なんて感想をポツリと漏らしながら苦笑いをする。

「肌の色と目の色と中性的な顔立ちは似ているけど、あんな白髪の凶悪面にはなりたくないかな」

そしてそう言って更に確認を進める。

人差し指に嵌まった指輪とズボンに付いたチェーンは昔から愛用しているもの。ピアスは左に二つ、右に一つと前の世界と変わっていないようだ。

僕は少し安心する。

だがしかし、同じ物ばかりの中で、確実に前の世界で持っていなかったものが地面に落ちているのを僕は見付けてしまった。

魔法使いのような真っ黒なロープ。銀色に光る鋭いナイフが数本。

たぶんあの人（自称神様）が用意してくれたものだろう。これで姿を隠して殺せという事なのだろうか。

神様と名乗った割に殺人を勧め、許可するような行動はどうなんだろう。

感謝はするが感心はしない

「戯言だけどね。なーんていーたんみたいに言ってみたり」

さて、とりあえず見た目の確認はこれぐらいだろうか。

次は中身の確認。



僕は宝探しのような感覚で頭の中を探っていく。

うん、やはりというかなんとというか思った通り全く覚えのない知識がある。

魔法という前の世界では持ち得なかった力。これがあの人の言っていた、与えてくれた力なのだろう。

使える魔法の種類は3つ。

1つは、身体強化。  
カントウス・ベラークス  
戦いの歌

2つ目は魔法の矢。  
サギタ・マギカ  
魔法の射手

そして最後に、何故かシャボン玉のような名前の付いていない魔法。

僕と同じくように名前がないし、使えるのも僕だけの神様からのプレゼント。

姉との大切な思い出に関係あるコレを殺す事に使えとは……どうやらあの人は案外性格が悪いらしい。

まあ、とりあえずこの3つの魔法と零崎の本能による殺人、もしくは殺戮が僕の武器であり手段。減る事も増える事もないこれからの人生の相棒のようだ。

確認は終わった。

次は実践して実戦する。

僕の、僕による、僕の為の零崎が幕を開ける。

標的は魔法使い達。

人間も亜人も関係なく、平等に無慈悲な慈悲を与えよう。

「おい、嬢ちゃん。此処は危ねえからさっさと逃げろ！ 巻き込まれて死にまうぞ!？」

声が聞こえて振り返ると、そこには屈強そうな男、髭を生やした筋骨隆々の男性が僕を見て驚き心配そうに声をかけてきた。

標的は決まり、例外はなし。

「ごめんねおじさん」

「あー？ 気にすんな。いいからさっさと行け！」

男は戦場には似合わない笑みを浮かべる。僕がどんな存在でこれからどうなるか知らないからこそできる微笑みを。

「 それでは、愉快に素敵に零崎を始めさせていただきます」

僕が言葉を発したと同時に、地面からシャボン玉がポコポコと出現する。

男は突然現れたシャボン玉に一瞬驚くが「おおつ、可愛いじゃねえか」なんて言葉を発しながらそれに触れる。

その瞬間、男の右手の肘から先が　パンツという音と共に弾けて消えた。

「ぐつ、ぎゃああああ　ああああああああああああああああア!？」

男はみつともなく醜く悲鳴をあげる。

突然の自体に処理が追い付かないのか、キョロキョロと目を動かしながら、出血の止まらない肘を抑えその場に倒れ込んで、身体をだらし無く忙しく動かす。

僕はその様子をじっと見つめる。

前の世界では見る事ができなかった人間の姿を記憶に刻み込むように、ただ静かにじっと見守る。

「お前、何をっ……………」

荒い息を吐きながら男は尋ねる。

戦場に迷い込んだ子供を助けに来たと思ったらいきなり右腕が弾けたのだ。

理解できなくても無理はない。

でも僕はわざわざ理解させてあげる時間をあげるような優しい人

間ではない。というか人間ですらなくなっている。

「零崎を始めるって言ったじゃん。油断する人間は早死にするよ？是非来世で今回学んだ事を活かしてね」

僕は笑う。

天使のような悪魔の笑顔。

男にはそんな風に見えているのではないだろうか。

恐怖と怒りが入り交じった表情の彼からそんな無駄な予測を立ててみる。

「　　はいはい」

言葉と共にいくつもの可愛らしい泡の風船が男の身体を囲む。

「やめっ　　」

パパパパンツ　　と音が響き、　弾けて、爆ぜて、消えて、混ざった。

地面ごと消しさったので、もはや血液すら残っていない。

彼がいた痕跡は全てこの世から消失したのだ。

僕は頬に飛んだ血を舐め取る。

彼の最後の一滴を舌で遊ぶように味わう。

血も肉も骨も髪も、全てが全て土に還ることなく消失した。

もしかしたら少しぐらい存在しているかもしれないがどうでもいい。僕は殺人の痕跡を消したい訳ではないのだ。

ただ、新しい自分の力に酔いしれてこんな風にしてしまっただけなのだから。

僕は戦場を見る。

僕が行った事に気付く者はいない。

少し離れた場所に関心を寄せていたら、目を逸らすなんて事は戦場では命取りなのだから当然か。

別に気付かれようが気付かれまいが、現在の僕に零崎を止める方法は、手段はないのだから関係ないが、どうせなら自分の実力を試したい。

人間は強大な力を得ると、それが暴力であれ財力であれ知力であれ、酔いしれて変わってしまうものだ。

バトルジャンキー  
戦闘中毒も似たようなものだろう。

試したいから相手の都合も考えずに力を奮う。殺人鬼になった僕でもそれは人間と変わらないようだ。

今の僕はさながら突然得た大量の給料の使い道を考える子供。

大人ではないから加減もわからない。

黒いローブを纏い戦場を見つめる。

醜く争う人間達は、僕にとっては美しく、浅ましく、どうしようもないほど途方もないほどに純粹に見える。

戦場に正々堂々を求めるのは間違いだ。だから、だからこそ僕は卑怯な不意打ちで彼等を終わらせよう。零に変えてしまおう。

「僕は零崎だ。聞こえてないかもしれないけどそれが僕の名前だ。この名前を心に刻んで恨み妬みながら死んでいってくれ」

一歩一歩、地面を歩みながら宣言する。その度の下から上から右から左から、何処からともなく溢れる戦場に似合わないシャボン玉。

弾けて爆ぜて混ざり合う悲鳴と血肉。

阿鼻叫喚。地獄のような血飛沫の飛び交う世界。

[illegible]

僕は笑う。

狂愛。僕の心の中に巣くう感情。

僕は人間が好きだ。愛してる。

どんな表情も好きだ。  
どんな行動も好きだ。

いろんな人間のいろんな姿をこの目に焼き付けたい。

あの新宿の情報屋が羨ましかった。

日常にいる僕には出来ない経験も計画も契約も簡単にできてしま  
うのだから。

でも今の僕にならできる。

非日常の住人となつた僕になら。

「お前……、何者なんだッ!？」

生き残っている魔法使いの一人が戦場を歩く僕に尋ねる。

魔法も同時に放つが、魔法で守られた僕には届かない。

「人間を愛し慕い敬っている　愉快的殺人鬼だよ」

パンツと乾いた音と共に彼の身体は弾ける。

悲鳴をあげる暇もなく一瞬で彼の身体は消失した。

「げらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげら  
げらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげら  
げらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげらげら」

人類最終のような笑い声をあげる。

僕には似合わない下品な笑い声を。

恐怖を与えてもつと彼等の表情が歪んでくれるように。

そしてしばらくすると視界には真っ赤な血飛沫と肉塊が広がる草原になっていた。

はじめての魔法。はじめての戦場。はじめての零崎。はじめての人間観察の結果。

僕は満足しているはずだ。

しかし何故か心が満たされている気がしない。

「まあ、いつか」

どうでもいい事を真剣に悩むのは僕には向いていない。

それよりもこれからどうするのかを考える方がよっぽど優良だ。

とりあえず零崎を続ける為に戦場を回る。衣食住については住は適当な町の家を使えばいいし、衣食とかその他も同じだ。確実に殺してしまうだろうが、仕方ないと割り切る事にしよう。



殺人鬼のくせに正義の味方ってのもおかしいし、存在自体悪なんだから悪は悪らしく生きよう。

とりあえずその場のノリで生きてみよう。

僕のこの世界での物語はまだ始まったばかりなのだから。

## 第二幕 過去の未来の英雄

はじめて零崎を開始したあの時から時間が経ち、僕はまた戦場にいた。

様々な戦場を巡り、様々な町並みや景色を見回り、この世界について知り気付いた事がいくつかある。

どうやらここは魔法先生ネギま！ の世界らしい。

僕がいる時点で少し違うから、ネギまを元に創られた世界が類似した世界だろうか。

まあ、とにかくその世界と同じような世界で今は魔法世界で戦争中。

つまり英雄が誕生する前なのだ。

あれから何度も何度も戦場に赴き、目撃者も残さずに殺していたのだが、未だに彼等に出会ってはいない。

それどころか最近はどうやら賞金首にされたみたいだ。

念波で死ぬ前に伝えたんですね、わかります。

名称：ゼロザキ

年齢：十代前半

種族：おそらく人間

容姿：黒いローブを着た子供

能力：シャボン玉に酷似した魔法  
賞金：100万ドル

オーバーキルドブラック  
黒き制裁なんて呼ばれてるみたいです。

哀川潤さんのファンだから嬉しいけど、恐れ多すぎて困る。

てゆーか子供の殺人鬼なんだからキティちゃんことエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルのせいになればいいのに。

賞金首になってしまってから、僕はこれ以上情報バレると生活が面倒だから、零崎を抑える訓練をしている。

あの人は零崎を抑えられるようになっていた。

零崎であって零崎でないとっていた。

嘘は言っていないだろうから、僕は訓練次第で呪いをどうにかできるということだろう。

それに気付いてからは少しずつ努力をしている。

だが、やはり難しいものは難しいものだ。

こんなので目標の紅き翼アラルブラに仲間入りして英雄になっちゃおう作戦はできるのだろうか。

そして未来でタカミチに零崎さんお久しぶりですとか感激しながら言われたり、魔法世界に行ったらキヤーキヤー言われるような存在になりたい。

ミハーで悪い？

せっかく漫画の世界に来たんだし、僕は自由気ままに楽しくやりたいんだよね。

なんて考えてる間にも戦いは続く。

零崎は禁止。

ただ戦って実力を磨くだけの戦争。

魔法の雨を避けながら、なるべく殺さないように連合も帝国も関係なく無力化していく。

少し気を抜いたら殺してしまうから難しい。

何人かの人間を殺してしまったし。

「おい、お前　ぶぎゃっ」

変なオッサンが喚いていたから顔面に蹴りを入れて黙らせる。

優しく無慈悲に、僕は戦場を鎮圧していく。

身体強化なんてしなくてもこの身は殺人鬼。

たかが人間には負ける事はない。

障壁なんて使えなくてもこの身は零崎。

避けるのなんてたやすい。

何人でかかろうともこの身は悪魔と神に作り変えられた存在。

有象無象に負けはしない。

「さあ、零崎を始め　　っていけないいけない。殺しはだめだめ。不殺主義に目覚めたんです僕はっ！　　なーんて、もちろん戯言だけどね」

身体が幼くなつた事と、厨二病と、新しい世界、新しい力、血飛沫舞う戦場のせいでテンションが上がりやすい。

気をつけないと皆殺ししちゃいそうで大変だ。

それから数日後。

何度か戦場で訓練している内に、零崎をある程度抑えられるようになった。

どうしても抑えられない場合は自分を傷付けて我慢するという選択肢も出来た。

再生能力も回復手段もないから最終手段だけどね。

もちろんその訓練の為に何人もの人間が素敵に愉快に痛快に死んでいった。

悲しみも罪悪感もないのだけれど。

そして今日も僕は戦場にいる。

最近食べるか寝るか戦うかしかしてないけれど、なんて十才児なんだろうか。

まあ、元々は十六歳だしいいだろうか。

なんてどうでもいい考えていると巨大な魔力の塊が近付いてくるのを感じ、僕は真後ろに跳ぶ。

そして横に視線を滑らせるとそいつらはいた。

アラルフラ  
紅き翼。

魔法世界を救った英雄（予定）。

千の呪文の男。

ナギ・スプリングフィールド。

旧世界の侍マスター。

青山詠春。

千の刃の男。

ジャック・ラカン。

そして変態のアルビレオ・イマ、苦勞人のガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ、爺シヨタのフィリウス・ゼクト。

「全員勢揃いか……、丁度いいね」

そう呟いて、僕は両手をあげて無抵抗を装いながら彼等に近付いていった。

飛べないからもちろん歩いてだけれど。

「てめえ、何者だ!？」

ナギの挨拶代わりの千の雷を避けた後、キリアキブル・アストラペー両手を広げて自己紹介。

「やあ、紅き翼諸君。僕の名前は零崎愛識。せろふなきいとしきちよつとお茶目な十才児さ。好きなものは人間。特技は解体。趣味は読書。正義と平和と人間をこよなく愛する愉快な殺人鬼だよ」

いつの間にか戦場には僕と紅き翼しか動ける者はいなかった。

「黒いロープの子供……、もしか黒き制裁ですか？」

「あん？　なんだよアル。おーばーなんたらって」

「黒き制裁だ馬鹿っ!」

ナギ、アル、詠春と、コントのような会話が続く。

緊張感が全くないのが彼等らしい。

「黒き制裁つつたら賞金首だろ？　連合も帝国関係なく皆殺しって  
いう」

「いやいや、殺す気はなかったんだよ。戦争なんて馬鹿な事をする

連中を止めたかっただけさ。弱すぎて死んじゃっただけで最近はやんと殺してないでしょ？」

ラカンの言葉にすかさず言葉を滑らせる。

今から仲間になろうって相手に悪い印象は与えたくない。

もちろん殺す気はなかったなんて戯言なんだけど言い訳は必要だ。

開き直るか否かで相手の心象は変わる。

「へえ……面白え。おい、お前ッ！」

きたきたきた。

これはテンプレ通り仲間になれよのパターンですね、わかります。

ここから僕は英雄街道爆進していくことになるのだろう。

《正義の味方になりました、ただし解決方法は皆殺し》みたいな  
っ！

「俺と戦いやがれッ！」

しかしナギが発した台詞は僕の予想とは180度違った。

獰猛な目でこちらを射ぬくかのように睨み付ける戦闘狂。

……転生して戦争の時代に来たら仲間には誘われるもんじゃないの  
だろうか。



「ご都合主義に僕は嫌われているらしい。

「おい、ナギっ！」

「うつせえ、詠春。強そうな奴ならガキだとか賞金首だとか関係ねえだろっ。行くぜ！ 千の雷ッ！！」

言葉と共に撃ち出されるのは極太の雷。

馬鹿の馬鹿魔力によって生み出された力の渦が僕に向かって直進してくる。

「ちっ！」

すかさず僕は舌打ちと共にシャボン玉で雷を相殺した。

辺り一面に舞う煙。

その煙が晴れた瞬間、目に映る赤。

「おらッ！！」

ナギ・スプリングフィールドは僕がこれくらいで終わると思っ  
てなかったようで、魔法を放つと同時に突っ込んでいたみたい  
だ。

ナギが打ち出した拳を軽くないし、ナイフを逆手に持って切り返  
す。

超反応。

本能の赴くままに首元掛けて切り掛かる。

しかし相手は戦いの天才。

接近戦が得意な魔法戦士タイプ。

首を振るだけでナイフを避け、今度は蹴りを放つ。

当たれば吹っ飛ばされそうな程素早い蹴りを。

僕はそれを後ろに跳んでかわす。

軽く掠ったが問題はない。

この程度なら戦闘に支障はない。

と、少し怯んでしまった瞬間にナギは突撃してきた。

「オラオラオラオラオラ」

拳が、肘が、脚が、膝が、僕に高速で向かってくる。

それを捌き、避け、受け止め、僕は防戦一方だった。

「どうしたあ？　こんなもんかよ、てめえは！？」

その言葉を聞いて、僕はナギの足を踏み、怯んだナギの心臓目掛けてナイフを走らせる。

「おわつと」

避けられないように足を踏んだまま突き刺そうとしたのだが、彼は僕の腕を横から殴る事でナイフを防ぐ。

そしてその痛みにナイフを落とした隙を狙い、両手の平で僕の胸の辺りを強く押した。

「っはっ  
」

一瞬息ができなくなり、僕はそのまま弾き飛ばされる。

そして、その瞬間を狙い、ナギは呪文の詠唱を始める。

「来たれ、虚空の雷。薙ぎ払え（ケノテートス・アストラプサトー・  
デ・テムナトー）。雷の斧！！」ディオス・テュコス

やっぱり戦闘経験が段違いか。

目の前に接近する黄色の閃光への対処を考えながら、諦めにも似た感想が過ぎる。

これが英雄。これが一流。

これが天才。これが戦闘。

これが魔法。これが本物。

今までの相手とはレベルが違う。

流石チートキャラ。流石バグキャラ。

慢心していた僕とは大違いだ。

態度はふざけているが、戦闘には常に全力で取り組んでいる。

シャボン玉でもこのタイミングだと相殺仕切れないだろう。

これが油断。

与えられた力で満足した結果。

これが甘え。

所詮漫画の世界だと侮った結果。

これが喜び。

自分より上の人間に出会えた結果。

これが悔しさ。

これから初めて敗北という結果に至る事に対する思い。

そして雷が僕の身体に直撃する。

「 やったかつ!？」

煙に包まれた空間を凝視して、本来なら無傷で敵が存在しているフラグを立てるナギ。

ここで追い撃ちをかけないところが彼らしいと僕は思った。

そして煙が晴れる。

その先にはとても無事とは言えないレベルでボロボロの僕がいた。

咄嗟に身体強化を使って避けなきゃ死んでいただろう。

強力で強大な威力だった。

本物を初めて味わった。

「強いね……、参った。降参っ！」

最後に笑顔でそう言い残して僕は倒れた。

虐殺でも殺戮でもないはじめての戦いは、僕の完全敗北で幕を閉じたのだった。

### 第三幕 愉快で素敵な仲間達

気がつくと僕は何処かのベッドの上に寝かされていた。

周りを見る限り、ホテルの一室だろうか。

何故こんな場所にいるのだろうか。

えっと、寝る前の記憶は確か……ナギ・スプリングフィールドに一撃も入れる事も出来ずに無惨に敗北。

「Oh……ナンテコッタイ」

それより僕、気絶し過ぎではないか。

この前まで平和な日本で姉に過保護に育てられていた高校生だからとか言い訳してもいいだろうか。

……お姉様、元気かなあ。

なんて前の世界で唯一の家族だった姉の事を思い出す。

もちろん流血ではなく血縁関係の家族である。

姉の事を思い出すと改めて世界でひとりぼっちだという事を自覚する。

この世界に零崎一賊はいるのだろうか。

いないのであれば目覚める人間はいるのだろうか。

弟でも妹でも目一杯愛してあげるから、いつか出来ますように。

と、まだ見ぬ家賊への愛を深めていると、コンコンコンツと小さなノックが聞こえた。

余談だけどノック2回はトイレノックって知った時は驚愕したものだ。

「おや、もう起きてましたか」

返答もせずにはーっとしてると細目のイケメンが入ってきた。

変態アルビレオ・イマである。

「変態という名の紳士ですよ」

口には出してないのだが、どうやら読心術はデフォルトらしい。

最近心を読まれる機会が多くてビックリだ。

「一応手当ではしておきましたが大丈夫ですか？」

「ありがとね。全然大丈夫だよ」

身体を見てみると本当に痛む部分どころか傷ひとつない。

流石は一流の魔法使いということだろうか。

「いえいえ、男の娘の身体に傷を残してしまうなんて紳士失格ですから。金髪赤眼の低身長ツリ目ロリータとは素晴らしいですね」

「すみません。その距離から一步も近付かないでください死ね」

感謝なんてしなければ良かったと落胆する。

アルビレオマジ変態。マジキモい。マジ死ねばいいのに。

ちなみに僕は日本育ちで日本語しか話せないけど、イングランドと日本のダブルだったりする。

「おやおや、嫌われてしまいましたか。ふふふ、しかしハーフだったとは更に素晴らしい」

マジ死ねよアルビレオ死ね。

てゆうかハーフって差別用語になってるらしいぞ。

全く気にしないけれどね。

とりあえずあの笑顔を絶望に歪めたい感情を抑え込みながらベツドから立ち上がる。

軽く伸びをして身体をポキポキと鳴らす。

「さて、目が覚めたならナギから話があるみたいなのでこちらにどうぞ」

やれやれ。



それじゃあ、紅き翼との楽しい楽しいお話と行きますか。

僕は怠い身体を引きずりながらドアを開けて外に出た。

案内された部屋は同じホテルの少し広い部屋だった。

中にはベッドが二つ、テレビが一つ。

他にもキャビネットや電灯などがあつたりする普通の部屋だ。

どうやら旧世界も魔法世界もあんまり変わりはないらしい。

もちろん動力や効果の違いはあるのだろうけれど見た目は普通だ。

部屋の中にはナギ・スプリングフィールド、青山詠春、ジャック・ラカン、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ、フィリウス・ゼクト、そして案内してくれたアルビレオ・イマ、客人の僕の合計八人。

この人数でこの部屋は少し狭いが、タカミチ少年達がない分マシだろう。

「どうやら元気なようじゃな」

最初に話し出したのはゼクト。

シヨタな割に爺口調なのが気になる。

「まったく、ナギの馬鹿は……。すまなかったな零崎」

そして次は詠春。

頭を押さえながらナギを叱り付ける。

しかし詠春とガトウだけが常識人って苦労してそうだなあ。

「うつせえなあ詠春は……。わかってるって言ってんだろ」

「てゆうか話って何？」

このままだとナギと詠春の漫才が始まりそうな気配なので強引に話を変える。

「ああっ、そうだった。おい……。零崎だったよな？ お前、俺らの仲間になれよ。俺達も戦争終わらせる為に戦ってるんだ」

ここでテンプレでご都合主義な勧誘。

ナギと戦う前なら一も二もなく飛び付いてOKしただろう。

しかし、惨敗したのに仲間になるなんてあるはずがない。

今の僕は与えられた力だけで満足していた二流だ。

彼等の仲間に相応しくない。

確かにある程度なら蹴散らせるが一流相手だと話にならない。

弱い。弱い。弱い。弱い。  
貧弱。軟弱。脆弱。最弱。

そんなどうしようもなく弱い僕にも、プライドというものはあるのだ。

レベル1でレベル50の勇者パーティーに入るなんて足手まといで惨め以外の何でもない。

「ナギ、僕は弱い。君と戦ってそれを思い知った。だから君達と並び立てる強さを手に入れるまでは仲間にはならない。……だけど僕が君達と支え合える実力になった時、その時は僕を仲間に加えてくれないかな？」

僕は静かに情けない言葉を告げる。

もはや僕の中から慢心は消えている。

「おう、待ってるからなっ！」

ナギの笑顔は眩しくて、まるで人類最強のように自信に溢れた表情だった。

そしてこの時が流されるままだった僕に目標が決まった瞬間だった。

それから僕は紅き翼の面々に別れを告げ、大小関係なく様々な戦場に訪れた。

もちろんたまに殺してしまうけれど、基本的には不殺主義を貫いた。

身体能力の強化、戦い方の観察、魔法の強化を中心に、とにかく実戦を重ねた。

気付いたのはやはり僕は魔法を3つしか使えないという事。

空を飛ぶのも無理。

障壁も無理。

千の雷なんか問題外。

かんかほう  
感卦法？ なにそれ食べれるの？ と言った具合だ。

魔力を身体強化、魔法の射手、シャボン玉以外に使えない。

しかし使えば魔力が増えていくのがわかったのだけは良いだろう。

そして無音拳や神鳴流なんかの魔力を使わない特技だがやはり無理だった。

才能というものが皆無だったのだ。

肉弾戦も我流でいくしかないだろう。

とりあえずナイフの使い方もしつかりせねばならない。

ちなみに紅き翼の面々とは戦場で会って模擬戦感覚で何度も戦った。

最初の内は全く歯が立たなかったが、最近ではななかいけると感じるレベルになってきた。

勇者パーティー入りはもうすぐだろう。

なんてフラグを立てたのがダメだったのだろうか。

次の日紅き翼は世界の敵となった。

英雄から一転して裏切り者となった彼等。

僕はその足取りを追っている。

とりあえずあいつらが本当に裏切り者な訳ないし、騙されたのはわかる。

原作知識がある僕には状況が手に取るようにわかる。

という訳で困った時に恩を売ろうという作戦を考えて実行しようと思っていたのだが。

「主と主の”紅き翼”は無敵なのじゃろ？」

現在、原作の名場面。

やっと見付けたら最強の7人がどうのこうの言ってる瞬間だった。

さて、どうやって入ろう。

A：僕様ちゃんを忘れるなーっ！

B：へっ、お前等だけに良い格好させるかよ！

C：すいません、牛井まだですか？

D：いやー、昨日実質2時間しか寝てないわー。2時間しか寝てないわー。

……まともなのがねえ。

てゆーか意味がわからねえ。

まったく

「傑作ですね」

死ねよアルビレオマジで。

結局、あの後アルビレオのせいで見付かった僕は正式に紅き翼に参加し、コスモ・エンテレケイアタイミングは最悪だったけど、世界を敵にまわしながらも完全なる世界とやり合う事になった。

「油断するなナギ」

「サンキュー、詠春！」

「ジャック、どっちが多く倒せるか勝負しようよ」

「はっ、俺様に勝てると思ってるのか愛識！？」

「ふふっ、私はジャック賭けることにしましょう」

「儂は愛識で大穴狙いじゃ」

「はぁ……お前ら、真面目にやれよ」

こんな戦いの日々や。

「主は本当に馬鹿じゃな」

「うつせえよ姫さんっ！ こちとら魔法学園中退だコラ」

「はぁ、また喧嘩か……」

「妾は見ていて楽しいがのう」

「ちなみに僕は学校自体行ってないかなあ」

「零崎さんですか？ 僕も行った事ないんですよね」

「俺様も行つてねえな」

「低学歴集団じゃの」

「タカミチやアスナ姫達はこの戦争が終わったら学校にでも通わせ  
てみるか？」

「愛識が行ったら壊滅しそうですね」

「殺して解して並べて揃えて晒してやんよっ！」

「」「やめろっ！！」」

こんな日常を過ごし。

「さて、愉快に素敵に零崎を始めましょう」

「おらっ、千の雷キリアキブル・アストラペー！！」

「神鳴流奥義、真・大雷光剣ッ！」

「ふふっ、楽しくなってきましたね」

「豪殺居合拳ッッ！！！」

「馬鹿弟子はまだ魔力でごり押しじゃのう……」

「羅漢適当に右パンチ！」

「《愛識ちゃん印の観光ツアーにご招待、ただし逝き先は地獄》  
みたいなのっ！」



そして仲間を増やして次の町へをやりながらついに最終決戦の日  
まできた。

## 第四幕 殺人鬼の誕生日

『殺し名』という裏の社会で有名な七つの戦闘集団が存在する。

上から勾宮、闇口、零崎、薄野、墓森、天吹、石凧の7位までで構成されている集団なのだが、零崎一賊はその中で最も忌み嫌われている殺人鬼集団だ。

この世で最も敵に回すのを忌避される醜悪な軍隊にして、この世で最も味方に回すのを忌避される最悪な軍隊。

邪悪と冒涇の宝庫。

理由なく殺す殺人鬼。

血の繋がりでなく、流血で繋がっている一族。

一見ばらばらなようで、結束は固く、家賊に仇なすものは老若男女人間動物植物の区別なく皆殺し。

一般人として暮らしていた者がある日突然零崎の血に目覚めるといふ。

そして零崎ならお互いが零崎だとわかる。

もちろんこの世界には殺し名どころか零崎一賊も僕しかいない。

長兄にして唯一の零崎なのだ。

しかし運命というものは皮肉なもので、僕は誕生するはずがない  
新たな零崎の、この世界で最初に生まれた零崎の誕生の瞬間に出会  
う事となった。

記念すべき最初の私の家賊に。マイファミリー

ぜろざきかなしき  
零崎叶識。

歓迎しよう、私の弟よ。マイブラザー

それは空が泣いているような雨の日だった。

その日はナギ達紅き翼とは別行動。

単独で完全なる世界に協力している奴らの殲滅を担当すること  
なっていた。

「さあ、皆さんにお待ちかねの零崎をプレゼントします」

いつも通りの零崎。

「うわっ、やめっ」

「助けてく」

いつも通りの命請い。

「この悪魔め！」

「呪い殺してや」

いつも通りの罵詈雑言。

「やだっ、来ないでっ」

「だから俺は嫌だっって言っただんだ！」

そしていつも通り、零崎を終えた後は死屍累々の光景が広がっていた。

生き残りは僕一人。

仕事は今日も完璧。

「London Bridge is broken down,  
Broken down, broken down, London  
Bridge is broken down, My fair  
lady」

一仕事終えて、鼻唄を歌いながらの帰り道。

嫌いな雨の中、傘も差さずに飛べない僕は歩いて帰っている。

「飛べない零崎はただの殺人鬼だ」

なんてくだらない事を言っていると、僕はおかしな気配を感じた。

初めての感覚だけど、これは間違いなく零崎の 家賊の気配。

有り得ない。

でも有り得ないなんて事は有り得ないってグリードさんも言ってたっけ。

気付いた時には僕は走り出していた。

瞬動も使わず、己の脚力のみで家賊目掛けて全力疾走。

びしょ濡れになりながらも渾身の力で雨の雑木林を走り抜ける。

そして森の中に小さな小屋を見付けた。

古くててばろい、でも温かみのある小さな小屋を。

ゆっくり近付き扉を開けると、そこには小さな少年が一人。

僕よりも若い少年が一人だけいた。

もちろんそれは生きている人間は、の話だけれど。

少年の周りには恐らく両親だろう人間の首無し死体。

少年は自分の手には不釣り合いな大きな包丁を赤く染めながら茫然としていた。

「やあ、何か良い事でもあったかい？」

僕が話し掛けると少年は初めて僕の存在に気付いたようで、その包丁を僕に向けて突き刺そうと突っ込んでくる　　が殺人鬼歴は僕の方が長いのだ。

嘗めてもらっては困る。

慢心を捨てた僕に成り立ての一撃が通用するはずがない。

包丁を指で挟みそのまま叩き折ると、少年は折れた包丁を手放し、床に滑るように座り込んだ。

僕はその様子を黙って見つめる。

「僕の名前は零崎愛識。本名は南愛姫っていうんだけど、どっちかって言うくと零崎が本名で南を偽名に使うかな。偽名をいちいち考えるのなんて面倒だしね。ちなみに君と同じ理由もなく人を殺す殺人鬼と、それに一応零崎一賊の長兄をやらせてもらってるよ。と言っても家賊はまだ僕しかないんだけどね」

少年はまだ混乱状態のようだ。

僕の言葉のマシンガンに頭がついていけない。

しかし僕は構わずに言葉を紡ぎ続ける。

「とりあえず君は零崎という名の理由なく息を吐くかのごとく殺す殺人鬼になった。これはおーけー？　まあ、つまり僕は君を勧誘しに来た訳だよ。だからさ　　」

一呼吸入れる。

初体験するのは緊張するね。

「僕の弟にならないかい？」

森の中にある村から離れた小屋。

俺は両親と三人で仲良く暮らしていた、仲良く暮らしていたはずだった。

そう、はずだったのだ。

気付いた時には包丁を持って、両親の首を切り落としていた。

意味がわからない。

確かに小さな家も、貧乏な家庭も、遊びに行くのに不便な場所も、不満はあげたらきりが無い程あった。

人間なんてそんなものだ。

今の自分が幸せなんて事に気付かずに更に幸せを求め、失った時にはじめて気付く生き物だ。

しかしだ。

何故自分は幸せな日常を自分で壊した。

何故自分は両親の死を悲しんでいない。

何故自分は両親を殺したのを当たり前のように感じている。

そんな混乱の中に彼女      後で聞いた話によると彼らしい      は  
来た。

殺人現場を見て「良い事があったかい？」なんて聞いてきて、いきなり切りかかれても平気で、何事もなかったかのように振る舞う。

そんな金色の女神様の名前は零崎愛識というらしい。

聞いた事がある。

黒き制裁、人類狂愛なんていろいろ呼ばれてる賞金首で、あの有名な紅き翼の一員。

何故彼は俺に      ってさっきから説明してるか。

理由なき殺人鬼、零崎一賊か……。

あはは、ごめんな父さん、母さん。

どうやら俺、質の悪い殺人鬼になっちゃったみたいだ。

意味不明で理解不能な言葉なのに、この人の言葉を聞くと安心してしまう。

自分の中にピースが嵌まっていく。



とりあえず今の俺に選択肢なんてひとつしかないよね？

だからこう言うしかない。

せつかく宛てもない人生に宛てができたのだ。

どうせ死ぬならこの人に着いて行ってみよう。

「よろしく姉ちゃん。とりあえず俺にも名前くれない？」

俺の零崎がこれから始まります。

よし、初弟獲得。

しばらくはナギ達と別れてこいつが生きていけるように鍛えるかな？

もちろん完全なる世界狩りもやりながらだけれど。

とりあえずは零崎一賊の掟とか関わったらいけない奴とか石に人類最強や人類最悪とかはこの世界にいないだろうけどいろいろ教える事はたくさんあるね。

巫女子ちゃんネタとかも仕込んでおくべきだろうか。

優しく、厳しく、激しく、緩かに丁寧に仕付けてあげよう。

僕は殺人鬼は嫌いだけど家賊は好きだから殺して生かそう。

実験台は完全なる世界（零崎の敵）。

被験者は僕の弟（零崎の次男）。

担当者は僕（零崎の長男）。

真っ赤に彩って飾ってさしあげましょう。

誕生日パーティー（愉快的連続殺人）の始まり始まり。

あ、でも一つだけ言っておかないと。

「弟よ、僕は男だからお兄様と呼べ」

「えっ!？」

間抜けな顔の弟を見て、僕は久しぶりに楽しい気持ちになった。

## 第五幕 最終決戦

現在位置は、完全なる世界の本拠地である世界最古の都、王都オスティアの空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』。

僕達、紅き翼はついに最終決戦間近まで来ることができたのだ。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の秘密結社なんてそんなもんだ」

ピリピリとした緊張感の中ナギとラカンが言葉を発する。

僕はその中でも緊張なんか全くしていない。

ナギが勝つ。僕達が勝つ。

正義が勝つ。人間が勝つ。

今回の決戦は予定調和の通過イベントみたいなものだ。

クリアする前から勝つとわかっている。

正義は必ず勝つ、逆に勝たなければ正義ではない。

……僕は殺人鬼っていう存在自体害悪だけだね。

「ナギ殿！ 帝国？連合？アリアドネー混成部隊準備完了しました」  
セラスの言葉に一同身を引き締める。

さあ、いよいよ最終決戦。

てゆうかこれ終わったら何をするか予定が全くない事に今更気付いてしまった。

そろそろ殺人衝動もある程度抑えられてきたし　と、言ってもたまに紅き翼を殺しそうになることもあるけど　あの人が言っていた未来に行くのだろうか。

ネギ少年はあんまり好きではないし、中学生に興味ないからあんまり嬉しくない。

僕の好みは年上だしね。

……今の僕には年上だけど。

「それであの……ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願い出来ないでしょうかっ!？」

「おお？　ああ、いいぜ。それくらい」

セラスの願いを快く引き受けるナギ。

モテモテナギきゅんには僕と違って女性ファンがたくさんいる。

殺人鬼にファンがいたら驚くけどね。

てゆうか最終決戦前にサインとか何考えてるのだろうこのバカ女は。

年齢の数だけバラバラに解体してあげたい気分になってくる。

「ふふっ、嫉妬は醜いですよ?」

アルビレオが微笑みながら僕を宥める。

死ねアルビレオ死ね。

てゆうか嫉妬じゃないから。

「おやおや、そうですか」

変わらぬにやけ面で緊張感のカケラもない様子のアルビレオ。

そういえば、なんだかんだで一番アルビレオと仲が良い僕。

よく二人で殲滅に行ったりした。

こいつは女装勧めてくるから僕としては鬱陶しいのだけどね。

「てゆうか僕は昔からガトウみたいなワイルド系目指してるからね」

「無理じゃな」

「無理だろ」

「無理だな」

「アイドル系ですか？」

僕の言葉に、ゼクト、ジャック、詠春が口を揃えて即座に否定し、アルビレオがわざと聞き間違える。

アイドル系のガトーってなんだよ。

マジでアルビレオ死なないかな。

人間は愛してるけどアルビレオみたいな変態は例外。

「おや、それは残念です」

ちつとも残念そうではない様子でにこやかに話すアルビレオ。

死ねアルビレオ死ね。

「そういえばガトウは？」

「連合と帝国の正規軍の説得だ。お前は話を聞いてなかったのか？」

呆れた様子で口を開く詠春。

僕は苦笑を浮かべて平謝りをする。

「てゅーかガトウは最後まで苦労人ポジションだなあ」

なんて呟いているとサインを終えたナギが話し掛けてくる。

「そろそろタイムアップだな」

「ええ、彼らは既に『世界を無に還す儀式』を始めています。世界の鍵『黄昏の姫御子』は彼等の手にあるのですから」

ナギの言葉に真剣な表情で返答するアルビレオ。

やっぱり間に合わなかったか。

正直外の敵の数だと連合？帝国？アリアドネー混成軍じゃ足りない。

「外の敵は頼んだぞ。愛識」

ナギは少しも心配していない表情で僕に話し掛ける。

正規軍が間に合わなかった時点で僕の担当は外と決まったのだ。

「しくじらないでよ、みんな？」

「誰に言ってるんだよ」

僕とナギの言葉にみんな自然と笑みが零れる。

無駄に自信满满、けれどそれに見合った実力を持つ若き英雄達。

断言しよう。

紅き翼は最強だ。

その翼を落とす事なんて、誰にもできはしない。

「ああ。よおっしつ、野郎共。行くぜっ!!」

ナギは言葉と同時に飛び出して、それにジャック、詠春、アルビレオ、ゼクトが続く。

もちろん僕も戦闘態勢だ。

今、紅蓮の翼が空を舞う。

撃ち落とせる自信があるならかかってこい。

「さあ、哀れな弱者達よ。愉快に素敵に零崎を始めさせてもらおうか。魔法の射手？連弾？氷の392矢っ!!」

僕の魔法が確実に紅き翼の敵を撃ち落としていく。

「ほらほらほら、どうせなら全力でかかってきなよ!!」

僕は叫ぶと戦場に似合わない可愛らしいシャボン玉が出現する。

そして悪魔達を喰い散らかしていく。

味方には頼もしく敵には恐ろしい球体の魔法が躊躇も遠慮もなく噛み殺していく。

飛べない僕は接近戦で混成軍を助ける事はできないが、普通の魔法使いのように遠距離からならこの場の誰よりも何よりも強い自信がある。



その時一匹の悪魔が僕等の船に乗り込む。

そして近くにいたセラス目掛けて爪を振るう。

「きゃっ  
」

悲鳴をあげるセラス。

魔法を使う暇もないようだ。

目を閉じて衝撃を待つ。

しかし彼女に悪魔の一撃が届く事はなかった。

「僕の目の前で味方を傷付けられる訳にはいかない。後で、ナギ達に怒られるのも嫌だしね」

七閃。

懐から取り出したナイフで悪魔をバラバラに切り裂く。

目を開いたセラスは驚きながら尻餅をついた。

「さっさと家に帰れクソ悪魔」

ニヤリッと笑いシャボン玉で悪魔を弾き消し飛ばす。

それからセラスに手を差し出し引き上げる。

「あ、ありがとうございます」

「油断したら死ぬから気をつけてね」

そして軽く言葉を交わして持ち場に帰った。

うじゃうじゃと何体もの悪魔が僕達から逃げ回る。

「踊れ踊れ。ちょっとばかり早いけどダンスパーティーの幕開けだっ！」

弾き、爆ぜ、消え、凍てつき、燃え、痺れ、切り刻まれ、悪魔達の数はどうどん減っていく。

脆弱、軟弱、貧弱っ！！

まるで手に入れた力で強者を気取っていた昔の僕のようにだ。

今の僕と昔の僕は違う。

友情、努力、勝利というジャンプ漫画のようなストーリーの中で僕は自分を鍛えた。

世界を、人間を諦めた奴らに負けるはずがない。

悪魔だろうが何だろうがかかってこい。

手加減も油断もせずに全員纏めてこの世から愉快に消失させてやる。

そして混成軍と僕で完全なる世界狩りを続けていると、墓守り人の宮殿から大きな爆発音が聴こえた。

「ナギ達が勝ったのかな」

僕が呟くとセラスは嬉しそうな表情をする。

しかしそれに続いて宮殿から光が溢れてきた。

敵の儀式が完成したんだろう。

僕が光の原因を尋ねるセラスにそう言うと彼女は慌て出した。

でも心配はない。

《諦めるなお主等！ それでも世界最強か！？》

神様は主人公達を見放さないのだから。

《こちらスヴァンスヴィート館長リカルド！！ 助太刀するぜ！！》

まあ、僕は無神論者なんだけどね。

会った事があるうと信じなければ一緒さ。

続々と仲間オスティア、連合、帝国の面々達が駆け付けて紅き翼

に激励を飛ばす。

《魔導兵団 大規模反転封印術式展開！！》

そして大規模な術式が発動する。

こうして世界は救われた。

1人の想いと1つの国と、その国の人々の犠牲の上にだけ  
ど。

何もかも犠牲なしで全てが全て上手くいくなんて戯言以外の何  
もない。

僕はこの後にどうなるか知っているのだ。

醜い大人による罪のなすりつけ、哀れな民の救われない生活、平  
和を目指した女性の生贄、答えを探す若き英雄、世界と一人を天秤  
にかけて、物語はまだハッピーエンドを認めてはくれない。

## 第六幕 零崎愛識の消失

大歓声に包まれる式典。

戦争が終わった喜び、世界が救われた喜び、救った英雄が目の前にいる喜び、これから幸せになれる権利を手に入れた喜び、連合も帝国も大人も子供も関係なく、今この場にいる誰も彼もが歓喜に浸っている。

望まれぬ戦争が終わった喜びをみんなで分かち合っている。

千の呪文の男【ナギ？スプリングフィールド】

千の刃の男【ジャック？ラカン】

旧世界の侍マスター【青山詠春】

そして僕、黒き制裁【零崎愛識】

ゼクトは消えて、アルビレオとガトウはサボっているが、民衆にそんな事を気にしている人はいない。

僕達、紅き翼は魔法世界に知らぬ者なしの英雄となった。

その英雄が目の前にいる。

ただ、それだけのことなのだ。

「おい、詠春！ 見ろよ、すげえぞっ！」

「馬鹿やめろっ」

「こんなぐらいで緊張してんじゃねえよ」

「ナギやラカンみたいな単細胞と詠春と一緒にしたら可哀相だよ」

「ああ、んっ？」

馬鹿みたいに騒ぐナギとラカンに、緊張で潰れそうな詠春。

そんな三人に笑いながら話し掛ける僕。

民衆にはそんな馬鹿な会話は聞こえていないようで、羨望の籠った瞳で僕らを見つめている。

ちょっと恥ずかしいが嬉しい。

僕はそんな気分の中、柄にもなくはしゃいでいた。

そういえば最終的に200万にまでなっていた僕の賞金も消えたらしい。

英雄が賞金首というのはおかしいので抹消してくれたようだ。

もちろんそれにはガトウも関わって必死に働いてくれたことも追記しておく。

老害だけでは僕を生贄に捧げようとしたかもしれないしね。

うむ……英雄になれたし、零崎をある程度抑えられるようにもなったし万々歳かな。

「おい、愛識」

そんな事を考えていると、頭上からナギの声が降ってきた。

いつものナギらしくない少し焦りを含んだ不思議そうな声だ。

「何？ 言っておくけど僕は手を振ったりとかする気はないよ？」

僕は呆れを含んだ声で返答する。

しかしナギは冗談を言っている様子もなく続け様に言った。

「いや、お前なんか透けてんぞ？」

「「「はあ？」「」」

僕とジャック、詠春は「何言ってるのこいつ？」みたいな表情でナギを見る。

人間も殺人鬼も幽霊のように透けたりするはずがない。

そんな当たり前の事を忘れてしまったのだろうかこの馬鹿は……  
って、あれ？

「マジで透けてるっ!？」

一応手の平を確認してみると本当に身体が透けていた。

しかも、どんどん薄くなっていくようだ。

そして僕は悟る。

つまりここで僕の過去の冒険は終わりのようだ。

「あーあ、タイムリミットか」

誰にも聞こえないように小さな声で呟く。

民衆も僕の様子に気付いたようでざわついていた。

この後はオスティアを救ったり、戦災復興したり、アリカ姫を助けたり、テオドラに帝国を案内してもらったり、ガトウについて行ったりいろいろ予定があっただけだなあ。

「おい、愛識っ！？」

詠春が焦ったように身体を揺らそうとする　が、しかし僕の身体は簡単にすり抜けて詠春は反対側に倒れ込んでしまった。

「悪い、紅き翼（お前ら）。タイムリミットがきたみたいだ。実は僕って異世界人で未来人で超能力者で宇宙人なんだよね」  
まほうつかい　ちきゅうじん

僕がふざけながら話すと、ナギ達はぽかーんとした表情でこっちを見る。

ハルヒの願望3つ叶えられる僕がそんなに珍しいのだろうか。

僕は構わずに言葉を続ける。

「ナギ、なかなか楽しかったよ。これから大変だと思うけど頑張れ。再会したらまた戦おうねっ。リベンジをまだ果たしてないんだから



さ」

「詠春はいつもナギのお世話お疲れ様。結婚式も子供の主産も祝えないけど、まあ許せ。その内挨拶しに行くから美味しいケーキとか用意しておいてくれ。あ、苺のやつがいいなあ」

「ジャックはいつまでも馬鹿で元気なままでいてね。お前の性格が真面目なんかに変わったらつまんないからね」

ナギ、詠春、ラカンの順番に最後のメッセージを告げていく。

民衆も含め、みんな展開についていけないみたいだ。

でも時間がないから待つ事はできない。

「それから他のメンバーに伝言。アルビレオには死ぬ。ガトウには死ぬな、タカミチとアスナ姫を立派に育てろ。テオドラにはごめん。帝国案内してもらった約束は何年か待たせる事になりそう。アリカ姫には貴方の選択は間違いなく正しかった。僕はそう思う。だから自分を責めないでね」

言葉と共に消失がどんどん加速していく。

もう足の先が見えなくなっていて、本当に幽霊になった気分だ。

「おい、待てよっ！！」

ナギが必死の形相で叫ぶ。

ふと見回すと詠春もラカンもまだ何かを言い足そうな、悲しそう

な、怒鳴り出しそうな、そんな表情だった。

今生の別れじゃないんだから、そんな顔するなよ馬鹿。

「完全なる世界の人形達に会ったらお前等の願いは絶対に叶わない  
って伝えておいて」

最後のメッセージを告げる。

これはフェイトに向けてのメッセージのようなものだ。

立場が違ってもう一人の主人公のような彼に向けての僕からのメッセージ。

「……愛識」

悲しそうな表情の詠春。

何故か今にも泣き出しそうだ。

じゃあね、詠春。

「よし、そろそろお別れだ。未来でまた会おう。それまではいばい  
っ！」

その言葉を最後に僕は式典の会場から姿を消した。

後に残ったのは楽しいはずの式典なのに静寂だけだった。

そして舞台は一転真っ白。

上下左右真っ白で影もなく、浮いているか地面を踏み締められているかも、広いか狭いか長いか短いかもわからないただ真っ白なだけの空間。

純白に包まれた世界。

まさか二度も此処に来るとは思ってもしなかった。

「やあ、無神論者」

そしてその世界に音が響く。

男かも女かも子供かも大人かも老人かもわからない、けれど澄んでいて優しく麗しい声だということが心に響いてくる声が広がる。

「やあ、自称神様。縁があつたみたいだね？」

僕は軽やかに挨拶を交わす。

久しぶりに会ったのに、久しぶりに会った気がしない。

いや、姿は見えないから会ったとは言わないけれどそんな感じなのだ。

「本来はそのまま未来に送るつもりだったんだけどね。少し君に感

想を聞きたかったんだよ」

神様は僕の言葉に楽しそうに答える。

僕はそれを聞いて疑問を浮かべた。

「感想？」

「そう、感想だ。虚像の世界の感想。新たな家賊の感想。戦友との冒険の感想。殺人鬼として生きてみた感想。君があの世界に感じた感情が知りたい」

男にも女にも子供にも大人にも老人にも聞こえる声が僕に尋ねる。

まるで好奇心旺盛な子供のように純粋な感情で聞き出そうとする。

「決まってるじゃん、そんなのさ」

僕は表情を変えて呟いた。

たぶん神様にもその表情だけで伝わるだろう。

それは僕にしては上出来な表情だったのだからね。

「そうだね。安心したよ」

優しくも厳しくも聞こえる声はそう言って笑った。

心底安心して言ったのではないだろう。

魚の小骨が取れた程度の小さな小さな疑問だったのだろう。

声からはそんな気持ちが伝わってきた。

僕に物凄く関心がある訳ではないようだ。

別に特別になりたいとは思わないけどね。

「それじゃあ、そろそろお別れだ」

神様は突然告げる。

この為だけに、この時間の為だけに、僕を自分の居場所に招き入れたらしい。

「ばいばい自称神様」

僕はそれを聞いて静かに言葉を紡ぐ。

それに対して神様の言葉も同じようなものだった。

「さよなら無神論者。縁があつたらまた会おう」

神様は短く告げる。

それと同時に初めての時と同じように気が遠くなっていく感じがした。

視界が暗転していく。

そんな中、白い空間に笑顔の誰かが見えた気がした。

## 第七幕 真祖の吸血鬼

《あなたが殺されている時がありますか。あなたが殺されている条件があれば、それを聞かして下さい。あなたがどんな時でも殺されるのがいやなら、少なくともあなたは人殺しをしてはいけない》  
僕には殺されている条件はあるが、いついかなる時でも殺されてもいいという訳ではない。

人殺しは罪。

知っているし、僕もそう思う。

しかし僕は殺す。

理由もなく、容赦もなく、後悔もなく、ただ、ただ殺すだけ。

人間というものは本来、同種を殺せないという話を聞いた事がある。

ドラマや小説のように頻繁に連続殺人が起きないのは、それが理由なのではないだろうか。

禁忌を何度も破れる者は人間ではない。

おとなしく死んだ方がいいだろう。

D・L・L・Rシンドローム（殺傷症候群）という自分や他人を傷つけずにはられない、自動症の一種がある。

いや、自動症の最高峰と言った方が正確かもしれない。

とにかく、埒外に最悪で、問題外に性質の悪い、とびつきりに凶悪な精神病。

存在そのものが疑わしいほどに稀な精神病だが、零崎は全員それじゃないかと言われている。

しかし、それがどうだというのだろう。

病気だから殺しました。

そんな跡付けの理由など、どうでもいい。

どんな理由があろうと殺す事は悪。

殺されそうになったから殺したなんていうのも悪。

戦争で殺しても悪。

安楽死なんてのも悪。

「君はそついうのどう思う?」

目の前の吸血鬼に話し掛けてみる。

何の警戒も持たず、待ち構えていたら思わぬ大物が釣れてしまった。

「……いきなり何だ?」

吸血鬼は怪訝そうな顔でこちらを見る。

その瞳には正体不明の敵をどう排除するべきかという警戒心と、



どうせ自分には敵わないだろうという慢心に満ちていた。

ああ、アルビレオが読心術ばかり使うせいで心を読まれるのが当たり前になってたよ。

本来はバレないように読心術を使うのなんて無理なのだ。

魔法なら魔力でバレてしまうし。

「ふんっ……まあいい。貴様も運が悪かったな。私が担当する警備の日に此処に侵入するとはな」

目の前の吸血鬼は鼻を鳴らす。

僕の態度がそんなに不満だったのだろうか。

さて、現状説明。

目の前にはロリ吸血鬼こと、エヴァンジェリン？A？K？マクダウェル嬢。

恐らく現在地はマホラだったか。

原作の舞台となった埼玉にある学園都市だ。

そしてその世界樹という巨大な樹の前に僕は飛ばされていた。

いつも通りの赤と黒の上下の服に黒いジャケット。

ローブは何故か地面に落ちている。

魔法発動帯の指輪にいくつかのナイフもきちんとある。

身体は十四歳ぐらいに成長しているが、何故か違和感はない。

うむ、どうやら問題はないようだ。

「さて、名前ぐらい名乗っておいてやろう。我が名はエヴァンジェリン？A？Kマクダウェル。誇り高き真祖の吸血鬼にして、最強の魔法使いだ」

エヴァンジェリンは余裕そうに笑みを浮かべながら自分の名を告げる。

流石ネギま一の慢心王。

くしゃみに負けた幼女だ。

自分が負ける事など微塵も感じていないだろう。

実力がわかっていない馬鹿ではなく、実力をわかっているのに慢心している。

最強種としての誇りなのだろうか。

「僕の名前は零崎愛識。ちょっとお茶目な殺人鬼さ」

それに対して僕は油断も慢心もしない。

もうナギの時のような惨敗は懲り懲りなのだ。

戦場では、雑魚ですら油断すると僕を殺せるような戦いをするこ  
とがあった。

人間を嘗めるとろくな目に合わないのはもうわかりきっている。

そしてお互いに距離を保ちながら相手を睨む。

「零崎、……あの殺人鬼集団か。しかも行方不明だった長兄にして  
英雄殿とはな。クッククク……、今夜は楽しめそうだ。茶々丸を置  
いてきて良かった」

エヴァンジェリンは少し考えるようなそぶりをし、すぐに気付い  
たようで僕の情報をすらすらと述べる。

しかし英雄だと、学園に悪意を持つ者ではないとわかっていて戦  
う意味があるのだろうか。

それに集団って、僕がいない間に叶識の奴が勧誘でもしたのだろ  
うか。

今、何人ぐらいいるんだろ？

まあいつか。

それよりも目の前の吸血鬼だ。

確かナギに魔力を封印されてるくせに、パートナーなしで僕と踊  
るつもりなのだろうか。

そこまで慢心していいのだろうか。

「魔力は持ちそうかい？ 吸血鬼」

僕は一応確認を取る。

せっかく最強クラスと戦えるのだから、自分を磨く為に万全の状態で戦いたい。

「嘗めるなよ殺人鬼。貴様こそ私についてくれるかな？」

吸血鬼はフラスコを揺らしながら、愉快そうに笑う。

いいだろう。

その慢心して長く伸びた鼻っ柱をへし折ってやろうではないか。

「レッツパーティー！！」

ふざけた言葉と共にニヤリと笑うと、僕は魔法の射手を吸血鬼に放った。

まずはお手並み拝見に17矢。

普通の魔法使いでも余裕でこなせる初心者レベルの魔法。

それを吸血鬼は簡単に防いだ。

レフレクシオー  
氷盾。

フラスコを媒介に発動したそれは、僕の魔法の射手を軽々と消し去った。

だけど、これはほんの籠手調べ。

僕はここからが本番だと宣言するかのように、ナイフを手に持ち相手に近付く。

「リク？ラク？ララック ライラック 来たれ氷精 爆ぜよ風精  
氷爆（ニウイス？カースス）！！」

しかし吸血鬼もただ待っている訳ではない。

呪文を唱えて、僕に向かって魔法を行使してきた。

凍気と爆風が僕を包み込もうとする。

しかしそれは無駄に終わった。

既に身体強化も完了した僕の身体には届かなかった。

横っ飛びで避け、直ぐさまエヴァンジェリンの方へ方向転換。

僕は速さには自信があるのだ。

もちろん、エヴァンジェリンもあれで仕留められると思ってなかったように、追撃を加えてきた。

人形使いらしく糸を使った攻撃。

複数の糸が僕を搦め捕ろうと、切り裂こうと向かってくる。

確かに素晴らしい技術だ。

何年も磨き抜かれた、極みに達している攻撃だ。

しかし僕には通用しない。

僕はあらかじめ彼女の攻撃方法を知っていて、彼女は僕の攻撃方法を知らない。

魔力も封印されていて、手札も相手に知られているのだ。

これほどの八百長試合はないだろう。

ハンデにハンデを重ねた接待試合のようなものだ。

だからこそ僕はすぐに次の行動に移せた。

糸を切断。切断。切断。切断。

月に反射してきらきらと光るバラバラになっていく糸。

「なっ      ！？」

ここまで簡単に突破されるとは思っていなかったのだろう。

吸血鬼は驚愕して驚きの声をあげている。

僕はその隙をついて、吸血鬼の長い髪を掴み首を切り落とした。

はずだった。

そう、そのはずだったのだが僕の手にはナイフはなく、彼女の首も未だに健在だった。

「……久しぶりに会ったのに変わりませんね」

横の方から声が聞こえてきた。

呆れを含んでいるが、歓喜の感情の方が大多数の割合を締める声が聞こえた。

僕のナイフを弾き飛ばした技に覚えがある。

居合拳。

この学園には使い手は一人しかいないはずだ。

ガトウ？カグラ？ヴァンデンバーグの弟子にして紅き翼の一人。

「久しぶりになるのかな。元気だったかいタカミチ？」

僕はにこやかに笑う。

煙草が似合う年齢になったかつての少年であり、現在の中年。

高畑？T？タカミチがそこにいた。

「お久しぶりです、愛識さん」

タカミチはニコニコと気持ち悪い顔で僕に言葉を告げる。

僕は今、笑顔のオッサンの案内で学園長室まで歩いていた。

後ろには不機嫌なロリ吸血鬼とそれを心配そうに見つめる従者の口ポ。

なんだろうこの集団。

「なんかタカミチが援交してるみたいな感じだね」

「……勘弁してくださいよ。愛識さん」

流石のタカミチもこれには苦笑い。

教職員として成人男性として、ロリコンの烙印を押される事は望んではないらしい。

ゴスロリ服の金髪ロリ。

中性的な金髪ショタ。

緑髪のメイド服口ポ。

煙草を吸う髭のオッサン。

当事者でなければ、絶対に関わりたくはない集団なのは客観的に考えなくてもすぐに理解できる事だった。

「そっいえばみんなは何してんの？」



僕は突然思い出したかのようにタカミチに尋ねる。

一応原作知識はあるが確認というやつだ。

それに対してタカミチは静かに答える。

「ナギは死んだって言われてますね。詠春さんは京都の関西呪術協会の長をしていますよ。アルは行方不明でラカンさんは魔法世界にいるのはわかってます」

淡々と告げる言葉に落胆する。

……詠春以外行方不明かよ。

「ナギはまあ死ぬはずないから大丈夫でしょ。ガトウは？」

先程詳細を教えられる事がなかった人物についても聞いてみる。

原作知識だと死んでしまうのだが。

「それが……」

「……そっか」

タカミチは一瞬寂しそうな表情を浮かべてポツリと呟いた。

僕はその言葉で全てを理解した。

やっぱり死んじやったか。

あいつの煙草の匂いは好きだったんだけどなあ。

なんて、悲しくも哀しくもないのに憐れむかのように心の中で呟く。

「タカミチ。煙草１本ちょうだい」

僕はふと思い付いた事をする為にタカミチにお願いをする。

昔は僕が何かタカミチにお願いするとガトウが「あんまり虐めたりするんじゃないぞ」なんて、呆れ顔で言ってたのを思い出してしまった。

「吸うんですか？」

「吸った事はないけど、僕が吸ってたらガトウが頭を押さえながら説教してくるような気がしてさ……。なんていうか浸りたいのだよタカミチ少年」

タカミチは不思議そうに尋ねるが、僕は直ぐさま肯定する。

天国は信じてないからお墓参りはいかないけど、この煙草を君に線香替わりに捧げよう。

タカミチから煙草を受け取り、火をつけてもらう。

赤い紅い朱い。

オレンジ色に燃え盛る小さな火種が紙で包まれた草に移る。

僕はそれを口元に運び、大きく息を吸い込んで肺に入れた。

「ごほごほっ……、まずいねこれっ。ガトウもタカミチも馬鹿じゃないの？」

すると、僕は直ぐさま噎せる事になった。

はじめて煙草を吸うのだからこうなる事はわかっていたのだが、どうしてもやりたくなってしまったのだ。

受け入れる事には時間がかかる。

どうやらそれは悲しみだけの問題ではないようだ。

タカミチの方を見ると目につつすらと光る涙が見えた。

彼にとっては一番尊敬している自分のただ一人の師匠なのだ。

悲しみも人一倍だろう。

デスメガネの目にも涙だね。

まあ、もともと僕は今回の事を誰彼構わず言い触らすつもりはない。

むしろそんな事を言い合う友達とかも知りはない。

彼の名誉の為にここは煙が目に入ったせいということにしておいてやろう。

だから存分に悲しむといいや。

## 第八幕 学園を統べる者

それからタカミチに僕が消えた後の話をいろいろと聞いた。

オスティアの崩壊。アリカ姫の処刑。ナギ達の救出劇。京都旅行。ガトウとアスナ姫との旅。ガトウの最後。アスナ姫の記憶封印。詠春の結婚と子供の事。麻帆良での学生生活。魔法世界のその後。警備員としての日々。

「記憶封印か……。僕としては記憶が失くなる＝死ぬことだから反対だけど、ガトウの遺言なら仕方ないね、デスメガネ」

「そう言ってもらえると　ってなんで知ってるんですかそれ!？」

「僕は何でも知っているよデスメガネ」

僕の言葉に一瞬苦い表情を浮かべるが、デスメガネと聞いて途端に態度を変えるタカミチ。

麻帆良に来たばかりの僕がその名前を知っていることがかなり意外だったらしい。

ちなみに本当は知っていることだけ知ってるんだけどね。

英雄の息子の歩む困難な人生とか。

デスメガネがアスナ姫に告白される事とか。

「おい、零崎」

そんな風に談笑していると、後ろからロリババアに呼ばれた。

「零崎だと複数人いるから愛識でいいよ」

それに対して僕はフレンドリーに話し返す。

友情に熱い殺人鬼を目指してるからね。

「そんなことはどうでもいい。貴様はナギから私の封印について聞いていないのか？」

本当にどうでもよさそうに切り捨てる吸血鬼。

そして自分を何年も悩ませている問題について僕に尋ねる。

僕は本来なら封印されている事実すら知らないはずなんだけどね。

「知らないよ。僕は魔法世界の式典の後すぐに此処に来たからね。むしろナギともついさっき話してたような心境だから」

吸血鬼の質問に正直な気持ちで返答する。

過去と現在で移動する間に挟まれた時間は言う必要はない。

まず、世界移動の話自体、誰にも言っていないことなのだから。

「ちっ」

僕の答えに満足出来なかったのだろう。

吸血鬼は舌打ちして、そのまま黙り込んだ。

その従者は「マスター」と小さな声で心配そうに尋ねる。

僕に呪いは解けないし、そういう知識すらない。

僕は魔法学校中退のナギよりも魔法について知らないのだ。

魔法は身体強化と魔法の射手とあのシャボン玉しか使えないし、初級の火を出す事すら無理な僕に馬鹿の馬鹿魔力で無理矢理封印した呪いなんて解けるはずがない。

そういうのはアルビレオやゼクトみたいな本物の魔法使いの担当なのだ。

僕様ちゃんには解決できないよ。うにー。

……こほんっ。

閑話休題。

そんな風に歩いていると気が付いたら麻帆良学園の女子中等部エリアの校舎内に入っていた。

……あの滑瓢めうりひょう、女子中等部のエリアに学園長室を作るとか変態なのだろうか。それとも孫馬鹿なのだろうか。

孫馬鹿ならまだ許せるからそっちの方がいいのだが、もし変態でロリコンなら救いようがなさすぎてこの学園を壊滅させたくなくなってしまう。

そしてそんな思考を繰り広げていると、漸く学園長室前のドアまでたどり着いた。

コンコンコンとタカミチが3回ノックをして扉を開く。

「失礼します。学園長、零崎愛識さんをお連れしました」

タカミチはそう言って先に入る。

僕と吸血鬼主従もそれに続いて中に入ってしまった。

そして入った瞬間、視界に妖怪の総大将である滑瓢と呼ばれている頭が仙人のように長い老人がいた。

滑瓢は髭を撫でながらこっちを見ている。

頭長え……てゆーかなんかキモい。

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

殺したら仙人殺しの称号か二つ名を貰えるかもしれないが、コレを殺すことで名が売れるなんて真っ平ごめんだ。

「ほっほっほ、ようこそ零崎愛識殿」

目の前の頭長爺が笑いながら僕に話し掛けてくる。

個人的な感想を言わせてもらえば笑い方も気持ち悪くて生理的に無理だ。



アルビレオより気持ち悪い人に会ったのが初めてで若干混乱してしまう。

前から原作で知っていたのに実際に見るとインパクトがヤバイ。むしろヤバイがインパクトだ。

意味不明な感想が頭を過ぎる。

そんな風に僕が混乱しているのも構わずに、滑瓢は構わずに話続けていた。

完全に聞き流している僕にはもちろん内容はわからない。

たぶん何かの話を真面目に話しつつ、頭の中で僕をどうやって利用しようか策略を巡らせているのだろう。

そういえば、妖怪、人間、殺人鬼、吸血鬼、ロボとこの場にいる者達は見事にみんな種族バラバラだ。

人間が一人しかいない部屋なんていくらファンタジーが当たり前な世界でも珍しすぎる。

「で、引き受けてくれんかのう？」

「だが断るっ！！」

「ほっ！？」

滑瓢の話を少し聞いてみると何かを引き受けてもらおうとお願い

していたみたいなので、なんだかよくわからないけれど問答無用で断ってみた。

この僕が一番好きなのは断られるはずがないと思っている奴からお願いにノーと言うことだからね。

もちろん戯言だけど。

「愛識さんはどうせ聞いてなかったただだから大丈夫ですよ。学園長」

僕の言葉を聞いて失礼な事を言うタカミチ。いや、デスメガネ。

タカミチの言葉を聞いて滑瓢と吸血鬼の学園御長寿コンビは呆れている。

今にも頭を抱え出しそうな感じだ。

はあ、会わない内に随分と生意気になったじゃないか小僧。

「愛識さん。この学園で働いてみませんか？ 学園長は教師と夜間の警備をお願いしたいそうです」

そしてどうせ僕が滑瓢の話を真面目に聞くはずがないとわかったのだろう。

僕に向かって先程滑瓢が長々と話していただろう内容を短く纏めて話し出すタカミチ。

14歳の先生というのは法律的にアウトだろう。

また14歳で夜間の仕事も確かアウトだったはずだ。

この世界の日本には来たばかりなのだが、前の世界の日本と法律が違うのだろうか。

原作を読む限り確か同じはずだったが、治外法権のような麻帆良学園では関係ないか。

この麻帆良学園は魔法で生徒達を洗脳してる学園なのだから

それよりも教師をやるとしたら問題は知識だ。

前の世界じゃ高校1年生までの勉強しかしておらず、この世界では学校機関にさえ行っていない僕を教師にするつもりとは。

「やるね、滑瓢。最高権力者はやりたい放題なのか」

そう言って笑う僕。

もちろん怒ってなどはいない。

生徒が可哀相だなんて自己中心的な考えの僕は思わない。

可哀相と思う気持ちがあるなら、殺人鬼になった瞬間に自らの命を絶つと思う。

僕は正義の味方なんかではない。  
むしろ存在自体悪の殺人鬼だ。

この学園にいる魔法使いは正義の味方を目指してるみたいだけど知らない。

矛盾してる部分には自分で気が付くべきだ。

……あれ？

僕ってアンチ小説とか好きだったのにいざ自分がその立場になると何もしないのか。

昔はオリ主みたいな立場になったら、英雄になって立派な魔法使いを目指す魔法使いを断罪して、生徒を守って、ネギ坊主をこれでもかってぐらい虐める、なんて妄想をしていた軽度の厨二病患者だったのだが現実と妄想は違うみたいだ。

「……まあ、いつか。その仕事引き受けてあげるよ」

僕は滑瓢の提案を受ける事にして肯定する言葉を伝えた。

現在の僕には予定も目標もないのだ。

詠春や家賊に会いに行くぐらいしかやることはないけど、詠春は2年生の修学旅行で会えるし、家賊には縁があつたら会えるだろう。

いや、何処に叶識がいるか全く検討がつかないし会える確率の方が低そうだね。

てゆーか今更だけど今が原作前か後どっちかすらわからない。

ネギ少年はいるのだろうか。

そんな事を考えていると丁度いいタイミングで滑瓢が話し出す。

「ほっほっ、そうか。なら君には1 Aをの副担任を担当してもら

おう。タカミチくんが担任だからいろいろ教えてもらつとええぞい」

その言葉を聞いて理解する。

つまり原作前ということだろう。

吸血鬼、ロボ、幽霊、魔法世界のお姫様、忍者、魔法使い、半魔族、純魔族、英雄の娘、侍、未来人などの濃いメンツと3年間過ごすなんて退屈しないで済みそうだね。

毎日楽しく過ごせそうだよ。

……何故かアルビレオが「傑作ですか？」なんて言っているのが聞いてきた気がした。

だからそれに一応答えておこう。

戯言だよ。

## 第九幕 新任教師

それからの話、僕は正式に書類を作って中学校の教師となった。

偽造に偽造を重ね、戸籍に免許証に保険証に住民票などを嘘で覆い隠して作り、学歴を表では普通の学校をしている魔法学校から借り受け、完全に嘘と戯言で造られた僕を証明する手段が完成した。

滑瓢やタカミチは出生届けすらないストリートチルドレンレベルの僕の過去を気にしていたが「大切なのは何処から来たかより何処に行くのか。燃料と行き先が決まっていればそれでいいのだよ」なんて無駄に格好良い台詞でごまかしておいた。

それから何故か一緒に着いてきていたエヴァンジェリンに「明日の放課後に家に来い」と誘われた後、タカミチに職員寮まで案内されて真新しい新鮮な匂いがするこれからのマイホームまで来た。

寝具どころか家具すらない部屋だ。

対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェイスの殺風景な部屋の方がまともな感じの生活感の全くない部屋。

「明日いろいろと運び込みますので、とりあえず今日はこれで我慢してください」

隣の家（タカミチの部屋らしい）から高そうな布団を持ってきたタカミチが苦笑いしながら僕を見ていった。

僕はそれを聞いて別段文句を言う事もなく、布団を敷いてくれた

タカミチにお礼を言い部屋から「また明日ね」と見送った。

紅き翼の逃亡者生活に比べたら屋根があってアルビレオがいない分随分と快適だ。

それに特定の住家をこの世界で得た事がない僕にとっては、とても嬉しい。

一人暮らしは自分の自由にできる自分だけの城を持てるということなのだ。

家具は明日タカミチが手配してくれたのが届くみたいだし、衣服や食料品や生活必需品は明日の帰りに適当に買えばいい。

仕事用のスーツは学園長が明日の朝に用意するみたいなので無問題。

つまり今日やることはもうない。

「明日は楽しく忙しくなりそうだなあ」

そう呟いて僕は布団の中に潜り込み眠る事にした。

予想よりも更に忙しい一日になるとは知らずに。

久しぶりにぐっすり眠れた次の日。

朝にタカミチに起こされて、タカミチの部屋でシャワーを借りた後で通勤し、学園長室でスーツを受け取り着替え、職員室で同僚に自己紹介をし、教師らしく伊達眼鏡をかけて、タカミチから生徒名簿を受け取り、意気揚々と1 Aに来た。

ここまでは何も問題なく大丈夫だった。

しかし眼前には明らかにトラップだらけで、ある意味歓迎している扉が控えていた。

苦笑いのタカミチに呆れ顔の僕。

「……すいません愛姫さん」

それを見て謝るタカミチ。

本当に申し訳なさそうだ。

ちなみに愛姫さんとは僕の名前だ。

零崎愛識という名は僕が思うより有名で危険で凶悪で醜悪で劣悪な名前なのだ。

英雄としてだけなら栄光と栄華と栄誉な名称だ。

しかし零崎一賊としての名前を知っている人間にとっては恐怖でしかない。

殺人鬼集団【零崎一賊】の長男。



英雄と讃えられる実力を持つ殺人鬼。

日常に紛れ込む非日常。

そんな物騒な名前を名乗る事はこの平和な学園では許されるはずがない。

だから零崎では珍しく偽名ではなく【南愛姫】という昔の名前を使うことにしたのだ。

「初日から先が思いやられるよ」

僕はこれからの日々を想像して小さく溜息をはいた。

同時に呟いた言葉は教室内の賑やかな声に掻き消される。

《首位独走のまま全力疾走、ただし残り30km》みたいな？

さて、いつまでもこのままじゃあれだろうからそろそろ教室に入ることにする。

ガラガラッ。

扉を開くと同時に落ちてきた黒板消しを名簿で叩き落とす。

恐らく引っ掛けてコケさせる為に用意したであろう足元にある糸を靴で踏みつけ、落ちてきたバケツをまた生徒名簿で叩き飛ばし、最後にドリフのように落ちてきたタライをキャッチして教卓の隣に置く。

「「「「「おおっ」」」」」

その様子を黙って見守っていた生徒達は僕が無傷のまま教卓に辿り着くと完成をあげる。

他のクラスの迷惑になりそうな歓声だ。

それをスルーして僕は黒板に自分の名前を書いていく。

「本日付けでこのクラスの副担任になりました南愛姫です。至らぬ点がたくさんあるでしょうが、どうぞよろしく願います」

口角をあげてなるべく優しそうな印象を与えられるようにゆっくりと語りかける。

ニコツと営業スマイル。

それを見て聞こえる「可愛いー！！」という女子中学生達の声。

エヴァンジェリンなんかは胡散臭そうな顔していたけれど、まあ成功したのではないだろうかと思考する。

ちなみに身構えていたけれど、原作のネギ坊主のように揉みくちやにされることはなかった。

「はいはい、質問いいですか！？」

あさくら かずみ  
朝倉和美。

出席番号は3番で報道部所属の通称【麻帆良パラッチ】と呼ば

れている生徒。

彼女が真っ先に挙手して発言してきた。

「ええ、どうぞ」

僕はそれに静かに言葉を返す。

「えーっと……、まずは簡単にプロフィールを教えてください」

「名前は南愛姫。年齢はタカミチより年上。性別は男。趣味は人間観察で、特技は料理。イギリスと日本のダブルなので髪や眼の色が違います。日本生まれ日本育ちなので、日本語は大丈夫というか得意です。尊敬している人物は人類最強。好きなタイプは自分に自信を持っている人。嫌いなタイプは嘘つき。担当する科目は英語ですが、タカミチ少年がいない場合のみになります」

僕が一気に自己紹介をするとタカミチより年上で男というのに驚きの声が上がった。

もちろん僕は身体年齢も精神年齢もタカミチより下なのだが、基本的に僕は基本的に性格的に不変的に嘘つきなのだ。

教員免許すら持ってないし、大学どころか今生では小学校にすら行っていない詐欺師の嘘つきである。

僕の言葉を信じる方が間違いで、騙された方が間抜けなだけだ。

「……えっと、高畑先生より年上というのは？」

「本当です。僕は生まれつき成長が遅い体質なのでこんな見た目ですが、タカミチ先生の少年時代の面倒をみてますから」

「そ、そうなんですか。あと、本当に男性なのでしょうが？」

「ええ、これも生まれつきのホルモンの関係で曖昧に見えるだけでれっきとした男です。何ならタカミチが証明しますよ」

朝倉は僕に困惑気味で質問を重ね、僕はそれを嘘偽りだらけで答える。

ちなみにタカミチが証明できるというのは一緒に温泉に入った関係ということだ。

しかし、触感を生やした女の子を中心とした生徒はそうは受け取らなかったみたいできゅーきゃーと叫んでる。

腐女子思考乙としか言いようがない。

てゅーか僕とタカミチが絡み合ってる本を書くなんて話を本人達の前で話すのはやめてください。

「えっと、じゃあ最後の質問をなんですが、このクラスで気になる人は？」

腐女子のざわめきを気にせず朝倉さんは僕に質問をしてきた。

……ふむ、気になる人か。

「キティちゃんかな」

僕はそれに対してごく自然に答える。

ちなみに理由は違いはあるが同じ鬼同士だからだ。

それを聞いて「誰それ？」と騒ぐクラスと、立ち上がり叫び出すエヴァンジェリン。

「誰がキティちゃんかあつ！ てゆうか何故貴様が知っている!？」

「アルビレオ？イマ」

「あの変態がああつ!!」

怒るエヴァンジェリンと無表情の僕と事態についていけないクラスメート。

もちろん知識は原作のおかげなのだが、確か原作でアルビレオが言ったのが最初だと記憶してるし一緒に問題はないはずだ。

てゆうかキャラ崩れてるぞ吸血鬼。

「アハハ……、ありがとうございました」

苦笑いで朝倉が話を締める。

いつも静かな同級生の豹変にちよつと引いた朝倉和美と1 Aの  
一同でした。

## 第十幕 人間の歡迎会

冬休み間近の授業というものは、皆やる気が出ないものだ。

僕も学生時代はもうすぐ冬休みという時期の授業は単位計算して、そのまま冬休み終わりまで休む事を真剣に悩んでいたぐらいだ。

しかし、これはあまりにも酷すぎるのではないだろうか。

目の前の光景を見て頭を抱えなくなる衝動を抑える。

僕は現在、タカミチの英語の授業を見学させてもらっている。

学歴詐称教師がぶつつけ本番で授業なんて、戯言なしじゃやっていけない。

僕は元々計画を緻密に立ててから行動するタイプだし、いきなり「じゃあ、お願いします」と任されて完璧にこなせる程の天才ではない。

授業を進める速度、一人一人の理解力、やるべき内容とやらずに済ませてもいい内容、授業を行う前に確認すべき事柄はたくさんたくさんあるのだ。

いきなりプリントを用意してやらせるなんて愚策で愚行だ。

それが最も優れた方法なら何処の学校もそれを採用しているというものだ。

だからこそまずは先達の授業のやり方を見てどうすればいいのかを考える。

教育実習すら受けてない僕は生徒よりも必死に授業を見ている。

タカミチが授業を行っているのは1 A。

つまり担任のクラスで最もやりやすいであろうクラスだ。

しかし先述したようにこれは酷い。

「ねえねえ、帰りにコンビニ寄ってかない？」

「いいよー。セブンイレブンの濃厚いちごオレに最近嵌まってるんだよねえ」

教員の話を中心に聞き流しながら、放課後の予定について話に花を咲かせる少女達。

「また彼氏ー？」

「はあ、次のデート何処行くか悩んでるんだよねえ」

授業中にも拘わらずに堂々と携帯を取り出しておそらくメールをしている少女とその少女をからかうようにニヤけながら話しかける少女。

「まだ1時間目なのに……」

「いやー、朝ご飯食べるの忘れちゃってさ」

更に呆れ顔の少女とそれに苦笑いで答えながら教師から隠れることもせずにお菓子を食べている少女。

「あらら、寝ちゃってるよ」

「起こさないようにね？」

更に更に惰眠を貪る少女とそれを起こさずに、むしろ優しく見守る少女達。

教員の立場になってみると、学生時代は当たり前だった行為がひどく不真面目に見えるから不思議というものだ。

立場を少し変えるだけで物の見方というものは180度変わってしまう。

いや、流石に僕の学生時代もここまでは酷くはなかったのだが。

原作で知ってはいたがこのクラスは本当に不真面目だ。

自由気ままに社会のルールに縛られる事なく自分勝手に自己中心的に行動する。

学園結界の影響だけではない。

叱り付ける事ができない教師。

ゆとり教育、PTA、モンスターペアレントなどなど。

教師にとって現代の教育では勉強しか教える事ができないのだ。



昔のように悪い事をしたら頭を叩いてでもやめさせ、生徒が健やかに清らかになるように育てていくことは難しい。

新田先生のように生徒に真面目に接して、嫌われようが態度を変えない先生はこの学園どころか今の日本の教育機関には少ない。

正直タカミチには出張なしで頑張ってもらいたいっていうか、むしろ僕が出張の方を担当したくなる。

もちろん真面目な生徒はいるのだが、お気楽な１Ａ、この前まで小学生だった彼女達には最初から期待するだけ無駄なのだろう。

親元を離れ、叱り付けてくれる大人が少ない中で育ち、性格を形成してしまったのだから。

ちなみにこのタカミチの授業での真面目筆頭は神楽坂明日菜。

好き好き大好き高畑先生愛してるな彼女はこの授業だけは真面目に受けているらしい。

他の授業はこんなにも真面目に受けてはいないのだろうと予測してみる。

それでも成績が悪いのには悲しすぎて涙を誘う。

もしや他の授業もちゃんと聞いているのに理解できないのだろうか。

アスナ姫は頭がずば抜けて良かったし、いろいろと才能溢れる子

供だったのだが、記憶封印で生まれ変わった少女はまるで全くの別人のようだ。

いや、記憶がないならやはり別人なのだろうけど、当時の面影が見た目以外ないのが悔やまれる。

アスナ姫は神楽坂嬢の現状を見て嘆くのだろうか。

もしくは幸せな日常を喜ぶのだろうか。

僕には全く検討もつかない。

教員の仕事とやらは副担任だろうが大変なようだ。

学生時代の恩師に感謝のメッセージを伝えたくなくなってしまった。

いろいろな授業の見学や書類仕事、今後の予定の確認を終えた僕は非常に疲れていた。

この後、キティちゃん宅で鬼同士の交流会をして、夜の0時に魔法使い達との歓迎会　という名の殺人鬼お披露目会　をして、警備の打ち合わせをして。

「……うわぁ、何時に眠れるんだろう」

僕は頭を抱える。

真面目に仕事なんかを頑張っている殺人鬼なんて滑稽で哀れな僕に、自称神様が何か嫌がらせてもしているのだろうか。

それとも2度も会っているのに無神論者なままの僕を見て、とうとう堪忍袋の緒がプリティでキュートなロリっ娘戦士のように切れてしまったのだろうか。

水樹奈々さんなら僕は歌唄ちゃんの方が好きなのだが。

そんな風にどうでもいいことを考えながら職員室から出て歩き出す。

「愛姫ちゃん！」

すると、後ろから声が聞こえた。

誰かが僕を呼んでいる！？　なんてアンパンのヒーローのような事を考えながら振り向くとそこには新体操部の馬鹿がいた。

名前は残念ながらまだ覚えてない。

いや、原作を知っているのだから忘れたと言っべきなのだろうか。

てゆうーか初日から愛姫ちゃんか。

僕は「私を苗字で呼ぶな。苗字で呼ぶのは敵だけだ」なんて言った記憶はないのだけど、親しみやすい雰囲気と彼女達とあまり変わらぬ容姿のせいでそう呼ばれることになったのだろうか。

「何かご用ですか？」

僕はとりあえず優しく笑顔を浮かべながら返事をしておく。

伊達眼鏡越しに少女を見つめる。

すると少女は笑顔のまま「ちょっと教室まで来て」と腕を掴みながらそう言って歩き出した。

ああ、歓迎会か。

僕は頭の中で予想を立て、少し嬉しい気分になる。

他の可能性としては、初対面で惚れられて告白されるなんていうのもあるが、確かにこの世界は漫画を元にした世界だが、僕はモテモテで最強なオリ主なんかではない。

チートでハーレムな最強物語が歩めないのはナギに負けた時に気付いたさ。

まあ年下に興味ないし、ハーレムは大嫌いだから別にいいのだけど、それだと少しネギまに登場する男らしくはないかな。

そもそも僕の物語が二次創作として存在するなら、今回のクラスでの歓迎会は人間の歓迎会、魔法使いの歓迎会は殺人鬼の歓迎会なんて題名がつくのだろうか。

紅き翼時代はどうなのだろう。

なんて自分を二次創作のキャラクターのように考えているといっ

の間にか1 - Aの教室の前まで辿り着いていた。

今か今かと静かに待ち構えているだろう少女達の為に僕は扉を開ける。

僕が誰かの為に行動するなんて戯言だけだね。

てゆうか今更だけど僕って戯言遣いの真似して戯言って言葉を使  
いすぎだね。

嘘や戯言だらけの生き方な僕が悪いのだけれど。

『愛姫先生、1 Aにようこそーっ!!!!』

扉を開け一本教室の中に入った途端に鳴り響く歓迎の言葉。

少女達の声が重なり合い、教室中どころか学校中に響き渡ったの  
ではないだろうかと無駄な事を考えてしまう。

愛姫先生ってやっぱり名字では呼ばないのかと少し落ち込んでし  
まう。

いつの間にか「名字で呼ぶんじゃないか」とか言っていたのだろう  
か。

僕はいーたんのような記憶力の悪さを持っているつもりはなかつ  
たのだが、ここまで名前しか呼ばれないと若干疑問に思ってしまう。

「さささ、愛姫ちゃんこっちこっち！」

生徒の一人が僕を引っ張って教室の真ん中に連れていく。

先程案内してくれた新体操少女は友達の輪に加わり、楽しそうな笑みを浮かべているようだ。

席に案内されて座ると、隣にはタカミチとせずな先生（眼鏡なかったらタイプです）がいた。

「やあ、タカミチ。せっかくのハーレムを壊して悪かったね」

「ちよつ、何か僕に恨みでもあるんですかつ！？」

「久しぶりに会ったら、僕より渋くなってた恨みとかならあるかな」

挨拶しようとするタカミチより先に戯言で口撃する。

するとタカミチは少し慌て気味で僕に問い掛けてきて、僕はそれにニツコリと答え返した。

すっかりガトウみたいになりやがって。

まだ僕の身体はまだ14歳だからまだ大丈夫と信じたい、まだ信じていたい。

「あはは……」

苦笑いで何も言わないタカミチ。

それを見て僕はがっくりと落ち込む。

「まあまあ、あまり落ち込まずに」

そんな僕の様子を見てしずな先生が慰めの言葉を紡ぐ。

「人には向き不向きがありますから」

そんな優しいしずな先生の言葉が僕には突き刺さった。

向いてないって……。

「ねえねえ、愛姫ちゃんって何歳なの？」

そんな風に落ち込みにトドメを刺されていると生徒の一人が僕に質問をしてきた。

「高畑先生より年上なんて全然見えないよ」

それに乗るようにもう一人の生徒が僕に話しかける。

病気って言うておけば深くは聞いてこないだろうと思ったいたのだが、どうやらこの子達には無駄なようだ。

「企業秘密です」

僕は偽名を使っていた新聞部部長の決め台詞でごまかす。

未来から来たメイドの決め台詞とどちらにしようか迷ったのだが、こちらの方が好きな言葉だったのでこっちを選んだ。

「ええー」

それに対して不満の声があがる。

「じゃあさ、高畑先生って昔はどんな感じだったの？」

しかし彼女達がこの程度で身を引くはずがなかった。

次は違う質問を、とまた違う生徒が僕に向かって質問をしてきた。

この質問と同時に神楽坂がこっちに注目。

そういえばアスナ姫はナギがお気に入りっぽかったのだが、神楽坂はオジコンだったか。

「うーん、今はおじさんになっちゃってるけど昔は可愛かったかな  
とりあえず真面目で何事にも素直で純粋な正義感の強い子供だった  
ね」

「「へー」」

「あんまりいろいろ言わないでくださいよ。いと……愛姫さん」

僕は昔を思い出しながら自分の正直な気持ちを吐き出す。

それに感心する生徒となんだか少し照れてるタカミチ。

さつきから真剣にメモっていた神楽坂は何かにつぼったようだ。

おそらく妄想か何かしたのだろう。



頭を抱えて悶えているのを黒髪京美人の近衛が心配そうに見つめている。

オッサンの照れ顔なんて需要ねえよなんて言おうとしたら普通に需要があつたようだ。

そんな感じで歓迎会は楽しく和やか緩やかに過ぎていった。

次はエヴァンジェリンのキティちゃんハウスに行く事になっている。

鬼が出るか、蛇が出るか。

とりあえず鬼が出るのはわかってる。

## 第十一幕 鬼の晩餐会

「……此処か」

歓迎会を終えて、現在ログハウスのような外観のエヴァンジェリンハウスの前。

此処にキティちゃんがいるのだろう。

鬼の先輩として「おい、焼きそばパン買ってこいよお」とか言われるのだろうか。

「ついでにジャンプもなあ」とかパシられるのだろうか。

体育会系の先輩後輩の上下関係は苦手なのだが、吸血鬼はドSでプライド高そうで古風な鬼だしなあ。

「よし、帰ろう」

「お待ちください愛姫先生」

思い立ったが吉日とばかりに自分の思考に従いリターンした瞬間、メイド服姿の魔法と科学で作られたガイノイド【茶々丸】に肩を掴まれ静止するよう呼びかけられた。

いつの間に家から出てきたのだろうか。

「ロリババアの相手は嫌です」

僕はそれに対して無表情で言葉を返す。

茶々丸だったら相手どころか、クーデレのデレなし状態だったら是非嫁に欲しいぐらいなのだが、吸血鬼みたいな我儘で威張りん坊なロリっ娘は苦手なのだ。

これは戯言抜きの話で。

「マスターが呼びです。どうぞこちらに」

そう言われて引つ張られていく僕。

最近流されていくことが多いのだけれど、ここで逆らうのも馬鹿らしいし、僕はそのまま着いていくことにした。

茶々丸が開いた扉の中に入ると中にはファンシーな趣味の部屋が広がっていた。

吸血鬼のくせに見た目通りロリな趣味なのようだ。

「こちらです」

茶々丸は無表情のまま言葉を紡ぐ。

生まれてまだ何年も経ってないから感情が希薄なのは仕方ないのだろうか。

奥へ奥へ進んでいく。

吸血鬼が待ち構えるその場所まで足を進めていく。

気分は戦争前の軍人。

戦の前の侍。

蜘蛛の巣へ向かっていく蝶。

熊の巣穴に迷い込んだ登山家。

確実に何かが待ち受けているとわかりつつも僕は進んでいく。

「やあ、遅かったな殺人鬼」

「不老不死で他人より長い時間があるんだから遅刻ぐらい見逃してよ吸血鬼」

そして辿り着いた先、部屋に入ると中の状況を理解する前に声をかけられた。

僕はそれに軽口で返答する。

それから部屋を見回す。

案内された先にいた吸血鬼は、ワインを飲みながら優雅に構えていた。

テーブルには食事が並んでいて、少なくともこれから殺し合いを始めましようという雰囲気ではない。

「お招きありがとう吸血鬼。悪いけどお土産はないよ」

「最初から期待しておらんわ」

僕は軽口を叩きながらエヴァンジェリンが座っている席の前の椅子に座る。

茶々丸は僕から離れ主人の左斜め後ろに控える。

「今日は鬼同士で晚餐会つてところかい？」

「殺人鬼なんて下品な連中と一緒にされるのは御免だがな」

「吸血鬼なんて時代遅れと一緒にされるのは御免だよ」

僕が笑いながら尋ねると、吸血鬼はそれを直接肯定はせずともどこか楽しそうに返答してきた。

腹の探り合い。

お互い毒を吐きながらも相手の意思を探るべく心の読み合いのようなものをしている。

口ではこう言っているながらも、僕等は傍目から見れば仲良しに見えるように笑い合っていた。

しかし心の中は会議で自分の有利になるように進めようとする政治家のように真っ黒。

平和な学園に血の匂いがする鬼が2匹会合するなんて珍しいから吸血鬼も楽しいのだろうが、自分が負けた相手に全幅の信頼を置くなんて油断は流石にしないようだ。

僕は茶々丸が入れてくれたワインを毒なんか警戒することなく口に含む。

吸血鬼はそんな卑怯な事をするはずがないと理解しているからの行動だ。

しかし正直に言うとなりの世界と合わせても20年以下しか生きてない僕には、上物だろう安物だろうがワインの美味しさなんてわからず、褒めればいいのか批判すればいいのかすらわからなかった。

せいぜいチューハイぐらいしか飲んだことがない現代っ子なんだよ、僕は。

そんな考えが表情に出ていたのか、エヴァンジェリンは面白そうに笑う。

「クツクツク、見た目通りお子様か」

「見た目については君には言われたくないけどね。永遠幼女<sup>エターナルロリ</sup>」

「ふんっ、そんな安い挑発に乗らんわ」

吸血鬼の挑発に僕が軽く挑発で返すが、吸血鬼は鼻を鳴らすだけで全く挑発に乗ってくることもなかった。

原作だと簡単に釣れてくれそうなんだけど、自分の同じ悪者サイドが相手だと対応も変わるのだろうか。

ワインを置いて食事を口に運ぶ。

うん、普通に美味しい。

ボギヤブラリーが貧困で庶民的な食生活を送ってきた僕にはこれ以上の説明ができないけど確かに美味しい料理だ。

慣れると普段食べる料理に軽く不満が出る程度には美味しい。

「さて、本題に入ろう。貴様は何故この学園の教師なんかになった？ 此処を貴様の狩り場にするつもりなのか？」

エヴァンジェリンが心底不思議そうに尋ねる。

もし「YES」と答えても彼女は疑問に思わないし、「ああ、そうなのか」とつまらなそうに一応納得するだろう。

しかしそれが答えではないと思っているからこそ彼女は僕に尋ねてきたのだ。

殺人鬼が平和な学園に就職なんておかしいだろう。

吸血鬼が中学生よりはマシだと思うけれど確かに客観視してみるとおかしい。

彼女が疑問に思うのも当然で自然だ。

「これから1、2年後に面白い事が始まるからさ」

僕は吸血鬼のその疑問に答える。

タカミチ達には聞かれても全く答えなかったその答えを。

英雄の息子による愛と勇気と感動の物語がこれから始まる。

流血と肉塊と絶望しか残らない僕の物語とは違う、主人公による汗と涙と青春の物語が始まるのだ。

僕はそれが見たい。

人間と人間のぶつかり合い。

人間と人間の傷の舐め合い。

欲望、願望、失望、絶望。

望みが叶い、望みが破れ、望みを忘れ、突き進む人間の姿が見たい。

人間が人間として人間らしく振る舞う姿が見たい。

人間が仮面を外し、本能のまま動く姿が見たい。

僕は人間達の傍観者として、時には干渉者として傍にいたいのだ。

だからこそ物語の中心である此処に残ることを決めた。

「未来予知か？」

吸血鬼が面白そうな表情で僕に問う。

「似たようなものかな。確かに僕の中には未来の知識があるし」



僕はそれに対して肯定で答えた。

僕には原作知識というこの世界の誰より恵まれた知識がある。

と、言っても僕みたいなイレギュラーを加えた物語でハッピーエンドなんて想像つかないから、確実に変わってしまうだろうけど。

「ふむ、聞いてもどうせ貴様は答えんのだろうな」

吸血鬼は僕の言葉に玩具を買ってもらえなかった子供のようにつまらなそうな反応を示した。

「……………」

…僕が答えずにいると彼女はやっぱりといった表情をし、目の前の食べ物にフォークを突き刺して食事を再開し出した。

…吸血鬼は僕とは違ってまるで貴族令嬢のように上品に優雅に食事を進めていく。

その様子を見てみると、僕は何故か何の前触れもなくただ唐突に思い付いてしまった。

吸血鬼が僕を食事に誘った意味。

吸血鬼が人形使いになった意味。

吸血鬼が茶々丸を作成した意味。

吸血鬼が部屋に人形を置く意味。

彼女は寂しいのだ。

一人が嫌いなのだ。

誰かと一緒にいたいのだ。

「エヴァ」

僕はなるべく親しみを籠めて、僕の意味が伝わりやすいように言葉を紡ぐ。

「なんだ愛識」

吸血鬼 いや、エヴァンジェリンはその意図に気付いたようだ。

僕の想いが伝わったようだ。

僕達はお互いに友達のように呼び合い笑い合う。

吸血鬼は照れ隠しで少し怒りながら、殺人鬼は慣れない感じできちなく笑いながら、ガイノイドは突然の事態に全く意味が理解できないようで混乱しながら。

寂しがり屋な吸血鬼と寂しがり屋な殺人鬼が出会ったらこうなるのは必然だよな。

人間をやめても一人じゃ生きられないから零崎一賊なんてのができるのだから。

吸血鬼は先程から待っていたのだ。  
食事の準備なんて歓迎ムードな時点で気付くべきだった。

もしかしたら吸血鬼は昨日からこうしようと思っていたのかもしれない。

僕はそれを考えて笑った。

エヴァがグラスを持ち上げる。

僕も同じように持ち上げて、エヴァのグラスに近付けた。

「「新たな友に乾杯」」

無理矢理な感じで仲良くなった僕達に事態についていけないガイノイドを加えて、鬼達の晩餐会は多いに盛り上がった。

## 第十二幕 英雄のお披露目会

あれからリベンジマッチ　ダイオラ魔法球という外と中で時間の違う魔法道具の中で行うらしい　の約束をしたり、ナギの話で盛り上がったりと、とにかく会話は意外なほどに弾んだ。

平和な学園に閉じ込められた吸血鬼と平和な世界に閉じ込められた異端はどうやら気があうみたいだ。

殺伐と殺伐がぶつかり合うとどちらかの殺戮が起きると思っていたが、案外お互い馴れ合いを好む性格らしい。

僕としては最初に殺しそうになった時点で仲良くなるのは無理だなんて考えに至っていたのだが、やはりハンデだらけの状態で殺人鬼であり英雄である詐欺師に勝てるとは考えていなかったらしい。

相手の強さを見抜くのも一流の証というやつだ。

闇の福音の完全復活とその後の勝負が楽しみである。

ちなみに僕は最初は殺す気でなかったと追記しておこう。

何故なら僕の殺す能力で最も優れているのはあのシャボン玉の魔法だからで、最初から殺すつもりだったのなら初撃不意打ちで圧勝できるからだ。

名前もなく、ただ殺す事に特化した能力はそれだけ強力なのである。

何処からでも呪文なしで発生するが、触れたら弾けて相手の身体を吹き飛ばすので、手加減などできない使い勝手の悪い能力なのだ。だから死合では使えるが、試合では威嚇や魔法や飛び道具からの防御にしか使わない。使えない。

封印状態のエヴァには使えない、使わない。

「おい、そろそろ時間ではないのか？」

頭の整理をしているとエヴァから声が投げ掛けられた。

時計を見ると零時の10分前。

そろそろ世界樹前の広場に行かないと間に合わない時間帯である。

いや、そもそも今から行っても遅刻かもしれないけれど。

「そうだね。じゃあ、そろそろ行こうかな」

そう言っ僕は立ち上がる。

楽しい時間は終わって、これからつまらない時間の始まりだ。

「零崎一賊の知名度ってどれくらいなの？」

僕はエヴァを見つめながら魔法使い達に会う前に気になる事を質問する事にした。

もし、魔法教師がみんな知っているのなら歓迎会という名の大量

殺人になるんじゃないだろうかと不安なのだ。

もちろん僕も好きで殺したい訳ではないが、殺されそうになったら反射的に殺してしまう殺人鬼になってしまっているのだし。

そんなくだらない事を考えているとエヴァンジェリンは静かに口を開いた。

「この学園で知っているのは私とタカミチと爺くらいだろう。裏の世界では有名だが表の世界では貴様という英雄ぐらいしか知られていない。他の零崎は貴様と違って零崎らしく目撃者も含めて皆殺しみたいだからな」

呆れ顔という言葉がピツタリ表情でこちらを見つめるエヴァ。

僕のラブリーな家族達は世界一頑張ってはいけない集団なのだが、みんなとっても頑張り屋さんのようだ。

まとめてキスの雨を降らせてあげたいぐらい愛おしいよ。

なんて戯言が頭を過ぎる。

「なら大丈夫かな。エヴァも来るの？」

「私は面倒だから行かん。案内なら茶々丸をつけてやろう」

僕が尋ねると彼女は僕の考えを見通していたようで、完璧に完全に簡潔に簡単に僕にちょうどいい返事してくれた。

なんと優しい吸血鬼でしょう。

それなら迷わずに行けそうだと僕は安心感を抱く。

「じゃあね。また明日」

僕はそう言つてエヴァハウスから出て行つた。

返事はなかったがそれはそれでエヴァらしいと僕は笑つた。

案内人の茶々丸が遅れてやってくる。

そして一言挨拶を交わし歩き出し、僕もそれに無言で着いて行く事にした。

「ほっほっ、どうやら来たみたいじゃのう」

茶々丸の案内で着いた世界樹広場では魔法先生や魔法生徒達が裏方も含めて勢揃いだった。

滑瓢が僕の方を見てバルタン星人のような笑い声と共に言葉を紡ぐと全員一斉にこちらを見る。

なんかみんなの顔がやたら輝いてて気持ち悪いと僕は若干引いてしまう。

英雄の正体は元賞金首の殺人鬼でエヴァンジェリンと変わらない

存在ですよ、と声高々に打ち明けたい衝動に駆られるが、これからの生活を円滑に円満に過ごす為に我慢することにした。

「紹介しよう。新しく警備員になった英雄　零崎愛識殿じゃ」

滑瓢の言葉と共に周りがざわめく。

本人を目の前にして嬉々として近くの者と話し出すのはどうなのだろうか、僕は無表情ながら考える。

「あれが紅き翼の？」

「黒き制裁がこの学園に……」

「ごによ、ごそごそ、ぺちやくちやと彼等は僕に注目した視線を反らずに話している。

流石紅き翼に所属していた有名人と他人事のような考えが頭を過ぎった。

しかし一カ所だけおかしい表情の人間がいる事にも気付く。

褐色のスナイパーだけは顔色が悪い。

僕はやはり数々の戦場を経験した彼女は零崎の名前の本当の意味を知っているのだろうか、警戒心を強める。

そんな事していると爺から合図がきた。

自己紹介をしろという事だろうと解釈し、僕は一歩前に進み言葉



を紡ぎ出す。

「どうも零崎愛識です。昼間は南愛姫という名前で教師をしているので間違いなさらぬようお気を付けください」

淡々と単調に単純な挨拶を短縮しながら話す。

愛想笑い、営業スマイルなど前の世界から猫被りが仕事上得意な僕は、短めの挨拶を彼等にして様子を窺った。

ちなみに前の世界の仕事は接客業である。

「さて、皆も気になっておるじゃろうからは非魔法世界の英雄殿のお力を見せてもらおうかのう。……高畑君」

爺は彼等が静まってくると同時に僕に断りもなく語り出した。

その言葉と共に前に進むタカミチ。

ガトウの弟子VSガトウの戦友。

殺したくなるほど愛しく成長したタカミチ少年。

もちろんこの戦いが今日この時間にあるだろう事は予測通り予想通り予感通りである。

「とりあえずこの試合に僕が勝ったら君をパシってあげよう」

僕は無言で前に進み出たタカミチを見つめながら話し出す。

全く関係ないのだが、ちょっと欲しいものを思い出したのだ。

かの病蜘蛛シグザグの得物であり、僕の弟が得意な道具なのだが、そろそろ手札を増やさないと考えていたところなのでこの機会に手に入れて特訓してみようと考えたのである。

「……会ったばかりなのにパシられてばかりでなんだか昔を思い出しますよ」

苦笑いのタカミチはタバコを携帯灰皿に入れ、両手をポケットに入れて戦闘体制になる。

紅き翼時代はよく面倒事を押し付けていたのだが、この時代でも変わらない事を嘆いているのだろうか。

それとも懐かしさに喜びを感じているのだろうか。

まあいい。

「さあ、どこからでもかかってきなさい」

僕が両手を広げて挑発すると共にタカミチは両手を合わせた。

魔力と気を融合させた究極技巧アルテマアート【感卦法】。

最初からクライマックスですね、わかります、なんて僕は内心余裕たっぷりだった。

お互い言葉は不要、拳で語れとばかりに降り注ぐ居合拳を避けながら、僕はどうやって彼を殺さずに倒すか考える事にした。

シャボン玉　却下。  
殺すつもりはない。

ナイフ　却下。

持つとどうしても殺してしまいそうだ。

先のエヴァンジェリンの件もあるし。

魔法の射手　却下。

成長したタカミチ相手にはあまり効果はないだろう。

身体強化　採用。

体術のみで倒してあげよう。

「力の違いを見せてやるっ！！」

僕は挑発的な笑みを浮かべて叫ぶ。

行動が決まってからは速かった。

居合拳を避け、防ぎ、躲し、潰し。

近付いてからの流れるような我流拳法。

僕が殴り。タカミチが躲し。

タカミチが殴り。僕が躲し。

僕が蹴り。タカミチが避け。

タカミチが蹴り。僕が避け。

一進一退。

激しい攻防が目にも留まらぬ速さで続いていく。

ふむふむ、成長したではないかと僕は上から目線の感想を抱く。

しかしだ。

「まだまだ修業が足りないね」

ハートブレイクショット。

心臓目掛けて放たれた拳は見事タカミチの胸を捉え、タカミチは「ごはっ!？」と言う言葉を漏らしながら吹き飛んだ。

「感卦法が使えるように僕相手じゃ意味なかったね」

僕はニヤリツと笑い勝利宣言が如く言葉を紡ぐ。

観客と化していた魔法関係者は麻帆良の猛者にして学園長の右腕であるあの紅き翼の高畑?T?タカミチが簡単に手早く敗北したのを見て啞然としていた。

そもそもタカミチ少年は弱い敵との多対一ばかり経験しすぎて、一人の強者と戦う機会が少ないのだからこの結果は当然だ。

仕方ない事だけど、紅き翼や完全なる世界や弟との戦いで鍛えた僕には負けるのは必然だ。

零崎として覚醒からの密度の濃い時間を過ごし、ナギとの戦いで慢心を消し去った僕の敵ではない。

「……勝負ありみたいじゃの」

起き上がらないタカミチを確認してから滑瓢が終わりを告げた。

殺人鬼の歓迎会は何の問題も問答もなく文句なしの実力を僕が見せる事で締め括られた。

### 第十三幕 魔眼の乙女

朝早く起きて、書類仕事して、職員会議して、授業して、夜遅くまで書類仕事して、たまにタカミチをパシって、夜中に警備員の仕事をしてを繰り返して一ヶ月が経った。

「労働基準法見直してこいよコラ！」

僕は我慢できずに唸る。

教職員の仕事がこんなにも忙しいものだとは思わなかった。

いや、夜間の警備員の仕事も兼任しているからだろうか。

何処にも属していないフリーの魔法使いはまだいい。

しかし関西呪術協会の人間まで頻繁に来るのは有り得ない。

もっとしっかりまとめろよ詠春と怒鳴り込みたくなる。

今度の休みにでも怒鳴りに行こうかなあ。

使う暇なく貯金だけがどんどん貯まっていくし、せっかく買った携帯も使う機会がなく不満だらけの生活だ。

だから、だからこそこんなぐらいの愚痴は許されてもいいのではないだろうかと僕は溜息を吐く。

あと3日で冬休みで麻帆良に来て初めての長期休暇。

そんな風に勘違いして浮かれていたら、タカミチに「教師は冬休みも仕事ありますよ」なんて言われてしまったので長期休暇も結局はないので、僕のストレスも貯金と同じく溜まる一方である。

ストレスが溜まりすぎて学園を壊滅させてしまいそうだ。

ちょこちょこ侵入者で発散しているのだが、人間は敵だろうと殺してはいけならしくので、召喚された鬼や悪魔相手ぐらいしか殺す事ができず、更に不満が降り積もる。

今まで自分勝手に我儘に過ごしていた僕にとって、社会人の生活は辛く苦しく怠いとしか言いようがない。

吸血鬼はこれを生徒の立場で何年も続けてるみたいだから「流石ッス先輩」と褒めておいた。

もちろん何言ってるんだこいつみたいな目で見られたけれどね。

もしこの3日の内にタカミチが出張したら、7人殺そう。よし決めた。今決めた。

心の中で小さく宣言。

人間が大好きだから人間を殺したい。

昔は思わなかった感情がドンドン溢れていく。

麻帆良の平和はタカミチ次第。

なんて僕の決意が無意味に終わり、終業式の日を迎えた。

タカミチの隣でぱっと終業式をやり過ごして数時間。

今、僕は学校近くのファミレスにいる。

教師の打ち上げでも、クラスの打ち上げでもなく、ある女子生徒に呼び出されたのだ。

呼び出した女子生徒から考えて甘酸っぱい青春からは掛け離れていると思うが、さては何だろうかと僕は期待に胸を膨らませる。

「やあ、待たせてしまったかな？」

そんな風に待つこと数分で彼女は来た。

褐色ガンナーこと、龍宮真名。

またの名をマナ・アルカナ。

1 Aでエヴァに続いて裏の事情に詳しいだろう彼女。

零崎の名の意味をきちんと理解しているだろう彼女。

そんな彼女が零崎と二人きりになるなんていったい何を考えているのだろう。



自殺願望なら余所でやってほしい。

僕は快樂殺人鬼ではないのだ。

「数分待ったけど気にしないでいいよ」

「こういう場合は今来たところなんて言うんじゃないのかい？」

「ごめん。僕は年上好きなんだ。そして興味ない人間に気を遣うなんて馬鹿らしくてやってられないよ」

なんてお互い軽口を叩きながら、彼女は一枚のお札を取り出した。認識疎外の効力を持つものだろう。

いかにもこれから内緒話を始めますと言っているようなものだ。

「零崎一賊の長兄に聞きたいことがある」

冷たい声。

若干緊張感を感じさせながら彼女は先程とは違う真剣な表情で僕を見つめてながら言葉を発する。

「なんだい？ 殺し方でも教えてほしいの？ それなら君の身体に直接教えてあげようか？」

それに対して僕は不敵に微笑み、先程と変わらない軽口で返す。

今、この場にいるのは南愛姫にんげんではなく零崎愛識さつじんきだ。

返答次第では平和なファミリーレストランに血の雨が降り注ぐ事になる。

それを彼女は理解しているのだろう。

彼女はごくりつと喉を鳴らし、僕の一挙一動に注目しながら、怯えを隠しながら話を進める。

「せろなまきただしき零崎直識の居場所を知りたい」

そして彼女は自分の目的を僕に伝えた。

零崎直識。

僕の弟だろうということは面識もないし、初耳だが名前でわかる。

零崎なんて姓を名乗る害悪は僕達だけなのだから。

「残念ながら知らないよ。僕は次男にしか会った事がないからね」

僕は頭の中でどんな弟なのだろうなんて考えをしながら、そんな考えを態度には出さずに返答する。

僕の答えに落胆したのであろう。

彼女は暗い表情で俯いた。

「……そうか、ありがとう」

お礼を言う彼女の表情はやはり暗い。

しかし、僕は人に気を遣える人間なんかではないから彼女の心を  
気遣う事なく気になることを尋ねる。

「僕の弟に何か用があるのかい？」

表情は笑顔、感情は警戒。

可能性が一番高いのは復讐。

しかし、家賊に仇なすものは、老若男女人間動物植物関係なく皆  
殺した。

だからこそ僕は彼女にこの質問をしなければならない。

僕としては原作キャラを殺して、物語を歪ませるのは嫌なのだけ  
れど、零崎の敵は僕の敵。例外は有り得ない。

「零崎直識は……、コウキは私のパートナーだったんだ」

彼女は暗い表情のまま語り始めた。

だった。過去形。

つまりは零崎として覚醒して縁が切れてしまったのだろう。

そしてそんな恋人を諦めきれないから魔眼の乙女は僕に情報を求  
めたのかと僕は納得する。

「立派な魔法使いを目指す正義感の強い普通の人間だったんだけど  
ね」

懐かしい思い出を語る彼女の表情は沈痛だった。

零崎として覚醒したら関係ない。

自分が新しく作り変えられるようなものだから、過去と同じままではいけない。

僕のように特別な生まれ方をしたら少しは可能性があるのだが、零崎として正しく生まれた彼には関係ない。

殺さないという選択肢がないのだ。

こういう人間しか殺さないで鎖で縛って、特定の人間だけに零崎を行う生き方はできるが、誰も殺さないという選択は零崎にはできないのだ。

どれだけの聖人君子だろうと、零崎になれば例外なく人を殺し続ける鬼になるのだ。

僕も零崎であって零崎でない、悪魔に呪われて殺人衝動に目覚めているが、完全に殺さないという選択肢はまだ選べない。

常に全身を意識して堪えなければ、今すぐこの学園都市を壊滅させるだろう。

友達だろうが恋人だろうが、例外なく傷付け続けるだろう。

僕達はそういう存在なのだ。

「見付けたら教えてあげるよ」

僕はそう言っで、頼んでいた紅茶を飲み干して紅茶の代金を置き席を立つた。

もう彼女に興味はないし、ダラダラと雑談を続ける仲でもないから、この場に留まる理由も意味もない。

もちろん見付けたら教えるなんて戯言だ。教える気なんか一切ない。

殺人鬼なんかに出会わない方が幸せだし、わざわざ自分の手で原作を歪ませる必要性は皆無だ。

ファミレスから出ると、外と中の温度の違いに少し戸惑うが、気にせず足を進める。

零崎、零崎、零崎。

知らない零崎を初めて知る事ができた。

と、言っても知っていた零崎なんて自分以外では叶識しかないのだけだ。

僕を知らない零崎は僕をどう思っているのだろうか。

零崎のくせに英雄と讃えられる変わり者？ 零崎が生まれるキツカケを作った厄介者？

それとも零崎なのに殺さない死人だなんて思われちゃったりなんかしちゃったりしてるのだろうか。

人間が好きで人間観察趣味の僕だけど、鬼の観察、接触なんてのも悪くない。

「これは戯言なんかじゃないよ」

僕の独り言は街の喧騒に掻き消されていった。

### 第十三幕 魔眼の乙女（後書き）

Trick or Treat！（ご馳走<sup>かんそう</sup>くれなきや悪戯するぞ！）

冗談です。

お気に入り登録、感想、お気に入りユーザー登録ありがとうございます。

漸く以前の改訂前より進む事ができました。

前の小説から読んでくれている方も、新しくなってから読んでくださっている方も（いるのかそんなヤツ？）ありがとうございます。

これからも気まぐれですが、頑張って更新していきたいと思います。

とりあえず11月11日までは毎日1話夜の8時に予約投稿してあるので安心してください。

それでは。

## 幕間零 殺人鬼の旅（前書き）

### 登場人物紹介

みなみあいき  
南愛姫

教師（物語の語り部）。

いちのみやかほ  
一ノ宮嘉穂

京都の大学生。

こしいわお  
小石岩夫

雑誌のカメラマン。

あまゆきみぞれ  
雨雪霰

旅館の従業員。

あまゆきあられ  
雨雪霰

雨雪三姉妹の次女。

あまゆきひよう  
雨雪雹

雨雪三姉妹の三女。

あかしゆうな  
明石裕奈

麻帆良学園1 - Aの出席番号2番。

いずみあこ  
和泉亜子

麻帆良学園1 - Aの出席番号5番。

大河内アキラ《おおこうちあきら》



麻帆良学園 1 - A の出席番号 6 番。

佐々木まき絵 ささきまきえ

麻帆良学園 1 - A の出席番号 1 6 番。

零崎愛識 ぜろさきいとつき

殺人鬼。

## 幕間零 殺人鬼の旅行

冬休み。

学生にとって嬉しい休みの時間。

リア充達が最も盛る日のある期間。

今はその冬休みだ。

殺人鬼なのに真面目に仕事に勤めていた僕は、遂に休暇というものを頂いた。

もちろん、タカミチが言った通り教職員には冬休みなんて存在しないので、また何日かしたら学校での仕事が始まるのだが休みがあるのは素直に嬉しい。

昼は教師、夜は警備員の生活は思ったよりも辛く、投げ出したい気持ちでいっぱいだったのだから。

そして、そんな休暇中の僕の現在地は温泉旅館。

せつかくの休みだし詠春に会いに行こうなんて考えていた僕は何故か此処にいる。

決して、ちらつと見えた温泉旅館の看板を見て、温泉なんてのもいいなあなんて考え、そのままホイホイと釣られたわけじゃない。

「嘘だ」

「嘘じゃない」

「嘘だ」

「嘘だよ」

まあ、そんな行き当たりばつたりの人生も悪くはないんじゃない？

隣に座る茶髪の女性に笑い掛ける。

「愛姫ちゃんは嘘つきだね」

「僕は嘘をつかない事を信条にしてるんだけどね」

「嘘つき」

「褒め言葉」

そんな嘘つきの僕と愉快に話しているのは、この旅館で仲良くなつた京都の大学生。

一ノ宮嘉穂ちゃん。  
いちのみや かほ

根暗で性悪な僕でも仲良くなれるほど、明るくて気さくな女性だ。

中学生のような容姿で一人歩いているのを見掛けて、迷子だと思  
い声をかけてきて、気が付いたら仲良くなっていた。

もちろん年齢的には本来中学生なのだが、本来の年齢は隠して社  
会人だと伝えている。

証明手段は車の運転免許証（偽造）。

戯言の影響で買ったベスパに乗る為に、滑瓢に頼んで作ってたのだ。

真っ赤なコブラ？

僕、派手なのは苦手なんだ。

「てゆうか愛姫ちゃんが教師なんて未だに全然信じられないよ」

これでも教師DEATH

小萌先生みたいに子供（に見える）先生やってます。

タバコは苦手で、お酒は弱いけど飲めます。

「さっき僕の生徒に会ったでしょ？」

僕は得意げに笑いながら言葉を紡ぐ。

そう、京都で僕の生徒に会ったのだ。

佐々木まき絵、和泉亜子、明石裕奈、大河内アキラの四人組は、中学生の分際で温泉旅行に来ていた。

しかもその中の一人に予想外の現象を確認してしまったのだが、これはいいだろう。

有り得ないことではないのだから。

なんて、僕がこの時にこの事実をもっと深く受け止めていたら、

あんな事にはならなかったんじゃないだろうか。

最初から事情を知っていて、解決に望んでいたら、悲劇は起きなかったのではないだろうか。

僕にはまだ答えは出ない。

## 幕間一 始まりはいつも唐突に

「僕と零崎は同じなのだろうか」

貸し切り同然の温泉に入りながら、僕は零崎について考える。

零崎は呼吸をするように人を殺す生き物だ。

しかし僕は零崎であって零崎ではない。

そしてこの世界に零崎が生まれた原因は僕だ。

ならば他の零崎も僕と同じ種類の零崎なのだろうか、叶識は、他のみんなは僕と同様に殺さない零崎になれる可能性を、殺さないを選べる可能性を持っているのだろうか。

そもそもこの世界で零崎が生まれていく理由はなんだ？

他の殺し名は存在せず、僕という零崎もどき以外本来いなかったはずだ。

なのに何故生まれたのだ。

「むう、……あ、そうか！」

思考をドンドン深めていくと、ある可能性を発見した。

零崎は零崎に共鳴する。

元々、零崎の可能性を持っていたから零崎が近づく事で覚醒して、目覚めたという可能性はどうだろう。

「接触しなければならぬではなく、近辺にいる事で目覚めるのなら、叶識の事も説明がつくし、ドンドン零崎が増えていく理由もわかる」

僕が叶識を覚醒させ、叶識が他の誰かに近づく事で覚醒させ、他の誰かが更に他の誰かに近づく事で覚醒して　これなら増えていく零崎についても、今までいなかった零崎についても説明がつく。

「あ、でも僕とそれ以外の零崎は同じなのかはわからないや」

僕は頭を抱える。

僕と他の零崎の違いについて考えていたはずが、いつの間にか考える事が変わっていた。

「はあ……、」

温泉から湧き出る湯気に向かって溜息を吐く。

そもそもこんな事で悩まなければいけなくなったのは予想外の現象のせいだ。

アレのせいで原作がどうなるのかわからなくなって悩んでいたのだ。

「　　って、悩んでも仕方ないか」

なるよーになーれ。

温泉から上がり、浴衣に身を包む。

慣れない和服に困惑しながらも、僕は温泉旅行に満足していた。

休暇の時ぐらい悩みは忘れて身体を休めるべきだろう。うん、そうだ。

せっかくの温泉旅行なんだから、もっと楽しい事を考えるべきだろう。

「愛姫ちゃんっ！ 卓球やろうよ」

そんな結論が出た瞬間と同時に、浴衣姿の嘉穂ちゃんが現れた。

右手にラケット、左手にピンポン玉と準備は万端なようだ。

「温泉旅館と言えば卓球だよ」

笑顔の女性の誘いを断るのは、紳士としてどうかと思うので、苦笑を浮かべながら頷いて誘いを受ける。

そして僕達は腕を捲りながら卓球場に向かう事にした。

「愛姫ちゃんって何の先生なの？」



「英語だよ。それと副担任なんかも担当してる。部活の顧問なんてのはやってないね」

たわいもない話をしながら歩いて行く。

知り合ったばかりなのに、僕達は長年の友達のように仲の良い雰囲気だった。

「あ、やっぱり英語得意なんだ？」

「見た目から勘違いしてるようだけど、僕は日本生まれ日本育ちだよ。髪の毛は染めてて目はカラコン」

下瞼を人差し指で下に引っ張りながら笑うと彼女はニッコリと微笑む。

「わかりやすい嘘をありがとう。染めた髪はそんなに綺麗じゃないです」

そして自信満々に嘘だと見破った。

「君は僕の嘘を簡単に見抜くね。何かコツがあるの？」

「私って昔から勘が鋭いのだよ」

「ふむ、勘か。それはもはや超直感なんてレベルと言ってもいいかもね。君に会ってから僕の嘘は全て見抜かれているみたいだし」

年齢も含めて彼女は僕の嘘を見破っているような予感がする。

「最初から男の子つてのも理解してたしね」

「それはみんなわかるさ」

そんな風に話していると、卓球場についた。

「とうちゃーく」

嘉穂ちゃんが元気良く笑う。

室中には佐々木まき絵、和泉亜子、明石裕奈、大河内アキラの麻帆良中等部1年四人組、旅館の従業員の雨雪霏あまゆきみぞれさん、宿泊客の小石こいし岩夫さんいわお、の合計六名がいた。

「やつぽー愛姫ちゃんっ」

「一緒に卓球やろうよ！」

佐々木と明石が僕の手を掴みながら卓球台へと引つ張る。

元気いっぱいの中学生に誘われて、僕と嘉穂ちゃんは共に卓球に参加する事にした。

「愛姫ちゃん弱ーいっ」

しかし、明石と佐々木VS僕と嘉穂ちゃんの試合は僕が足を引つ張り、明石が綺麗なスマッシュを決め、僕が足を引つ張り、佐々木が見事なスマッシュを決め、僕が足を引つ張り、嘉穂ちゃんが華麗なスマッシュを決め、最後には負けた。

「愛姫ちゃんって運動苦手だったの？」

嘉穂ちゃんが苦笑いで尋ねてくるが、僕に人に自慢できるほど得意なものがあつた記憶がない。

特技の料理だつて実は並レベルだ。

「自慢じゃないけど得意なスポーツなんて出会つたことがないよ」

殺人をスポーツというのなら出会っている事になるが。

「あんまり気にすることないですよ。俺もさっきあの子達にコテンパンにされましたから」

なんて名前とは裏腹に黒髪で黒縁眼鏡をした細身の男性、小石岩夫さんが話しかけてきた。

彼は僕と嘉穂ちゃんと麻帆良四人組以外の最後の宿泊客で、雑誌のカメラマンをやっているそうだ。

ちなみにこの旅館には宿泊客七人に対して、従業員三人の仕事に圧殺されそうな人数しかない。

長女の雨雪霰さん。あまゆきあられ次女の雨雪霰さん。三女の雨雪霰さん。あまゆきひょうの三姉妹で営業している小さな旅館だ。

まさに隠れ家的温泉旅館って感じかな。

……こんな山奥の旅館に中学生四人が来るってどういふことなん

だろ。

「てゆうか、愛姫ちゃんと嘉穂さんってもしかして恋人？」

「うそつ、先生恋人とかおつたんや？」

どういう意味だ和泉。

「この旅館で知り合っただけの関係だよ」

「迷子の愛姫ちゃんを保護しましたっ」

「迷子にはなつてなかったけどね」

お互い一切照れもせず話すと中学生ズは勘違いだと納得してガツカリとしたようだ。

この年頃の女子中学生は恋愛に興味津々だよね。

「つまんないのー」

「喜ばせようとしてないからね。それよりももう夜遅いし寝たら？  
これでも教師だから生徒の夜更かしは注意するよ？」

目の前に人間がいるとどうしても殺したくなっちゃうんだよね。

此処に来るまでに五人程殺したんだけどなあ。

ちなみに遺体の処理はシャボン玉で楽勝でした。

現場にはただ血が残されてるだけで証拠はなし。

「ぶー、愛姫ちゃんの意地悪っ」

「まあまあ、仕方ないて」

「しょうがないから部屋で恋バナでもしますかっ」

「この前したばかりで誰も恋愛話なかったけど」

「恋はいつも突然だーっ」

「もうええから。じゃあね愛姫先生」

「」「」「おやすみなさい」「」「」

「はい、おやすみ」

四人組はそう言つと一斉に出ていった。

さて、僕も寝ようかな。

せつかくの休暇なんだからじっくり睡眠を楽しみたいし。

「それじゃあ、僕も失礼するよ」

「あ、私も」

僕に続いて嘉穂ちゃんが手を挙げながら着いてくる。

「おやすみなさいませ」

「おやすみなさい」

二人に見送られ、僕は卓球場を後にした。

「明日の朝ちよつと探検しない？ 一人で森の中歩くななんてつまんなくてさー」

廊下を歩きながら世間話をしていると、嘉穂ちゃんは急に話題を変えた。

確かにそれはそれで楽しそうだけど。

「この激しい雨の中をかい？ しかも明日には更に酷くなるみたいだよ？」

夕方から降り出したのだが、今は風も強いし、正直お断りかな。

僕はどんな雨の中も傘を差さない人間だし。

「止んだらだよ。せつかくこんな山奥に来たのに勿体ないじゃん」  
別に探検しに来た訳じゃないけどね。

あと3日で帰るからその時に止んでくれたら僕は構わない。

「まあ、晴れたらね」

「約束だよ？」

運動嫌いな僕としては是非この雨が3日続く事を祈るよ。

こうしてこの日は幕を閉じた。

しかしこの時から いや、ずっと前から、もうあの事件は始まっていたのだろう。

僕はそんな事には気付かず、暢気に休暇を楽しんでいた。

## 幕間二 疑われた殺人鬼

目が覚めるとバタバタという大きな足音が聴こえた。

朝からうるさいし、しかもこの足音の主は僕の生徒であろう確率が高く、少しうんざりだ。

時計を確認すると9時。

窓の外は豪雨。

これなら今日もゆったり過ごせそうだが、外に出る事は出来ないだろう。

「さて  
」

着替えて彼女達を叱りに行こうかな。

モノトーンの服に、胸元にナイフのいつも通りの姿になった僕は洗顔を済ませ、身嗜みを整える。

僕は人前でだらしない格好ができない人間だ。

それは真面目とか、格好をつけたいなどとは違い、誰が相手だろうと隙をみせたくなり深層心理の現れだと思う。

……自信満々に言ったけど外れていないと嬉しいな。

「愛姫ちゃん大丈夫っ!？」



驚愕。痛烈。

扉を開けようとしたら自動で開いて、僕の額と侵入者の額で強烈なスキンシップを交わすこととなった。

そして痛みを堪えながら顔を上げると、額を押さえながらうずくまる嘉穂ちゃんがいた。

「君のせいで今大丈夫じゃなくなったけど何か言いたい事はある？  
もちろん責めている訳ではないよ？　しかしこの状況において、  
謝罪なしで世間話を始めるのは些か不満があるというのは否定はできないけどね」

「そんなことはどうでもいいのっ！」

僕はこれから説教を始めてやろうと彼女を睨みながら話す。  
すると彼女は勢いよく立ち上がって叫び出した。

どうでもいいと申したか、嘉穂ちゃん。

僕が年上好きで君が年上だからといって、そんな相手の横暴を許容するような心の広い奴だと思っっているのだろうか。

否、否、否。

僕は自分程心の狭い、ケチ野郎はいないと思っている。

だからこそ君のその意見には異議を申し立てねば

「……愛姫ちゃんの生徒が死んじゃったみたいなの」

と、考えていたのだが、青白い表情でわなわなと震える彼女を見て、僕は閉口せざるおえなかった。

僕が疑わしげな表情で彼女を見つめると、彼女は嘘じゃないと言いたいかのように何度も首を横に振る。

ごめんねネギくん。

原作前に原作崩壊が起きちゃったみたいだ。

正直原作キャラが死ぬとしたら、僕が我慢出来ずに殺してしまうか、零崎化した人間が殺人を犯すかのどちらかと思っていたのだが、どちらでもなかったようだ。

しかし原因はやはり僕だろう。

僕というイレギュラーのせいでこの世界が変貌しているというのは間違いない。

嘉穂ちゃんに案内された先には、バラバラに切り裂かれた和泉亜子がいた。

魔法の痕跡はなし。鋭い切り口から、僕の弟が得意としていたよな系を使つての行為じゃないかと推測を試みる。

確かバンドだったり、ナギ（ネギ）といろいろやつたり、魔法世界に行ったりといういろいろ活躍していたはずなんだけど、どうやらそ

の光景を実際に見る事はできないらしい。

「一体誰がこんな」

血塗れの少女を撮る小石さん、泣き崩れる二人とそれを宥める大河内、気分が悪そうにしゃがみ込む嘉穂ちゃん、予想外の自体に気絶した電さんと彼女支えている霰さん、警察に連絡しに行った霰さん。

誰も僕の疑問に答えられる人はいない。

仕方がないか。

こんなものを見慣れているのは殺人鬼の僕ぐらいなもんだよね。

僕はそんな事を考えながら辺りを見回す。

この部屋に泊まっている麻帆良四人組のモノらしき荷物（僕にとっては多く見えるが、女性は荷物が多いからこれが普通なのだろう）、開きっぱなしの窓、意外にも整理整頓されて散らかっていない部屋から犯人と争った形跡は見えない。

それにバラバラな遺体の手を見たが、手の平や爪に髪や皮膚はないし、血塗れでわかりにくいバラバラになっている以外に怪我などはないから、素直に殺されたようにもいや、指先に細かい傷後があり、首には切断した傷口以外にもいくつか切り口があるから最初に首にかけられた系で首が絞まっていくのを手で抵抗していたようだ。

「って、なんだあれ？」

遺体の中に血で覆われているが少し違和感を感じるものを見つけ、僕はゆっくりと近付いていく。

そしてハンカチでそれを拾いあげた。

「これは……木材？」

拾いあげたものは小さな木の塊だった。

何かが欠けたものらしく、血を拭いてみると一部分が肌色をしている事から人形のような物の一部みたいだ。

この部屋には人形が飾られていて、それが抵抗した時に壊れて、部屋に散らかって、犯人が持ち出した？

いや、僕の部屋には人形なんてなかったから、この部屋もそれはないか。

「むむむ、わからな」

「南さん。此处から離れて警察が来るまで大広間で待ちましょう」

思考に集中していたが、先程まで写真を撮っていた小石さんの言葉で引き戻される。

もう部屋の中には僕と小石さんしかいない。

「アハハ、すいません」

僕は曖昧に笑いながら小石さんに着いて部屋を後にした。

「それじゃあ、これからについて話し合おうか」

大広間に僕の声だけは響く。

皆揃って沈痛そうな表情だ。

「霰さん。警察はいつ来るの？」

「それが、土砂崩れがあつたみたいですからにはこれないようです」

なんとというバッドタイミング。

3日間雨が振る事を祈った僕がいけないのだろうか。

「なっ、それじゃあ俺達はこのままなんですかつ！？」

先程まで写真を撮っていた癖に、小石さんは急に取り乱す。

まあ、すぐに警察が解決してくれると思つたら無理だつたんだから慌てるのは当然か。

「落ち着いてください小石さん。とりあえず第一発見者は状況を説明してくれるかな？」

そう言つと麻帆良三人娘がピクツと反応する。

同じ部屋なんだから彼女達が発見するのは当たり前か。

「亜子が気分が悪いから部屋で休むって言ってたから私達三人だけでご飯食べに行つて、それでその後ゲームセンターで遊んでたの、……それでいつまでも亜子が来なかったから様子を見に行ったら……」

そこで明石の言葉が止まる。

現場を思い出してしまったんだろう。

「発見した時間は？」

「確か8：30辺りです。その後は私は雨雪さんに伝えにロビーへ。裕奈は気分が悪くなったみたいだから、まき絵が運んでいった」

「ねえ、愛姫ちゃんは何がしたいのっ!？」

突然、佐々木が叫び出す。

確かに友人が死んだ直後に取り調べ的なものは中学にはきついでろっつ。

でもここで止めるという選択肢はない。

「警察は来れない。外には逃げれない。この状況でしなきゃ行けないことは犯人探したよ、佐々木」

「そんなの警察が来るのを待てば」

「いや、確かにそうだ。この事件が今回で終わる保障はないんだ。犯人を見付けなきゃ安心なんてできない」

僕の言葉に反論しようとした佐々木の言葉を小石さんが遮る。

そう、僕以外のもう一人の殺人鬼を見付けなくちゃ、また犠牲者が出てしまうかもしれないのだ。

「大河内、鍵はどうだった？」

「かかってました。それで私が持っていたのでそのまま開けました」

「大河内達はずっと一緒にいたの？」

「はい、朝からずっと一緒でした。食事の時は大広間で一ノ宮さんと小石さんと雫さんと一緒にでしたし、ロビーには雫さんと霰さんがいました」

つまり麻帆良三人娘はアリバイありか。

「雫さん。客用以外に鍵はいくつありますか？」

「マスターキー一本です。従業員室で管理してます」

「雫さんは今朝は何をしていました？」

「私は朝食の用意を三人でした後、皆さんに配膳して、お客様の事は電に任せて二人でロビーの掃除をしておりました」

家族だから法律上はアリバイなし扱いだけど、この際それは無視しよう。

「私と小石さんと雹ちゃんは大河内さん達が来る前からずっと一緒にいたよ。食事の後も三人でお喋りしてたし」

つまり、嘉穂ちゃんと小石さんと雹さんはアリバイは完全に証明されている。

「なあ、犯人は外から入ってきたってのはどうだ？ ほら、窓は開いてたんだからさ！」

「こんな雨の中を歩いて、窓から部屋に入ったら部屋が濡れたり汚れたりするけど、窓枠は全く汚れていなかった。犯人が靴や服を脱いで侵入して和泉が無抵抗で死を待つ以外それはないよ。それにあの部屋は2階だからね」

小石さんの言葉に僕は首を振る。

風向きのせいで部屋に雨が入る事もなかったし、その可能性は低い。

「愛姫ちゃんは？」

佐々木が首を傾げながら尋ねる。

僕はそれに苦笑を浮かべながら答える。

「アリバイなし。昨日の夜からさっきまで寝てたからずっと一人だ



よ」

部屋には鍵がかかっていて、窓は開いていたが部屋は2階だから侵入は無理。

しかし自殺は有り得ない。

他に宿泊客はいないし、外部犯なんて森の奥のこの場所じゃ可能性は低い。

これは僕ピンチ？

「つまり君だけが彼女を殺せるって訳だ」

小石さんに言われなくても、まずい状況になってきたのはわかった。

いつそみんな殺してしまおうか。

「一応反論させてもらうと消去法だけで犯人扱いされるのは困るな。それに僕には彼女を殺す理由がない」

小石さんの言葉に首を振る。

殺人鬼に殺人の罪を被せるとは、犯人さんはなかなかやりますのお。

まあ、『彼女を殺す理由がない』なんて理由なく殺す殺人鬼が言う事じゃないけどね。

「君は彼女達の副担任らしいじゃないですか。俺達みたいに初対面な訳じゃないし理由はありそうだ」

「しかし鍵の問題は？ わざわざマスターキーを従業員室に忍び込んでまで閉める理由がない」

「それこそ俺達に疑われない為なんじゃ？ それか自分だけアリバイがないなんて思わなかったとか……。現実には推理小説みたいに上手くないものだしね」

「凶器に使われたものは？」

「こんな山奥だ。処理するのは簡単ですよ。まあ、警察が来ればわかることですね」

探偵役から一気に犯人役へ。

偽の罪を被せられる殺人鬼なんて傑作だね。

「愛姫ちゃんは嘘ついてないよっ」

ここで救いの女神。

ありがとう嘉穂ちゃん、愛してる。

「証拠はあるのかい？」

「ないけど、愛姫ちゃんが殺したって証拠もないでしょ？」

ありがとう嘉穂ちゃん。

嘘が通用しないなんて、嘘臭いとか思ってたのは撤回するよ。

「そんなに庇うなんて君が共犯の可能性も」

「共犯の可能性を話し出したら僕以外にも可能ってことになるけどね」

「そ、それは……」

これでなんとか挽回できた。

まあ、一番疑わしいのは僕なんだけど。

「とにかく君が一番怪しい事には変わらない」

「だと思しますので、どうぞ監視役でもつけてください」

「なら私が」

「君は仲がいいからダメだ。ここは俺が引き受けよう」

そう言って小石さんが立ち上がった。

「俺以外は女性だし、彼は小柄だから俺なら体格や力から、殺されそうになっても抵抗できるしね」

オッサンと二人で過ごす殺人事件のあった旅館での休暇って……。

犯人が見付かったらたっぷりお礼をすることにしよう。

### 幕間三 誰が殺したヘン・ロビン

あれからの話し合いで、昼間は小石さんが見張り、夜は倉庫に閉じ込められる事が決定した。

倉庫に閉じ込められるなんて僕は園山赤音さんのように次の犠牲者になるのだろうか。

いや、彼女はクビキリサイクル的には犯人か。

バラバラ死体を使って脱出は無理だと思うが。

てゆうか小石さんが犯人なら次に狙われるのは僕かもしれない。そもそも、次があるかわからないのが。

「考え事ですか？」

「このまま犯人扱いされるのは嫌なので、そろそろ真犯人を見付けてやろうかと考えていたところですよ」

僕は立ち上がりながら宣言する。

殺人鬼に罪を被せた馬鹿にお灸を据えねば。

「現場を見に行きたいので着いてきてくれますか？」

「私も行くっ」

次いで、嘉穂ちゃんが立ち上がる。

「小石さんが犯人だったら、愛姫ちゃんが危ないからね」

嘉穂ちゃんの優しさに涙。

しかし、自分に嘘は通用しないという彼女は犯人を知らないのだろうか。

もしくは嘉穂ちゃんが犯人？

やめやめ。

疑心暗鬼はよくないよ。

そもそも裏切られようが僕は殺せないし、それならそれで潤さんのように信じて裏切られるようにしよう。

「……俺は犯人じゃないんですがね」

呆れ顔の小石さんも立ち上がる。

さて、現場検証だ。

部屋は麻帆良三人組の荷物以外はそのまま。

死体もビニールシートを被せたただけなので、血の臭いが充満している。

凶器はおそらく鋭い糸のようなもの。

第一発見者は麻帆良三人組。

三人組が部屋に戻る前のアリバイは僕以外完璧。部屋には鍵がかかっていたが、窓は開いていた。鍵は大河内が1つ、マスターキーが従業員室に1つ。

共犯を疑うなら麻帆良三人組が霰さんと霞さん。

単独犯なら僕以外不可能。

旅館に誰か潜んでいるという事もないし、森に潜んでいるのは天候的に無理。

死体を発見した後は大河内はロビーへ行き霰さんと霞さんと合流して現場へ。

明石と佐々木はそこから少し離れた場所で休んでいて。

騒ぎを聞き付けた霞さん、嘉穂ちゃん、小石さんが現場へ合流。

嘉穂ちゃんはその後、僕の安否を確かめに僕の部屋へ。

一人になる機会があったのは、大河内と嘉穂ちゃんだがその頃には和泉は死んでいる。

やはり共犯の線を疑うしかないな。

「何かわかった？」

嘉穂ちゃんが僕の顔を覗き込む。

「凶器は糸のような細くて鋭いもの。単独犯なら僕以外は無理。死体は苦しんだ様子がないから気絶なり眠らせるなりしてからバラバラにしたのかな？ 気分が悪かったみたいだし。遅効性の毒物で殺された可能性もあるけど、僕は専門家じゃないからわからない。バラバラ殺人をした理由は不明。よっぽど憎かったか殺す事が好きなのか何か理由があるのか一切わからない。でもただ殺すだけならもっと簡単にできるから、何か理由があることは確かだね」

「君はなんとというか冷静ですね……」

「見慣れてるからかな。最初に死体を見た時は吐いたりしたけどね」  
前世で小学生やっていた時にね。

「で、探偵くん。犯人はわかったのかにや？」

「わからないということがわかったと言っておくよ」

って、あれ？血の色が違う？

「どうしたの？」

「うっん、なんでもないよ」

血が乾く速度なんて場所によって違うだろうし、別に気にする必要はないか。

「それよりそろそろ戻りませんか？ 正直あまりバラバラ死体と長い時間一緒にいるのは……」

写真撮ってた人がよく言うよ。

「そうだね。私も愛姫ちゃんとは違って死体と一緒に空間にいるの好きじゃないし、それに賛成！」

「僕も好きな訳ではないよ」

死体愛好家じゃないんだからさ。

「あ、そういえば」

「どうしたの？」

部屋から出た瞬間思い出す。

そういえば最初に死体を見た時に発見した木材を忘れていた。

「これ、何かわかる？」

ポケットの中から一部肌色に塗られた血に染まっていた木材をハンカチで包みながら取り出して、二人に見せる。

「なにこれ？」

「遺体の傍で見つけたんだ」

僕がそう言うと嘉穂ちゃんも小石さんも嫌な顔をする。

「ただの木の屑じゃないの？ 窓が開いてたし飛んできたとか」



「風の方角と濡れていない室内から考えて外からの異物ではないよ。それに一部分肌色だし、赤ん坊の拳ぐらいの大きさのコレが風で飛ばされたら、旅館の窓とか割れてるよ」

「それじゃあ、お手上げ」

「同じく俺も」

嘉穂ちゃんと小石さんは両手を上げて大袈裟に振る舞う。

ふむ、犯行現場にあったから重要なものってのはわかるんだけどなあ。

僕は木材を包んでポケットにしまう。

「あ、先生？」

廊下を通って大広間に戻っていると大河内にばったり出会った。

彼女は僕が犯人とは思っていないのか、警戒心は全くない。

「やあ、大河内。先生の代わりに容疑者になってくれない？」

「お断りします」

僕が軽口を叩くと、彼女は少し苛立ちながら拒絶し、そのまま僕を避けて廊下を進んでいこうとする。

「じ、冗談だよ！ ちょっとしたブリティッシュジョークだから！」

僕は慌てて前言撤回する。

無反応は辛いはず。

「何か用があるんですか？　ないなら私もう行きますけど」

大河内は不思議そうに首を傾げ僕を見る。助けを求めて後ろを振り向くが小石さんも嘉穂ちゃんも視線を合わせてくれない。

「あー、あー、うん、そうそう。大河内達はなんで温泉旅行に？」

僕は無理矢理用件を絞り出して彼女に尋ねる。

本当は事件について聞きたいが、この様子だと友好的に話を聞き出せそうにないし、でも何もありませんで終わりたくないしで苦肉の策だ。

「実はちょっとこの前まで亜子が元氣なくて、それにまき絵との仲も何かおかしくて、私達四人微妙な仲だったんですよ。……でもそれはちよつと前に解決して、それで今回は仲直り旅行みたいな感じですよ」

悲しそうに和泉の事を話し出す大河内。

そんな話を聞いて嘉穂ちゃんは泣きだしそうだ。

「せっかく裕奈のお父さんが用意してくれた旅行なのにこんな事になって……。なんで、なんで……」

大河内は静かに泣きだし、それを見て嘉穂ちゃんも涙を流す。

先程まで写真を撮っていた小石さんですら悲しそうな表情だ。

しかし、僕は泣けない。人の死を悲しむ事ができない。同情も共感もする事ができない。

零崎となつて壊れたのか、何人も殺して麻痺したのか知らないが、僕は一緒に長い時間を過ごした戦友の為にすら涙を流す事ができなかった。悲しいと思う事すらもできなかった。

そんな僕が少しの間過ごした生徒の為に泣けるはずがない。

所詮、空想だと思つてゐる世界の住人の死を実感する事なんてできない。

相手が前の世界の愛しい姉なら僕は泣き叫びながら暴れる事だつてできただろう。

いや、南愛姫のままで此処に立っていたら、彼女達と共に悲しみに浸る事ができたはずだ。

でも僕は南愛姫本人だけど南愛姫本人ではなくて、零崎愛識と名乗っているが自分を零崎愛識なんて思えなくて、僕は誰でもないから悲しめない。

殺人衝動という呪いを、悪魔に呪われてしまった瞬間から僕は変わってしまった。

戻りたいとは今更思わないが、それでも僕は人間に憧れる。

今頃ながら変質を自覚した。

僕はやっぱり殺人鬼だ。

### 幕間三 誰が殺したヘン・ロビン（後書き）

うさぎさんでやった名前ネタ。

南愛姫は、南は昔使ってた偽名の一つ（源氏名とはでは断じてない）。愛姫は昔バンドやってた時の超可愛い同性の先輩の名前。零崎愛識は戯言の原作から。

一ノ宮嘉穂は由来すらなく適当に。

零崎叶識（元は悲識）は感情の名前が良かったから悲しい、そしてそのままだとアレだから改変。

小石岩夫は山にある温泉だから山のイメージ。

雨雪姉妹は雨と雪が好きだから、個別の名前は関連しているのから適当に。

零崎直識（元は正識<sup>まさしき</sup>）は正義の味方のイメージで正しい 正識でもそのままだとアレだから改変。

昔から読んでいる方なら知ってる風巻進も嘉穂同様に適当。強いて言うなら風を巻き込んで進む。

昔から読んでいる方なら知ってる零崎守識<sup>かみあり</sup>は折り紙が由来。

昔から読んでいる方なら知ってるジャンヌ・ダルクは作品でも書いていたようにみんな知ってるフランスの英雄。J a n n e D a A r cは確かに好きだけど、J e a n n e d ' A r cの方ね。

ちなみにバンドのジャンヌ・ダルクの名前の由来はライブをドタキャンした際に名前を変更することを計画して、ボーカルのyasuがデビルマンを読んでいて、すぐ変えるだろうと思っていたから、キャラクターが弱くて可哀相だったからそれにした、だよ！

#### 幕間四 納得のいかない終わり

真っ暗な闇が支配する世界。

雨の雫を地上に降り注ぐ空は、真っ黒に塗り替えられていた。

月明かりすら雨雲に奪われた夜の世界で、僕は明かり一つ入ってこないじめじめとした空間にいる。

もちろん豚箱（牢屋）ではない。

やっと小石さんから解放された僕は旅館の外にある倉庫の中に閉じ込められていた。

窓すらない倉庫内は汚いし、狭いし、お金を払って泊まりに来たのにととても残念な気持ちでいっぱいである。

せつかく休暇をゆつくりと過ごしにきたのにこれはひどい。

犯人にはたつぷりお礼をせねば。

もう一つ大切な理由もあるし。

僕は倉庫の中に用意された布団の上に寝転がりながら決意をする。

寝返りを打ったら完全にアウトだなあ。

「　　って、ああ……、そういえば忘れてたよ」

僕はパツと起き上がり、ポケットの中から携帯を取り出す。そし

てアドレス帳から昔からのパシリを見つけ、その電話番号に発信する。

プルルル。

雨音に紛れて携帯の音が響く。

そして、しばらくすると件の相手は漸く電話に出た。

『もしもし、高畑ですけど』

ダンディズム溢れる洪い声。

今にもぶるああああと言い出しそうなタカマチではなく、いつも苦笑いをしている印象が強いタカハタ君だ。

「やつほータカミチ。少々報告があるのだよ」

僕は状況とは真逆の明るく元気な声を出す。

困難を打ち破る者こそ英雄なんですよ、とか馬鹿な事を考えながら自然に楽しそうな声を出す。

しかし、僕のこの声に騙されるとタカミチ少年はかなりショックを受けるだろう。

楽しい話かと思ったら悲しい話だった時はテンションの急降下で強く衝撃を受けそうだし。

『報告ですか?』

タカミチはそんな僕の考えを知らずに面白そうなものだと勘違いして、笑いながら僕に尋ねる。

しかし次の瞬間僕が出した話に困惑する事になった。

「君と僕の生徒が一人死んで、更に犠牲者が出るかもって報告」

『はっ？』

僕が真面目な声に変わり報告すると、それを聞いて間抜けな声を出すタカミチ。

まあ、そりゃあそうだよな。

しかし僕は畳み掛けるように話しを続ける。タカミチの心情を気にする事なく話しを続ける。

「死んだ生徒は和泉亜子。犯人はまだわかってないけど、見付け次第始末するつもり」

残念ながら見逃すつもりはない。見逃すはずがない。

犯人は手を出す相手を間違えたみたいだ。

身内に手を出したら例外なく容赦なく躊躇なく、誰であろうと死んでもらう。

『始末って いや、ちょっと、全然話についていけないんですが』

「殺すって事に決まってるじゃん。ちゃんと処理するから心配無用」



僕はいつも通りのお気楽な口調で淡々と単純に単刀直入に告げる。

タカミチはいきなりの連続で更に混乱していく。

『そういう意味じゃなくて……いえ、何でもありません。あ、ひとつ聞いてもいいですか？』

そして僕に何を言っても無駄なのがわかったのか早々と諦める事にしたようだ。

だけど聞かなきゃいけない事があるようで、苦笑する表情が見えてきそうな声で僕に一言断りをいれる。

「なんだいタカミチ？」

『僕の生徒を殺したのは愛識さんじゃないですよね？』

沈黙。

了承せずに尋ねてみると、タカミチは真剣な声で僕に尋ねてきた。

零崎だからこそ疑われて当然の事だ。

僕がタカミチの立場なら僕（零崎）を疑う。僕（大量殺人鬼）を疑う。僕（人を殺す鬼）を真っ先に疑う。

「……もしそうだったら？」

僕は笑いながらふざけた感じで尋ねる。

『たとえ、愛識さん相手でも僕は戦うつもりです』

すると、タカミチは覚悟を決めて返事をした。

出張で生徒ほったらかしにしてる奴の台詞じゃないね、まったく。

「ふふっ、違うよ」

『信じます。愛識さんは近い人間の大切な人を傷付けたりしませんから』

その信頼は零崎にはきついよ。

「愛姫くんはそうでも、愛識くんはそうじゃないかもよ?」

なんて言ったって零崎なのだから。

『信じます』

なのに彼は全幅の信頼を持って、返答してくれた。

「ありがとうタカミチ」

こんな殺人鬼の言う事を信じてくれて。

その信頼はいつか必ず裏切ると思っけど嬉しいよ。

「おやすみ」

『おやすみなさい』

ほんと、殺したくなるほど愛しいよ。

プーッ      プーッ      。

外側から鍵をかけられた倉庫内に電子音が響く。

脱出は可能。

しかし、容疑を晴らす為にはこの場に残り、あるかどうかわからない次の事件を待つ必要がある。

携帯をポケットにしまい、胸元からナイフを取り出す。

暗い倉庫内で光もないのに、それは鈍く輝いていた。

朝。時刻は携帯によると8：45。

天気は最悪で、雨は止みそうにない。

昨日よりも早く起きた僕は『早く小石さんや嘉穂ちゃんが迎えに来ないかなあ』なんて、呑気なことを考えてながら待っていた。

ドンドンドンドンッ。

すると、早くも迎えが来た事ようだ。

倉庫を叩く騒音によって気分を切り替える。

ガチャツ　、という南京錠を外す音と共に扉が開く。

「愛姫ちゃん大変だよっ」

なんかデジャヴユ。

目の前で傘を差しながら慌てている嘉穂ちゃんを見て、僕は昨日の事を思い出す。

「その前に身支度を整えさせてくれないかな？　人前で醜い格好をするのは堪えられないんだけど」

「そんなことより、また愛姫ちゃんの生徒がつ　」

「また殺人事件が起きたんです！」

またかよ。

焦りながら用件を述べる嘉穂ちゃんと小石さんを見て溜息を吐く。

「はぁ……、とりあえず急ぐ必要はないし、先に着替えたりさせてよ」

僕の言葉に呆れる小石さんと怒る嘉穂ちゃん。

だって嫌なものは嫌なんだもん。

嘉穂ちゃんに説教をくらいながら、自分の部屋に戻って身支度を整えた後、すぐに現場に向かった。

部屋の中には首吊り死体。

犠牲者は明石裕奈。

天井の太い木にロープを引っ掛けて吊られているようだ。

足元に台が転がっているから自殺か、それとも自殺に見せ掛けた他殺か。

しかし明石教授になんて説明すればいいのやら。

しかも魔法世界編に参加するメンバーが更に脱落なんて、原作はどうなるのだろうか。

もしかしたらネギくんが来る前に全員死亡ENDなんてのもありそうだね。

「第一発見者は？」

僕が問い掛けるとみんなが麻帆良2人組を見る。

「佐々木と大河内か。状況説明よろしく」

そう言つと佐々木は俯き、大河内が震えながら話し出す。

「朝、起きたら……裕奈が首を、その……吊った状態で、死んでて、枕元にこれが」

大河内はそう言つて、右手に持っていた紙を渡す。

『この手紙を読んてる頃、私はもう死んでいるでしょう。

ごめんね、お父さん。

でも後悔はしてません。

亜子を殺したのも私、理由は墓場まで持つて行くことにします。

皆さん迷惑をかけてごめんなさい。

まき絵とアキラ。私の為に嘘をついてくれてありがとう。

愛姫ちゃん、倉庫なんか閉じ込められちゃうような事になってごめんね。

さようなら。

天国には行けないけど、あの世からみんなを見守っています。

明石裕奈』

声に出して読み終わった頃には二人は泣いていた。

「佐々木。……嘘つて何？」

「ずっと、一緒にいたって言うてたけど、本当は、裕奈は気分が悪くなつて途中でトイレに行く、って……ぐすっ……一人になつて」

つまり本当はアリバイはなかったのか。

でも妙に納得いかない。

現実はこのんなものなのか？

遺書が偽物の確率は零。

これでも副担任だから筆跡はわかる。

他人を殺して耐え切れなくて自殺。

なんてもやもやする幕切れだろう。

僕は殺人事件の終わりを喜ぶよりも、殺人事件の虚しさを感じていた。

## 幕間五 終わらなかった悲劇

あれからみんな大広間に集合した。

みんなと言っても小石さんは首吊り死体を撮っていないのだが、それ以外の生きている人間は全員集まっている。

今回は自分で書いた遺書ありの自殺だから、わざわざ死体を調べてはいない。調べる必要性を感じられない。

疑いもはれて事件も終わった。

でも僕の心は晴れなかった。

「愛姫ちゃん」

そんな風に、もやもやした気持ちでぼーっとしていると嘉穂ちゃんから声を掛けられた。

僕は嘉穂ちゃんの方を見る。

「なに？」

「嘘のことについて聞かないの？」

嘉穂ちゃんが僕を真剣な眼差しで見つめる。

彼女の超直感、嘘が通用しないのが本当なのならそれは役に立つだろう。



終わった気でいる事件が再開する可能性もあるし、その場合は真犯人すら応用すれば誰かわかる。

嘘がつけない、真実だけで話さないといけないというのは、選択肢を狭める行為は、犯人にとっては反則過ぎて不満が出るだろう。

僕はそんな不満なんかどうでもいい。

けれど、思うんだ。

「推理小説ってのはネタバレしたらつまらなくなるものだよ。最後の最後まで犯人がわからなくなる、犯人がわかった後もう一度見直したくなる作品が一番なのさ。最初から犯人がバレバレの推理小説や犯人がわかってもらえない推理小説なんか面白くないですよ？」

「これは現実だよ？」

「くだらない幕切れのね」

あまり興味なさ気に答えると、嘉穂ちゃんは何かを考え込むように顎に手を当てる。

正直犯人が死んでしまったのなら僕の出番はない、犯人が生きていても警察の介入を待つのもありだ。

僕は絶対に自分が解決したいなんて目立ちたがり屋で強い正義感を持つ人間なんかじゃない。

解決方法は問わないし、解決して犯人がわかってても基本的にはど

うもしない。

今回はどうにかするけどね。

「わっちに嘘は通用しないのは嘘じゃないであります」

突然嘉穂ちゃんが似ていない物真似をしながらニヤリと笑う。

「素晴らしい鼻をお持ちなんですネ、狼さん」

僕はそれに対して棒読みで乗ってあげた。

嘉穂ちゃんは少し不満そうな表情だが少しは嬉しそうだ。

「でも、主様がわっちの話を聞かないと言つのなら、わっちの力が必要ないと申されるのなら、わっちは黙って主様が全て解決するのを待っておるであります」

嘉穂ちゃんはニツコリと笑う。僕に期待するような視線を向けながら楽しそうに、けれども何処か危なげに笑う。

僕はそれを見て気分を変える。

それはつまり、まだ解決していないということで、嘉穂ちゃんは真相を知っているということで、犯人はこの中にいるということ、また誰かが殺されるかもしれないということ？

「期待してるよ、愛姫ちゃん」

そんな言葉を残し、嘉穂ちゃんは部屋に戻っていった。

勝手に期待して、勝手に押し付けて、自分は勝手に投げ出して、僕に任せて彼女は大広間から消えていった。

そしてその夜に死んだ。

殺人事件はまだ終わっていなかった。  
いや、終わってまた違う事件がもう一度起こった可能性もあるが、とにかくまた人が一人死んだ。

「終わったんじゃないかったのかよ……」

流石に余裕がなくなったのか、小石さんはカメラを取り出さなかった。

「うちの旅館で三人も死ぬなんて」

電さんはそう言って気絶する。

何度も起こる殺人事件に、ついに緊張感が切れてしまったのだらう。

そんな電さんを雲さんががちりと受け止め、心配そうな表情で見つめる。

「電、大丈夫？ 電、電を運んであげて」

「はい、姉さん」

そして気絶した雹さんを部屋から霰さんが運び出していった。

嘉穂ちゃんは、まるで第一の夜を再現するかのように　バラバラに解体されていた。

頭、腕、肩、脚、爪先、お腹、胸、指　様々な身体のパーツが真っ赤な血液と一緒に部屋中に散らばっている。

抵抗した形跡はなく、第一の事件の時に感じた違和感や異物は存在しない。

畳に広がっている血は固まっているから、みんなが寝ている深夜に殺されたのだろう。

寝ているところを殺して、そしてそのままバラバラにしたのだろうか。

悲鳴一つあげる事なく、自分が死んだ事を感じる暇なく、夢を見ているまま死んでしまったのだろうか。

とりあえずこれだけは言える。

「答え合わせはできなかったみたいだね、嘉穂ちゃん」

肉塊を見下しながら呟く。

嘉穂ちゃんの頭は眠っているかのように穏やかだった。

「大広間に行こう、みんな。犯人探しの再開しなきゃいけないみたいだ」

仇はとってあげるから安心してね、嘉穂ちゃん。  
どのみち犯人は殺すつもりだったからついでにだけどさ。

大広間にて全員集合。 気絶している雹さんと僕以外みんな表情は暗い。

当たり前だろう。

三人、三人も死んでしまったのだ。 少し前まで仲良く話していた知人が、旅先で会った旅先で仲良くなった知人が、無惨な遺体となつて、物言わぬ死体となつて次々と消えていったのだ。

人の死に慣れるなんて有り得ない。 一生忘れられない思い出として残る。

だから僕みたいに普通でいられるのが異常なのだ。

「一人ずつ、一昨日の夜から朝までと昨日の夜から朝まで何をしていたのか聞いてみようか」

しかし僕は彼等に遠慮しない。

他人の死を受け入れるのを悠長に待つてあげる事なんかしない。  
するはずがない。

この中にいるのは確定で、この中にいる人間が殺したのが確定で、

僕がそんな犯人を殺すのも確定。

全て定まっている。

僕の言葉を聞いて、みんな一斉にこちらを見る。

しかし誰も喋ろうとはしない。

それならと、僕はまずは自分から語る事にした。

「まずは僕。一昨日の夜から朝までは嘉穂ちゃんと小石さんが鍵を開けるまで倉庫の中。昨日の夜から朝までは部屋に一人だったよ」

朝はアリバイありで夜はアリバイなし、アリバイ関係なく自分が犯人じゃない事はわかっているが。

「私達は両方共、朝は朝食の用意をしていて、夜は三人同じ部屋で寝ていました」

「ずっと一緒に？」

「はい、怖かったのでトイレも一緒に。夜も同じ布団で手を繋いで」

雨雪さんの話を聞きながら頷く。

彼女達は家族だから庇い合ってる可能性もある。だから一応疑わなくては。

しかし、こうやっていろいろ聞いて嘉穂ちゃんに確かめていたら、

嘉穂ちゃんは死ぬことはなかったんだろうか。

嘘が通用しないと自慢する嘉穂ちゃんと一緒に犯人を追いつめる未来なんていうのも存在したのではないだろうか。

もう遅い事だが、僕はそれを想像して笑う。

「俺は朝も夜も一人でした。朝は騒ぎを聞いて一ノ宮さんと君を呼びに行くまで一人で部屋に籠ってたし、夜は一人で部屋で寝ていたし」

次に話してくれたのは小石さん。

完全にアリバイないが、最初の事件はアリバイが完全にあるし、僕の予想では犯人ではない。

しかし決め付けや先入観は良くない。そのせいで思考を止めてしまうのはダメだ。

小さなヒントを探しだし、それを元に常識に捕われずに思考を深めるのが必要だ。

「私達は一昨日の夜から朝は裕奈を発見するまで寝ていて、昨日の夜から朝は二人共寝てました」

次は麻帆良二人組。

彼女達は友達が死ぬ度に、次々と部屋を変わっている。

どちらかが起きたら敏感になっているだろうから物音で起きるか。

これで全員終了。

ダメだ。僕には名探偵の孫や高校生探偵や神の弟のような推理力はない。

そんな事を考えていると、バンツ　と机を叩く音が聞こえて、僕達は全員注目する。

机を叩いたのは佐々木まき絵だ。

「ねえ、愛姫ちゃん。愛姫ちゃんが犯人なんでしょ？」

佐々木が静かに、それでいて怒りを籠めて僕に問い掛ける。

僕は黙ってそれを聞き続ける。

「亜子の時は愛姫ちゃんだけアリバイがないし、決まってるじゃんっ！！」

勢いよく立ち上がり、僕を睨みながら叫ぶ佐々木。

でも、それでも確実な事がある。

「　僕に明石は殺せない。」

その言葉に黙り込む佐々木。

僕は倉庫に閉じ込められたから犯人候補の資格を失ったのだ。



しかし、そのまま黙り込んだままでいると思った佐々木の発言でそれはひっくり返される。

「裕奈は愛姫ちゃんが怖くて自殺したかもしれないじゃん！ それに死んだ人はみんな愛姫ちゃんに関係あるんだよっ！？」

佐々木の言葉を聞いて、みんな納得したかのように、それがあつたかと頷く。

僕を庇ってくれた嘉穂ちゃんは今もない。だから反論は無駄だろう。

「そうですね。悪いけど君は警察が来るまで、ずっと倉庫の中で過ごしてもらいましょう」

小石さんも立ち上がり僕を見つめる。

雨雪姉妹は、僕を殺人犯と決め付けたのか怯えた眼差しを向けている。

「はあ、……どうぞご自由に」

僕に言い返す気力はなかった。

遺書の存在を言い出す気にはなれないし、言ったところで無駄だろう。

またあの暗い倉庫の汚い床に布団を置いて寝るのか。

もう、僕は旅行には行かない。温泉なんてクソくらえだ。

## 幕間六 現実逃避

せつかくの休暇に生徒達に会う。嵐のせいで帰れない。殺人事件に遭遇する。犯人扱いされる。オッサンに入浴含めて四六時中見張られる。倉庫に閉じ込められる。仲良くなった人が死ぬ。

こんな休暇ありでしょうか？

「僕はこんな状況に何度も遭う、見た目は子供、頭脳は大人な探偵を尊敬するね。僕は今回だけでお腹いっぱいだ」

「はあ」

倉庫に閉じ込められたまま独り言のように呟くと、扉の外にいる震さんが気の抜けたような返事をする。

そして僕は返事してくれる人がいるのを嬉しく思いながら更に話し出す。

「彼はそこの殺人鬼よりも多く死体を見ている。事件に巻き込まれている。まさに死神だね。彼を見かけたら死ぬかもしれない事をまず意識しなければならな」

「あのう……」

「なんだい震さん？ 食事中に話すマナー違反は見逃してくれたら嬉しいんだけど」

震さんが途中で声を掛けてきたので僕はたわいない話を中断して

返事をする。

現在、食事を持ってきてくれた霰さんと扉越しに話している。

さつきまで小石さんもいたのだが、鍵を締めたらすぐに帰ってしまったから二人きりだね。決してロマンティックな雰囲気はないが。

「そうじゃなくて……、何て言うか随分落ち着いてるんですね？」

恐る恐るといった様子で霰さんは尋ねる。

一応第一犯人候補だから無駄な恐怖を感じているようだ。

「確かに倉庫に閉じ込められた状況は犯人にとって恰好の餌食だけど、僕は殺されるつもりはないからね」

「貴方は犯人じゃないと……？」

霰さんの言葉に頷く。彼女には決して見えないのはわかっているが普段の癖のようなものだ。

「僕はやるならもっと頭を使っさ。あんな単純な方法は使わない」

「えっ！？ それじゃあ」

「犯人もトリックも解けたよ。ついさっきの話だけだね」

あいにく、閉じ込められていたから、暇な時間だけはたくさんあった。

その時間を推理に充てたらこんな簡単な殺人事件は余裕で解けた。

「始まる前から始まっていて、終わる前から終わっていた。証拠はないけど僕にはわかつちやったよ」

「……へえ、でももう遅いけどね」

僕の言葉に静かな返事が返ってくる。

ガチャッ      ガラガラッ      。

大きな音を立てて鍵が開き、ゆっくりと扉が開いていく。

雨はもう止んでいる。

「やあ、此处を開けたって事は      」

「うん、最後の一人だよ」

声の主は僕の言いたい事がわかっていたのか、全て言い終える前に返事をする。

    こんばんは、犯人さん。

「じゃあ、答え合わせしていいかな？」

「……どうぞ」

僕が尋ねると真犯人は勝手にしろと目で訴えながら了承した。

僕はその様子に満足して頷く。

「それでは愉快に素敵に零崎を始めますっ」

手品を披露するマジシャンのように、舞台の上で演じる俳優のように、身振り手振りを交えながら言葉を紡ぐ。

そして僕の推理ショーが始まった。

「まずは第一の事件。佐々木、明石、大河内が発見した時は和泉は生きていた」

「バラバラ死体があっただよ？」

「佐々木達以外は見てないよ」

「三人が嘘をついたってこと？」

「違うよ。ヒントはバラバラ死体をたかが一般人の中学生がずっと直視できるはずがないってこと」

「……つまり？」

「三人が最初に見たバラバラ死体は偽物。和泉亜子は部屋に隠れていた。ドッキリでも仕掛けたんだろうね。まあ、麻帆良なら精巧な人形も血液も簡単に手に入るだろう」

現場には色が違う血が、それに一部肌色の木片もあった。

嘉穂ちゃんの時にはなくて、和泉の時にはあったのは、そもそも殺される前の状況が違うから。前提条件が違えば不思議はない。

つまり二度和泉は死んだいたのだ。

「ふーん……、」

殺人犯は興味なさ気に聞いているように見えるが、その瞳には焦りが浮かんで見える。

僕はその様子に正解を確信しながら続きを話す。

「和泉亜子を殺すのは簡単だ。彼女は血を見ると失神する。バラバラにした人形は予め糸でも繋いでいたらずくに片付けられるし、窓から捨てれば調べに行く人もいないし問題ない。調べられても明石を殺した後なら明石のせいにできる」

「でも殺す理由がないよ」

殺人犯は両手を広げて、さあ答えてみると問う。絶対にわからないと自信満々に余裕の表情を見せる。

普通ならわからないだろう。平和な日常を過ごす者なら検討もつかないだろう。同じ種類の者にしかわからないだろう。

だけど僕はわかる。

だって僕は同じだから。休暇中だから後回しにしたが、旅館でバツタリ会った瞬間に違和感に気付いたから。予想外の現象に僕は気付いていたのだから。

「和泉亜子が殺人鬼だからさ」

僕の言葉を聞いて、殺人鬼は固まった。僕の正解にうろたえていた。

「理由なく殺す殺人鬼。彼女みたいなのを『零崎』というんだ」

狼狽する殺人犯を無視して、そのまま話を進めていく。

「たぶん現場を見ちゃったんだろうね。それとも相談されたのかな？」

「何を」

「でもあの娘は零崎だけど完全な絶対じゃない。限定された条件でしか殺せない。血を見ると失神する零崎なんて欠陥品でしかない。それに絞殺、毒殺、いろいろな方法はあるけど、どれも血を見る可能性は零じゃない。血を見てしまうから殺せない、血を見てしまうから殺して気絶を繰り返し返す。どちらだったのか知らないが、とりあえず彼女は零崎なんだ」

零崎でありながら零崎でない。  
僕と似ている殺人鬼。

人を見ると殺さないという選択肢は選べないのに、人を殺すと血を見る事は当たり前なのに血が苦手な殺人鬼。異端の欠陥品。

けれどわからない事がある。

彼女は何故僕（零崎）に気付かなかった。彼女は何故見る者全てを殺さなかった。彼女は何故麻帆帆良で事件を起こさなかった。

無意識に自然に呼吸をするように殺す彼女は零崎ならば零崎らしく人間を殺しているはずだ。

なのに、そんな報告は受けていない。

最初から条件付きの殺人なんてのもおそらく不可能だと思うのに何故。

まあ、いいか。

どうせ本人は死んだし、考えても答えが出ないことなのだから。

気分を変えて殺人犯を睨む。

「怖かったんだろ？ 次は自分かもしれないって。逃げたかったんだろ？ 殺人鬼からさ」

「でもさ、私はあの時一緒にいた人が」

「それも簡単。そのままドッキリ計画を利用して嘘だと言えばいいのさ」

殺人犯は僕の表情を見て後退る。

今更、自分は犯人じゃないなんて言うのかい？

自分の足元に首を切り裂かれた裏さんがいるのにさ。

「第二の事件は簡単だ。同室なんだから鍵がかかっていようが殺せるさ」



「でももう一人が起きるかもしれない」

「それについてはいくつか候補があるよ。予め同室の人間が被害者を薬で眠らせるか、第一の事件のようにドッキリでごまかすか、そもそも暗闇だから問題ないってパターンもあるし、バレたらバレたで殺していたってパターンもある。重要なのはそこじゃない。元々密室の中にいたってとこさ。遺書もドッキリを信じている明石なら問題ない。そもそもあのファザコンが父親に連絡しないなんて有り得ない。その父親が近くににいる僕に電話してこないなんて有り得ないんだ」

「……………」

「理由も簡単。ドッキリじゃないなんてバレたら無駄だからね。だから殺す必要があった」

無言でこちらを睨む殺人犯。さっきまでの余裕はもう目の前の人間にはない。

「だけど君にも計算違いが起きた。罪を被せて終えるつもりが、嘘が通用しないと豪語する人間がいたんだ。まだ事件は解決していないと理解している女性がいたんだ」

「一ノ宮嘉穂……………」

悔しそつに歯を食いしばる。

あんな得意を持つ人間なんて誰にも予想できないさ。

「そつ、…………だから殺した。夜中に出る時もトイレに行くとか言え  
ばいい。優しい君の友人なら自分の友人が疑われることは言わない

だろう。そして嘉穂ちゃんはわかっていても抵抗しなかったんだろ  
うね。あんな話をみんなの前でしたんだ。次は自分が殺されるなん  
てわかりきっていただろう」

もしかしたらあんな話をしたのは嘉穂ちゃん自身が死ぬことで、  
僕にヒントを出してくれたのかもしれない。

だからすつごく感謝してるよ。

なんて、もちろん戯言だけどさ。

「危険な綱渡りは失敗。せつかく嵐なんて奇跡を手繰り寄せたのに、  
とても残念だったね」

僕は笑う。勝利を確信して敗者を嘲笑う。

「ね、佐々木まき絵さん？」

殺人鬼殺し。

佐々木まき絵は僕を睨む。

手には部活で使うリボンと触れたら斬れそうな細い糸を持ってい  
る。

あれが恐らく凶器だろう。

もしかしてリボンで絞殺してから糸で斬殺したのか？

「口封じで皆殺しなんて君は逃げてばかりだね。現実逃避してない  
で自分を客観視してみなよ。君はもう戻れない」

「うるさい、うるさい、うるさい……」

怒声と共にリボンが僕の首を絞める。

「私は悪くない！　だって殺されなくなかったんだもんっ！　裕奈は残念だったけど、私はまだ捕まりなくなかったから仕方なかったっ！」

リボンが僕の首を更に締め付ける。

彼女はまるで世界移動前に、僕の中の世界が変わる前に出会った通り魔のようだ。

全てを他のもののせいにして、傷付くのを恐れ、自分を守り現実から逃げている。

子供が駄々をこねるように喚く少女を見て懐かしさを感じるとは……。

「愛姫ちゃん。アキラは起きてたんだよ？　だから同罪っ！　寝てたと思ったら朝に『自首しよ？』なんて言ってきたんだよ！？　友達に捕まれて言うなんて信じられるっ！？」

そうか、大河内は全て知っていたのか。全部知ってて殺されたのか。

僕が信じられないのは君だと言ってやりたい。

でも言わない。この少女には言っても無駄なのはわかっている。

「一ノ宮さんは笑ってた！　元々自殺しに来てたから殺してくれて

ありがとうってさっ！」

山の散歩は場所探しだったのか。  
もしかしたら無理心中に巻き込まれたのかもしれないかな。

「みんな私を馬鹿にしてるんだよ！ みんな私を悪者にする気なんだよ！ だから小石さんも雨雪さん達も殺したっ！ だから最後に愛姫ちゃんも殺して逃げる！！」

喚く少女を見て呆れる。

もう彼女に付き合う気にはなれない。

所詮、バカピンクに完全犯罪なんて無理か。

スパッ。

胸元から出したナイフでリボンを切り裂く。

すると、佐々木は後ろに倒れた。

「くっ　、愛姫ちゃんそんなの持ってたんだ？」

しかし、彼女は直ぐさま起き上がりこちらを睨む。

でも僕は気にしない。

「僕はね、零崎なんだ。」

これからは僕（愛姫）じゃなくて、僕（愛識）の番だ。

「えっ？」

「零崎一賊の長兄なんてやらせてもらってる。本名は零崎愛識って言って今まで何人も殺してきている」

「……何、言ってるの？」

佐々木は知っているはずの僕の知らない一面を見て困惑している。

僕はそれを無視してドンドン彼女に近付いていく。ゆっくりゆっくり一本一本足を運んでいく。彼女が知っている微笑みとは違う笑顔で歩いていく。

「零崎一賊は血の繋がりでなく、流血により繋がっている。でね、一見バラバラなようでみんな家族思いなんだよね」

「愛姫、ちゃん……？」

そして彼女の前で立ち止まる。

「零崎に仇なすものは老若男女人間動物植物関係なく、例外なく、特例なく、容赦なく、区別なく 皆殺しだ」

そして怯える彼女に、僕は銀色を振り上げた。

こうして、温泉旅館での殺人事件は幕を閉じた。

## 幕間終 終わりは新たな始まり

あれから、そう　あの事件、京都の旅館で起こった連続殺人事件が終わってから、僕は同じ京都のあの旅館から差ほど離れていない喫茶店で優雅にティータイムと洒落込んでいた。

あの少女、恐怖から逃げ、現実から逃げ、全てを他人のせいにして生き残ろうとしていた少女はもう存在していない。

僕が殺した。零崎である僕が、零崎に手を出したものに、何も知らなかった哀れな殺人鬼殺しに死を与えた。

僕はそれに対して何の感慨もない。達成感もない。一人の少女、原作で活躍するはずだった彼女の物語を終わらせた事に既に興味を失っていた。

後処理を単刀したのは警察ではなく、関東魔法協会。魔法は関係ないが、自分達が管理していた少女が起こし、管理され管理する側の僕が終わらせた事件を公にしたくはないようで、彼女達は交通事故故で死んだ事に偽造されるようだ。わざわざバラバラ死体を繋ぎ合わせて、死者の身体を弄んで生者を騙すそうだ。

佐々木まき絵は僕が殺した。大河内アキラは、雨雪三姉妹は、小石岩夫は、佐々木まき絵が和泉亜子と明石裕奈と同じように彼女がその手で殺した。

だが、その事実の関係者以外誰に伝わる事はない。

「明石教授残念だろうなあ」

僕は無関係に無関心に、何事でもないかのように、ごく自然のよう  
に淡々と呟く。

しかし明石教授、明石裕奈の父親にとっては残念という一言で済  
ませればいい程簡単な問題ではないだろう。最愛の妻を失い、更に  
娘まで失い、彼はまさに不幸で不運でどうしようもない程苦しく辛  
いだろう。

妻はまだ理解できる。魔法関係の、所轄裏の世界の住人だったの  
だから、死ぬ可能性は高かったのだ。納得はできないが気持ちの整  
理は付きやすいだろう。

しかし娘の話は別だ。彼女は魔法なんて関係なく、普通の少女と  
して普通じゃない父親に育てられ、普通じゃない事に巻き込まれて  
死んだ。

何故、何故、何故、何故。と彼は何度も答えの出ない問い掛  
けを、誰に求めるでもなく続けているだろう。

今回、直接の責任はないが、間接的な責任は僕にある。零崎の僕  
に、零崎が生まれる原因となった僕に、仮説が正しければ和泉を覚  
醒させた僕にあるだろう。

だが、僕はそれを悲しむ事も、哀れむ事も、憎む事も、誇る事も、  
喜ぶ事も、何もしない、ただあるがままとして受け入れ、その観察  
結果を自身に記録するだけで、僕が死者に、遺族に何かを思う事は  
ない。

それが僕なんだ。

なーんて、こういう事を真昼間から普通の喫茶店で考えてる

のもおかしいし、もし読心能力者なんかいたら大変だ。少し自重しよう。

紅茶を、正確に言うならホットミルクティを口に運び、少し口元を笑みを浮かべる。

今日が長期休暇最後の日。

こうやって優雅に過ごせるのは素晴らしい事だ。普通の日常とはなんて偉大なんだろう。

普通から外れてしまっていた宿泊を乗り越えた今ならそれが心から理解できる。素直に喜べる。

「相席よろしいですか？」

そんな僕の感動を妨害する声に僕は思わず眉間に皺を寄せる。普段はしない明らかに『不機嫌です』と主張する表情に顔を作り変える。

冬休みとはいえ平日の、しかもあまり雰囲気が良いとは言えない喫茶店は空席が目立っている。わざわざ相席を求めなければいけない状況でもないし、何の目的があるんだろうか。

「……どうぞ」

仏頂面で短く返事をしながら声を掛けてきた空気を読めない人間を一目見ようと首を動かす。

そして僕は驚愕した。今まで生きてきた中で一番かもしれないレベルで驚愕し、目の前に映る光景に疑問を感じざるおえなかった。



これはどういう事だ。一体全体何がどうなっているんだ。僕は夢を見ているのだろうか。これが白昼夢というものののだろうか。

「やつほー、愛姫ちゃん。お疲れ様ー」

そこには死んだはずの、一ノ宮嘉穂がいた。無傷で、何事もなかったかのように自然に立っていた。

「はあ？」

僕は素っ頓狂な声をあげて目を丸くする。口を大きくだらし無く開けて目の前にいる人間をじっと見つめる。

「なにになになぁー？ 幽霊でも見たような顔をして、死んだ人間が生き返ったかのような顔をして、目の前にある現実を簡単に簡潔に受け入れられない、あるがままを受け止められない滑稽な人間を演じているように見えるんだけど気のせい？」

一ノ宮嘉穂は人を小ばかにした態度を取りながら僕の対面の席に着く。

そんなはずはない。彼女はバラバラになって殺されたはずなんだ。

僕はその現場を見たし、それに彼女が言うように目の前の事がどんなに摩訶不思議でも簡単に現実だと受け入れられる人間などない。

物事には、人間にはワンクッション必要なのだ。殺人鬼もそれは変わらないのだ。

結論、なにこれドッキリ？

「ノードッキリ！ 嘉穂ちゃんやっぱ死ぬのが嫌だから生き返っちゃいましたのだ！。あ、店員さん、私はホットコーヒーで！」

けらけらけらけら、と何が面白いのか大きな声で笑う少女。

ふんわりとした茶色の髪に小柄な体型、あまり化粧や装飾品で着飾っていないシンプルな容姿、それは僕が見る限り間違いなく一ノ宮嘉穂の容姿と一致していたし、口調や声や性格も本人そのものと思えなかった。

有り得ない事なのに。

「有り得ないなんてことは有り得ないのだよ。愛姫ちゃんもよく言うでしょ？」

不思議そうに首を傾げる嘉穂ちゃん。

確かによく言うがあんなものはごまかした。世の中に有り得ないものやことがないのなら僕の信じていない神様や、それ以外も全て存在してもおかしくないという事になる。

世界移動を経験した僕が言うのもおかしいが有り得ないものというのは確かに存在するのだ。

なんだこの状況は。一ノ宮嘉穂は死んだのではなかったのか。

「それが間違い。嘉穂ちゃんはピンピンしております故」

「……嘘がわかるのは読心術？」

僕は彼女を嘘やごまかしは許さないと睨み付ける。

しかし嘉穂ちゃんは表情を変えずにニコニコと微笑んでいる。

「ピンポン。いやあ、愛姫ちゃんに気付かれないように頑張っちゃったよー」

そして僕の質問にごく自然に答えた。

つまりはそういう事か。

「嘉穂ちゃんは魔法使いでしたー。身替わりとかよくできてたですよ？ 気付かれたら犯人扱いされちゃうから高い道具使ったんだよねー！」

「戯言だよな？」

「それなら傑作だけど真実さ。ちなみに私は最初から最後まで私は全部まるっとお見通しでしたー。いひゃひゃひゃひゃひゃー」

下品な笑い声を聞いて頭を抑える。超展開と彼女の言動に僕は頭痛を感じていた。

つまり僕は最初から嘉穂ちゃんの手の平の上だった訳で、彼女は自身の死して僕を探偵役に、滑稽なホームズに導いていたのか、このワトソンくんは。

「それじゃあ、答え合わせといきましょうか     って、まき絵ちゃ

ん相手にやっただよな？ 約束破るのはひどいよ、ぶんぶん」

頭痛が酷くなった気がする。

「頭痛薬いる？ ちなみに認識阻害使ってるから会話は大丈夫だよ。あ、店員さんありがとっ」

嘉穂ちゃんはそう言っ、湯気が揺らめくコーヒー受け取る。

「そんじゃあ、嘉穂様がもはや語られる事のない真相を、死者の代弁者として語らせていただきます」

そして不敵に素敵に魅力的に蠱惑的にニヤリと笑った。

「まずはアキラちゃん。彼女は最初から知ってたよ。でも友達を疑いたくなくて信じなかった、っていうより自分をごまかしていたのかな？ でも裕奈ちゃん殺しの現場を見て自首を促そうと頑張ったの！ 死ぬまでポーカーフェイスだったよねえ。そして友人想いのいい子だねえ」

「佐々木から聞いたよ」

「私とも答え合わせしようよ、もう」

ノリの悪い僕に嘉穂ちゃんは拗ねるが、殺人事件をノリノリで語るのはどう考えてもおかしいと思う。

殺人鬼の台詞ではないけど。

「ちなみに小石さんが友達の死体を撮つるという不謹慎な行動をしていても怒らなかつたのはまき絵ちゃんは犯人だし、裕奈ちゃんは

ドッキリだと思ってたし、アキラちゃんはまき絵ちゃんのことですれどころじゃなかったからだよ！」

「そんな事気にしてなかったよ」

「やつぱり人の死に慣れてる人にはわかんないかなあ？ てゆうか愛姫ちゃんってば一般人と違うからね。こういうところにもヒントはあるんだから見逃しちゃだめだめ」

「そりゃあ、殺人鬼だからね」

だめだめと言われても僕は探偵になった訳ではない。僕はどちらかと言えば探偵に追い詰められる犯人側だ。

そんな想いを込めながら僕は言う。

「ちなみに此処に来るまでに10人殺したのも見ました！」

しかし彼女は恐れるどころか既に知っていたようで、しかも僕の現場を全て見ていたようだ。

僕は溜息を吐く。

「あのシャボン玉可愛いねー？」

「僕のオリジナル魔法」

「なんでシャボン玉なの？」

「姉に初めて貰ったプレゼントがシャボン玉だからかな？」

自称神様が僕の記憶から作ったのだろう。記憶の底から大切な思い出を見つけ出し、それを利用したのだろう。

あれなら悪い事に使わないとでも思っていたのだろうか。  
まあ、どうでもいい。

「うわっ、なんかシスコンっばい」

「家族は大切にするものさ」

「殺人鬼でも？」

「零崎にそれを聞くの？」

楽しそうに話す嘉穂ちゃんに対して僕は無表情でつまらなそうに答えていく。

僕達（零崎）は世界一家族想いの、家族に危害を加えるものには何が相手でも報復を加える殺人鬼集団だ。

それを僕（零崎の長兄）に聞くのはおかしいだろう。

「ふん……まあ、いいや。あ、アド交換しようよっ」

「なんか旅館にいた時より元気潑刺だね？そっちが本性？」

「あんまり変わらないよ。ほら、貸して」

そう言っ僕から携帯を奪い、手際よく赤外線通信をする。

「サンキュー。これからよろしくにゃーッス」

そしてすぐに携帯を返してきた。

「さて、ここからは君が一番気になっている疑問。久しぶりに会ったら零崎化していた少女は殺人を行っていたのか。また彼女は何故旅館で殺さなかったのか。殺さないという選択肢を選べたのか」

ゴクリと喉を鳴らす。僕にとってはここからが本番のようなものだ。

「答えは簡単。彼女が感じる血の恐怖が無意識の零崎のうよりも勝っていたから。それほどまでに彼女は血を見る事から逃げていたから。窒息させたり、毒で殺ろしたりを選べなかったのも、万が一血を見る事になる可能性で零崎を封印していたから」

彼女の言葉に絶句するしかなかった。

血の恐怖が『無意識に息を吐くように人を殺めてしまう』衝動に勝った？

殺さないという選択ができるはずがない呪いのようなものを封印した？

世界移動という奇跡を起こした神様を自称するものが消す事ができないと諦めたコレを、彼女は打ち破った？

「有り得ない。これはそんなに単純なものじゃな」

「現実を見ようよ。殺す対象を条件付けて抗う君達の一部にはできなくても、彼女の恐怖にはそれができたんだよ」

僕は何も言えない。

「同室であるまき絵ちゃんを殺しそうになった。人間以外の動物は殺してしまった。自分を何度も傷付けその度に気絶した。けれど…  
…彼女は人間に傷付けた事は一切なかった。これが真実」

彼女は血に何をそこまで恐怖していたというんだ。無意識を封じるなんて魂に刻み付けるような理不尽が彼女にあったんだ。零に限りなく近い可能性ですら拒絶して零崎を押さえ込むなんて偉業を彼女は何故できたんだ。

答えを求めるような瞳を嘉穂ちゃんに向けても、彼女は何も言わない。

僕は考えるのを止めた。ただ、真実を受け止めて『乙女の秘密』を聞き出すのを諦めた。

「嘉穂ちゃんは何でも知ってるんだね」

「何でもは知らない。知っている事だけだよ」

僕が諦めたような口調で話すと彼女は笑いながら返事をした。

嘉穂ちゃんが語る真実はこれで終わったようだ。

「ちなみになんて知ってるのさ？ 超能力者？」

あの天才占い師のような。



「どの天才占い師かは知らないけど超能力なんかじゃないよ。私は情報屋なんてのを営んでるのだよ」

情報屋？

「つまり私の頭の中には世界中の最新情報が集まっているって訳。例えば愛姫ちゃんが突然魔法世界に現れたとかも知ってるよ」

誰も知らないはずの僕のこの世界での原点まで知っているのか。

「愛姫ちゃんに関しての情報が少ないからあの温泉旅館で直接調べようと思ったんだよね。そこで巻き込まれた訳さー」

この世界の生まれじゃないからね。

「じゃあ、どの世界？ 直接調べようとしても魔法世界に現れる以前の情報が見えなくて苦労してるんだよね」

読心術は本物のようだ。

心の中で返事をしていても彼女はきちんと理解していた。

「嘉穂ちゃんには隠し事は無駄みたいだね」

「愛姫ちゃんの隠し事はわからないけどね。まず、姉なんて君にいいはずだし」

「まあ、企業秘密だよ」

「……はあ、手に入れた情報が少なすぎて無駄足だよ」

嘉穂ちゃんはそう言って、残りのコーヒーを飲み干して立ち上がった。

「次は愛姫ちゃんを丸裸にしてあげるからね？」

目を細めながら探るような視線で僕を見る嘉穂ちゃん。

「……勘弁してよ」

僕には彼女に言い返せる言葉はこれしかなかった。

お互い笑い合い視線を合わせる。

「バイバイ嘘つき」

「バイバイ物知り」

そう言って嘉穂ちゃんは笑顔で立ち去っていった。嘉穂ちゃん自身についての謎はたくさん残して、呆気なく消えていったのだった。

あつ。

「伝票置いて行くなバカ野郎……」

最後まで負けたような気分で僕は店を後にした。

## 幕間終 終わりは新たな始まり（後書き）

終わった、終わった。漸くバラバラエスケープズムの改訂が終了した。

この話は個人的に狂愛のお気に入りです。こじつけが多く、推理すべき謎も幼稚で、犯人すらも最初の方から簡単にわかってしまうミステリーとは呼べないものですが、それでも狂愛にとってはお気に入りの章なんでござえますです。

実は狂愛はテンプレが苦手です。原作になぞるような二次創作なら原作の方が面白いですからね。……それでもテンプレなのはお話を考える想像力が足りないからです。

だからこそオリジナルストーリー的なものを書いてまんまんまんとくなのですよ。書き切れた事にこそ意味があると思っていますですよ。

さて、ここまで読んで下さった皆様ありがとうございました。改訂前から読んでくださっている方には更に感謝の言葉を申し上げます。せていただきます。

ちなみに不人気な嘉穂ちゃんですが、作者はお気に入りなので『最後の探偵役』として、主人公を事件に巻き込む『厄介者』としてこれからも登場していくと思います。

人間狂愛。

## 第十六幕 麻帆良の最強頭脳

世界の歪み、物語に発生した異常、正史とは違う運命を辿った冬休みの事件は終わり、今日は学生達の始まりの日、始業式の日がやってきていた。

これから3学期が始まり、生徒達は次の学年や卒業に向けて、更に学業や部活動に打ち込み、教職員達はそれを支えるべく精一杯サポートをする。

そんな大切な日の始まりは、彼女達には悲しく、辛く、涙が止まらない報告から始まる事となった。

明石裕奈、和泉亜子、大河内アキラ、そして佐々木まき絵の四人が交通事故に巻き込まれ、帰らぬ人となって卒業する前にクラスから消えた。

クラスメートやあまり関係のなかった生徒や教職員は一同悲しい表情で報告を終えた後も過ごし、本来の事情を知る一部の関係者は複雑そうな気分のまま作業を続けている。

死者の家族には魔法による意識操作、記憶操作。裏の事情を知っている明石教授には事情説明を行い、正しい事件は偽りの事故として闇に葬られた。

今にも死んでしまいそうな表情の明石教授の顔は記憶に新しい。妻に続いて娘も失ったのだから当然だろう。

大切な家族の死を僕が知る限り二度経験し、自分はのうのうと平

和な日常を過ごしているなんて、当たり前のように生を歩んでいるなんて、彼は今どんな気持ちなのだろうか。

僕には全くわからない。想像することしかできない、できるはずがない。

「愛姫さん、ホームルーム終わりましたよ」

「ああ、ごめんタカミチ。ぼーっとしてたよ」

静まり返った教室での帰りのホームルーム、子供っぽく言つとわりの会は特出する事がないまま終わった。

いつもつるさい A の生徒はみんな騒ぐ事もなく、思いの外思考に集中してしまった。

今日みたいに騒がしくないと授業はやりやすいが、やっぱりどうしても違和感がある。まるで別のクラスで話しているようなそんな感覚だ。

「愛姫様、マスターから伝言です。今夜晩餐会を開くと」

「やあ、茶々丸。それなら美味しい料理よろしくね」

「かしこまりました」

そんな風に静かに悲しみに落ちる生徒に含まれていない生徒、絡繰茶々丸はいつも通り機械のように 正しく機械なのだが 用件を述べ、僕はそれにこやかに返事をした。

茶々丸はまだ堅い。

原作だと性格はロボットの的でなく、礼儀正しい生徒的な感じなのだが、未だにその兆しは見えてこない。

これから原作までに成長するのだろうか。それとも彼女もまた原作前に死んでしまうのだろうか。心が芽生えることもなく壊れてしまふのだろうか。

こんな考えなんて戯言のまま終わってくればいいな、と僕は思う。

「愛姫さん。僕は先に職員室に戻ってますから」

「あ、うん」

タカミチは少し急ぎながら僕に声を掛けて教室から出て行った。

おそらくクラスの人間の死の影響で仕事が山ほどあるのだろう。

僕もすぐに行く予定なのだけだが、副担任としてやらなきゃいけない仕事が少ない事を祈る。

「じゃあね、茶々丸。僕もそろそろ行くよ」

「はい、それでは」

茶々丸の綺麗な一礼を見ながら、僕は扉を開けて教室を後にする。

「やあ、愛姫先生。ちょっと話があるネ」

しかし待ち構えていたかのようなタイミングで現れたエセチャイナ野郎のせいで、僕はタカミチを追いつける事ができなくなってしまった。

「何か用？ 佐々木に『本物そっくりのお人形さん』を作った天才さん」

僕は少し苛立ちながら返事をした。

タカミチの様子からして仕事に大量にある事は確かだし、僕はさっさとそれを終わらせる為に職員室に戻りたいのだ。

それを妨害した彼女に少し毒を吐いてしまうのは仕方がないと思う。

「まさか、あんな事になるとは思ってたかたヨ」

彼女の言葉を聞いて、こいつは真相を知っていると確信した。

こいつの知る未来は僕がいる未来なのか、それともいない未来なのか。それによって話が変わるのだが、それを確かめる時間は今の僕にはない。

ちやおりんしえん  
超鈴音。

お料理研究会、中国武術研究会、ロボット工学研究会（大学）、東洋医学研究会、生物工学研究会、量子力学研究会（大学）に所属している『麻帆良の最強頭脳』の名で呼ばれる超天才児。

中華屋台『超包子』のオーナーでもあり、多くの研究会で重要なポストにつき、東洋医学研究会では会長も務めている勉強も運動も

万能な無敵超人。

その正体は、世界に魔法の存在をバラそうと計画している未来の魔法世界（火星）からやってきた未来人なのだが、個人的に彼女の行動や思想にあまり興味はない。

「それで用件は？ これでも出張の多いタカミチのせいで仕事が多いんだよね」

他の副担任より確実に。

「先生は未来人はいえると思う力？」

「宇宙人、未来人、異世界人、超能力者、自称神様の全員に会ったことあるけど？」

宇宙人      ラカンなどの魔法世界人。

未来人      超鈴音。

異世界人      僕。

超能力者      魔法使い。

自称神様      あの人。

「……はえ？」

超は僕の返答が予想外で理解不能だったのか、目を丸くしてこちらを見ている。

僕はそれに対して突っ込んで時間を余分に使うことはしない。

「どうやら僕はキョンくんらしい」



「……真面目な話ネ」

僕の言葉に彼女は眉をしかめる。馬鹿にされていても思ったのだろう。

僕が相手の立場でも同じ事を考える。

しかし僕は真面目に話しをさつさと切り上げて職員室に戻りたいだけだ。

「僕はいつでも真面目だよ、未来人」

「っ!？」

だからこそ相手の正体を知っている事を伝え驚愕させた。用件を手短に済ませる為にこちらから手札を切る事にした。

そしてこの反応で彼女が僕のいない未来から来たことがわかった。

もうこれで彼女に用はない。

「単刀直入に聞くが、愛姫先生は何者ネ？」

超は真剣な眼差しで茶化しても無駄だぞと目で訴え掛けてきている。

しかし僕はもはや真面目に相手をする気を失っていた。最初からなかった気がするが今は完全になかった。

「僕はね、今まで他人に本名を教えたことが一度しかないのを誇りに思ってるんだ。それとやめておいた方がいい。僕の本名を呼んだ人間は三人いるんだけど　例外なく全員死んでいるからね」

ごくりつ　と息を飲む音が廊下に響く。

超は僕の演技に騙され、戯言を真言として受け取り、僕に対する警戒心を高めたようだが、もちろん二つの意味で『戯言』だ。

前の世界での本名は南愛姫、こちらの世界での本名は零崎愛識と僕は認識している。

僕は嘘が嫌いだから本名しか名乗らないのさ。

「……愛姫先生の名前を呼んだから死んだと？」

しばしの沈黙の後、超は試すように確かめるように僕に問い掛けた。

「少なくとも僕はそう思ってる」

「貴方が何者かは知らないが、私の計画は邪魔させないネ」

「君の計画とやらは知らないけど、せいぜい邪魔にならないようにしておくよ。それじゃあね」

彼女の計画はどうせ失敗する計画だ。

しかも何がしたいのか知らないが、『敵に塩を送る』どころか『自分と同じ特別な刀を与える』ような馬鹿な真似をして、最終的に

十歳の少年に負ける。

絶対に成功させたいくせに、悪人になっても成し遂げたいくせに、慢心に慢心を重ねて、この目の前の偽悪者になりきれない偽善者は挫折する。

そんな超鈴音が僕に対しての悔しそうな感情を認識しながら、僕はそれを放置して別れの挨拶もせずに職員室へと向かっていった。

僕は思う。

仕事をサボるなんて無理無理。鬼の新田は殺人鬼でも怖いからね。

僕は学園一の嫌われ者である極悪人の吸血鬼、エヴァンジェリんととても仲が良い。

毎週何度がキティちゃんハウスと僕が呼ぶエヴァの居住区であるログハウスに食事を御馳走に行ったり、他愛ない話をしに来たり、親交を存分に深めている。

最近癒しが吸血鬼とその従者しかいない殺人鬼です。

「たれえうゝ あ萌えゝ」

「今日の貴様は気持ち悪いな……」

みかんを装備した火燵という人類の英知の結晶の中で吸血鬼と一

緒にぬくぬくと過ごす。

これが最近で一番の癒しだ。

「いや、最近癒しが少なくてね」

「殺人鬼に癒しは必要なのか？」

「吸血鬼も常に殺伐だと辛いでしょ？」

「私はぬるい毎日を過ごしすぎて、退屈で死にそうだな」

「僕は冬休みに連続殺人事件に遭遇したからお腹いっぱい」

「お前が全員殺したのではないのか？」

「殺したのは犯人だけだよ」

疑うなんて酷いよ、吸血鬼。

僕は甘酸っぱい蜜柑を口に含みながら拗ねるように口を尖らせる。

「で、貴様は土産も買ってこないしな」

「生首なら大量にあつたけど？」

「いらんわっ！ 京都土産でその選択はおかしいだろうがっ！！」

「常識的な吸血鬼（笑）」

「馬鹿にしとるのか貴様ーっ！！」

「エヴァンジェリン先輩を馬鹿にするはずないじゃないですか、ぷっ」

「笑ってるではないかつ！？ 貴様の首と胴体を切り離してやろうかコラッ！！」

「子供が物騒な言葉遣いしてはいけませんわよ。ミス？マクダウェル」

「あ、ああ、すまん って、子供扱いするなっ！ しかもなんだその気持ち悪い口調は！？」

「ノリツツコミまでできるロリ吸血鬼。今なら5？8000円の大特価！ お求めは今すぐフリーダイヤル無惨な良い国まで」

「誰がロリだっ！？ それに売るなバカーっ！ しかも安すぎるだろうがっ！？ だいたい無惨な良い国ってなんだっ！？」

63071192で無残な良い国。

「もしもし、1セット購入したいのですが」

「「茶々丸っ！？」」

思わず僕まで驚いてしまった。

性格が放課後の時点から変わり過ぎていて二重にビックリしてしまった。

「やるではないか茶々丸」

「感謝の極み」

僕が褒め称えると茶々丸は無駄のない動作で綺麗に一礼をする。

「貴様ら私を馬鹿にしてるのかーっ！」

今日もキティちゃんハウスは平和です。

## 第十七幕 秘密の百合の花園（前書き）

今回の冒頭には百合ん百合んなR 15（18？）が含まれています。苦手な方は流し読み、もしくはこの話自体を読まないようにオススメです。

## 第十七幕 秘密の百合の花園

「ん？ どうした？ 顔が真っ赤になっているじゃないか」

スタイル抜群の大人な女性が小柄な少女を見下しながら吸血鬼のような歯を覗かせ楽しそうに笑う。

ベッドの上に押し倒され、首筋に這う生暖かい舌の感触に快感を感じながらも、それを必死に堪えようとしている少女には、返事できない。できるはずがない。

「やつ、ああんっ、おねえ、さまぁ……」

少女は恥ずかしそうに身体を震わせ、涙が溜まった瞳で女性を見つめる。

少女は「もうやめてください」と言いたかったのだろうが、しかしその仕草は女性には誘っているようにしか見えなかった。

「おねっ、むぐっ んっ」

そして女性は少女の唇を強引に奪う。舌を絡ませ、唾液を貪り、少女の身体をまさぐりながら何度も何度も唇を奪う。

少女は女性に身体を触れられると跳ねるように身体を反応させる。快楽に表情を歪ませ、僅かな抵抗を見せながら女性になすがままに弄ばれ続ける。

「あっ、そこは……だめっ！」



しかし女性の指先が触れると少女の最も敏感な部位に触れると、彼女は強く抵抗して女性を突き飛ばそうと腕を伸ばした。

「なんだ？ アイヒメは私に触れられるのが嫌なのか？」

力の入っていない腕で押された女性は少し悲しそうな表情で少女を見つめる。

その表情を見て少女は慌て始めた。

「ち、ちがつ……そうじゃなくて、イヴお姉様に……そんな汚い場所に……んっ……触れさせるなんて、あつ、私には……できません」

快楽に震えながら少女は必死に首を振り否定する。

それを見て女性は妖艶に笑った。

「お前は私にただ身体を預けるといい。私はお前の全てが愛おしいのだ。だから私にお前の全てに触れさせておくれ」

女性の言葉に少女は恥ずかしそうにゆっくりと、しかし確実に頷いた。

その反応を確認すると女性は少女の大切な部位に触れる。

ぴちゃり。

いやらしい水音が響くと少女は顔を真っ赤にして、女性から顔を

反らした。

「……濡れているじゃないか。いやらしいな」

「い、いやっ、言わないでっ……」

女性は触れた指先を舐め回しながら震える少女に笑い掛ける。

「ふふふ、たつぷりと愉しませてやるからな」

そして女性は少女を

「何見てるの茶々丸？」

突然背後から聞こえたその言葉を聞いて私は本を閉じ、そして振り向きながらその薄い本を背中に隠す。

後ろにいたのはマスターの友人、南愛姫として私達の副担任をなさっている零崎愛識様でした。

「い、いえ、何でもありません」

私は少し吃りながら否定してごまかす。

彼女 訂正、彼は魔法世界では知らない者はいない程の英雄であると同時に一部の人間しか知らない殺人鬼一家【零崎一賊】の長男で、愛らしい見た目とは裏腹に私のマスターと互角以上の戦いができる戦闘者らしいです。

可憐な見た目、実力がある、鬼であるとマスターとは共通点多

く、この学園でお互いに一番仲が良い者同士だと私的に思っています。

私が今背中に隠しているのは早乙女さんに依頼して描いて貰った愛識様が女体化したアイヒメとマスターが大人化したイヴが姉妹の契りを結んで愛し合うラブロマンス。同人誌と呼ばれる薄い本でございます。

「へえ、そっか……」

愛識様はつまらなそうに呟き、興味を失ったのか私から視線を反らす。

良かったです。これで私の宝物は守られます。

マスターや愛識様に見付かれればお叱りを受けるでしょう。嘆かれるでしょう。燃やされてしまう可能性だってあります。

しかしにとってそれは受け入れられるものではありません。

マスターの不利益になる可能性を無視してでも私はこの本を望んだのですから。

キツカケは愛識様が夜遅くなっただからお泊りをすると決まった日。

あの日、私は見ました。

美しき天使達を。

あの日、私は解りました。

私が生まれた意味を。

夜にトイレに行かれた愛識様が寝ぼけてマスターの部屋へ。

そしてマスターが眠るベッドに近付くとマスターは母親のように優しく抱き寄せる。

二人が抱き合いながら眠る姿を見て私は気付きました。

これが、これこそが、私が彼女達を見て感じたものが愛情という感情だとっ！

それ以降、私はマスター達を見守りながら日々萌えさせていただきました。

しかし恋愛事に興味がないお子様の愛識様とサウザンドマスターを今でも想っているマスターでは刺激的な事件は起こりません。

そこで私は『なければ偽造<sup>つく</sup>ればいいのです』と思い付き、今に到ったのでございます。

「茶々丸、これはなんだ？」

怒りを含んだ声が背後から聞こえてきて、私は直ぐに後ろを振り向く。

あれ？ ないっ………ない！？

そして気が付くと私の手から宝物は失われていて、背後にいるマスターの手の中にあつたのです。

「……………」

「くっ、これはっ」

無言で本の中身を見つめる愛識様と真っ赤な顔でぷるぷると怒りに震える可愛い 訂正、恐ろしいお嬢様。

私はその様子を見てごまかす事は不可能だと把握する。

「同人誌と言われるものでございます。マスターと愛識様を元にしたものを早乙女さんに依頼して手に入れました（キリッ）」

「そ、そうか って、そういう事を言っているのではないわーっ  
！！」

私の言葉を聞いて、マスターは納得できないのか暴れ出してしまった。

愛識様が「どうどう」と宥めながら羽交い締めにしてマスターを止めている。

「ま、まあ、落ち着いて。それよりも茶々丸が感情に芽生えたんだし、祝ってあげたり」

「主人とその友人の絡みを見て欲情する従者などいるかーっ！！」

「ここにあります」

「そう言う意味じゃないわ！ 貴様は今まで私達にそんな劣情を抱いていたのか！？ 私に忠実なのは貴様が私に発情していたからなのかっ！？」

「いえ、私はマスター単体でも萌えますが、お二人の絡みの方が萌えます。そして私自身が参加したい訳ではありません」

「そ、そうか。それならいいのか？」

漸く落ち着いたマスターが一応納得するかのような態度を示す。

「いや、茶々丸自身が変わった事やこんな本を持っている事はいいの？」

しかし愛識様の言葉でまた暴れ出してしまいました。

ちっ、余計な事を。

「だいたいなんだこのイヴとかいうヤツは！ これでは私が女好きの変態みたいではないかつ！ しかも愛識がこんなに素直で可愛らしいなんて納得できんっ！！」

「最後のは余計だよ」

マスターの言葉に私は溜息を吐いた。

まさかここまでダメなマスターだったとは。

「いいですか、マスター？ マスターは600年を生きている経験豊富な淑女です。ですからイヴがリードするのは当たり前です。普段ツンツンなイヴがベッドの上では大人になるのです。それに対して愛識様は未経験で恋愛感情すら未だに芽生えていないお子様。ですからアイヒメが恥ずかしがるのは自然です。そして初めての恋な

のですから嫌われたくない一心で素直になっっているのです。普段は悪戯好きの困ったちゃんですが未経験故にあれだけ恥ずかしいがるのです。そんなアイヒメを見て更に愛おしい気持ちが強くなったイヴがツンツンした態度をやめて自分が大人になり、彼女を深く愛する《いじめる》のです。そして」

「そ、そうか。うむ、もういい……茶々丸。私達はわかったから」

「原作崩壊パネエのです……」

まだ説明はたくさん残っていたのですが、マスターが理解してくれたようなので私は説明をやめます。

愛識さんは何やら不思議な事を言いながら唸っていますが大丈夫でしょうか。

「ご理解いただけたなら幸いです」

「うむ」

こうして私の秘密がバレた一日は終わったのでした。

「あつ、あの本は没収だからな？」

「えっ」

## 第十七幕 秘密の百合の花園（後書き）

まさかの茶々丸百合オタ化。

茶々丸が主人萌えは予定していましたが、予定を突き抜けて予想外の方向に突き進んでしまいました。



## 第十八幕 殺人鬼の予定

現在2002年の3学期。

つまりネギ坊主が来るのは来年な訳だが、仮契約のパートナーは既に三人も死んでいる。

これが世界にどんな影響を齎すのだろう。

僕は白いベスパで職場に向かいながら、そんなことを考えていた。

ちなみにベスパは混合給油が面倒なのだが、ファンとしての想いでソレを我慢している。

まあ、ベスパの話はどうでもいい。

問題は物語。

メインキャラクターではないが、やはり影響は大きいのではないだろうか。

この世界は原作という正史に縛られている訳ではないが、何も行動しなければ、何も異物<sup>ほか</sup>が干渉しなければ正しい歴史を描いていくはずだ。

原作キャラの死というものが、どんな影響を与えてくるのだろう。そもそもこの世界はおかしい。

正史では存在しなかった零崎化。  
物語にいなかった特別な存在の出現。  
死ぬはずがない人間の死。

もはや、別世界として考えた方がいいだろうか。

ネギくんが零崎化していてもおかしくはない、ネギくんが引きこもりになっていてもおかしくはない、ネギくんが変態になっていてもおかしくはない。

何が起るか予測不能というのは当たり前の事なのだが、知っている世界が知らない世界になっていく感覚がどうも気になる。

よし、原作知識に過度に頼るのはやめよう。

自分の未来は自分で切り開けだ。

僕はそんな新たな決意と共にタカミチを轢いた。

「へぶっ！？」

吹っ飛ぶタカミチ。

ベスパたんには傷一つ付いていない。

「おはようタカミチ。今日も元気そうだね」

なんて笑顔で挨拶すると、タカミチはふらふらと起き上がり、頭から血を流しながらきよろきよろと辺りを見回す。

そして僕の存在を確認すると、苦笑しながら挨拶をしてきた。

「おはようございます愛姫さん。……そのバイク物凄く硬いですね」

「傷が付いたり、壊れたりするのが嫌だったから、魔法先生にお願いして頑丈にしてもらったんだよ」

魔法の射手（一発で岩を砕く威力のある魔法）の10倍ぐらいの威力なら耐えられる仕様です。魔改造は男のロマン。

「そんなもので朝一から轢かないでくださいよ……」

「車と楽しいで轢くでしょ？ タカミチを楽しくしてあげようかと」

「楽しいのは愛姫さんだけですよ」

そう言ってハンカチで血を拭き、絆創膏を額に貼付ける。

流石広域指導員だね。怪我の治療は慣れてますってことか。

僕は鮮やかな応急手当に感心する。

「そういえば今日は愛姫さんにしては早いですね？ 新田先生に怒られても良かったですか？」

いつも職員会議にギリギリ間に合う程度の時間に来る僕。

ネギ先生は生徒と一緒に登校してたとか十才の少年の話で言い訳したいが、彼はまだこの学園には来ていない。

来ていても僕はタカミチより年上で身分を登録しているし無駄だ。

「答えはノーだ、タカミチ。僕は生徒に勉学を教える楽しさに目覚めたのだよ」

「嘘はいいです」

無表情で即座に否定の言葉を放つタカミチ。そんなに似合わないかな？

「滑瓢が何か話があるって言ってたから早めに来たんだよ。一応最高責任者の話ぐらい聞いてあげようかなあと」

「生徒が零崎化したことへの話ですかね？」

タカミチは途端に真剣な表情になる。

いつものヘタレメガネとは全く違う表情で僕に問い掛けてきた。

「それは報告書をまとめて提出した。……と言っても、兆候もわからないし、対策も予防も治療もできないけどね」

前例がないから仮説は立てられるが、誰が零崎になるかわからないし、どうやって零崎になるかわからないし、零崎になるのを防ぐ手段もないし、零崎になっても戻す方法はない。

「愛姫さんのように抑えられないんですか？」

「僕は特別だからね。ちなみに一人の覚醒で最悪、街が消える場合もある」

僕は零崎であって、零崎ではない。  
名前自体偽物の零崎だ。

ちなみに街が消えるという話は魔法世界の資料を見て知った。

この世界でも零崎の危険性は変わらないらしい。

「……………」

無言で俯くタカミチ。

また冬休みみたいな事が起きないとは限らないから今から悩んでいるのだろう。

「はいはい、笑顔笑顔。そんな顔してたら神楽坂辺りが心配するよ？」

恥ずかしくて話しかけられない可能性もあるけど。

「……………すいません。それじゃあ、僕はそろそろ行きますので」

「新田先生に遅れるかもしれない報告よろしくー」

そう言ってタカミチは去っていった。

「さて、行きますか」

滑瓢の用事ってなんだろうなあ。

「失礼しまーすっ」

ノックして侵入。

爺の部屋には爺一人しかいなかった。

「ほっほっほ、よく来てくれたのう、愛姫くん」

……やっぱり気持ち悪い。

痴漢されたとか言って悲鳴をあげようかな。

「何か用？」

僕は新田先生以外は、この学園じゃ敬意を払っていない。

二足の草鞋の魔法先生は本職の魔法使いで僕に負けてるし、無関係の教員は別に尊敬するようなどころはない。

てゆうか、この学園の教師って基本的に生徒に振り回されてるし、最近の教師自体モンペやPTAに逆らえないし、新田先生ぐらいしかまともなのがない。

「実は君に頼みがあつての」

あ、ヒゲグラこと神多羅木っちは格好良い。あのダンディズムは

タカミチより上だ。教師よりマフィアやSPに見えるけど。

「春休み　魔法　に　」

僕もサングラスかけようかな。

教師の時は伊達眼鏡してるし、急にしても違和感ないだろう。

「　ヘラス　テオドラ　」

あ、でもサングラスかけたら前が見えにくいな。

それに似合うかわからない　　って、滑瓢の話聞いてなかったや。

「　で、引き受けてくれるかのう?」

「だが、断るっ!」

「ほっ!?!」

あれ?　なんかデジャヴュ。

「あー、お主ちゃんと聞いておったかのう?」

「江戸川コナンの正体は工藤新一なんですよ?」

「バーローwww」

「チャドの霊圧が消えた……」

「心配せんでも日常茶飯事じゃい」

「それで、男ってバレないようにかなこさんと一緒に暮らせと？」

「鞠也様ハアハア　って、違うわいつ！」

この爺の気持ち悪さは天井知らずなのか。

血縁関係がある孫が不憫で泣ける。

「お主、聞いておらんじゃったじゃろ？　春休みに魔法世界のヘラス帝国、夏休みに魔法世界のアリアドネー魔法学校、冬休みにウェールズのメルディアナ魔法学校へ出張を頼みたいんじゃないが」

なんという休日潰し。

てゆうか旅行は懲り懲りなんだけど。

「ヘラス帝国はテオドラ様と約束があるし丁度いいじゃろ？　その時にちょこつと用事を済ませてくれればいいわい」

あ、そういえば案内してもらった約束だったか。

「アリアドネーは総長グランドマスターに届け物を頼みたい。知り合いだし、あつちも会いたいじゃろっ」

確かセラスだっけ？

ナギのサイン貰ってた小娘の。



「メルディアナは2年の3学期に新しく雇う教師の様子を見てきてほしいんじゃ。あの、ナギの息子だしお主も会いたいじゃろ？」

何が悲しくて子守りをしにウェールズまで行かなきゃいけないんだ糞爺。

「パス。タカミチにやらせればいいじゃん」

「タカミチくんはいろいろ忙しくて頼めんのじゃ。だから他に全員と知り合いなのはお主しかおらんのう」

……タカミチ、後で焼き土下座ね。

僕は苛立ちながら八つ当たりを決意する。

「はあ、引き受けてあげるよ、糞爺。いつか息の根止めてあげるからね」

「ほっ！？」

殺人鬼このおれをパシリにするなんていい度胸してンじゃねエか。褒めてやんよ、三下ア。

「最後に言っておいてあげる」

「さ、最後っ！？」

「あんたのそのクソつまんなさそうな人生、あたしが面白おかしく演出してやるわー！」

「ラゼルたん……、きゅんっ」

バタンッ。

ドアを閉めて外に出る。

「おえっ、気持ち悪いにも程があるだろ」

詠春も大変な義理の父親を持ったものだ。同情してあげるから感謝してくれ。

## 第十九幕 夜の麻帆良

夜の麻帆良は昼とは違う色を見せる。

昼は穏やかな白、夜は危なげな黒。

魔法関係の貴重な物や膨大な魔力が秘められた世界樹を狙ってくる襲撃者と麻帆良を守る立派な魔法使いを目指す正義の魔法使いが争う戦いの夜が今日もやってくる。

「こちら零崎。今のところ異常なし」

『ご苦労様です。こちらにも異常ありません』

タカミチの報告を聞いて携帯を切る。

今僕がいる暗い森の中どころか、結界の中にすら侵入者はいない。感知していない。

しかし万が一結界に感知されずに侵入してくる実力者の事も考えて、当番制で毎晩教職員や生徒の魔法関係者達の中で戦闘向きの人間達が麻帆良を巡回している。

基本的にはチーム制だが、近くに他人がいると逆に危険な僕や出張で予定が不規則なタカミチは一人でチーム、実力者のエヴァは自分一人でも大丈夫だが面倒臭いという理由と嫌われていてチームを組み辛い理由から茶々丸と二人。もしくはエヴァ一人でチーム。

魔法生徒二人に魔法先生一人のチームとそんなイレギュラー達を

学園長が上手く当番を割り当てて守っているのがこの麻帆良だ。

プルルルル。

電話から響く機械音を聞き、素早く通話ボタンを押す。

『侵入者です。数は八人。おそらく関西からの陰陽師。そちらのポイントに北東から三人が接近中。直ちに迎撃お願いします』

短く簡潔に明石教授らしき声は必要事項のみ伝え電話を切った。

僕はそれを脳内で整理し、まとめ終わるとすぐに走り出す。

探知魔法など使えず、かなり接近しなければ魔力も感じられない僕には正直この仕事は向いていない。

得意なのはシャボン玉を用いた殲滅戦。もしくは身体強化や魔法の射手を交えてナイフで戦う正々堂々とした戦闘。

襲撃するのは得意だが、襲撃されるのは探す手段の影響で苦手だ。

しかしそんな僕の思いとは裏腹に襲撃者達はいとも簡単に見付かった。

前方で鬼などの妖怪を召喚している三人組を発見。

相手も既にこちらに気付いているようで、僕を睨み付けている。

「おいおい、せっかく召喚されたかと思ったらこんな嬢ちゃんが相手かいな」

「相手を見掛けで判断するな。ヤツからは濃い血の臭いがする」

「はっ……ビビりな鳥族<sup>チキン</sup>さんは見てるだけでもええでえ？」

「なっ、貴様っ!？」

「いいからさっさとやっちまおうぜえ」

大きな鬼が一匹、眼光が鋭い鳥族が一匹、涎れを垂らしながらだらし無くこちらを見ている狗族が一匹。

量より質を優先したのか、実力があまりないのか、それともこちらを甘く見て油断しているのか。  
たぶん油断しているのだろう。

僕は使い捨て用の投げナイフを三本懷から抜いて構える。

「嬢ちゃん。悪いけど召喚主の命令でなあ」

「悪いが死んでくれ」

「ぎやはははは、うまそうな匂いだ!」

「……………」

三匹は後ろの陰陽師を守るような体制を取りながら獲物を前にして余裕をかましている。

それに対して僕は何も言わない。

「何をやっている？ さっさとやれ！」

そして陰陽師のその言葉と共に三匹は一斉に飛び掛かってきた。

「おらぁあッ！！」

まずは狗族が真っ先に爪を立てて切り掛かってくる。

そしてそれをサポートする為に陰陽師が呪文を唱え、幾つかの火の玉が僕に向かってきた。

「……つまらない」

「ちっ！！」

僕はそれを指に挟んでいた投げナイフで切り裂いて掻き消す。魔法処理がしてある特別製は伊達ではない。

「もらったぁぁぁあ！！！！」

「遅いんだよ、ワンコッ！！」

「なっ　ぐぎゃあ　ぁぁぁああ！！！？？？」

そしてそのまま突っ込んできた狗族の身体に投げ付けた。それは両足と心臓に刺さり、勢いは失速し、地面に落ちて断末魔をあげて彼は消滅していった。

「やるやないか嬢ちゃん」

こん棒を構えた鬼が笑う。

上空で警戒していた烏族は何も言わない。

しかし陰陽師達は彼等のように余裕がある訳ではない。数を増やそうと召喚する為に直ぐさま呪文を唱え出した。

僕はそれを邪魔せず、笑いながら待つ。

「嬢ちゃん。何がおかしいんや？」

鬼が心底不思議そうに首を傾げる。訳がわからないと困惑する。

僕はそんな彼を見て、不敵に笑った。

「嬢ちゃんじゃなくて坊ちゃんが正しいよ、鬼のオジサン。僕は零崎、零崎愛識。英雄と呼ばれ、殺人鬼として生きる化け物さ。僕を目にしたものは屍と化し、僕はそれを踏み付けて道を作っていく。そして君もその一つになるのさ」

「なっ　零崎やとっ！？　関東が黒き制裁を雇ったのは本当やったんか！？」

陰陽師の一人が慌て出す。戦争の英雄という大量殺人鬼が目の前にいる事に取り乱す。

「馬鹿を言つなや！　あんなガキが黒き制裁な訳ないやろ！　あいつが子供の姿で戦争に参加したのを何年前だと思ってるんやー！」

しかしすぐにもう一人が嘘だと判断して僕の言葉を否定する。それを聞いて取り乱した陰陽師は落ち着きを取り戻した。

「……そうやな。有り得ん話や。それにヤツは行方不明って話や。嬢ちゃん、嘘をつくんならもつとマトモな話にしておくんやったな」

彼が言い終えた瞬間、化け物と呼ばれる外見をした妖怪達が大量に現れた。そして全員が全員僕を睨み付けている。

「行けえええ！！！」

そして数十匹はいる妖怪達が一斉に飛び掛かってきた。

「では、愉快に素敵に零崎を始めます」

僕はそれを告げると共にナイフを八本指に挟み込み、彼等に突撃する。

切り裂き、貫き、突き刺し、叩き潰し、薙ぎ払い、蹴り倒し、殴り掛かり、妖怪達は次々と悲鳴をあげる暇もなく消滅していく。

最初に召喚された鬼と烏族も後から召喚された妖怪達に紛れて消えていった。追加で召喚されていく異業達と一緒に消失していった。

一匹、また一匹、また一匹、二匹一緒に、三匹纏めて、次々と消されていく妖怪達の姿に三人組は恐怖していく。

消えた、消えた、消えた、消えた、また消えた。殺し尽くす前に妖怪達は深いダメージを負って帰っていく。



そして全員消し去った後、僕はわざと身に受けた異業の返り血で真つ赤に染まっていた。その姿を見て魔力を使い尽くした陰陽師達は絶望するしかなかった。

「悪魔めッ！！」

誰かが言った。化け物よりも化け物な、鬼よりも鬼らしい僕の姿を見て、恐怖で引き攣りながら悲鳴のように叫んだ。

「悪魔で……いいよ。悪魔らしいやり方で話を聞いてもらうから、  
……なんて言うて欲しいのかい？」

僕は笑う。

[illegible]

壊れたように何度も笑う。普段とは掛け離れた下品な笑い方で彼等を恐怖させる。もつと絶望を、深く絶望を、選択肢を間違えた事を教えるように楽しく愉快に素敵に笑う。

[illegible]



「さて、仕事時間終わったし僕は帰るかなあ。タカミチはまだだっけ？」

「僕は今日はこのまま朝までですよ。久しぶりの侵入者に＋して朝まで労働、朝からは教師の仕事です」

「マイドーン！ ガッツガッツ、あいとあいとですヨー！」

「励ます気……ありませんよね？」

「うん！」

僕は疲れた表情のタカミチを残して真っ直ぐ帰宅し、朝までぐっすりと快適な睡眠をとった。

## 第二十幕 次男との再会

季節が移り変わるのは早く、そして過ぎ去ったまま追い掛ける事ができない。

過去は過去、未来は未来、そして現在は現在。今は刻一刻と過ぎ、一秒前の自分には戻れず、一秒後の自分に変わる為零秒の自分として生きるしかない。

つまり何が言いたいかと言うと、早くも冬が終わり、三年生は卒業して、在校生は次の学年になる前の準備をする期間、春休みがやってきていた。

僕は予定通り魔法世界のヘラス帝国にいた。

波瀾万丈な冬休みと比べれば、あれから吸血鬼が風邪を引いたくらいしかイベントもない平凡な日常が続いていたのだが、ここではそうはいかないだろう。

僕はそう考察している。

何故なら僕は総人口12億人を誇る魔法世界《ムンドウス？マギクス》<sup>コスモエンケレティア</sup>で、完全なる世界が起こした南の古き民　ヘラス帝国　と北の新しき民　メセンブリーナ連合　の間で起きた大分烈戦争《ペルム？スキスマティクム》<sup>アラルブラ</sup>を終わらせ、平和を齎した英雄、紅き翼の一員なのだ。

しかも、式典の最中に消えた英雄。謎のまま行方がわからなくなった元賞金首。人々に憧れられる虚像の殺人鬼。知る人ぞ知る殺人

鬼一家、零崎一賊の長男。

どうしようもなく有名で、どうすることもできない程名が知れ渡っている僕がこっちの世界に現れて何の騒ぎも起きないはずがなく、既に扉でこちらに来る時すらも大変だった。

サインをねだられたのは人生初体験だ。エヴァへのお土産話になるだろう。

それと京都旅行で土産を買ってこなかった事を今までネチネチ言われ続けているから、今回は物も買って帰る事にする。

「……はあ、変装が必要なんて大分烈戦争以来だよ」

僕はサングラスに帽子、黒のスーツに赤のインナースタイルで、人込みに紛れながら溜息混じりに呟いた。

僕が紅き翼に所属したのは、紅き翼が裏切り者として世界を敵に廻した時だからあの頃は毎日大変だった。

自分一人なら変装なしで、来た者を殺す生き方で生きていけるが、非戦闘員を含む仲間と行動を共にしていれとそう簡単にもいかない。

一度変装なしでタカミチを連れ回していたら発見され、いろんな人間に追われ、ガトーに説教されたのは良い思い出だ。いや、悪い思い出か。

「しかし……久しぶりだなあ。1983年にやった離宮島での式典以来だから、19年振り？……本来なら僕も27歳ぐらいなのかオッサンか！」

冬休みに誕生日があつたから現在身体年齢は15歳。成長期は未だに來ない。

身長141cmだからタカミチとは親子ぐらいの身長差がある。いや、身長差というか老け顔と童顔だから親子に見えるのかもしれない。

今度街中で『パパ』と呼んでみようか。上手くいけばタカミチに援交疑惑が流れるはずだ。

僕はニヤニヤといやらしく笑う。

「まあ、どうでもいいことは置いておいて、……テオドラの使いと待ち合わせは此処であつたよね？」

賑やかな人通りを避けるようにして存在する喫茶店の中、僕は到着した待ち合わせ場所で途方にくれていた。約束の時間からは既に10分が過ぎている。

「社会人なら時間には厳しく」

僕はキリツと擬音が聞こえてきそうな表情で、自分が未だに守れていない社会人の、と言うより人間として当たり前前の行為について呟く。

つてあれ？ 近付いてくる？

僕は気付いていたが放置していた、冬休みにも感じたあの感覚が近付いてくるのを感じた。

「近くに家賊がいると思ってきたら愛織姉ちゃんかよ……」

そして後ろから間抜けな声が聞こえてくる。

「愛織お兄様だろうがクス」

僕は振り返りながら睨む。

そこには僕の弟である殺人鬼 零崎叶識 が間抜けな表情で立っていた。

彼は姿も声も、面影を残しながらも別人のように成長はしているが間抜けな印象は全く変わっていないかった。

「久しぶりなのに身長伸びてねえなあ」

170後半ぐらいに成長している弟がニヤニヤと笑いながら僕の前の席に座る。

くそつ、心も体も生意気に育ちやがって。

「昔は愛織お兄ちゃんって甘えてきたくせに」

僕は少し拗ねて唇を尖らせながら愚痴る。不機嫌そうな表情で睨みながら噛み付くように告げる。

すると、彼は凶星を突かれたようで、痛そうな顔をした。

「そついうのは言わないでくれよ」

叶識は苦笑しながら溜息を吐く。

「てゆうーかそんな事より何で此処にいるの？ テオドラの使いつてまさか君？」

絶対に有り得ない話だけれど、僕は一応彼に尋ねてみる。聞いて損をする事はたぶんないはずだ。

「俺みたいなのが皇女様の使いな訳ないじゃん。ちよつと弟を捜してるんだよ」

「弟？」

彼の返事は予想通りと予想外の返事だった。

僕は首を傾げる。

「そう、弟。零崎直識、自分が悪と認めた奴だけを殺すとかいう正義の味方気取りの弟。可愛いげのない、兄を便利屋扱いする弟。そんな弟を捜す為に放浪気味の今まで行方不明だった愛識兄ちゃんとは違って家賊想いな俺は世界中を捜し回ってるのさ」

愚弟の言葉を聞いて僕は嫌な顔をする。誰も好き好んで行方不明になっていた訳ではないのにグチグチとうるさい愚弟を睨みつける。

あ、そういえば、直識っていうと原作だと死ぬはずだったコウキとかいう龍宮の元彼か。彼女が捜してる零崎か。

もちろん愚弟には伝えないけど。



「アイツこの前、俺に面倒事押し付けて逃げやがってさ。つか、一賊の奴はだいたい俺が近くにいたら利用しやがるんだよね。これでも零崎一賊の次男で サイレントキリング 無音虐殺 なんて恐れられてる曲絃師なんだけどなあ」

「昔、調子に乗って指を切り落とした奴が成長したもんだねえ」

あの頃はヘタレ殺人鬼だった子供が成長したものだ。

「うげっ、だから愛織姉ちゃんに会うのは嫌なんだよ。いちいち人の失敗を覚えてやがるし」

「愛織お兄様だ駄犬。家賊の思い出は大切にするものでしょ。『こわくてねむれにやいにょ』だっけ？」

「死ね性悪兄貴」

「黙れ生意気愚弟」

だいたい僕は性悪なんかじゃなくて小悪程度のレベルだ。

しかしか、昔は素直で良い子だったのにどうしてこうなったんだか。暴言を放つ愚弟を見て僕はどうしようもなくやる瀬なくなる。

「まあ、いいや。そろそろ俺行くよ」

諦めたような立ち上がり、叶識はそう言って大きく伸びをした。

「うい、じゃあね」

「ああ、その……久しぶりに会えて良かったよ」

「悪いけど男のツンデレには興味ないんだ」

照れ顔の弟を見て僕は『おえっ』吐く真似をする。

いくら弟でもね。

「うつせえ、さっさと死ねっ！」

そう言い捨て、殺人鬼は去っていった。零崎叶識は自分の日常へ戻っていった。いつか屍に埋もれる戦場（生活）に帰っていった。

僕は素直じゃない弟の、家賊想いの弟の心情を察して笑う。

「仲が良いのか悪いのかわからん家族じゃのう」

その時、丁度よく割り込む声が聴こえた。

凶器を取り出す必要はない。警戒する必要はない。僕はちゃんとこの声を覚えてる。さっきから近くで話を盗み聞きしていた事に気付いている。

「やあ、まさか本人が来るとは思ってたよ、テオドラ。しかも遅刻してさ」

テオドラ第三皇女。この国の皇帝の三女の華麗なる登場である。

こっちに来た途端に弟に再会したり、皇女にいきなり会ったり、

なんか魔法世界に来なかったせいでイベントが溜まりまくっているのだろうか。

「どうせお主は用事を済ませたらさっさと帰りそうじゃから妾から来てやったのじゃ。約束を果たしに来てやったぞ」

身長も胸も成長したテオドラが自慢げに笑う。

「てゅーか護衛は？」

「もちろん置いてきたのじゃ。黒き制裁がいるのに必要ないからかう。……そのせいで遅れてしまったんじゃが」

つまり遅刻の原因は側近や護衛から逃げてきたからという訳か。

僕は相変わらずのじゃじゃ馬第三皇女に呆れかえる。

「相変わらずな性格のようで」

「久しぶりに会ったのに失礼な奴じゃのう」

呆れ顔だが、確実に嬉しさが混じった表情で僕を見るテオドラ。

昔はチビジャリだったのに今は立派なお姉様になって……。

「ん？　これが気になるのか？　少しぐらいなら触らせてやってもいいのじゃぞ？　ほれほれ」

そう言って胸を両腕で挟んで強調するテオドラ。

しかし、残念だったね。

「僕の好みは色白で金髪で長髪で年上で細身で優しいお姉さんなんだ」

ネカネさんとかエヴァ大人バージョンとかかなりタイプです。

「肌の色以外当て嵌まるのじゃな」

ニヤニヤといやらしく笑うテオドラ。

年上のお姉さんにからかわれるって結構美味しいシチュエーションかもしれない。もちろん戯言だけどさ。

「ふむ、お主は昔から表情に出ぬからわからぬ。詠春ぐらいからかいがいがあればいいのじゃが」

紅き翼で女性に鼻を伸ばすのって詠春ぐらいだしね。今は巫女ハイレム作ってるんだっけ？

「まあ、よいのじゃ。ではそろそろデートに行こうかのう」

ニヤニヤ笑うテオドラ。

好みのタイプ言わない方が良かったかな？

僕は少し後悔しながら街の中を歩いていくテオドラを追った。

## 第二十一幕 第三皇女テオドラ

渴望しても意味はなく、熱望しても叶うことなく、切望しても届くことはない、そんな僕の願望。

チートになりたい！

そんな厨二病な妄言を真剣に願いながら街を歩く。

「コラ愛姫。せっかく妾が案内してやっとするのじゃからもつと楽しい顔をせんか」

腕を組んで引つ張りながら僕の偽名を呼ぶテオドラ第三皇女。

愛識だとバレたら面倒だから愛姫。テオドラだとバレたら面倒だからテオ。

まさか皇女様のあだ名なんて、あだ名で呼ぶ子供がいるなんて誰も考えないだろう。気付かないだろう。

お互い変装もバッチリで、美人のお姉さんと楽しくて、嬉しくて、騒がしいつきつきデート。

なのに、僕がつまらなさそうな表情をしているのは単純明快だ。

「おおつ、その美人のお姉さんとお嬢さんっ！串焼き一本どうだい？」

「ふむ、では妾と愛姫の分で二つ貰おうかのう」

「まいどありー」

恋人同士どころか、友達同士どころか、子守りしている大人と子供にしか見えない関係に絶望して、失望しているのさ。良くて姉妹、悪くて親子にしか見えないのは悔しい。

「ぷぷつ……ほれ、お嬢さん」

笑いを堪えながら僕に串焼きを渡すテオドラ。正直、普通に腹が立つ。

「最悪の気分です、ガイドさん」

「妾は最高の気分じゃぞ、お客様」

「人の不幸を笑うのは最低だよ？」

「最愛の友達だから遠慮せずに接しているのじゃよ」

「最哀の友達の間違いじゃない？」

「このまま最逢の友達になりたいと思っているのは妾だけのようじやな」

あいあいあいいうるさいわ。

お猿さんかお前は。

「最近忙しいから無理だよ」

「忙しくなくても今日で会うのが最後になりそうじゃがのう。お主がわざわざ会いに来るなんて想像できん」

確かにめんどくさがり屋な僕には無理な話だ。こうやって友達と話すのも楽しいけど、一日中部屋で過ごすのも好きなインドア派だしね。

根暗でごめん。

「そつえば何か見たい場所はないのかのう？ 食いしん坊な愛姫の為に食べ物ばかりみて回ってみたのじゃが」

「食いしん坊はテオの方でしょ？」

串焼きを頼張るテオドラをじと目で見る。

僕はどちらかと言うと少食だ。

「甘い物の店も案内するからその目はやめてくれんかのう？ 久しぶりの護衛なしの外出じゃから食べたい物がいっぱいあったのじゃ」

申し訳なさそうなテオドラ。

もちろん心優しい僕は元々怒っていない事もあり、テオドラを許す事にした。

甘い物に釣られた訳ではない。断じて違う。そんなはずはない。

串焼きを美味しそうに食べるているテオドラの姿は、は反省しているようには見えないけど、別に気にしてないから構わないだけだ。

「テオ、ソースが頼ったについてるよ」

でも皇女様が口元にソースをつけたまま話すのはどうなんだろう  
か。

そんな事を考えながらハンカチを取り出す。

あいにく、鏡に使えるそうなのはナイフしかない。

「ど、どこじゃ!？」

テオドラも一応女性。性格はあまり変わっていないが流石に気に  
するようだ。

「動かないでね」

そう言っ、僕はハンカチでテオドラの頬を拭い去った。ソース  
の取れた褐色の肌はきめ細かく輝いている。

「恋人同士なら舌で舐めとったりするのなの？」

「バカカップルはそうだろうね。ジャックにでも頼んだら？」

僕の思わぬ反撃にテオドラは顔を朱色に染める。

「あ、あんな筋肉達磨なんとも思っておらんわっ!」



そしてぶんすかぴーと怒りながら叫んだ。

そんな表情で言っても説得力がないって事は黙っておこう。

「ほれ、さっさと行くぞっ！」

テオドラはずんずんと進んでいく。

さて、置いていかれないように、テオドラが襲われないようにさっさと追いかけよう。

僕は思う。この言葉がフラグだったようだ。

追いついていた先は理解したくないが、理解しやすい状況だった。

酔っ払い四人。その集団に絡まっているテオドラ。到着した途端、下卑た表情で見られる僕。迷惑そうに困り果てている店主。無関係でいようとする周りの人間。

フラグはきちんと回収されたようで、テオドラはしっかり厄介事に巻き込まれていた。

「……トラブルメーカーめ」

「いいからさっさとこやつらをなんとかせんか！」

僕がじと目で睨むとテオドラは吠えるように叫んだ。

「よお、お嬢ちゃん。なんか用かい？」

けっけっけっけ　と、下品な声で笑う酔っ払い達。

人間は酔うと気が大きくなる。

それに彼等の見た目から察するに傭兵のような戦う事を職業として生きているようだ。そんな腕っ節に自信がある人間ならただの子供にしか見えない僕に警戒なんてわざわざしないだろう。

しかし、あれだ。明らかな囃ませ犬臭が隠せていない。彼等からはギャグ漫画の四天王みたいな一瞬でやられるフラグの囃ませ臭がする。

それに生きる為に戦う人間が殺しが生き様な僕に敵うはずがない。そんな無謀が叶うはずがない。

「その馬鹿を解放したら見逃してあげる。逆らうなら入院が必要なぐらい痛めつけてあげる」

僕が『どつちでも好きな方選んでいいよ？』と続けて言うと、やっぱりというか酔っ払い達は怒り出した。

「ああん？　嘗めてつと」

「愛姫ちゃんキークッ！」

「　ぶべらっ！？」

面倒だったから蹴り飛ばした。

相手をするのも、相手になるのも面倒だ。話を聞くのなんて更に面倒だ。

「トシちゃんっ!？ てめっ」

「愛姫ちゃんパーンチっ!」

「へばっ!？」

二人目撃破。

酔っ払いながら僕の相手をしようとしたのは彼等が始めてだよ。

トシちゃんとやらの上に二人目を殴り飛ばしながら溜息を吐く。

ちなみにテオドラは既に彼等から逃げ出し、離れたところで僕達の様子をジーっと見守っている。

「やりやがったなっ!？ くらえ魔法の」

「愛姫ちゃんシャイニングウィザードっ!」

「まぎげふっ!？」

残り一名の一命。

彼は次々と簡単にやられていった仲間達の無惨な姿を見て慌てて

いる。

この様子だと常習犯ではなく、今回は少し調子に乗ってみただけだろう。

「最後通達。不様に負け犬のように泣きながら尻尾まいて逃げ帰るか、それとも勇敢に果敢に突っ込んで惨めに戮られるか」

ごくりと息を飲む音が響く。

周囲の人間も静かに身を潜めるように見ている。

「選べ、三下。こう見えても僕は世界で一、二を争うレベルで優しい」

懷から愛用のナイフを取り出し、相手に向ける。すると、残った酔っ払いは情けない声をあげながら逃げ出した。

しかし僕はそんな彼の逃げ道を塞ぎ、ニコリと笑う。

「ごめん。優しいって言ったけどあれは嘘なんだ」

足を転ばせ馬乗りになり、スーパーフルボツコタイム！

「君がつ！泣くまでっ！殴るのをっ！やめないっ！！」

「いふあ ひぶっ ずっ、ずみませんっ」

「ごめん。それも嘘なんだっ！」

「あぶっ、ひっ やめてっ」

「正確には、君がっ！ 泣いても！ 殴るのをっ！ やめないっ！」

「悪魔がおるのじゃ……」

こうして楽しい愉しい魔法世界、ヘラス帝国旅行は幕を閉じた。

ちなみに仕事は本当に書類渡しただけで終わりでした。

……マジで僕をパシリに使いやがったな、あの爺。

## 第二十一幕 第三皇女テオドラ（後書き）

いろんな作者さんの作品を読んでも思うことがあります。

格闘技とか陰陽術とか神とか悪魔の神話とかの知識量が凄いですよね。

得意なジャンルがあつて、それを活かせるのは素晴らしいです。狂愛は得意なジャンルを活用しようとしてもグダグタになるからしません。

あと、日本語自体苦手で辞書を離せない狂愛とは違って、たくさん難しい言葉を知っているのもすごいです。

## 第二十二幕 アーティファクト

ヘラス帝国でチートが欲しいと思った僕は唐突に気付いた。

あれ？ 僕弱くない？ 空も飛べないし、使える魔法自体3つしかないし、神鳴流や無音拳にも適性というか才能がなかったし、曲弦系も結局使いこなせなかったし、攻撃手段が近距離の我流体術とナイフ、中遠距離のシャボン玉。

自称神様が言った通り死なない為の力は持っているが勝つ為の力がない気がする。

「チートほしーい！ー！ エヴァえもーん！ー！」

「誰が青ダヌキだ、伊達眼鏡ッ！ー！」

そんな僕が相談に来たのは、お婆ちゃんの知恵袋、二百年年の知識を誇るエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

彼女は僕がキティちゃんハウスに飛び込むと、今日もキレの良いツツコミで出迎えてくれた。

「いったい何の用だ？」

惘然とした表情で僕を睨むエヴァ。今日もロリ可愛い。

「チートが欲しい！ よく考えたら全盛期で本気のエヴァと考えたら勝てるはずがないよね！ どう考えても凍らされて終わりだよね！ だから知識や知恵、もしくは道具をブリーズ！ ギブミーチョコ

「レートー!!」

「ええい、鬱陶しいわ!!」

縋るようにエヴァに頼み込むと、彼女は僕をおもいつきり蹴り飛ばした。

「だいたい貴様には銃弾すら軽々と避ける反射神経とかあるだろうが……」

「地味じゃね?」

「知らん」

冷たい冷たいキティちゃん。

流石は氷や闇の魔法を得意とする吸血鬼。頼ってきた友人を簡単に遇うとは。

「キティのバカッ! もう知らない!」

「おねえちゃんのほかあっ! つつ、何をやらせるかああッ!!」

「何をやってんだか」

「うるさいわ!!」

相変わらずお婆ちゃんの癖にノリがいいね。

「ん? 待てよ? そういえば『アレ』があったか」



ババンジェリンは急に何かを思い出したようで、突然静かになった。

直感A+は有りそうな僕が察するにあまり僕には嬉しくない予感がする。

「仮契約ならアーティファクトが手に入るぞ？」

前言撤回。結構嬉しい思い付きだった。

「は、はじめてだから痛くしないでね？ それと出来れば大人モードで」

「痛いだろうがすぐに終わるさ（魔力を籠めた宝石に血を垂らせば）」

「て、テクニシャン！？」

「何を言ってるんだお前は？」

怪訝な表情で僕を見るエヴァ。

流石百年以上生きる吸血鬼！

事情説明中

「なるほど。それなら問題ないね！」

「どんな勘違いをしてるんだ……」

耳まで真っ赤に染めながら溜息混じりに呟くエヴァに僕は曖昧に笑う。

魔力が外より濃い別荘内に来た僕は、エヴァが仮契約の準備をおとなしく待ち、漸くその時が訪れた。

「ほれ、さつさとやれ」

そして彼女は真っ赤な宝石を差し出した。高く売れそうな大きな宝石を何でもないかのように用意した。

お金持ちなんですね！

そんな事を考えながら僕は人差し指の先を爪で噛み切り、宝石の上に一滴落とす。

眩しい光に僕とエヴァが包み込まれ、光が止んだ時に、一枚のカードが僕に舞い降りた。

従者のカード

主：E v a n g e l i n e A . K . M c D o w e l l

名前：南愛姫

称号：呪われた殺人鬼

番号：0

色調：黒と赤

徳性：愛

方位：南

星辰性：月

アーティファクト：空の旅人  
カエルム・ウィアートル

「これが僕の仮契約カード？」

「呪われた殺人鬼なんてお似合いだな」

どうやら零崎<sup>ゼロ</sup>を受けようと、僕の真名は南愛姫のようだ。仮契約カードを見て驚く。

作り替えられたような、別人になったような気でいても、南愛姫が呪われた後の存在でしかないという事か。

「来たれ《アベアット》でアーティファクトを出し、去れ《アデアット》でアーティファクトが消える。強制召喚は恐らく使わないだろうが、念波は便利だから使うぞ？ まあ、とりあえずさつさとアーティファクトを出してみる。お望みの玩具だ」

「来たれ《アデアット》！」

エヴァの言う通りにしてみると、真つ黒な靴が出てきた。

「これを穿いて脚を振り回すと炎を発生させたり、斬撃みたいなのを飛ばしたり」

「いや、ただ飛べるだけだ」

僕の新兵器は地味で、普通の魔法使いには役に立たないものだった。

「正確に言つと空を歩ける、だな。地面を歩くように空気中に足場が作れるそうだ」

僕空中戦得意じゃないんですけど。

「なら練習だな。私の名目だけで従者にするつもりはないが、私が主人であるカードを持つのなら空中戦ぐらい得意でないとな！それに更に強くなりたいなら力のあまりないお前にピッタリの合気道も教えてやろう」

「地味！ それより糸遣いのスキルを」

「タカミチから聞いた。お前には才能がない」

歩きながらハッキリと告げるエヴァ。

僕にはその言葉を否定する事はできない。

「あ、そうだ。ついでに私も仮契約カード作っておくか。便利なアイティファクトが手に入るかもしれぬし」

そう言つと、エヴァは足を止め、契約陣の書かれた前まで戻ってきた。

「ほら、次はお前をマスターで契約するからさっさと来い」

「はいはい」

僕は契約陣の中に面倒臭そうにだらけながら入り、エヴァを見る。

「宝石は？」

「もうないから『コレ』でいい」

僕が首を傾げながら尋ねると、エヴァは僕の顎を掴み、唇を重ねた。

そして契約陣を中心に光が溢れ出す。

「どうせなら大人モードでしてよ」

「面倒だ」

光が納まった頃にはエヴァの手には僕と似たようなカードがあった。

従者のカード

主：南愛姫

名前：E v a n g e l i n e A・K・M c D o w e l l

称号：人形使い

番号：26

色調：スマレ色

徳性：信仰

方位：北

星辰性：冥王星

アーティファクト：血の聖杯

サンクイス・カリクス

吸血鬼の徳性が信仰でアーティファクトは聖杯か。少し予想外だ。

「ふむ。まあ、こんなものか」

「知ってる？ アウグスティヌス曰く、信仰は愛と密接アガペーに結びついてるんだってさ」

「くだらん」

エヴァはふんつと鼻で笑った。

せつかく仲良し鬼コンビだね、なんて戯言を言おうとしていたのに。

「あ、ファーストキス奪われたけどエヴァはロリババアだしお婆ちゃんにキスされたとも思っ  
てノーカウントにするね？」

「誰がババアだっ！！」

貴方です。

僕はそう言っ  
と彼女が怒るのはわかっている  
ので我慢する。

「とにかく使えるか、使えないのか確かめてみるか。来たれ《アベアット》」

エヴァの言葉と共に真っ赤な杯が姿を現した。どう見ても聖杯っていうか邪杯ですね。

「う、むう……？」

血の聖杯が真っ赤に歪に輝き出す。鈍い光を放ちながら輝き、そして杯の中に真っ赤な液体が溜まっていく。

「なんだこれは？」

数秒後、杯はある程度真っ赤な液体を器の中に溜め込むと光るのをやめ、液体も増加しなくなった。

エヴァはその中の液体を不思議そうに見つめる。

そして指につけて舐めた。毒か薬か、どんな効果があるかわからない液体を体内に摂取した。

「ど、どう？」

僕は彼女から距離を取りながら尋ね、万が一を考えて懐からナイフを抜き出す。

狂化するとか精神操作で仲間をを敵と思うとか、どんな罠があるかわからない。

「血だな」

「血ですか」

「まごうことなきただの血だ」

「完全に完璧に何の変哲もない血ですか」

血でした。せっかく警戒していたのだが、エヴァのアーティファクトに溜まった液体は極普通の血液でした。

「なんとという吸血鬼にしか得がないアイテム」

「いや、これは呪いのアーティファクトらしい。この杯に誰かを考  
えながら触れるとその血液を奪うそうだ」

エヴァは手に持ったパラパラと本をめくりながら答える。それに  
僕は素直に驚いた。

「おおーっ」

「ただし、この杯の半分程度しか奪えず、一度奪った相手からは二  
度と奪えないらしいがな」

なんというちょっとした嫌がらせアーティファクト。僕の関心を  
返せ。

「ちなみに誰を考えながら触れたの？」

「目の前にいたお前だ」

貧血で倒れました。



## 第二十三幕 再会（破壊）

春休みというのは仕事が多い。麻帆良は3年間クラス分けがないから少しはマシなんだろうが、それでも新学年になる生徒や新しく学校に入学する新入生の為にやらなければいけない用事は山積みである。だから出張から帰ってきた僕は少ない休みでたくさんこき使われていた。

今日はそんな少ない休みの内の一日。せっかくなので誰か友人と親交を深めようかと思っていたら、数少ない友達の吸血鬼は風邪でダウンしていて茶々丸はその世話、パシリ兼同僚のタカミチは出張中。

つまり、どういう事だかお分かりだろうか。僕が麻帆良学園で仲の良い人間が二人（+ガイノイド一体）しかいない寂しい奴という事ではない。

わかること、というのは僕が現在進行形で暇を持て余しているという事だ。

僕の趣味は読書なのだが、僕の家には書物が一つもない。というか本どころか最低限の生活必需品しかない。

殺風景で今までに割ったタカミチのメガコレクションぐらいしか変わった物がない部屋だ。

「戯言だったらいいのになあ」

畳の目を数えて暇を潰すという時間の無駄すら出来ないフロー

リングの上に敷かれたカーペットに寝転ぶ。

休日の過ごし方に困るなんてまるで友達がいらない根暗な奴のようじゃないか。非リア充でしかもネト充ですらないダメ人間のようじゃないか。趣味すら少ないとか何が楽しみで生きているかわからないじゃないか。

僕人自分を責める。

ネギくんみたいに生徒と遊んだりとかはどうだろう。

いや、彼は10才で女生徒の部屋に済んでいたから、仲良しこよしだったのだ。僕はタカミチより年上を自称する男。必然的に学校外で生徒と遊ぶなんて選択肢はなくなる。

はあ、これからは不死の子猫ちゃんに優しくしよう。あの娘、誰にでも喧嘩腰だから僕以上に友達が少ないし。

ピンポーン。

そう結論付けた瞬間、エヴァを上から目線で哀れんだ瞬間、インターホンによる間抜けな音が部屋に響いた。

エヴァは風邪でダウン。タカミチは出張中。茶々丸はエヴァの看病中。生徒はそもそも仲良くない。弟は麻帆良にいるの知らない。他の家賊の気配はドアの外から感じない。同僚はあまり関わらない。魔法先生は近付いてこない。滑瓢はわざわざ来ないで呼び付ける。魔法世界人は地球に来れない。アルビレオは療養中で学園祭期間中しか出て来れない。

一瞬で考えた選択肢は全て否定されてしまった。だったら残りの選択肢は一つしかない。

ガチャツとドアノブを捻り、扉をゆっくり開いて挨拶をする。

「やあ、詠春。久しぶりだね」

僕は唯一の候補だった相手の名前を呼ぶ。しかし残念ながら目の前にいたのは詠春ではなかった。

間違い。勘違い。検討違い、知り合いだったらこの人だろうという僕の予想は見事に外れた。

扉の前にいたのはあまり会いたい人物ではなかった。できればもう会いたくないようなお茶目な性格の人物だった。

だから僕はすぐに扉を閉めようとした。

「あれあれ？ 愛しのハニーにそんな態度なんて嘉穂ちゃん泣いちゃうよ？」

しかし彼女は予想通りだと言わんばかりに扉を掴み、強引に中に入ってきた。

京都の大学生と名乗っていた自称情報屋、一ノ宮嘉穂。あの冬休みに出会い、騙され、最後に誰も知っているはずがなかった全てを説明して、そして消えて今まで連絡もなかった魔法使いがそこにいた。

ちなみに愛しのハニーだった事実もカケラも存在しない。

「じゃあ、ダーリン？」

読心術の達人。彼女の前で隠し事は不可能だ。

「ダーリンでもハニーでもなんでもいいから帰ってください」

ハッキリ言おう迷惑だ。それに僕は忙しい。

「さつきからずっと暇してたくせにー。てゆーかなんで私を迷惑がるの？」

首を傾げて尋ねる嘉穂ちゃんに僕は正直鬱陶しさを感じる。

僕はこれでも平穩をこよなく愛する殺人鬼なのだ。殺人事件で知り合った人間と関わって、また厄介事に巻き込まれるのは嫌、というか無理、お断りだ。

いくら暇でも絶対に厄介事を持ってきたっぽい厄介者とは関わりたくない。

「でもでも愛姫ちゃんに拒否権はないのですたー。殺人鬼に人権はありませんーんっ」

しかし僕の考えを理解しているだろう嘉穂ちゃんは、そんな考え知った事かとはかりにバツサリと切り捨てた。

鬼権を作ってくれないだろうか。ウチの家賊の為にもなるし。

まあ、無理だろうね。

やたらと笑顔が眩しい嘉穂ちゃんを見て、僕は諦めの溜息を吐いた。

とりあえず部屋の中に案内して水道水を出す。戯言ファンだからいーちゃんの真似、ではなく単純にお前に出すお茶はないという意味だ。

「あ、そのコンビニでリプトン買ってきたからいらないよー」

けれど嘉穂ちゃんにはそんな考えは見透かされていたのか、持っていた鞆の中からコンビニ袋を出し、その中から紙パックのミルクティーを取り出してストローを差す。

それから彼女はソファにもたれ掛かりながら、まるで自分の家のように寛ぎ始めた。

「何か用？」

冷蔵庫で冷やしていた缶ジュースの、スプライトのプルタブを開けながら冷たい表情で一応尋ねる。

この場合の一応は嫌で嫌で仕方がないけどしょうがないから一応尋ねてあげるの一応だ。

どうせ聞かないと自分から話し出すかいつまでも座敷童のように

居座るだろうし、聞かないと始まらない。

「愛姫ちゃん！ いつもモノトーンの服ばかりで地味だから可愛い服買いに行こうぜーっ」

僕の服を見ながら元気よく答える嘉穂ちゃん。

確かに現在着ている服も、仕事中に着ているスーツも、ましてやクローゼットやらに収納してある服も、赤なんかもあるが基本的に黒や白の服ばかりだ。

しかし、いきなり来た知り合い以上友達未満人間がこんな事を言い出して、それを鵜呑みにする程僕は交遊関係が広く、社交的な人間ではない。

僕に会いに来る知り合い以上友達未満の人間は厄介事を持つてくるのが、前世からのお決まり事なのだ。

これがタカミチなら信じられたが、何かを常に企んでいそうな腹黒魔法使いの言葉なんて信用できるだろうか　いや、信用できない。反語。

「という事でお断りします」

「それ却下デース」

ウザイ言葉と共に嘉穂ちゃんはリプTONの紙パックを握り潰した。

もう飲んだのか、早いね。

「忙しい忙しい嘉穂様は計画した予定を崩す事はありません。また、さっき言ったように殺人鬼に人権はありません。更に更に私は自分の我儘が拒絶されるのが嫌いですっ！」

誰だろう、この悪魔を女神とか言っていた殺人鬼は、我儘で自己中心的で傲慢なこの考え方は

「まるで僕みたいだ、かな？」

ニヤリツと笑う茶髪の悪魔。

僕は白いコートとニット帽を燃やしてやりたい衝動に駆られる。

「さあ、お買い物に行きますよーっ」

彼女は僕がそんな物騒な事を考えているとは知らずに　いや、知っていてに決まっているか。知っていながらもそれを感じさせない笑顔でガバツと立ち上がった。

まあ、嘉穂ちゃんみたいな友達を増やすのも悪くないだろう。丁度自分の交友関係を悲しく思っていたところだ。せつかくだからこのB型っぽい人間を逆に振り回してやろう。

決して嘉穂ちゃんに対抗する事を諦めた訳ではない！

僕はそう自分の心に言い聞かせながら、嘉穂ちゃんに続いて不機嫌面で立ち上がった。

## 第二十三幕 再会（破壊）（後書き）

10時から20時まで予約投稿11連続。1日ごとに予約投稿していたストックを全て使い切りました。

まだ昔書いていた時の半分ぐらいのお気に入り登録や評価なので、『バカ』や『うさぎさん』に負けそうなので、とりあえず長さだけは……みたいな感じです。



## 第二十四幕　一ノ宮嘉穂の戯言

先に出て行った嘉穂ちゃんをゆっくりと歩きながら追い掛けてみると、思いの他早く彼女に追い付く事が出来た。どうやら僕を待って、遅いペースで歩いていたらしい。

見失ったら見失ったで、追い掛ける必要性も、追い付く必要性も、嘉穂ちゃんと一緒に出掛ける必要性すら無くなるから、むしろ見失いたかったのだが、現実はその甘くなかったようだ。いつでも現実には厳しいものである。

そんな事を考えながら一枚のカードを取り出す。この間手に入れたばかりの仮契約カード、僕の新しい武器、空を駆け回れる便利な靴だ。

一ノ宮嘉穂と一緒にいると、どうも厄介事に巻き込まれそうな気がする。いや、彼女は厄介事を持ってきたような気がする。殺人鬼の、戦闘者の勘だ。今回はこれを使う事になるかもしれない。

僕はカードを大事にポケットの中に入れながら、嘉穂ちゃんの隣を歩く。

しかし今更ながらどうせならもっと良いチートが欲しかった。

死を理解した殺人鬼のなれば、直死の魔眼みたいな玩具チートがあれば、どんなに厄介な事に巻き込まれても、余裕で終わらせられる（零に出来る）だろう。まあ、無くても技術だけでたいいのものは切り裂けるのだが。

厨二病な事を考えながら歩いている自分を客観視して、僕は苦笑を浮かべる。こんな恥ずかしい考えも一ノ宮嘉穂にはバレバレなのだろう。

うむ、恥ずかしくない事でも考えて、恥ずかしい人間ではない考えを見せて、今彼女に認識されているであろう『厨二病』な人間ではないと認識を改めてでももらおうかな。

麻帆良学園。埼玉県麻帆良市に存在するこの学園都市は、明治中期に設立され、幼等部から大学部のあらゆる学術機関が集まってきている。『あの学園都市』のように外より技術が優れているが、決して超能力者はいない。

しかし魔法使いはいる。そもそも麻帆良とは魔法使いの魔法使いによる魔法使いの為の場所なのだ。麻帆良大結界というものに覆われていて、一般人は認識障害で常識を歪められ、エヴァンジェリンのような人間以外は魔力を抑え込まれている。

ちなみにマホラというのは Magic Home Life を日本に合わせて、略語にして変えたものである。

「愛姫ちゃんは自分の心の中でまで嘘をつくんだね」

麻帆良について、知的な感じをアピールするつもりで考えを読ませていたら、

嘉穂ちゃんは呆れ顔で、じとーとした嫌な目で僕を見つめてきた。

嘘吐きだから仕方ない。僕は嘘をこよなく愛し、嘘にこよなく愛され、嘘で覆われた世界で、嘘で塗り固められた人間と、世界を嘘色に染めながら生きていく、生粋の嘘吐き野郎なのだ。

上辺だけの薄っぺらい嘘よりも、心の底から、自分すら偽るような嘘を吐ける人間なのだ。そんな嘘吐き野郎の心の中を勝手に覗いたんだから、心の中で嘘を吐いているのなんて見逃して欲しい。

僕は無言で彼女と視線を合わせ、考え事がわかつているんだから察してくれと、アイコンタクトで答えた。

そんな僕の心を感じ取ってくれたのか、嘉穂ちゃんは溜息を一つ吐くと『しょうがないなあ』と笑ってくれた。

しかし次の瞬間、顔付きが変わった。態度が急変した。豹変してしまった。僕の知らない一ノ宮嘉穂に、たぶん本来の一ノ宮嘉穂に、見た事のない人間に変わってしまった。

そんな一ノ宮嘉穂が鋭い眼差しを僕に向ける。僕はその視線に何故か怯え、その威圧感を恐れ、一步、また一步と後退りしてしまう。そして彼女が口を開いた。冷たい声色で、冷たい旋律を奏で始めた。

「君は自分が嫌いなんですよ？」

何を言っているんだろう。そんな事を僕は考えたことすらない。

きっと好きでもないが嫌いでもない、そんな程度、他人と変わらないものだろう。

けれど嘉穂ちゃんは僕の心の中の否定を無視して言葉を紡ぎ続ける。

「だから嘘を吐く、だからこそ嘘を吐く、そうだからこそ嘘を吐かなければならない、嘘を吐き続けなければならない。自分も、他人も、全部を騙し続けて生きていく。君の嘘には自分に対する憎しみが籠められているんですよ？ 気付いてないと思った？ 心の奥にしまい込んで、理由なんて思い出せないようにして、表明的な考えだけ読ませて、それだけで私に気付かれないなんて、誰にも気付かせないなんて自信があったの？」

それは責めるように厳しく、慰めるように優しく、咎めるかのように恐ろしい言葉だった。

何を言っているのだろうか。僕の嘘に理由など無く、僕は嘘を吐きたいから嘘を吐いているだけだ。零崎が呼吸をするかのように人を殺し、僕は呼吸をするかのように人を騙す、ただの嘘吐きなのだ。

そんな大層な理由なんてない、あるはずがない。けれど否定したくても声が出なかった、出せなかった。心の奥で十全に、鍵で閉じ込めていた何かが震え出し、飛び出してきそうになる感覚が、それを邪魔していた。

僕の恐怖は加速していく。

けれど彼女は止まらない。

「……零崎愛識も、南愛姫も本名かどうかすら怪しいよ。君が嘘をつくのは人を笑わせる為でも、人を惑わせるためでもない、自分を隠す為でもない。自分が嫌いで嫌いで嫌いだから、自分が憎くて憎くて仕方ないから、だから、だからこそ君は正直に生きない。否、生きられない、正直に生きる選択肢が選べない」

止まらない、止まらない、止まらない。どれだけ嫌がろうと彼女の話は止まらない。

ある意味彼女の言う事は当たっている。一部だけなら認める事ができる。

零崎愛識。かの大泥棒が使っていた偽名だ。僕はそれを、この世界での名前にした。偽名を本名に、嘘を真実に、作り変えられた自分を作り変えた。

南愛姫だって、もう僕の名前ではない。つまり僕には真名がないのだ。たとえ仮契約カードにそう刻まれようと、それは僕の身体の名前だけで、僕の名前ではないのだ。

彼女の話が本当なら、自分だけの名前を作り、世界に存在を認められなくなかったからなのだろうか。自分の証明すらも曖昧にしたかったからなのだろうか。

ダメだ、ダメだ、ダメだ、ダメだ。考えるな、考えてしまつてはダメだ。これ以上深く自分を知つてしまつてはダメだ。知らないまま、知らないままで終わらせなければダメなんだ。

けれど嘉穂ちゃんは止めない。止めてくれるはずなんてない。心を読めるくせに、空気が読めないなんて有り得ないのに、自分がやりたい事を自分がやりたいようにやる。

「愛識、愛姫、君は愛を名乗っているけど 自分を愛してはいない。ただ、人間を愛している。人間という存在を愛している。けどそれは歪んだ愛だ。だって自分が関わらない愛だもの。人間の歓喜

の表情、絶望の表情、落胆の表情、期待の表情、悲哀の表情、悲壮の表情、どれも全て愛しているけど、君は観察者で、傍観者で、部外者だ」

僕は何も答えられない。必死に心の奥を見ないようにするだけで精一杯だ。聞き流す事すら今はできない。

嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ。もう聞きたくない。もう聞かされたくない。

耳を塞ぎ込んで膝をつく。けれど彼女の声は脳に響く、彼女の言葉は止まらない。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、高畑・T・タカミチ、絡繰茶々丸、ナギ・スプリングフィールド、近衛詠春、テオドラ、ジャック・ラカン、アルビレオ・イマ、クルト・ゲードル、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア、他にもたくさんいる知り合い……君はその中の誰が死んでも悲しまないだろう、哀しまないだろう。むしろ君は愛しい人間の死ぬ姿を見たいと思っっているのかもしれない。狂ってる、変わってる、歪んでる　完全に壊れてるよ。家賊の死にすら、怒る事はできても悲しめない、そんな可能性も否定できないよ」

それから嘉穂ちゃんはそれが当然であるかのように、自然であるかのように、必然であるかのように、何の躊躇もなく、何の遠慮もなく、笑いながら僕の手を握った。

僕はその手を振り払えない。

「愛姫ちゃんにとって私は嘘、そこに歩いてる通行人も嘘、仲の良

い友達も嘘、戦うべき敵も嘘、愛すべき家賊も嘘、そして世界すらも、君にとつては嘘なんだよ。虚構の世界の虚像の住人。だから、だからこそ君は零崎として人間を殺さなくて済む、人間を殺せなくて済む。人形を殺したがる零崎なんて零崎じゃないよね？ 君は心のどこかで自分以外の全てを嘘だと信じ込んでいるから完全な零崎になれないんだよ」

もう僕は何も考えたくない。

「貴方が殺したいのは人間。でもこの世界では叶わないんだよ」

僕の全てを総てを、知っているかのように、理解しているかのように、雄々しく、神々しく語る彼女に、何故か自分でもわからない内に苛立っていた。

お前に何がわかると叫びたくて、お前に何ができると問い質したくて、でもそんな事をできる余裕もなくて、僕はただ、自分の拳を握りしめていた。

「なんてね、戯言だよ」

その後、嘉穂ちゃんは『ごめんね！。つつい調子に乗っちゃった』なんて、舌を出しておどけながら、何事もなかったかのように、僕の手を引いて、僕を立ち上げらせて歩き出した。

僕は思う。あれは魔法使いが使う読心術なんてものじゃない。も

つと恐ろしいものだ。

自分の内面を完全に見透かされ、簡単に利用され、感覚を支配され、完璧に包み込まれるかのように、突き放されるかのように、矛盾した糸を張り巡らせ、蜘蛛のように絡みとられた。

いつの間にか吹き出た汗を、ハンカチで拭い取る。

自分でも気付いていなかった事を気付かされ、責めもせず、慰めもせず、断罪することすら、開き直ることすら許されない一ノ宮嘉穂による裁判。

あれはきつと魔法使いの読心術よりも怖い何かだ。身体の中に化け物のような何かを飼っているんだ。そしてそれを誰にも気付かれずに伸う伸うと淡々と生きている。

一ノ宮嘉穂。京都の大学に通う自称情報屋。身体に化物を飼う楽道家。他人に秘密を許さぬ探求者。彼女はいつたい何者なのだろう。

僕は知ってしまうのが怖かった。



第二十四幕 一ノ宮嘉穂の戯言（後書き）

これが噂の言葉責めです。

## 第二十五幕 一ノ宮嘉穂の告白

ガタンゴトン。

電車は一定のリズムで、機械だからこそ悩みなんか持つ事もなく、操られるがままに揺れている。僕はそれに揺られている。

ガタンゴトン。

この電車が何処に向かっているのかすら、僕は知らない。今の僕は、嘉穂ちゃんの言葉を聞きたくない心理状態だった。わざわざ話し掛けたくはなかった。彼女の事がとても怖かった。

ガタンゴトン。

そして電車に揺られながら、嘉穂ちゃんと目的地も知らないまま移動している中、僕は先程の事について考え始めた。向き合ってみようと決断してみた。

零崎一賊。この世界には存在しないが、他の殺し名は仕事で殺す、しかし僕等にとって、殺しとは生き様だ。殺さないと生きられない。殺す、殺さないではなく、殺すことしか考えられないのが僕達だ。

そんな殺人鬼の僕が、平和な学園で、平和な生活を送っている。なんとも愉快で素敵で、有り得ないような夢物語だ。

殺していない訳ではない。自制できない、生まれたばかりの殺人鬼と一緒にいるが、完全に自制できるほど人間ではない。呼吸を

するように、当然に、自然に、目の前の人間の、人生を零にする。

友達も、恋人も、指導者も、理解者も、何もかもできない、できるはずがない孤独な殺人鬼。だから零崎ができた。だから零崎がつけられた。

僕、僕、僕、ぼく、ぼく、ボク、ボク、ボク、BOKU、BOKU、BOKU　僕は自然ではなく、人工的に生まれ、現実と認識していた世界から、架空と認識している世界に送られ、明確な目標も目的もなく、ただ生きている。

それは生きていると言えるのか？

思い出すのは『最悪だな、死にながら生きている』という言葉だ。ある長い時間を生きたゾンビは、目標も、目的もなく生きる少女にこう言った。

つまり僕は生きていないのか。生きる為に殺さなければいけないのに、殺さずに生きられるのはそういう事なのか。

わからない。僕は自分の事なのに理解しきれない。

けれど現れるはずのない理解者の登場によって、正しく理解し始めてしまっている。世界を、全てを知る彼女が、唯一知らない僕を解明し、説明し、僕はある一つの結論を出した。

僕は此処にいない。

「……………」

「……………」

目的の駅に到着して、そして降りるまで、僕も嘉穂ちゃんも、一言も一切話さなかった。

嘉穂ちゃんは僕の心の中を見ていたのかもしれないが、それはもはやどうでもいい。気付かなければ良かった事に、僕は気付いてしまったのだ。それへの対応で頭がいっぱいなのだ。

無知が罪なら、僕は罪人のままで良かったのに。

全てを知る嘉穂ちゃんも、僕と同じ気持ちなのだろうか。世の中には知らなければ良かった事なんて、いくつも存在し、それを知らずに一般人は、楽しく、悲しく、普通に、不変に生きていく。生きていける。

それなのに何故、彼女は僕に僕を知る事を促したのだろう。何故、僕に僕を知らないままにいる事を、許してくれはしなかったのだろう。

僕には、人類最知の情報屋の考える事は全くわからなかった。

「……はあ、別に理解してくれなくていいよ。私は理解する側であって理解される側ではないからね」

ずっと口を開かなかった嘉穂ちゃんがようやく発した言葉は、彼

女にしては珍しく、負の感情が入り混じっていた。そんな言葉だった。独り言のように、秘め事のように、それを告白するかのよう  
に、懺悔するかのよう  
に、感情が感じられる、人間らしい言葉だった。

「……ごめんね」

僕は思わず謝ってしまう。しかし、それは何の意味もなく、何かの  
為にもならないだろう。けれども僕は謝らずにはいらなかった。いつ  
も能天気な嘉穂ちゃんに暗い表情をさせた自分が嫌だった。

さっきまで暗い表情をさせられていたのは自分なのに、おかしい話だ。  
理解してもらえたのが、無意識的にでも嬉しく、ギャルゲーのヒロイン  
のように、好感度が上昇でもしたのだろうか。

僕は少し笑ってしまった。嘉穂ちゃんもそんな僕を見てきこちな  
く笑う。

そしてそんな表情のまま口を開いた。

「気にしないで。私も面倒事に巻き込んだじゃっ      じゃなくて、何  
でもないよっ！」

「……え?」

聞き逃してはいけないような言葉を聞いて、僕は妙な声を出す。

どうやら僕の予想は、バッチリすっかり何の疑いもなく当たっていた  
ようだ。

「嘉穂ちゃん、ちょっと詳しい説明をお願いしますね？」

握られたままだった手を強く握る。

苦笑の嘉穂ちゃんと、微笑を浮かべる僕の睨み合い。シリアスな空気は消え、コミカルな、いつもの空気に、僕達の間にも流れる空気は変わっていた。

事情説明。長々と言い訳ばかり言葉の端々に挟んでいた話を、嘉穂ちゃんの説明を、簡潔に纏めるところだ。

いつものごとく調べ物 危険な情報発見 気にせず調べる バレる 逃げる このままだとマズい よし、愛姫ちゃんに面倒事を押し付けよう ついでにいろいろからかって愛姫ちゃんについての情報も調べよう いまここ。

ふざけるな、と噛み付きたい。

「えへへ、ごめんね？」

彼女の謝る姿は、萌えキャラ殺しの西尾維新様なら、すぐにも殺してくれそうな程可愛い表情だった。そして僕は純粹に殺意が芽生えるのを感じていた。

ぶっ殺すぞ、コラ。

「あのね、僕は請負人でもなければ、SPでもないし、そもそも嘉穂ちゃんと仲良しこよしなんて仲でもない。そんな僕に面倒事を押し付けようとは、一体全体どういう見だい？」

「私の知り合いの中で一番強そうで、簡単に会えそうで、最速で終わらせてくれそうなのが愛姫ちゃんだったんだよね。てゆーか私達手を繋いでお出かけするくらい仲良しこよしじゃん！」

その言葉を聞いて手を突き離す。そしてまるで汚いものに触れていたかのように、嘉穂ちゃんの手を握っていた手を、逆の手の平でパンパンと掃う。

言葉巧みに追い詰めて抵抗を奪い、そんな僕の手を勝手に握っただけじゃん。

「報酬は自分を知る機会をあげたこと。あと私とデートできることでっ！」

小学生のイジメのような僕の行動なんて気にせず、そのまま話を続ける嘉穂ちゃんを、けらけらとバカみたいに笑う嘉穂ちゃんを、僕はおもいつきり睨む。

それでも彼女は関係なく、関心なく、躊躇も、遠慮もなく、僕が伝えたら逃げるのではないか、なんて事を考えている様子もなく、話を続ける。

「嬉しいでしょ？　嬉しいでしょ？」

どっちも全くこれっぽっちも嬉しくないよ、バカ。勘違い乙としか言いようがないよ、アホ。考えてる事がわかるくせに、わからな

いフリしてんじゃないよ、カス。

考え事が伝わる彼女に、テレパシーを伝えるかのように強く思いながら、怒鳴り付けるように考える。

「嬉しいくせにー」

僕はナルシストは大嫌いなんだ。人類最強みたいな自分を完全に信頼している、自身に最高の自信を持つ人間は好きだけどね。自分にはないものに憧れるのは、殺人鬼だろうと変わらないから。

「まあ、ぶっちゃけて言うともう遅いけどね。そろそろ追っ手が来る頃だろうし」

あっけらかんと言いつつ嘉穂ちゃんに、僕には二度目の殺意が芽生えた。

今回の事が終わったらこいつとは縁を切る。今思った、今考えた、今願った、今決めた。

それでもこの場で殺す事も考えず、厄介事に付き合っただけようとしている僕はやっぱり、ただ流されるまま、流れるままに生きているのだと思う。

もしくは相当なお人好しなのだろうか。

「殺人鬼が何言ってるの？」

ですよー。



反論できる材料を探す前に、納得させられてしまった。

「はぁ……」

僕は人生と鬼生、合わせて何度目かわからない溜息を吐いた。

## 第二十五幕 一ノ宮嘉穂の告白（後書き）

最近書いてばかりで他人の二次創作を全然読んでいない、読めていない。だから誰かオススメでもあれば教えてくださいな。メッセーじお待ちしております。

ちなみに不人気な嘉穂ちゃん。狂愛はそんな嘉穂ちゃん大好きです。鬱陶しいけどうざ可愛い。

## 第二十六幕 一ノ宮嘉穂の誤算

それから、我田引水という言葉の説明するのにピッタリな少女である、一ノ宮嘉穂が話した追っ手とは、魔法関係者ですら手を出したくないと考える、殺人鬼すら関わりたくないと思える相手を狙っている敵は、驚く事に魔法世界の者ではないようだ。

旧世界。現実世界。

つまり此処だ。

嘉穂ちゃんが言うには、魔法世界の人間は機械関係を軽視するから楽なようだが、しかし旧世界の人間は、ほとんど魔法を知らないから、基本的には楽なのだそうだが、魔法を知る、旧世界の魔法使いではない人間は、両方を警視するので厄介らしい。

魔法使いはどうしても魔法にばかり関心を向けるが、魔法を使えない人間は両方を怖がり注意する。

人間、自信過剰より、臆病者の方が油断しないし、そっちの方がいいのだ。かの英雄王も、慢心による油断から、圧倒的な力を誇っていたのに、敗北してしまったのだから。

しかし旧世界の人間に、魔法使いの嘉穂ちゃんが逃げる手段を選ぶ、とはどういうことだろうか。

そんな事を考えていると、考えを読み取ったらしい嘉穂ちゃんが説明してくれた。

「私はね、……知る事においては右に出る者どころか、足元に及ぶ者すらいないと思っっているし、それを知っている。でも……でもね、戦うことについて私は自信は持てない。私は戦わないで勝つタイプの人間なんだよ。相手の内面を傷付け、無理だと判断したら時間を稼いだり、逃げ回ったりして援軍を待ったり、そうやって生き残っている人間なんだよ」

嘉穂ちゃんは静かに自分の事を語り続ける。それは誇りも、嘆きもなく、自分を褒める事も、慰める事もなく、他人事のような話しか方だった。

「私の全ての能力はただ知る為にある。ドカドカやり合うのは戦闘者の役目だよ。そして今回みたいな危険事は危険な殺人鬼にお任せ！ 適材適所の助け合い精神でしょ？」

僕は利用されてるだけだけどね。それに嘉穂ちゃんが僕を助けてくれる日が来るなんて実現する事はないだろう。

そう考えた瞬間、彼女はニヤリツと小悪魔のように笑った。

「もしその日が来たら愛姫ちゃんは私のお願いをひとつだけ無条件で聞いてね？」

「そんな約束したら嘉穂ちゃんはその為に行動しそうだからヤダ」

「乙女のお願いを断るなんてっ」

「男女平等を騒いでるくせに、こういう時だけ性別を持ち出す女性は嫌いです。女尊男卑にしたいだけなのが伝わってくるからね」

男女平等で女性専用車両。  
男女平等でレディースデー。

そんなのせいで普通の女性まで、馬鹿な主張をする女のせいで、批判されるのは間違っていると思う。けれど平等を主張しながら、自分にとって都合の良い不平等を平等と主張するのも間違っている。いや、痴漢する人間とか、女は男に従えばいいとか考える男は全滅させたいけど。

「紳士な男がいないとか騒ぐ女は自分がまず淑女になるべきだよね」

君の言う通りだけど、そして今更なんだけど、そろそろ心を読むのやめてくれないだろうか。プライバシーの侵害だ。

「それは無理だよ。私はこれをオンオフ切り替えたりできないし、防いでもらうことすらできない。私の周りにいる人間は誰も彼も隠し事はできない……愛姫ちゃん以外はね」

ああ、確か自称神様関係は読み取れないのか。それは良かった。

「それでも私達の大切な隠し事を勝手に知られてしまったのは、許されることではないのだがね」

嘉穂ちゃんの言葉に、知らない男が世間話を話すような気楽さで返事をする。

声の方角を振り向けばそこにいたのは4、50代の渋味のある男性。スーツ姿に、帽子に、ステッキ姿の男は、まるで映画の中から出てきたような姿だった。

なに、この渋いオッサン。神楽坂とか好きそうなオッサンだね。

「やあ、はじめまして。一ノ宮嘉穂君とそのお友達。私の名前は風巻まきというのだが、別に覚えなくてもいいので適当にオッサンとでも呼んでくれたまえ」

そう言つて笑顔で語る初老の紳士は、どう見ても嘉穂ちゃんが逃げなければならぬような相手には見えなかった。

が、しかし

「見た目で、態度で、言葉遣いで油断して、痛い目を見るのは三流。僕は残念ながらそうじゃない」

「若い方にしては関心関心。最近の若い方はオッサン相手だとすぐに油断して死んでしまうからね。　　こうやって」

ドガガガガッ。

彼がそう言つた瞬間、僕の真下の床から、鋭い槍が飛び出した。

僕は直ぐさま嘉穂ちゃんの手を引き、その場から離れる。

誰か下にもう一人いたのか！？

「おやおや、初撃が躲されたのはいつ以来だろうか。せつかく君達が立ちそうな位置に仕掛けておいたのに、……あ、被害なら安心してくれたまえ。君達がお話に夢中になっている間に人払いは済ませておいたからね」

少し近付いて見ても、槍はもう動かない。どうやら人間が下にいたようではなく、あくまで僕が相對する相手は彼だけのようだ。

しかし辺りを見回してみると本当に誰もいない。

結局油断していたなんて、そんな殺人鬼なんて笑い話にもなりはしない。

「私の読める範囲外から仕掛けるなんて……」

嘉穂ちゃんは悔しそうな顔で齒を食いしばる。

僕は彼女の悔し気な表情を見て、むしろオッサンにお礼を言いたいのだが、KYにはなりたくないの、それを告げるのはやめておく事にした。

「嘉穂ちゃんは人が少なくなっているのに気付かないような役立たずだから離れててね」

訂正。やはりKYっぽい。

考えとは裏腹に、ニヤニヤと笑いながら口から出てしまった言葉は、十分にKYっぽかった。

僕の言葉を聞いて、彼女のこめかみに青筋が浮かぶ。

「カッチーンッ！ あのおじさんの情報教えてあげようと思ったけどやーめたっ！！ せいぜい一人で頑張ってなさい……ふんっ」

嘉穂ちゃんは走り去っていく。

「どうやら僕はミスをしたようだ。攻撃手段がわからないより、わかる方がどう考えても有利なのに、それを知る機会を潰してしまった。」

「ふむ、どうやって君と一ノ宮嘉穂君の意思の疎通を妨害しようかと考えていたが、どうやら必要なかったようだね」

紳士は嬉しそうに、楽しそうに、しかし決して油断しないように、僕の様子を観察しながら言葉を紡いだ。

「改めて自己紹介をしよう。初撃を避けた君には私を知る資格がある。私の名前は風巻進。かざまきすすむ。断罪領域なんて呼ばれているのだが」

紳士はそこで言葉を区切る。そして不敵な笑みを浮かべながら続けた。

「君の名前も聞いておこうか」

そこで区切る意味はあったのだろうか。戦場紳士とかの方が似合うのではないだろうか。

真剣な紳士に対して、僕はそんな無駄な事を考えていた。

「殺人鬼集団、零崎一賊の長男をやらせてもらっている零崎愛識だ。黒き制裁なんて呼ばれてるちよつとお茶目な殺人鬼さ」

「ああ、魔法世界の英雄のかな？ よく知っているよ。鬼姫やら死ムオーバー亡前提やら言われている、敵対した者は生き残らないとされている」



殺人鬼さん」

何それ恥ずかしい。黒き制裁以外聞いたことないんですけど。アルビレオが面白半分で隠してやがったのか？　ないわあ。厨二過ぎでないわあ。黒き制裁は人類最強に似てるから良かったけど鬼姫（笑）、死亡前提（笑）。姫じゃなくて王子でごめん。死亡前提なのにそんなに殺してなくてごめん。そもそも敵対したのに生き残ってる人間いっぱいいてごめん。

心の中で大爆笑しながらぶるぶると震え出す。

「ぶふつ　　ぼ、僕に出会った不運を嘆くといいよ、ぶふつ」

そしてキリツとした表情で、笑いを堪えながら告げてみた。

真面目な顔で厨二病としか思えない事を言ってる老紳士とか、どう考えてもギャグだ。

「……噂では血も涙もない殺人鬼と聞いたが、やっぱり噂は噂のようだね」

紳士は呆れ、殺人鬼は笑った。

**第二十六幕 一ノ宮嘉穂の誤算（後書き）**

そろそろ完全に昔の話に追い付きそうです。

## 第二十七幕 覚醒（欠生）

僕は身体強化の呪文を唱え、懷からナイフを取り出す。そしてそれを握りしめながら紳士に飛び掛かった。

一瞬一殺。一撃決死。一交即死。勢いをつけたその一撃は、紳士に届くはずだった。その一撃で彼を終わらせられるはずだった。

が、そう簡単にはいかなかった。彼がステッキで床を軽く叩くと急に、横から幾つもの刀が飛び出してきて、僕は床を蹴り、その凶刃から逃れようと身体を捻る。

「逃がさんよッ！」

そして続いて彼が指をパチンツと鳴らすと、避けた先の床からまたしても槍が出現した。

「ちっ」

パンツと弾けた音が響く。その音と共に僕を串刺しにしようとしていた槍が、跡形もなく消え去る。

無名にして、我が手札の最強。攻防共にこなせる便利性を持つ、僕の数少ない武器。戦場に似合わないシャボン玉が、その槍を消し去った。

「……ふむ、呪文なしで発動するとは全く厄介だな。タイムラグが存在しないとは」

一旦動きを止めた紳士が、言葉とは真逆の余裕な表情で笑う。

ノーモーションでできるはずがない。ただの魔法使いよりかは早  
いだけだ。

けれど勘違いしてくれるなら丁度いい。それが油断に繋がるなら  
大歓迎だ。

そんな感情を悟られないように、僕は無表情で口を開く。

「長期戦になりそうだね。僕が攻めても罠で防がれ、そっちが攻勢  
に出ても僕の魔法に防がれてさ」

「いやいや、決め付けるのは早いじゃないかい？」

男が言葉を発したその瞬間、真下から爆風がどかんつと巻き上  
がった。障壁も張れない僕の身体は、その衝撃をモロに受けてしま  
った。

「うはっ  
」

肺に貯まっていた酸素が一気に対外に放出される。そしてドサッ  
と地面に不様に落ちいった。

爆弾とは、随分と罠使いらしい、使い古された戦法だね。

僕は心の中で皮肉る。心の中では余裕ぶっているが、僕の身体は  
鍛えていない未成年と同じようなものだ。力ではなく、技術で戦う  
僕は、一度の攻撃が、ほんの少しのダメージが命取りになる。

「できればこの一撃で仕留めたかったのだが、火薬の量が少なかったみたいだな」

紳士は僕にダメージを与えたというのに少し不満そうだった。僕はそんな不満げな紳士にムカつき、紳士に向かってナイフを投げる。

「……おっと」

しかし、力無く投げられたナイフは、いとも簡単に彼に避けられてしまった。

僕は舌打ちをする。

罾使いなら逃げながら罾に引き込み、そして引っ掛けるのかと思いきや、紳士は魔法のようにその罾を使いこなしていた。しかも詠唱も構えもないから、魔法よりも厄介だ。

拳銃なんて玩具よりよっぽど厄介な攻撃方法だ。地面には全て彼の獲物が仕掛けられてある。空を飛んでもおそらく格好のマトになるだけだ。

まるで鎖で繋がれながら戦っているような気分。これだけの実力があれば彼が自信満々なのにも納得できる。

僕は立ち上がりながら唇を噛み締める。深くダメージを負った身体は既にフラフラだ。

ああ、負けちゃうのかな、なんて厳しい状況の割に僕は笑っていた。

けれど次の瞬間、紳士が言った言葉によって笑みは消え去った。

「殺人鬼といっても可愛らしいものだ。所詮人間ということか」

あゝあ？

紳士の声を聞いた途端、僕のこめかみからブチリと、スイッチが切れ替わるような音が聞こえた。

「今、なんて言った？」

紳士は僕の様子が突然変わった事に気付いてはいるが、警戒は強めていない。満身創痍の獲物を前にして舌舐めずりをする狩人のように、彼は余裕ぶっている。

それが僕の怒りを加速させる。

苦悩、苦悩、苦悩、苦悩。人間ではなく、完全な零崎でもない、苦悩している僕に、この今の僕にそれを言うか爺。精神面は戦う前から既に満身創痍だった僕の逆鱗に、わざわざ触れてくれるというのか。

「所詮人間と言ったのだよ、殺人鬼」

「ぺっ  
」

口から流れ出て、啗内に貯まっていた血を地面に吐き捨てる。そしてチェックを決めたぐらいで安心していている紳士を睨む。

おーけーおーけー。全力全壊でやってやるよ。チェック・メイト

まで勝負はわからないって教えてあげるよ。面倒事に付き合わされただけだし、別に殺したい気分じゃないから訓練気分で、戦闘をしていたというのに。

「畏使い……、君は僕を怒らせた」

紳士は僕の言葉を、強がりだと決め付けて鼻で笑う。その余裕が崩れていくのがとても楽しみだ。

僕はこの世界に来てからずっと使っている自称神様からの贈り物のナイフを取り出しながら笑う。

ただでは殺さない。楽には死なせない。  
殺さないつもりだった。怒らないつもりだった。

だけでももう遅い。僕の身体には自制心なんて利かない。だんだんと僕は目の前の男を殺さない選択肢を選べなくなっていく。

頭の中がスッキリとクリアになった気分だ。僕の中の呪いがどす黒く、身体の中で疼いているのを感じる。

そうだ。これは前の世界で通り魔を、友達を殺めてしまった時の気分だ。長い間味わっていなかった零崎の本能だ。

怒りはある。けれど不思議と殺意は身体の中にない。ただ僕は我慢する事をやめ、本能のまま、無意識に逆らわないようにしているだけだ。

たぶん怒りで考えられなくなった事が原因だろう。理性的な殺人鬼は今ここにいない。自分にとっての偽物と本物の区別などして

いられない。

生きて、二足歩行で歩いて、人間の言葉で話している。あれは人間だ。

僕は人間が好きだ。愛している。だから人間だけを殺していく。

「さあ、愉快に素敵に零崎を始めよう」

瞬間、男の右腕が飛んだ。

「ぐがぁぁ あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!？」

目の前の男はみつともなく喚く。先程まで狩人だった紳士は今立派な獲物になっていた。

紳士の肩から先は既に地に落ち、彼は肩から湧き出る血を、必死に押さえながら切り裂いた後に自分の後ろに移動していた、僕をおもいつきり睨む。

僕はそれを見て、愉快に言葉を紡ぐ。

考えている事は二つだけ。僕は人間しか殺さない。そして目の前にいるのは人間だ。

「僕は人間が好きだから殺す。僕は自分が嫌いだから死なない。僕



は零崎だから殺す。僕は零崎じゃないから殺さない。僕は生きているから殺す。僕は死んでいるから殺さない」

「な、なにを」

何をだつて？ 自分自身でも何を言っているのかなんて、今の僕にはわからないのさ。何も教わっていない覚醒したての零崎（おじさま）のように、ただ欠伸をするような、生理現象の一つとして当たり前のように、目の前の君を殺してしまおうとしているだけなのだ。

理性で縛り付けていた無意識が今、僕の中で暴れているだけなのだ。

「僕の大好きな人間と狂った僕を一緒にするなつて事さ。自虐癖でもあるのかもしれないけど、殺人鬼なんかと人間を一緒にするものじゃないよ」

「いったい、何が起きたんだっ！？ 何故私の腕が消えた！？

男は焦る。手段もわからぬまま自分の腕が吹っ飛ばされたのが、よっぽど堪えたのだらう。

「僕がさっき使ってたシャボン玉はね、……何処にでも自分が行使しようと思つた瞬間出せるんだ。意味わかるかな？」

「それはつまり」

「相手の身体の中にいきなり発生させて、ドーンつてもできるんだよ。滅多に使わないけどね」

そう言つて、僕は紳士の真下の地面に炸裂させる。彼は右腕を庇いながら落下し、直ぐさまこちらを睨み付けた。

「罾使いつて僕と相性悪いよね。見えない位置だろうと僕には破壊する術があるのだから」

更に自分の真下を炸裂させる。地形を支配しようとも、地形ごと破壊されれば意味がない。

そして緩やかに着地して、彼と僕の空間を繋げる為にシャボン玉を出現させる。これで四角い地下空間の出来上がりだ。

「ナギの阿呆だったら千の雷で全て破壊したりするんだけど、僕はそんな地域破壊兵器みたいな技使えないしね」

破裂した水道管を尻目に僕は歩く。紳士は直ぐさまステッキを拾い、僕の方に向ける。

パンツつと銃声が空けた空間に響く。どうやらあのステッキは仕込み銃だったらしい。しかし僕には通用しない。少し身体を動かすだけで簡単に避けられた。

「おいおいおいおい、プロのプレイヤーに 零崎に銃なんて玩具通用すると思つてたの？」

紳士は答えない。もう手遅れだと思つが、焦りも、油断もなく、無表情でこちらの出方を窺っている。

「逃げるならさっさと逃げなよ。ほら、鬼ごっこは足を止めたらすぐ捕まっ（殺され）ちゃうよ?」

紳士は答えない。殺伐とした戦場を和ませるジョークは無駄みただ。

「最後に言いたい事あるなら聞いてあげるよ？ これでも心優しい殺人鬼だからね」

ぎやはつと品のない笑いで相手を挑発する。すると、漸く紳士は口を開いた。

「だね」

「へっ？」

水道管から溢れ出る水の音で聞こえない。小さな声は僕に届かない。

「油断大敵だねと言ったんだよ、殺人鬼っ！！」

轟音と共に、地下空間ごと、僕の身体は吹き飛んだ。

単純な話だ。破裂したのは水道管だけではなく、ガス管も同じ。

紳士は銀色のジッポライターを使い自爆したのだ。

凄まじい音とともに吹き飛びながら最後に見た紳士は笑顔を浮かべていた。

**第二十七幕 覚醒（欠生）（後書き）**

なんという厨二病。背中がぞわぞわしてくる。

## 第二十八幕 一ノ宮嘉穂の悪戯

瞼に光が射す。くらくらと揺れる頭は、まだ意識がハッキリとさせてくれない。しかし頭の下の方の柔らかな感触が、心地良い事だけは理解できた。その感触を手で確かめながら瞳を開く。

目の前には 。

「あ、気が付いた？」

疫病神がいた。

途端に不機嫌な表情になった僕を誰も責めはしないだろう。見た目が可愛らしくるうと彼女は悪魔だ。関わる人間全てに厄介な運命を与える。

それにひざ枕なら大人エヴァとか、雪広あやかとか、眼鏡を外した源しずなとか、好みの金髪美人にしてみらいたい。こんな性悪自己中人間は勘弁だ。

「ならさっさとどけっ！」

一ノ宮嘉穂は僕の下から膝を抜いて立ち上がる。

「痛っ!？」

そして重量に従って、地球に引き寄せられて、地面に勢いよく叩き付けられる僕の頭。爆発で吹き飛んだのに、酷いのではないだろうか。

「優しさを当たり前だと勘違いしてお礼のひとつも言わない人間には言われたくないね」

その言葉を速達で送り返すよ、厄介事の張本人。

「しかしガス爆発の中心にいて生きてるとはすごいね、二人共」

ニヤニヤと笑う嘉穂ちゃん。この痛みからして左腕と肋骨の骨折ぐらいで済んでいそうだ。咄嗟にシャボン玉で自分を囲んだのだが、爆風は消せなかったみたいだ。

って、二人？

僕は起き上がり辺りを見回す。少し離れたところに血塗れで倒れている風巻がいた。

「あつ」

視界に入った瞬間シャボン玉が、彼の身体を消し去った。

「やってしまった」

「うげえ……」

少し嫌そうな顔をする嘉穂ちゃん。その嘉穂ちゃんの右腕にナイフを突き刺す。

あれ？



どうやら頭突きをされてしまったようだ。とりあえず強引に動かした左腕が痛い。

「半端な零崎でいいのに、こんなタイミングで覚醒しちゃうなんて……」

そんな事を言いながら嘉穂ちゃんは鞆の中から何かを取り出して、僕の身体に取り付ける。

そして気付いた瞬間には、僕の両手両足は縄で拘束され、身体に札のような貼られて魔力が使えない状態にされていた。

僕はジタバタと暴れながら彼女を見つめる。

「簡単に状況説明プリーズ」

「基本的に愛姫ちゃんは『零崎』の定義から、性質から外れている。でも何かキツカケがあれば完全に『覚醒』して、周囲にいる人間を無差別に殺していく　って、こと！」

「普段から我慢してるんだけど」

「本当の『零崎』が不殺で楽しい学園生活なんて送れる訳ないじゃん」

まあ、確かに。屈強な意思で殺す対象を限定する事はできても、ここまであまり殺さずに生活できているのが、むしろ異常（正常）なのか。

「本当の零崎<sup>わたし</sup>デビュー？」



「なんか魔法じゃない不思議な力で抑えられてるから時間が経てばいつもの半端な零崎に戻るよ」

自称神様が何かしらしてくれているのだろうか。

「てゆーかキツカケってどう考えても君に心を乱されたからじゃない？」

「トドメはあのオッサンでしょ？」

と、一ノ宮嘉穂はまるで悪びれた様子がなく、僕はそれを見て苛立つ。

殺されそうになつたくせに嘉穂ちゃんはいつも通りだった。ほんとさつさと死んでほしいぐらいに。

少し苛立つたので、お返しにぴょんつとコイキングのように跳<sup>と</sup>び跳ね、嘉穂ちゃんの首筋に強く噛み付く。

「あつ……やつ、らめえ……」

すると、変な声を出し始めたので、僕は慌てて飛びのいた。

「もうっ、愛姫ちゃんってば激しいんだからあ」

「さつさと拘束を解け。今なら一瞬でバラバラに解体できる自信がある」

「殺人鬼こわいよー」

今、わかった。性悪で悪戯好きな嘉穂ちゃんは、あのアルビレオに似ているんだ。だからこんなに苦手意識があるんだ。

無意識は意識する事で止められる。呼吸は少しの間我慢する事ができる。でもそんな殺人衝動なしに殺したところではアルビレオそっくりだ。

「性悪なんてひどい」

アルビレオより性悪だよ君は。てゆーか悪戯好きは否定しないんだね。

「よいしょつと……さて、戦後処理を始めますか」

嘉穂ちゃんは僕の心の声を無視して、鞆からノートパソコンを取り出した。そして立ち上げた後に、カタカタカタと連続した音が響く。

機械が苦手な僕はあいにく何の作業をしているのかわからず、暇を持て余すしかない。というかキーボード打つのに『Kがないんだけど』とか近くの人聞かなければならない僕と、ブラインドタッチで高速操作する嘉穂ちゃんとは差がありすぎて、理解しようとするのが間違いだろう。

はあ……集中していると肋と左腕の痛みがズキズキくる。さっさと麻帆良に戻って治してもらいたい。

それから数分すると、嘉穂ちゃんの作業はようやく終わったようだ。暇すぎて頭の中で縦長棒オンリーのテトリスをやっていた僕はやっと解放されるようだ。

「とりあえずこのぐちゃぐちゃになった地形は関東魔法協会が一晩で直すってさ」

タカミチが一晩でやってくれました。

「あと私を追跡してた組織とは和解が成立。情報提供でなんとかなりましたっ！」

最初からそうしなよ。

「武力も見せる必要があつたんだよ」

一応いろいろ考えているのか。

ノートパソコンを片付けながら淡々と説明する嘉穂ちゃんに視線を向ける。

「という訳で嘉穂さんは帰りますっ。迎えには関東魔法協会の人間が来るみたいだから此处で待っててね？ 認識疎外も人払いも心配無用だから」

そう言って立ち上がる嘉穂ちゃん。

それって

「この状態で一人で延々と待たされるってことっ!?!?」

嘉穂ちゃんの声と僕の声が同じタイミングで、同じ声量で、違う声色で、違う高さで重なり合う。この程度は一ノ宮嘉穂にとって楽勝なのはわかるのだが、やられるとうざい。てゆーか、やっぱり一人で待ち続けるの？

「その通りで〜すつ。ばいばい」

嘉穂ちゃんはひらひらと手を振りながら去っていく。拘束放置プレイ？

「薄情者……」

寝たら寝起きに助けに来た人間を殺してしまうかもしれないと眠れず、拘束されているから何もできず、僕はまた頭の中で縦長棒だけのテトリスで暇を潰すという、小学生でもできる無駄作業で迎えるのを待ったのだった。

第二十八幕 一ノ宮嘉穂の悪戯（後書き）

そろそろ生徒達とも絡ませよう。そうしよう。



顔をわしづかみにしてそのまま力を入れていくと、朝倉は乙女らしくらぬ悲鳴をあげた。でも僕は気にせずメリメリと音が鳴る朝倉の頭を割ろうとする。

「あだだだだ　ストップ！　私黙りますから！」

「次はないですよー」

必死に頷く朝倉を見て、僕はニツコリと笑った。

「それじゃあ、出席をとりまーす」

「「「「「はい」「」「」「」

元気の良さだけは自慢の2　Aです。

「相川さよさーん　は今日も僕には見えませんと」

霊視の瞳なんてありません。

で、明石は死んだから出席確認はなし。

「朝倉和美さーん」

「はい。せんせー、今度取材させてよ！」

「先生はヌードにはなりません」

「ちょ、そついうのじゃ　」

「はい、しゃらーぷ」

納得できていない様子の朝倉は放置して出席確認の続きに戻る。

「綾瀬夕映さーん」

「はいです」

「読書してたらぶっ飛ばしますからねー」

「き、今日は大丈夫です」

彼女には僕の授業中に本を読んでいた前科があり、その時に処罰しました。

で、和泉と大河内も死亡だから確認はなしで　って、死者多いね。

「柿崎美砂さーん。不純異性交遊中の柿崎さーん」

「ぶっ　ちょ、せんせ!？」

ヒロイン31人の生徒の中で唯一の彼氏持ち。ネギくんが寝盗るんですかね？

「タカミチが休みで悲しそうな神楽坂明日菜さーん」

「わ、私はべ、別に　」

「はいはい、シンデレシンデレ」



タカミチにフラれてネギのパートナーになる魔法世界の没落王族。

「春日美空さん」

「はい」

「シスターシャークティが放課後話があるそうです」

「うげっ、どれがバレたんだろ……」

「ちなみに逃げたら先生がぶち殺します」

僕が魔法世界の英雄様だと知っている春日の顔が青ざめていく。

春日が逃げたら僕の責任になっちゃうから面倒なんだよね。

「絡繰茶々丸さん」

「はい」

「今日の晩御飯はピラフがいいです」

「申し訳ありません。今夜はマスターのご要望で和食の予定です」

ちっ、日本好きの外国人め。

ちなみに僕が茶々丸ん家でご飯を食べている事は既にみんな知っている。



したら物理的に腐らせまーす」

「横暴だーっ」

常識で考えろよゴキブリ野郎。

「桜咲刹那さーん」

「はい」

うーん、原作前でこのちゃん仲直りイベントまだだから固いなあ。

「ピリピリしててうざいでーす。常にテロリストの侵入とか警戒してるのは厨二病ですよー？」

「ぶふっ、い、いえ、私はっ」

「はい、中学生だから仕方ないですね。皆さんも理解してあげてくださいねー」

「「「「「はい」」」」」

「だから私はっ」

桜咲は授業中も護衛的な警戒的な事をしているおバカさんです。麻帆良は結界があるのにねー。

さて、佐々木も死亡だから次は、と。

「椎名桜子さーん」

「はい」

「幸運わけてくださーい」

「無理です」

とある魔術の真逆、幸運EXの椎名。神様に愛されている麻帆良のコレットさん。割と真剣にわけてほしい。

「龍宮真名さーん」

「ちゃんというよ、先生」

「銃火器の持ち込みは禁止ですよー」

「何のことだい？」

まあ、僕も身体中にナイフ仕込んであるんだけどね。

「超鈴音さーん」

「はいネ」

「さっさと海外で飛び級してきてくださーい」

「邪魔物扱いは酷いと思うヨー！」

エセ中国人キャラは一人で十分だからいらないと思う。

「長瀬楓さん」

「はいでござる」

「ござる口調は逆に忍者っぽくないです。最近の忍者なら『だってばよ』とかにしましょうね」

「せ、拙者は忍者なんかじゃないでござるよー!」

もっと隠そうとしようよ力エデェ……。

「那波千鶴さん」

「はい」

「結婚式はいつにしますか?」

「まあ、先生つたら」

うふふと笑って返事を曖昧にする那波。

年上お姉さんキャラは大好物です。

「鳴滝姉妹」

「まとめないでよ先生!!」

個別に言う事ないんだもの。

「葉加瀬聡美さん」

「はい」

「茶々丸の姉妹機譲ってください」

「お断りしまーす」

一家に一台茶々丸が欲しい。

「長谷川千雨」

「……はい」

「先生にはどんなコスプレが似合いますかね？」

「金髪チビだし眼も同じ色だから幼い頃のフェイトとか って、  
違う違う！ 私にはわからないです！」

必死にごまかそうとする長谷川を見て失笑。わかるヤツ（早乙女  
とか）は長谷川のオタク臭に気付いたようです。

ちなみに大人フェイトさんとか超母性のあるお姉様はかなり好み  
です。どうせならリリカルでマジカルな世界に行きたかったよ。

……どうせ殺しちゃうんだろうけど。

「この前無理矢理先生のハジメテを奪ったエヴァンジェリン・A・  
K・マグダウエルさん」

「……ええーっ！！！！？」

「ちょ、おま……お前っ……………、キスしただけだろうがっ!!」

「うわー、エヴァちゃんだいたーん!」

「「「「「きゃー」「」「」」」」

「ち、違う! ほら愛姫、お前から説明しろ!!」

「愛姫だつてー、にやにや」

「黙れええええ!!!!!!」

「はい、みんなが静かになるまで5分も掛かりました」

「愛姫ちゃんのせいじゃん」

「しゃらーぷ」

「そうだそうだ! と抗議してくる生徒達を有無を言わず黙らせる。」

「思った以上に盛り上がった結果、騒ぎを收拾するのに時間が掛かってしまった。たぶん後で鬼の新田に怒られる。」

「はい、続きしまーす。宮崎のどかさーん」

「……はい」

「もうちょっと元気よく返事をしましょうねー」

「……頑張ります」

人見知り代表、宮崎のどか。未だに僕に慣れていません。

「村上夏美さーん」

「はい」

「今日も地味ですねー」

「先生ひどいよー!!」

身体も普通、顔はイマイチ、性格はよくいるタイプという普通の子。

「さっきから鼻血垂れ流してる雪広あやかさーん」

僕のヌード発言からずっとです。ネギの女装もありだったから僕みたいなものもありなようだ。

「ち、違いますわ！ これは先生への愛が溢れて」

「そんな物騒な愛はいりませーん」

流血（鼻血）で繋がれた愛とか誰得。



「四葉五月さーん」

はい

「今日も独特の話し方ですね」

ありがとうございます？

ヒロインの中にポツチャリ系も入れるとか赤松さん、いろんな需要に答えようとし過ぎだよね。

「ザジ・レイニーデイさーん」

「……」

「はい、今日も返事が聞けませんでしたー」

いつになったら声が聞けるのやら。

でもとりあえずコレで終わり。相坂以外全員出席している、と。

「はい、出席確認終わり。全員いるみたいだけど、バカは風邪を引かないのではなく、引いても気付かないだけだから体調管理はちゃんとしましょう。花粉症の季節でもありますからね」

「……先生、それって私達がバカって事？」

「それに気付けたのなら少しはバカレンジャー卒業に近付いたかもしれないね、神楽坂」

「な、なによお!？」

「「「「愛姫ちゃんひどい」「」「」

このクラスはバカが多過ぎだね。

まあ、とりあえずそんな感じの26人と、楽しい学校生活なんかやっています。

## 第二十九幕 新学期（後書き）

とりあえず生徒全員出してみた。

### 第三十幕 癒しのマクダウェル家

新学期が始まり幾日か過ぎた今日この頃。僕はキティちゃんハウスのソファでのんびり寛いでいた。

正直僕はもうこの家の住人になりたい。茶々丸辺りに婿に貰ってほしい。

「今日はピラフ食べたい」

ファンシーな部屋の中に僕の声だけが響く。今日はという言葉通り、最近はずっとエヴァの家夕食をお世話になっている。

朝は食べない、昼は食堂、夜はキティちゃんハウスの食生活で、自宅には基本的に寝る為に帰ってるみたいな感じた。

「すいませんが今日はマスターの希望でカレーライスになりました」

茶々丸の申し訳なさそうな返事を聞いて、僕は少しガツカリする。

基本的に僕の要望が叶う事などない。所詮はタダ飯喰らいのお客様モドキだ。主人の命令が最優先に決まっている。

しかし最近の茶々丸は自我的なものが芽生え始め、昔と比べるとずっと人間らしくなったと思う。

破天荒な知り合いだらけの中で数少ない癒しだ。

常識もあるし、何より性格が良い。

時間が経てば変わるものだなあと、僕はソファにごろごろと転がりながら茶々丸を見つめる。

「別にいいけど、甘口のカレーは邪道」

そしてニツコリと笑いながら、ハッキリと言葉を紡いだ。

甘口のカレーはカレーに非ず。

カレー粉を使ったカレーはカレーに非ずは認めない。自<sup>イギリス</sup>国から自<sup>に</sup>国<sup>ほん</sup>に伝わったものだからではない。断じて違う。

まあ、とりあえず味覚が子供なエヴァと同じカレーなんて嫌だ。

「たかりに來ている奴が文句を言うな」

噂をすれば影が射す。後ろから声が聞こえたので振り向くと、そこには可愛らしい幼女がいた。

先程まで自室で何かしていたらしいのだが、どうやらそれは終わったようだ。

いつも思っただけど守備範囲外だから成長してほしいなあ。ロリババアとか需要ねえよ！

ふんつと偉そうに鼻を鳴らすエヴァを見て僕は溜息を吐く。

「お子様な味覚のキティちゃんは黙ってましょうねー」

「誰がお子様だっ!？」

そしてそのまま軽く挑発すると、エヴァは簡単に怒り出した。

予想通りすぎて欠伸が出そうだ。本当に何百年も生きた大先輩なのかと疑いたくなる。

「なら、カレーは中辛ね。茶々丸よろしく」

「ま、待て」

「かしこまりました」

「茶々丸う!？」

僕の言葉に頷くと茶々丸はゆっくりとした動作で台所に向かっていった。

裏切られた、という表情のエヴァを見て僕は笑う。

扱いやすい吸血鬼さんは本当に楽で有り難いです。

「はぁ……まあ、いいだろう。別に食べれん訳じゃないしな」

呆れたような口調でそんな事を言うと、エヴァは反対側のソファに崩れるように倒れ込んだ。

僕はそんなエヴァをジーツと見つめる。

「ん、なんだ？」

茶々丸が部屋から出ていくのを見ていたエヴァは僕の視線に気付  
き、怪訝な表情で尋ねる。

「いや、再生力がすごい真祖の吸血鬼って何回致命傷負わせても死  
なないのかなあって」

僕はそんなエヴァの疑問に対して、本当は何も考えていなかった  
がとりあえず思い付いた事を答える。

腕を斬られても生えてきそうだし、心臓を刺しても、頭潰しても、  
吸血鬼に有効だと言われているような武器ではない普通の武器なら  
再生しそうだし。

「……自分の弱点を安々と晒す馬鹿がいるか」

そう言って顔をソファに埋めるエヴァの言葉に、僕は苦笑を浮か  
べた。

基本的に二次元キャラクターって自分からいろいろ能力とかを説  
明してくれるし、そんな二次元キャラクターに言われてもどう返せ  
ばいいか困る。

吸血鬼。

それも真祖の吸血鬼は多少の物理攻撃では死なないはずだ。

何百年も過ごし、吸血鬼特有の弱点をなくし（大蒜以外）、魔法  
を極めて、一つの武術を極めた魔法世界の最強種の一つである、エ  
ヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。未だに魔法世界ではナマ  
ハゲのように扱われる悪い魔法使い。

吸血鬼特有の能力、人形使いとしての技術、日本で学んだ本物の合気道、鉄扇などの武具の扱いもでき、魔法の技術も知識もかなりもの。

闇の福音と恐れられる600万ドルの賞金首。

とりあえずゴスロリ姿でだらける彼女はともそうは見えなかった。

まあ、真祖になった理由とそれからの生活を知っていれば納得はできるのかな？

10才という若さで、突然儀式で吸血鬼にされ、そしてその復讐を遂げた後、一人で放浪。世間知らずな子供の身で、吸血鬼だからと狙われながら、600年の孤独な生活。

僕には彼女の苦しみなんて、想像する事すらできない。

人間は孤独に耐えられない。

人間は孤独を堪えられない。

人間は孤独で生きられない。

でも、人間は孤独から逃げられない。

いつかまた彼女は孤独になる。

それは人間死ぬ時は一人、なんて言葉とは関係ない。

彼女は死なないからこそ一人なのだ。



でも僕は同情はしない。彼女は紛れも無く悪だからだ。

殺されそうだから殺した。

だからどうした。

理由があろうと殺人は悪。

理由がなかろうと殺人は悪。

《誇り高き悪》の魔法使い。

彼女はそう名乗る。

弱者をいたぶる行為を良しとせず、女子供は殺さない。基本的には殺されそうになったから殺している。

そんな彼女が悪を名乗るのは僕と同じ考えだからだろう。

僕もエヴァも世界にいてはいけない悪だ。存在自体害悪だ。

よく二次創作で立派な魔法使いを目指す魔法使いがアンチされたりするのがあるが、彼等は正しい。

真面目に15年働いた？

だから何？

エヴァは何もしていない？

過去に山ほど殺しているよ。

エヴァの過去を知れば自分の過ちに気付く？

どんな理由があろうと殺人は罪だよ。そんな人間を大切な生

徒と生活させるなら気をつけるのは当たり前だ。

見た目が可愛いからって庇<sup>ヒーロー</sup>うな偽善者。

僕達《悪》は自分の罪を理解している。

「何かくだらない事を考えているみたいだな、殺人鬼」

目の前の吸血鬼の事をずっと考えていると、その本人から声が掛かり、僕は自分がずっと考え事をしていた事に気付く。

時計を見ると茶々丸が部屋を出てから数十分が過ぎ、キッチンの方からは先程まではなかった美味しそうな匂いがしてくる。

「君の事を考えていたんだよ、吸血鬼」

僕はとりあえず彼女に適当な返答をした。

ちなみにこの場合の適当とは、よく使ういいかげんな意味ではなく、適切なと同じような意味だ。

「言葉だけを聞けばずいぶんロマンチック台詞だが、貴様が考え事に集中する前の言葉を思い出すとゾツとする台詞だな」

「あ、そういえばそうだね」

人形のように美しく整った人形使いは、優雅に上品に、楽しそうに愉しそうに、遊園地で遊ぶ子供のように、男を魅了する娼婦のように、魅力的な微笑を僕に見せた。

それを見て僕も微笑む。

「悪の幹部の会談のようですね。何の悪巧み中ですか？」

そんな風に笑い合っていると、キッチンから茶々丸が現れ、ポツリと言葉を漏らした。

その言葉に「がほっ　」と情けない声を出してソファからずっこけるエヴァ。二人の様子に僕は苦笑を浮かべる

「お前は主人をどんな風に見ているのだっ！？　ええいつ　巻いてやるうっ！！」

「ああっ、んっ、マスター　」

僕とエヴァの悪の幹部の会談と言われた話し合いは茶々丸の登場によって、一気にコメディ映画の一部分のように愉快的時間に変わった。

……まあ、少し特殊なようだが。

僕はふふっと小さな笑いを残して、薇に魔力を籠めるエヴァとされるがままの茶々丸を置いて、つまみ食いに行くことにした。

### 第三十幕 癒しのマクダウェル家（後書き）

頑張つて毎日投稿してるけど文章に全く納得できていないから、  
ちよつとまだ読めてない本（積みゲーならぬ積みブック？）でも読  
んで勉強し直したい。

### 第三十一幕 先輩と後輩

「ヤキソバパン買って来いよ。ついでにジャンプもなあ。……もちろんお前の金で！」

昼休みの職員室。いつも出張ばかりのタカミチは今日は学校にいた。

そして元気に学校で授業を行った後、今から僕にパシリにされる事を聞いて感激していた。

いや、もちろん嘘だよ。嘘じゃなかったらタカミチはシヨタコンのマゾになっちゃうよ。

感激なんてしてないし、いつも通りの苦笑いダンディーフェイスだ。

「愛姫さんはヤキソバパンそんなに好きじゃないですよ？ それにジャンプ読んでないじゃないですか。マガジンとサンデー派ですよ？」

その通りだ。タカミチの言っている事に間違いはない。でも月刊マガジンとマガジンSPECIALを忘れるなよタカミチ。

ちなみに最近では月刊マガジンが一番好きだ。三味線のやつとピアノのやつにハマっている。

と、どうでもいい話はおいておこう。

タカミチの言う事に間違いはない。けれど、だからと言って僕の命令を聞かないでいいという事ではない。

という訳で一言。

「メロンパンといちごオレさつさと買ってこい。カスが」

そして「昼休み終わるだろうデスメガネ」なんて続けていると、タカミチは嫌な顔一つせずに「わかりました」と、コンビニに向かっていた。

……あれ？ マジでシヨタコンマゾ？

てゆうかこれだと僕が典型的な意地悪な先輩だよ。裏でタカミチが愚痴つても責められないレベルだよ。

まあ、態度を改めるなんて僕には無縁の話だけだね。……いや、でも悪評はあまり嬉しくないなあ。

「お前はタカミチ相手には本当に容赦しないな」

うがーと自分の世間体に悩んでいると、後ろから職員室には似合わない声がしてきた。

振り向けば君がいて、また何気なく笑いかけ。今日最後の制服

「いつ、私が貴様に笑いかけたんだ？ あと私に今日最後の制服なんて時は呪いが解けない限り永遠に来ないぞ」

君こと吸血鬼は眉間を押さえながらそう言い、僕はそれを聞いて

素直に感心した。

心を読むとは流石だね。

「全部声に出てるがな」

そう言われ、僕は舌をぺろりと出して「ごめんちやい」と謝り、心の声を口に出すのをやめる。ちなみに彼女の台詞は『がな』ではなく『がな』だ。関西弁ではない。

僕の様子を見てエヴァンジェリンは更に呆れる。そしてそのままの表情で僕の隣の席にあるタカミチの椅子に勝手に座り出した。

そういえばエヴァが此処に来るなんて珍しいどころか初めてだ。タカミチにでも会いに来たのだろうか。年の差カップル？

「貴様の顔を見れば、考えている事を口に出すのをやめてもわかるから言っておくが、私だつて来たくて来た訳じゃないぞ。……貴様に爺からだ」

そう言つてエヴァは僕に一枚の封筒を手渡す。

「ふんっ……この私をパシリになんか使いやがつて」

そして不機嫌そうに鼻を鳴らしながら悪態をついた。

殺人鬼と吸血鬼をパシリに使うとは流石は妖怪の総大将だ。尊敬はしないけれど素晴らしいよ。

僕は受け取った手紙を手の中で遊ばせながら溜息を吐く。

そしてエヴァを見てお礼を言う。

「……ありがとう。今度出張の時に魔法世界のお酒でも買ってくるよ」

僕の言葉を聞いて不機嫌だったエヴァの表情がご機嫌に変わっていく。

ロリ体型のくせにお酒が大好きだから、魔法世界に直接行くなんて事できないから嬉しいのだろう。

僕はエヴァの可愛い様子を見てひそかに笑う。

そしてそんな僕に気付いていないエヴァは、

「ほう……、楽しみにしているぞ『英雄』殿」

とニヤリと歯を見せながら言い残し、もう用はないとばかりにそのまま去っていつてしまった。

彼女の言い残した言葉について考える。

つまり有名人としての特権を使って、せいぜい高いお土産でも買ってこい、ということだろうつか。

確かに今までお土産を買って帰ったことなんてないし、今度はちゃんと買ってこようかな。

気分は娘に出張土産を頼まれるお父さんだ。



「買ってきましたよ、愛姫さん」

そんな事を考えていると、入れ代わるようにタカミチが帰ってきた。そして夕席に着くと、爽やかな笑顔で僕にコンビニの袋を手渡す。

僕は手渡されたコンビニの袋を覗き込む。すると頼んだモノ以外にいちごのポッキーが入っていた。

……こういう風に優秀だからついついタカミチを使ってしまうんだよね。

「ありがとうタカミチ！ いちごのポッキーまで買ってくるなんて流石、僕を『世界で一番愛してる』なんて言うだけはあるね！！ 噛み終えて味のなくなったガムと同じくらい愛してるよ！！！」

……ざわ……ざわ……ざわ……。

僕の言葉に途端にざわつく職員室。

「ち、違いますよ！ ちょっと、だから……いや、そうじゃなくて……はいはい、ええ、そうなんです！ ジョークですよジョーク！ あはは……本当に愛姫さんってお茶目ですよね！！！」

そんな職員室の先生方の反応を見てタカミチはすぐに誤解を解きに回った。

暑くもないのに汗をかきながら焦っているタカミチを見て僕は笑う。

「勘弁してくださいよ愛姫さん」

やっと弁解し終わったのか、どっと疲れながら僕をじと目で見つめ、訴えるデスメガネ。

「いや、タカミチはマ」

「勘弁してくださいって！」

僕はそんな反応が面白くて更に何かを言っでやろとしたが、タカミチは咄嗟に僕の口を手で塞いでそれを防いだ。

煙草臭い手で触るなど言いたいが、塞がれた口ではうーうーと言うことしかできない。

うーうー言うのをやめなさい的なネタがやりたかったのだろうか。もしそうなら僕はうーうー言うのをやめなさいって言うのをやめなさいと言っでやる。

なんて考えながら数秒が過ぎると、タカミチは僕が何か変な事を話し出す様子がなくなつた事に気付いたようで、ようやく解放された。

「はあ……」

と溜息をつくタカミチを尻目に、僕は食事を始める事にする。それを見てタカミチも静かに優雅にコーヒーを飲み始めた。

髭の生えたオッサンは何故、こんなに美味しそうにコーヒーを飲

むのだろう。そんな無駄な事を考えながらメロンパンに被りつく。

そんな僕を見てタカミチは何故か微笑ましいものを見ているかのような瞳を僕に向けていた。

お父さんか！！

「いつもメロンパンは飽きませんか？」

世間話。タカミチはコーヒーを飲み終わると、暇になってしまったように僕に話し掛けてきた。

「うーん……飽きないかな。僕って好きなものは飽きないんだよね。毎日三食オムライスを一週間続けたこともあるし」

「一週間ですか？」

「うん、一週間。別に味付けも材料も付け合わせも変えることなく一週間」

タカミチは苦笑を浮かべる。

「愛姫さんって変わってますね」

奇才って言うのはかんべー的な台詞を返すべきだろうか。そういう期待をしているのだろうか。

いや、タカミチに限ってはいいか。不思議そうな顔をするだけで終わるのがオチだ。滑瓢なら「ジョニー・デップに似てても言ったらだめかのう？」なんて返してきそうだが。

「変わってないよ。確かに存在は普通からは外れてしまってるけど、趣向自体は普通の範囲内さ」

「普通の人間は同じものには飽きますよ。特に日本人は飽きっぽいですし」

「それは半分イギリス人の僕に喧嘩売ってんの？ メシマズの国だから美味しい料理だと飽きないんですねとか言いたいんですか？ 朝食だけ美味しいんだから朝食3回食つてるとか言いたいんですか？ 紅茶ばかり飲んでんじゃないよとか言いたいんですか？ デイスってんじゃないやねえよ！！」

「ちょ、すいませんって」

マシンガンのように無表情で畳み掛けると、タカミチは慌て出した。

別にイギリス行ったことないし、愛国心のカケラもないけどね。まず、国籍日本だし。

「いいぜ、お前がイギリスを馬鹿にするってんならまずはそのふざけた月末買ったばかりの眼鏡をぶち殺すっ！」

僕はそう言うと同時に懷からナイフを取り出し、それを振るう。

そしてカシヤンツ と音を立て、レンズの部分だけ綺麗に、真つ二つに切れて眼鏡が床に落ちた。

「ああ……これで今月3つ目だ」

ショックを受けながら床にしゃがみ込んで眼鏡を拾い、哀れな表情でそれを見つめるタカミチ・ザ・デスメガネ。

魔法世界の英雄で、犯罪者からは恐れられ、国民からはモテモテの、魔法の使えない無音拳の使い手、高畑・T・タカミチ。僕は彼とこんな感じで日々楽しく過ごしている。

### 第三十一幕 先輩と後輩（後書き）

言葉だけでイカされた気分。テンションがハイになりましたね！

大好きな作品に感想書いてみたら、まさかの作者さんが狂愛の事を知っていた　きゃー！　きゃーきゃー！！

返事見た瞬間舞い上がって頭振りながら身体振りながらギターをおもいつきり掻き鳴らしちゃいましたよ！！

駄文過ぎる物語をもっと良くする為に頑張らなければ！！！！！！  
！

## 第三十二幕 桜色の思い出

突然だが僕の昔の話をしよう。僕がまだ人間だった頃の話をしよう。

### 桜舞う季節。

つまり淡い恋の季節。恋をすると、よく『春がきた』なんて言われる事でお馴染みの季節だ。

若人達は寂しさを埋める為に人肌を求め、憧れの感情まま勇気を振り絞って告白し、成功に頬を染め、失敗に涙する。

そんな告白で同じみの、恋愛ゲームでは伝説なんかがある桜の木の下に僕は呼び出されていた。もちろん僕が通っていた学校には伝説なんてない、ただの告白スポットしかなかったけどね。

中学三年生になってまだ使い慣れていない下駄箱に入っていた手紙。僕はそれに書かれていた時間と場所を指定しての呼び出しに、何の疑いも持たずにこのこと言われた通りに向かった。

そして、その桜の木の下に 彼女がいた。

「あ、あの……」

長い黒髪を煌めかせながら、少し茶色い瞳に僕の姿を映し、子供ながらに凹凸のついた身体を木に預け、まだ幼い顔立ちを喜色一色に染めて笑っている少女。

僕はその少女を見て先程までの平静が嘘のように緊張し始めた。

「君がコレの差し出し人？」

「はい。……来て下さってありがとうございます」

僕が手紙をひらひらと振りながら尋ねると彼女は笑顔で肯定した。

その時間こえた鈴の音色のように美しい声で、僕の緊張は更に高まっていく。

喉がからからに渴いていく。頬が熱くなっていくのを感じる。そして手が湿っていくのに気付いて、僕はズボンにそれを擦り付けながら平静を装う。

「私、2年の山撫渚子やまなでしよこです。はじめまして」

「僕はみな」

「愛姫先輩ですよね？ 呼び出したのは私なんだから知ってますよ」

うふふと面白そうに笑う彼女を見て、僕の心臓の鼓動は次第に速くなっていき、彼女に聞こえてしまうのではないかと焦り出してしまふ。

普通は逆ではないだろうか。何故呼び出された側の僕がこんなに緊張しないといけないのだ。なんて、そんな事を彼女に言えないし、言うわけにはいかないのだが、誰かに気持ちをぶつけないと平静を取り戻せないだろう程に、僕の心は掻き乱されていた。



けれど先輩として、男として、情けない姿を見せる訳にはいかない。僕は意地で素っ気ない感じを維持する。

「で、要件は何？」

「そうでした。そうでしたね。あの手紙だけでは何の用があるかわからないですね。すいません」

「いいよ、別に」

ぶっきらぼうな返事をしているが僕の心は面白そうに笑ったり、申し訳なさそうに落ち込んだり、真面目な顔で頷いてみせたり、ころころと変わる彼女の表情一つに過剰に反応してしまっている。

彼女は気付いているだろう。気付いていないはずがないだろう。

けれど彼女はその事には触れない。

それを自覚すると僕には彼女が小悪魔のように見えてきた。

そしてその小悪魔が桜色のなまめかしい唇を開く。

「愛姫先輩って付き合ってる人いますか？」

「……いないよ」

小悪魔は僕がそう言うのと「良かったです」とニツコリ笑った。

自慢ではないが実の姉以外に異性に興味を持った事すらない。告白された回数 of 僕みたいに女々しいシスコンがモテるはずがなくこ

れが初めてだ。

それにしても普通は告白前にそういうのは確かめて　いや、まだ告白だと決まっていけない事を失念していた。

放課後に呼び出されて何かあるパターンは他にもある。調子に乗るなどヤンキーに絡まれるパターンとか〇〇先輩にコレを渡してくださいパターンとか。

先入観で物事を決め付けるのは良くない。けれど恋人の有無を聞いたって事は期待してもいいのだろうか。

僕は探るような眼差しで彼女を見る。

「ふふっ、心配しなくても校舎の影から不良男子が出て来てボコボコにされる……なんて呼び出しじゃないですよ」

僕の心を見透かしたかのような言葉だった。そんなに僕は顔に出やすいだろうか。僕は首を傾げる。

「普段の先輩はわかりにくいですけど、今の先輩はわかりやすいですよ」

そう言っただけで彼女はキラリと星が見えてきそうな可愛らしいウインクをする。

僕はそんな言葉を聞いて、動作を見て、耳まで真っ赤になってしまっているだろう事に更に赤面した。

「面白いですね、先輩って……やっぱり私の見込んだ通りです」

僕は現状を面白く感じる事はできない。それにどんな見込まれ方をしていたのだろうか。

「……さて、そろそろ本題に入っていいですか？」

突然の言葉に返事が出来ず、僕はコクコクと頷く。そして緊張で身体が固まっていく。

恋人ってどういう事をするのだろうか。いや、その前に僕は告白されてそれを受けるのだろうか。って、まだ告白されると決まった訳ではないっていうかなんていうか。でも今そんな感じの雰囲気だし、ああ、でも。

僕の頭の中は大混乱。自分で何を考えているのかすらわからなくなってくる。

そんな僕の心情を読み取ってくれたのか、彼女はこほんと咳ばらいをして僕に彼女が話し出す前に準備させる時間をくれた。

けれどそんな短時間で僕の心の準備が完了するはずもなく、でも、それでも彼女はもう待てないとはかりに口を開く。

「これ受け取ってください」

彼女がそう言って差し出したのは綺麗に包装されて中身の見えな何かだった。

プレゼントだろうか。僕は汗で湿った手で彼女の手に触れないようにしながらそれを受け取る。

「コレが私の気持ちです」

少し頬を染めながら笑う彼女を見て、これ以上高まる事がないと思っていた心臓の鼓動が更に速くなっていく。

「……あ、ああ、うん、ありがとう」

もっと気の利いた台詞を吐き出す事ができないのだろうか。自分を客観的に見ている自分が僕を責めてくる。

しかしこれが精一杯だ。他に何か話そうとしたら何を言ってしまうかわからないのだ。

「……家に帰ってから見てくださいね？」

彼女が笑う。僕は黙って頷く。

そして僕の反応に満足したのか、彼女はそのまま別れの挨拶もせず、小走りで去っていつてしまった。

恥ずかしかったのだろうか？

僕はそんな考えに至り、自分の気持ちが少し落ち着いていくのを感じる。

「……なんだろコレ？」

少し重みのある包装された何かを持ち上げながら僕から独り言がこぼれる。

さつさと家に帰って開けてみよう。

自宅に帰ってから姉がいるかも確認せず、手洗いうがいもせずに自室に戻ったのなんて生まれて初めてだ。

僕の心はまだそれぐらいに緊張し、手の中の重みの正体が気になっ  
っていた。

「……」

ごくろつと僕は唾を飲み込む。

中身の正体は一体何なんだろうか。全く検討がつかない。

僕は少し震えた手でリボンを解いて、鮮やかな色の紙でできた包  
みを剥がしていく。

そしてようやく中身に御対面した。

のだが、なんだろうコレ。

「……漫画？」

それは一冊の漫画だった。おそらく月刊連載のものだろう見たこ  
と漫画雑誌。

コレが気持ち？　どんな気持ち？　もしかして罰ゲームだったのだろうか。

僕はしょんぼりとしながらページをパラパラとめくっていく。

「ぶっ　なにこれ！？」

そして気付いた。これが普通の漫画雑誌ではない事に。アブノーマルな趣味の雑誌である事に。

僕は部屋の隅に本をおもいつきり投げ付けた。

本は壁にぶつかり、大きな音を立ててそのまま床に落ちる。

そんな気持ちかよっ！！　と、僕は悪態をつきながら心の中で叫んだ。

そしてジト目で本を睨み付ける。

ガチャ。

そんな時、突然ノックなしで部屋の扉が開く音がした。そしてそのまま誰かが入ってくる。まあ、誰かと言っても泥棒以外の可能性は一つしかないのだが。

「うるさいわよー？　てゆーか帰ってきたなら愛華様に挨拶しに来なさいよ愚弟」

南愛華、僕の姉だ。金髪赤眼で大きくメリハリがついた体型の見

た目は外国人に見えるが日本生まれ日本育ちの僕の同種。でも英語も他の国の言葉も勉強してペラペラな僕の別種。

突然の侵入者は彼女だった。

そんな彼女は僕が何か本を睨んでいる事に気付き、それに近付いていく。

まずいつ、勘違いされる！

けれど行動を起こすには既に遅く、彼女はもうその本を手にとっていた。

「なにこれ……百合姫？ ジャンプを読まない非国民のくせにあんたはまた別の漫画に……あ？」

ペラペラとページをめくっていくと同時に、歪んでいく最愛のお姉様の表情。僕はそれを見て溜息を吐いた。

「こんな子に育てた覚えはないんだけどなあ……何処で何を間違えたのやら。ジャンプを読んでなかったせいね。こういうのがいけないとは言わないけど」

僕もそんな子に育った覚えはないです。それとジャンプはそこまですっきりしたものではありません。なんて言いたいけれど、笑いながら怒るという器用な真似をしているお姉様には何を言っても無駄なので、僕はガミガミとお説教を続けるお姉様の言葉にひたすら耐える。

愛華お姉様に反論なんて愚者のする事だからね。

「　　って、ことでわかった！？　とりあえず愛姫はジャンプを読むこと！」

どうしてその結論に至ったのだろう。僕にはジャンプ信者の言葉は全く理解できないが黙って頷いておく。

「それでよし。ジャンプ読んでは全国模試一位とか余裕だから。あと友達もできるし。だからそんなことになるジャンプを読みなさい！　そしてコレは捨てておきなさい！！」

そう言ってお姉様は僕に例の本を投げ渡し、僕はそれを嫌々ながらキヤツチする。そしてそれを見届けた後、お姉様はふんつと鼻を鳴らして部屋から出ていった。

あ、言い忘れてたけどジャンプをそんなに万能に使いこなせるのは貴女だけです。何処の真剣ゼミですか。

僕は既に届かない言葉を心の中で溜息混じりに告げた。

そして手に持ったコレを捨てる為にゴミ箱に近付いていく。

「　　って、なんだろコレ？」

興味本意でパラパラとめくっていると、手紙のようなものがしおりのように挟まれていた。

僕は本を床に置いてそれを開く。

『愛姫先輩へ』



私の贈り物は気に入っていただけでしょうか？

男装している先輩を一目見た瞬間から趣味が合いそうだなあ、なんて憧れていました。

良かったら一緒にこの道を極めていきませんか？

山撫渚子より』

「ぶっ殺すぞ、レス野郎」

僕はその手紙をぐしゃぐしゃに丸めて本と一緒にごみ箱に投げ捨てた。

ときめきを返せ！！

向かいに座る吸血鬼は内容がよくわかっていなかったのか首を傾げる。たぶんその雑誌の事を知らなかったのだらう。

だが茶々丸は理解できていたようで「その人とは仲良くなれそうです」なんて怖い事を言っている。

「どうかな？ エヴァ、茶々丸。僕の恋愛の話は……面白かった？」

「昔は貴様もピュアだった事が聞けたのは面白かった。だが私はその雑誌を知らないからオチが意味不明だったぞ」

「私は満足できました。大変興味深い話でした」

「まあ、茶々丸はそうだろうね」

僕はあははと乾いた笑いで答えた。

第三十二幕 桜色の思い出（後書き）

愛華、愛姫、愛玖、愛祁、愛琥。アイケはキツイですね。

### 第三十三幕 仄仄な日常

零崎未満人間以上。もしくは人間未満零崎以上。僕の存在はそれだ。

人間が上か零崎が上か、人間がマイナスで零崎になるのか、人間がプラスで零崎になるのかわからないが、とりあえず存在自体は最<sup>マイ</sup>悪<sup>ナス</sup>な零崎。

そんな半端な零崎でも殺さなければ生きられない。屍で道を築かないと人生（鬼生）を歩んでいけない。

無意識を意識して封じ、呼吸（殺人）をずっと我慢して、休日になると麻帆良から離れた街で自分を解放する。

タカミチは知れば止めるだろう。滑瓢は知っていて、利益になる存在が離れていく事を恐れて何も言わないんだろう。

零崎に『殺すな』は吸血鬼に『血を飲むな』と言う事よりもタチが悪い。自殺しろって言っているようなものだ。

まあ、麻帆良で普通に教師やってるなんて死んでるようなものだろうけどね。

「うぐっ……、な、なんで……」

喚き声が聞こえて足元を見る。

そこにはスーツ姿の音が切り傷だらけで倒れていた。犯人は僕。

人気のない路地裏で誰かが来るのを待っていたらちょうど彼が来たのだ。

そしていつも通りずばばーんとやっちゃったんだぜ。

僕は彼を見下しながら尋ねる。

「なんで会った事もない人間を傷付けるのか？ お前は無差別殺人犯なのか？ とか、誰かに雇われたのか？ とかが言いたそうな顔だね」

僕が尋ねると知らない男はコクコクと必死に頷いた。

まだ動けるみたいだけど、男には対抗する力も反抗する力ももう無いみたいだ。

このままほって置いてても出血多量で死んでいくだろう。最後の悪あがきってヤツかな？

「金なら、払う……だから助けて……」

「いらないよ」

男は絶望的な表情をする。

ここまできてお金で解決するとも思っていたのだろうか。

「みんな理由聞くよね？ 理由聞いてどうするのか僕にはさっぱりだ」

何を知っても事実は、現実是不変というのに。

「僕はね、家族のお父さんもお母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも弟も妹もおじいちゃんもおばあちゃんも、ペットの犬も猫もハムスターもインコも熱帯魚も、親戚の誰も彼もみんな殺されちゃったんだ！ だからこれはその復讐さー！」

「か、関係、俺は関係な……」

「関係ないなんて言うなよ。人類皆兄弟……君も人類でしょ？」

「ひい  
」

僕がそう言うとなんは表情を強張らせながら必死に地面を這うように逃げ出す。

でも僕がそれを許さない。

僕は男の進行方向に立ち、退路を塞ぐ。

「まあ、さっきのは嘘なんだけどね」

必死に逃げようともかく男に僕は笑いかける。

「理由理由理由……理由なんて必要なのかな？ まあ、どうしても必要な理由を考えてあげるよ」

男は諦めたのか俯せの状態のままビクビクと震えて動かない。

僕はそんな男を見下しながら囁く。

「仕事が休みだから殺す。天気が晴れたから殺す。空が青いから殺す。歩き疲れて足が痛いから殺す。お腹が空いたから殺す。この前見たお笑い番組が面白かったから殺す。修道女萌えを妹萌えだと知り合いに勘違いされたから殺す。酸素があるから殺す。地面がコンクリートだから殺す。知り合いの眼鏡がうざいから殺す。漫画が読みたいから殺す。買い物がかたいから殺す。ポストが赤いから殺す。ここが日本だから殺す。地球が丸いから殺す。神様を信じていないから殺す。甘い物が好きだから殺す。車が走っているから殺す。中学生はロリなのかわからないから殺す。砂漠が砂だらけだから殺す。そろそろ疲れてきたから殺す。ライオンは雄しか鬣がないから殺す。ドラえもんが青いから殺す。コンビニが24時間営業だから殺す。芸能人は歯が命だから殺す。ベートーベンの曲が好きだから殺す。虫が大嫌いだから殺す。ドクターペッパーを飲んだ事がないから殺す。暇な時間が少ないから殺す。円周率を20桁までしか覚えていないから殺す。B E C Kの映画でコユキが歌ってなかったから殺す。日本のホラー映画が怖いから殺す。二次元世界に来ちゃったから殺す。お酒に弱いから殺す。髪の毛が伸びてきたから殺す。B DがD V Dと見分けがつかないから殺す。フロマージュなんて可愛い名前なのにチーズだから殺す。猫が可愛いから殺す。太陽が眩しいから殺す。雲の流れが遅いから殺す。口笛が何故か遠くまで聞こえるから殺す。ピアノの音色が好きだから殺す。海が広くて大きいから殺す。恋が淡くせつないから殺す。僕の身体に赤い血が流れているから殺す。ギターの演奏が難しいから殺す。焼肉はタン塩が好きだから殺す。お寿司はエビが好きだから殺す。人間が二足歩行だから殺す。夏の動物園が臭いから殺す。小説を読んでいると眼が疲れるから殺す。最近新しい漫画を買ったから殺す。僕の眼が真っ赤だから殺す。お気に入りの二次創作小説の更新が遅いから殺す。C Dの形がドーナツみたいだから殺す。飛行機が空を飛べるから殺す。野菜

が嫌いだから殺す。チート能力が欲しいから殺す。紅茶が好きだから殺す。安心院さんが素敵過ぎるから殺す。ポケットが便利だから殺す。朝はパン派だから殺す。日本が島国だから殺す。宇宙は今も広くなっているから殺す。ベスパの整備が面倒だから殺す。言いたい事も言えないこんな世の中じゃポイズンだから殺す。納豆がネバネバだから殺す。目薬が怖いから殺す。新しい携帯が欲しいから殺す。コーヒーが飲めないから殺す。コーラが真っ黒だから殺す。喉が渴いたから殺す。魔法が全然使えないから殺す。酸素を吸って二酸化炭素を吐き出したいから殺す」

男の表情はどんどん青くなっていく。そして理解できないようなものを見る目で僕を見上げる。

「どんな理由がいいかな？ どんな理由で君が殺されるのか自由を選んでいいよ。どんな理由でも結果は同じなんだからさ」

「なんだよそれ……意味わかんねえ」

「わかっていなくていいよ。わからない方がたぶん幸せだ」

零崎ほくの気持ちを理解しようなんて間違っている。だって僕にも理解できないのだから。

「まだ死にたくない……」

死にたいなんて本気で願ってる人間はいないさ。いるとしたらそれはもう人間じゃない。生きていない。ただ死んでいないだけの何かだ。

「死にたくないんだよッ」

「



男は真っ赤な手で僕の足を掴み、必死に懇願する。

最後まで諦めない人間。彼はなんて素晴らしい人間なのだろう。

汚くて、醜くて、弱くて、美しくて、綺麗で、強くて、僕が一番大好きな種類の人間だ。

「でも、君の懇願<sup>ねがい</sup>は叶わないんだ。だって僕は零崎<sup>ぼく</sup>なんだから。半端な存在でも……それでも僕は零崎<sup>ぼく</sup>なんだから」

「嫌だ……嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！」

「大好きだぜ？ 人間」

「うわあああああああ」

グシャリと嫌な音が僕の下から聞こえた。そしてそのまま赤い液体と肉片が飛び散り、白い骨が砕け、桃色のドロドロとしたものが流れ出す。

ぬちゃつと気持ち悪い音を出しながら僕は『それ』から足を退け、そのままぷらぷらと足を振る。

「あーあ、汚れちゃった。この靴とズボン高かったのに……」

僕は溜息を吐いた。

夢中になるとつい汚れる事を無視しちゃうんだよね。着替えが靴

の中にあるから困りはしないけど。

ん？ ああ、思い出した。

「もう聞こえてないだろうけどお兄さん？ 理由ならあったよ」

僕は苦笑を浮かべながら言った。

これは独り言のようなものだ。死んだ後は全て零なくなると考えている僕には死者の魂、幽霊なんて信じていない。だからこれは独り言。

「僕が化物ばくぶつだからさ」

### 第三十三幕 仄仄な日常（後書き）

めだかボックス全巻買いました。そして全巻一気に読みました。初めて読んだんですが面白かったです。

安心院さんにハグされたい。赤さんに病辱プレイで虐められたい。裸エプロン先輩の為に裸エプロンになってあげたい。

めだかボックスの二次創作が書きたい！

あ、報告。これまで1日1更新でしたがたぶん次話には結構時間が掛かります。次から幕間の話なんですが、それは幕間が全部書けてから順番に投稿する予定なので、ご了承くださいです。

## 幕間零 狂愛と信愛（前書き）

### 登場人物紹介

みなみあいき  
南愛姫

物語の語り部。

ぜろさきいとつき  
零崎愛識

魔法世界の英雄。

いちのみやかほ  
一ノ宮嘉穂

京都の情報屋。

セラス

アリアドネーの総長。

ぜろさきかみおり  
零崎守織

零崎一賊の一人。

ジャンヌ・ダルク  
体験入学生。

クロエ・ラプソディ  
お嬢様。

スノウ・ロングゲート  
ピラリオマニア  
愛書家。

マッティーナ・ウェアハウス

クラス委員長。

コレット・シュレディンガー  
迷子少女。

エルザ・サルバトル  
コレットの世話係。

ロマネ・シャトー  
アリアドネーの教師。

ブリジット・ストーン  
おっとりガール。

ロール・ストーン  
ブリジットの姉。

逸峰咲夜  
《悪食鬼》。

## 幕間零 狂愛と信愛

「復讐心って怖いね。……人を鬼に変えてしまう。化け物に変えてしまう。どんなに人々から愛されている人間でも、全ての人間に愛される事はできない。全ての人間を愛する事はできないんだよ」

僕は愛している。全ての人間から憎まれようとも、全ての人間の全てを愛している。たとえ裏切られようとも僕が全ての人間を愛し続ける事に変わりはない。

君の事だって本当は愛してるんだぜ？

「だって貴方は人間じゃないから。だって貴方は壊れているから。だから人間を狂う程に愛している。狂いながら愛している。でも貴方は愛しているけど裏切られる事はない。だって貴方は親愛なる人間を信愛してはいないから。信頼関係を築けないのに信愛する事なんてできないから」

それは失礼な話だ。勘違いも甚だしい。僕は人間を信頼し、信用し、信愛している。信じなきゃ愛せるはずがない。

「信じていないから愛せるんでしょう？ 裏切りは人に絶望を与える。裏切りに人は耐えられない。けれど完全に信頼していない貴方は裏切られたと本心から感じた事なんてない。表面で装ってるだけだよ」

僕より僕をわかってるみたいな言い方をするんだね？

「貴方より貴方を、誰よりも誰でも知っている。それが私という存在だからね」

それは楽しいかい？  
それは愉しいかい？  
それは悲しいかい？  
それは哀しいかい？  
それは恐ろしいかい？  
それはどんな気分なんだい？

僕には君の気持ちがわからない。愛する人間の全てを知る愛する人間の気持ちがわからない。愛しているからこそ人間の全てを知りたいのに。

「『人間の全てを知りたい』って？ 私は一部しか知らないよ。見えないものが見え、聞こえないものが聞こえても 人間はもっと奥底に自分を飼っているんだよ。それは私にも知る手段はない。知りたいと感じた事もないけどね」

それはどうして？

「……怖いから。人間は化け物あなたよりも恐ろしい生き物だから。そんなものをわざわざ見たいと考える程、私は物好きじゃないから」

それでも僕は知りたい。人間の全てを知って、人間の全てを経験したい。もっと深く人間を愛したいんだ。

「あんな事があつたのに？」

あんな事があつたから尚更さ。

「戯言でしょ？」

真言だよ。



## 幕間一 仕事と私事

アリアドネー魔法騎士団養成学校。

ウェールズの魔法学校は研究などに特化していて、更にネギを思いつく限り初心的な事しか教えない場所なのだろう。魔法世界のように本格的にできる訳でもないし。

しかしアリアドネーは違う。実戦を考えて訓練され、立派な騎士団を育てる為の学校なのだ。

過去にその騎士団のリーダーだったセラスが総長を務めるこの学校は、学生と生徒の二足の草鞋の魔帆良やネギ（欠陥品）を出席で卒業させるウェールズとは格段にレベルが違う。

独立学術都市国家アリアドネー。学ぶ意思と意欲があれば、例えば死神犯ろうが何だろうが受け入れるここでは、魔帆良やウェールズ（悪ふざけ）みたいな事は許されない。

アリアドネー正規騎士団は質、装備、士気の全て超一流の騎士団。その騎士団を目指す生徒の住む場所が此処なのだ。

僕はそんなアリアドネーの学園都市に滑瓢のパシリとして来ている。

そしてセラスと待ち合わせしている最中だ。

今回の待ち合わせ場所は人々がこつた返す広場。喫茶店などで待ち合わせをしなかったのは僕に対する嫌がらせなのか、それともた

だ適当に決めたのか。

僕にそれはわからないが、とりあえずさつさと来い。

なんて考えているとタイミング良く、遠くからセラスらしき人物と小さな少女の姿が見えてきたから不思議だ。タイミングを見計らっていたのだろうか。

僕はセラスらしき人物ではなく、後ろをちょこちょこ着いている小さな少女を見つめる。

もしかして いや、もしかなくてもそういう事か？

この気配。街に到着してからずっと感じていたそれらしき気配。僕達だからこそわかるこの独特の感じ。

それがセラスと一緒に来るのは予想外にも程があった。

どうやらあの愚弟以外とも縁があったようだ。

僕は異常と異常が惹かれ合う事を再認識した。

「お久しぶりです。零崎さん」

そう言っつて、昔会った時より老けた女性、セラスは上品に笑みを浮かべるながら頭を下げた。

僕と彼女は過去に紅き翼と共に戦った戦友だ。一応知り合いに力テゴライズされている存在だ。

けれど今の彼女と昔の彼女が僕の中で一致しない。今は立派に総長なんかやっているが、昔は最終決戦前にナギにサインを頼んでいたミーハー馬鹿女だった。

それが立派に育つ（老け）ちゃって。

……それに物騒な化物を隣に連れているし。

僕はその化物に視線を移す。

「はじめましてお兄様。零崎守織（ぜろさきかみおり）と申します」

化物は5年経ったら好みにピッタリになりそうな可愛らしい姿だった。

年齢は僕より少し下ぐらいで、僕より身長も小さい。そしてはじめて会うが彼女も僕の零崎（いもつこ）。

そんな化物がアリアドネーの制服を着てそこにいた。

……殺人鬼も受け入れるのかよ。

魔法世界に来たら絶対家賊に会うフラグなんていつ立てたんだろ  
う。

目の前の少女をそんな考え事をしながら見つめる。

すると、何故か少女は顔を真っ赤にしながら俯いた。

「この娘、貴方に憧れてるみたいなんです」

「はい、叶識お兄様からいろいろ聞いてます！ ナイフ1本で100人を一瞬でバラバラにしたとか、その死体を綺麗なシャボン玉で一瞬で消し去ったとか、初めて見た時は女神のように見えたとか、お兄様は間違いなく零崎一賊最強とか、えっと、それからそれから……」

セラスの声にパツと反応して顔を上げた少女は真っ赤な顔のまま、先程までとは打って変わってマシンガンのような連射速度で話し始めた。

僕は初めての反応に少し戸惑う。

零崎（英雄）のファンじゃなくて、零崎（殺人鬼）のファンは初めてだから、どう反応すればいいのか検討もつかない。しかもそれが初めて会う妹なのだから余計に接し方に困る。

実質、長男は叶識みたいなものなのだから。

「えっと、えっと……とにかく握手してくださいっ！」

そう言っつて、守織は両手をと前に差し出す。

何て言うか……可愛らしい。これは僕に近親相姦ルートを選べという神様からのメッセージなのだろうか。

無神論者なりの戯言を頭に過ぎらせながらセラスを見る。

「……………」

セラスの瞳は純粹な親心が宿った瞳だった。ここで抱きしめてすりすりしたら怒られそうなほどに。

どうやら自重した方がいいらしい。

残念だ。長男なのに家賊とのスキンシップは叶識にしかやったことないよ。

「よろしく可愛い妹よ。お兄ちゃんって呼んでもいいんだぜ？」

とりあえず無難に笑顔で握手することを選んでみた。女性相手だとセクハラになりかねないし。

「あ、ありがとうございます！」

でも恥ずかしがりながらはにかむ妹の姿が見れたのだからいいかな。

僕の手を取り、ぶんぶん振り回す守織いもつとを見てそう思った。

「……さて、そろそろお仕事の話いいかしら？」

守織が手を離すとようやくセラスが話を切り出してきた。

「書類渡すだけでしょ。はいっ」

僕はそう言って、真つ黒の鞆の中から茶色い封筒を差し出す。

これだけの仕事に英雄ぼくを使うのはあの爺ぐらいだろう。

「貴方は黒色が本当に好きですね？ 髪も染めて目もカラコンしたらどうですか？」

「いや、別にそこまで好きじゃないよ。ただ僕のイメージカラーかなあって思うから着てるだけ。そもそも普段は色々着るし」

セラスは封筒を受け取ると、鞆を見て独り言のように口に出す。僕はそれに対して即座に否定した。

一番好きな色は青だしね。厨二病扱いはされたくない。

「はいはい、それじゃあ仕事の話をさせてもらっわよ？」

「へ？ 今、終わったじゃん」

「こんな封筒届けるだけなら配達させればいいでしょう？ 何を言ってるんですか？」

そっいつお仕事で帝国でしてきたんですけど。

「本来の仕事は別。近衛学園長に聞いていらっしやらないんですか？」

爺殺す。話聞いてなかった僕が悪いけど殺す。

「着いて来てください。あまり人前で話す話ではありませんから」

「こっちですお兄様っ！」

そう言って歩き出すセラスと、僕の手を引く守織。

最初から違う場所を集合に使えよ。

「愛識さんに頼みたいのは潜入捜査です。アリアドネーにどうやら完全なる世界の残党がいるみたいで」

少し人通りから外れた居酒屋の個室。そこに移動した途端セラスは神妙な表情で話し出した。

僕はそれを聞いて理解する。

なるほど。確かに学ぶ意思があれば死神でも受け入れるアリアドネーだけど、世界を無に返そうとする完全なる世界の人間がいるのはまずいか。でもアリアドネーの特徴から表立っては出来ないから潜入捜査。

偉い人は大変だなあ。

でも疑問が一つ。

「あのさ、僕って自分で言うのもなんだけど有名人だぜ？ 潜入捜査とか大丈夫？ 守織に頼んだらいいと思うけど」

「私調べ事とかは苦手なんです。すぐ表情に出ちゃうし」

「……と言つことなのでお願いします。バレる可能性は問題ありま

せん。こちらをどうぞ」

セラスは一枚のカードのようなものを取り出し僕に手渡した。

「学生証？ えっと…ジャンヌ・ダルク？」

そこには少し身体が大きくなり髪色が黒くなった僕の写真で違う名前が記されていた。

「年齢詐欺薬を使い、髪色も魔法具で変えて性別を偽れば問題ないかと」

先程の神妙な表情から一転して、笑いを堪えた楽しそうな表情のセラス。

守織も嬉しそうだけど、それは純粹に僕と学校に行けるからだと思っ。思いたい。思わせる。思わせてくれ。

「……地獄に堕ちろ」

はあ、どうせ滑瓢が面白がって提案したのだろう。お前帰ったら殺すからな。



## 幕間二 聖人と悪人

フランスの英雄。神の声を聞いたとされる聖人。ジャンヌ・ダルク。

魔法世界の英雄。神を名乗る存在に会った事がある無神論者。零崎愛識。

まさかフランスの聖女の名を日本の殺人鬼である僕が騙（名乗）ることになるとは思わなかった。しかも当時フランスの敵だった、イギリスの血も混じっている僕がだ。

何の冗談だろう。妖怪の考える事は僕にはよくわからない。

僕は溜息混じりに呟く。

「……さつさと見付けて終わらせよう」

僕は昨日制服に身を包み、偽造した学生を持ちながら守織と共に歩く。

今の僕の肩書はアリアドネーの体験入学生徒らしい。

髪を黒く染め、カラコンで瞳の色を変え、年齢詐欺薬で成長した身体では誰も僕が僕だと気付く事はない。

と、言っても、生徒達が休暇中で、実家に帰省している人間もたくさんいる中、アリアドネーの学園都市地区にいる人間はあまり少ないのだが。

容疑者も絞り込みやすいし、正体がバレる心配もしなくていい。けれど女装はあまり気分が良いものではない。

「はぁ……」

「どうかなさいましたか、お兄様？」

「なんでもないよ。それと此処（校内）でお兄様はだめだよ。バレちゃうからね」

「も、申し訳ありませんっ」

守織はペコペコと頭を下げる。彼女は昨日からこの調子だ。

ちなみに昨日、と言うのは昨日の話し合いだけではなく夜の事も込みである。

僕は正体バレ防止の為に守織の部屋に泊まる事になってしまったのだ。

彼女は全くもって殺人鬼らしくない。僕が言うのも何だが殺人鬼のくせに、完全な零崎のくせに人を殺さない。しかも気が弱く、癒し系な性格なのだ。

アンチ癒し系、リバース和み系の人間ばかりが周りにいる僕にとっては嬉しい話なのだが、相手になれていないので緊張。守織も憧れの人相手に緊張。

だから昨日は新婚初夜の男女のような感じだった。今日もそれが

あると思うと、なんだか胃が痛むのを感じる。

僕はお腹を摩る。

「あのー……大丈夫ですか？」

そんな様子を見て、不安そうな表情で守織が見つめてきた。上目遣いの女の子って眼球をぺろぺろしたくなる魅力があるよね。

「大丈夫だよ」

「ハッ、もしかして昨日の原因ですか！？ 私のせいで赤ちゃんできちゃいましたか！？」

「ぶはっ」

近くを歩いていた女性に守織の言葉が聞こえたようで、飲んでいたジュースを吹き出し、ごほごほとむせる。

「あっ……」

そんな様子を見て守織は自分が外でどんな会話をして、どんな想像をされたのか悟り顔を真っ赤に染める。

天然純粹暴走ガール？ 子供ができるような事してねえよ。

「へっ、あ、そ、そそそなんですか！？ すいません！ 私の知識不足でお姉様に恥をかかせてしまって！！」

それを説明すると守織は更に真っ赤になって頭を下げた。

ちなみに子供の作り方とかは説明していない。なんか犯罪チックな感じがしたから。

まあ、そんなこんなで僕達はいろいろありながらも歩いていく。

「……それでジャンとお姉様。どうやって彼等をお探しになるのですか？」

守織は小首を傾げながら尋ねる。

ふむ、そういえば説明してなかったね。

「証拠は残してないだろう。だから情報を報告している現場にも行かないし、勧誘してる現場も探さない。目指すは報告する為の情報がたくさんある場所さ」

「なるほど。流石ですお姉様！」

セラスが完全なる世界の人間を発見できたのは、その報告している現場を見たからだそうだ。捕まえることもできなかったし正体もわからなかったが、いることだけはわかったので、紅き翼で居所がわかっていて、詠春のように忙しくはない僕が呼び出されたのだ。

僕は彼等に恨みもないし、正義味方を気取るつもりもない。けれどあのゴキブリのようにしぶとい存在の計画を成功させるわけにはいかないのだ。

「……完全なる世界はこの世界を無に還す気だ。それはつまりこの世界にいる零崎に害をなすという事。だから容赦のカケラもなく殺

して解して並べて揃えて晒してやんよ。第二ラウンドも人間＆鬼の連合軍の勝ちさ」

「私もお手伝いさせてもらいます。お姉様のお力にならせてくださいっ！」

守織はキラキラとした瞳で見つめてくる。

だめだ、僕、純粋なコは自分の心の汚さを見せられている気がするから苦手なんだよね。

てゆうかお姉様っていつたら叶識思い出すなあ。お兄ちゃんをお手伝いしに来てくれないかなあ。……無理か。

そんな事を考えている内に一応目的地としていた場所に到着。

「此処がアリアドネー学園都市が誇る中央大図書館です。調べ物をするなら魔法世界で此処より最適な場所はないでしょう」

「図書館の数が多いからまずは一番大きな場所から調べるのが一番だよ」

此処には本を読みに来た訳ではない。『情報収集 報告』の流れなら、見付けにくい報告の現場より情報収集の段階で見付けたいと考えたからだ。

怪しい調べ事している人間に片っ端から質問するとかは目立つ無理だけだね。

僕は巨大な図書館を見上げる。

「ちょっと邪魔ですわよ！」

そのままぼーっと図書館を見上げていると後ろから声が聴こえた。振り返ってみると、典型的な我儘お嬢様のような見た目の女性と取り巻きっぽい女性二人。

「庶民は庶民らしく道の端っこを歩きなさい。私の通り道を邪魔するなんて論外よ！」

「その通りですわ！」

「ですわですわ！」

日傘をくるくると回しながら睨む金髪縦ロール。それに便乗するモブキャラのような二人。

僕はそんな彼女達に「あ、すみません」と言つてた道を空ける。

すると彼女はふんつと鼻を鳴らして歩いていった。

なんとというテンプレキャラ。まるでうちの学園の脱げ女を見ているようだ。

「お兄様にあんな口を聞くなん」

「はいはいストップストップ。僕は気にしてないから大丈夫だよ。それとお姉様だからね」

守織は彼女達の様子に憤慨し、懷から何かを出そうするが、僕は

彼女の両手を掴み止める。

家賊愛は嬉しいけど、必要以上に目立ったら警戒されてしまう。こんなところで何か行動されてしまうのは、あまり良くない。

それからなんとか守織を説得後。僕達は図書館に足を踏み入れた。

中に入った感想はとにかく広い。ずらりと並んでいる本は綺麗に揃えられていて、ほこりのカケラすらない。

中には騒いでいる人間もいないし、良い図書館のようだ。目当ての本を探すのは難しそうだが。

「ようこそアリアドネー中央大図書館へ。どのような本をお探でしょうか」

おそらく案内係であろう司書が話しかけてくる。司書は麻帆良の司書のように何か企んでいそうな笑みではなく、真面目に仕事を頑張りますという気力が伝わってくるような笑みを浮かべている。

「あの、これを……」

守織が何かカードのようなものを司書に手渡す。それを見て司書はこちらの事情を理解したらしく「ごゆっくり」と言い残し、この場を去った。

「さあ、行きましょう」

守織は真剣に神妙な表情で告げる。

「そうだね。じゃあ、行こうか」

まずは黄昏れの姫巫女やオスティア関係の書籍を調べようかな。

僕達は図書館内の案内図を見てから歩いていく。

見た感じ中は外よりは人が多い。たぶん帰省しなかった者が調べ事をしているからだろう。

……しかし、見渡す限り女の子、女の子、女の子、女性、女の子、女の子、女の子、性別女ばかりだ。かなり場違いなような気がする。

僕は溜息を吐いた。

そしてしばらく歩くと先程まで黙っていた守織がようやく口を開く。

「あ、オスティア関連は此処みたいですな。あんまり人は多くないみたいですし、とりあえず今いる人の顔を覚えて一人一人調べていきますか？」

守織の声は図書館内だからと、話の内容がバレないように、を意識し過ぎて聞き取り辛く小さな声だった。

僕は辺りを見回す。現在、オスティア関連の資料を読みあさっているのは6人。ここに残党がいるかもしれないし、いないのかもしれない。



れない。

人形フエイトと同じ見た目のやつとかいてくれたら有り難いんだけどなあ。

てゆーかよく考えたら今更、完全なる世界がオステイア関連の資料を調べるかもわからないし、完全なる世界〃オステイア関連は安直か。

フエイトが助けた戦災孤児がアリアドネーにいるのは原作で知ってるし、いる可能性が高いのはわかる。

外側からの協力者は簡単に見付かるが、内側からの裏切者は見付けるのも難解で、存在自体厄介だ。疑心暗鬼と情報操作、情報の横流しは戦う前から不利になってしまふ。

作られた世界の創られた世界で生きるなんて真っ平ごめんだ。

「とりあえず読んでる資料をばれないように確認して怪しいの奴はリストアップしていこう。もちろん名前はわからないから特徴を書いて後でセラスに確認ね」

小声で守織に指示を出す。

はあ、こんな時に嘉穂ちゃんがいたらみんなの頭の中を……嘉穂ちゃん？

そうだ。嘉穂ちゃんがいるならこんな茶番をする必要はないじゃないか。

「ごめん、ちょっと電話してくる！ 守織は適当に調べておいてっ」

「えっ、ちょ、お姉様!？」

そう言っ て僕は外に向かう。後ろから聞こえた守織の声はシャットダウン。

こんな時ぐらい嘉穂ちゃんに役に立っ てもらおう。

僕は途中で司書に怒られながらも図書館の外に出た。そしてポケットの中から携帯を取り出して、アドレス帳の悪友の欄から1番目の番号を確認する。

魔法世界でも現実世界でも、関係なく簡単に連絡できる携帯（タカミチに買っ てもらった）の定番だ。

プップップ と、ボタンを押すと電子音が響く。

そのまま30秒。嘉穂ちゃんは出る気配がない。

それから1分。繋がる気配は一行にない。

苛立ちながら電話を切る。

世界の情報を誰よりも早く集める彼女が電話に出れないはずがない。僕の状況もわかつているだろうから、忙しくて何かしらのリアクションぐらいできるはずだ。

つまり

「……あの性悪女。僕の面白可笑しい姿を見て今頃笑ってやがるな。そしてわざと無視してるんだろっね」

もしかしたらアリアドネーにいるかもしれない。

その時、ブルブルと携帯が震える。確認するとメールが一件きていた。

【DATE】 08 / 11 15 : 31

【FROM】 一ノ宮嘉穂

【sub】 正解

ジャンヌお姉様あ

可愛いね（\*´、\*）ハアハ

ア

「えっ？」

僕は辺りをキョロキョロと見回す。目当ての人物らしき姿は見えないが、あの人なら変装もできそうだ。

【DATE】 08 / 11 15 : 33

【TO】一ノ宮嘉穂

【sub】死ね

残党の情報を

教えてから死ね

とりあえず返信してみる。さて、返事は来るだろうか。

ブルブルブル　と、思ったより早くバイブレーションの震えがきた。僕は急いで携帯を開く。

【DATE】08/11　15:35

【FROM】一ノ宮嘉穂

【sub】だが断る！

お仕事があるので

いつてきます（＾　＾　）

お土産よろしくね

「……………」

無言で携帯の電源を切ってポケットに戻る。

性悪相手をお願いしようとした、僕が間違ってたみたいだね。うん、さっさと守織のところに帰ろう。

### 幕間三 活動と衝動

あの性悪からのメールがあつた日から三日経ち、収穫は何もないまま今日のスパイ捜査も一旦終了した。正直初日から何か情報が得られるとは思つてはいなかったが、流石に四日も何も得られないままだとは思わなかった。

完全なる世界は基本的に中ボスと人形<sup>フェイト</sup>以外は死んだはずだからおそらくスパイは新参者。それなのにこうも隠れるのが上手いとは恐れ入る。

「今日もダメでしたね……」

守織は俯きながら呟いた。

今日で守織の部屋で過ごすのも5日目。同じベッドで寝てるわけではないから別に平気だが正直なんだか恥ずかしい。

妹への接し方が未だに掴めていないのだ。僕の知っている兄という存在は妹にセクハラしたり、小学生以下なら男も妹、などと言うような変態。守織は受け入れてくれそうだが僕はそんな変態になるのは嫌だ。

なら普通の兄になればと考えたのだが普通の兄など知らない。だから気まずい沈黙や噛み合わない会話を未だに続けている。

「あの……お姉様？」

「ああ、ごめん。考え事に集中してたみたいだ」

守織は僕の顔を覗きながら心配そうに見つめていた。そして僕が反応した後、表情を変えぬままゆっくり離れていく。

「しかしこの部屋って二人部屋だね？　なんで守織一人？」

僕はそんな風に心配されると心苦しいので気分を変えようと話題を提供する。

今、僕達がいるのは学生寮の一つの部屋。ベッドが二つあったり、一人には少し広いスペースがあったり、僕はそれが少し気になっていたのでちょうど良いタイミングだと思い聞いてみたのだ。

守織は苦笑浮かべながら口を開く。

「あはは……私も一応零崎一賊なので」

零崎を知らない者にはわからない言い方だったが零崎にはちゃんと理解できた。

例外以外の零崎は生粋の殺人鬼だ。呼吸をするように自然に人を殺める。人を殺さないという事は呼吸をしないという事と同意義なのだ。

だから人間に擬態して日常を過ごす事などに学園に通ってない？　あれ？　守織普通

異常の零崎なのに僕と同じように過ごしている？

僕は守織をじっと見つめる。

「……あの、なんででしょうか。私の顔に何か、付いていますか？  
じっと見つめられると、その……少し恥ずかしいのですが」

守織は素人小説ではスラッシュが五本くらい語尾に付きそうなく  
らいもじもじと照れながらそう言った。

「あ、ああ、ごめん」

そういえばこの娘は殺人鬼に憧れてたんだった。憧れの存在に見  
つめられたら僕も同じようになる。僕と同じ名前のバンドのギター  
ストとか。だからまあ、しょうがないか。

「あの……お姉様」

「ん？ なあに？」

「そろそろ今日のまとめでもしませんか？ もう夜遅いですし」

突然真面目な表情に戻った守織がいきなりそう言い出した。

僕は時計で時間を確認し、もうそんな時間かと溜息を吐く。

一応、僕達はただ好き勝手に搜索している訳ではない。毎日の活  
動報告書をセラスに提出、集めた情報を話し合い、情報から更に情  
報を捻り出す為に専門家に依頼など様々な事をやっている。

そして活動報告書は一日の最後にその日までに、手に入れた情報  
を話し合って、新しい情報だけ書くのが決まり事だ。次の日に提出  
するまでにまとめなければいけない。



だから毎晩寝る前にきちんとこうして話し合っているのだ。

「うん。じゃあ、まずはこれまでのまとめをしようか」

僕がそう言つと守織は元気よく「はい」と頷き、資料を広げながら語り出す。

「まずは図書館での情報収集の結果。完全なる世界が欲しがりそうな情報関連の書籍を借りていて、未だに学園に残っている人間は36人。その内34人は完全に白な事が調査済みです。未だに調査中の二人……オスティア関連の書籍を毎日1冊借りている人間が一人。名前はスノウ・ロングゲート。セラスさんの報告だとただの読書好きでたまたまそちら関連“も”読んでる可能性が高いそうです」

少し話す機会があつたが無口で情報収集にならなかった彼女が。

「もう一人はマッティーナ・ウェアハウス。クラスの委員長をやっている人気者だとか。彼女は夏季休暇の課題の為だそうです。話してみた感じは怪しくなかつたですね」

「図書館関連でまだ裏が取れてないのはその二人だけだったよね？」

「はい。その二人は過去の経歴があやふやなのでもう少し時間がかかるそうです」

犯罪者でも受け入れるアリアドネーって事件が起きたら本当に面倒そうだなあ。指紋とか調べられなさうだし。

僕はあの温泉旅館を思い出しながら苦笑を浮かべる。

「次は完全なる世界の残党を発見した場所やそういう人気のない場所によく行く人間ですね。基本的に寮は二人以上で部屋を使うからって事で調べたのでしたっけ？」

「うん。張り込みなんて嫌だしね」

あんパンとコーヒー両方嫌いなのはべ、別に関係ないんだからねっ。

守織は図書館関連から怪しい場所関連の資料に視線を移す。

「こちらは図書館関連みたいに目撃者も残らないから発見できたのも少数。けれど私達にはこちらの方が本命な気がします」

そう言って、守織は視線を鋭くする。

「発見できたのは五人。その内、白と確定したのは二人だけ。他三人は未だに調査が完了していません。まず一人は図書館に行った日にお兄様に出会った雌豚！ 名前はクロエ・ラブソディ……きっとコイツが残党ですよお兄様！ 金髪ツインドリルなんてダサい髪型してますし！！」

守織は話していく内にヒートアップしていき、そのまま関係ない人間まで侮辱した。僕はそれを「ドードー」と宥める。

「とりあえず全国金髪ツインドリルに謝りなさい。あとアリアドネー（ここ）ではお姉様ね」

「金髪ツインドリルさんごめんなさい」

しばらくして落ち着いてから守織はようやく落ち着き、僕が言った通りに素直に謝った。

なんだか熱烈な愛を感じる。

「こほんっ……… 続けますね。彼女は魔法世界有数の企業の社長の一人娘で取り巻きのような存在が常に二人はいるのですが、たまに一人でふらふらと徘徊しているようです。深夜に外出していたのも確認されてるとか。ちなみに噂だと彼女は養女だそうです」

幼女じゃないけど養女。彼女は怪し過ぎて逆に怪しくない。というのが個人的な意見だ。

「もう一人はコレット・シュレディングァー。よく迷子になるそうなのでそれが原因の可能性が高いそうです」

なんか怪しいと思いながら聞いてると全員怪しく思えるから不思議だ。キャラ設定作っておいて怪しいところをバレないようにする、みたいな。

僕はそんな事を考えながら守織の話を聞き続ける。

「最後の一人はエルザ・サルバトル。落とし物をしたのですと探しているらしいです。……… 以上が今までに発見した残党候補の、このアリアドネー魔法学校の人間です。今のところ生徒のみですね」

真面目に夏休みの宿題でもやっていたらいいのに。わざわざ世界中に悪と認識されてる組織への協力ご苦労様です。

僕は溜息を吐いた。

「では今日のまとめを」

「何も発見できず。以上」

「ですよね」

守織が話を続けようとしたが僕はそれに割り込んで結論を出した。それに対して守織は溜息混じりに頷く。

今日もいろいろ怪しい場所を探したが何も発見できず。正直夏季休暇中に仕事が終わらない予感がする。

「夏季休暇中に終わるかな？」

「終わらなかったらお姉様はどうなさるのですか？」

「……どうなんだろう。上司次第？」

基本的にただのパシリだし。

「そうなんですか……」

守織は悲しそうに俯いた。

僕はそれを見てどうすればいいのか少しテンパる。妹心とかわかりません。

「あー、まあ……アレだよアレ！ たまになら遊びに来てあげるし

？ てゆーか解決しても夏季休暇中は一緒にいてあげるって！ あ、一応教師だけど夏休みの宿題的なものは頼らないでね」

アハハと笑いながらとりあえず慰めの言葉になりそんな事を言ってみる。

すると守織は顔を上げ、僕をじっと見つめてきた。そして「ホントですか？」とうるうるした小動物系の顔で見つめてくる。

「ホントホント。解決して課題も終わったら何処か連れて行ってあげるし」

「わかりました！ 頑張ります！！」

そう言つと、守織は勢いよく立ち上がって勉強机の方へ近付いていった。まさか今から課題を終わらせる気なのだろうか。

「！？」

そう思っていたら、机の上に置いてあった鞆の中をあさっていた守織の表情が嬉々としたものから驚愕の表情に、そして徐々に落胆の表情に変わっていく。

「か、課題を学校に忘れました……」

あるある。

## 幕間四 登校と学校

次の日の朝。報告書を渡すついでに守織が課題を学校の教室に忘れてた事をセラスに報告。するとセラスが一人の教師に連絡してその教師同行の元、学校に課題のプリントを取りに行く事になった。

正直スパイ搜索活動の合間にこんな日常的な、普通の学生的な行動をするなんて思っていなかったが、スパイ搜索活動自体当初の予定にはなかった事なので、僕はいつも通り誰かに流されるまま自分の明確な意思を持たずに行動する。

「珍しいでございますね。いつも真面目な零崎さんが忘れ物。しかも昨日まで気付かなかったなんて」

同伴する事になった女教師、ロマネ・シャトーが笑いながらそう言つと、守織は真つ赤な表情で「申し訳ないです……」と俯きながら呟いた。

零崎さんと呼ばれると反応しそうになってしまつが、今の僕はジャンヌ・ダルク、もしくはジョーン・オブ・アーク。だから反応はしない。

「まあ誰にでもそういう事はあるでございますよ」

ミスのない人間なんて人間じゃない。零崎<sup>はけもの</sup>でもそれは同じという事だろうか。なんて頭の中でエア返事を楽しみながら歩いていく。

そしてそのまま校門を通り過ぎると、すぐに校舎が見えてきた。少し古びた歴史を感じる大きな校舎で、生徒用の玄関は旧世界とあ

まり変わらない、一昔前の外国の学校を思い出す。

「鍵を開けるから少し待っていてくださいでございます」

そう言つてロマネ・シャトーはポケットから鍵束を取り出す。当たり前と言えは当たり前だが、どうやら玄関にもきちんと鍵が掛かっているようだ。

「このドアは旧世界みたいにオートロック式なんですよ。最近取り入れたみたいです」

守織はがちゃがちゃと扉を鍵で開けている様子を見ながら僕に耳打ちする。そこで僕は疑問を感じた。

「オートロック式だといちいち鍵を開けなきゃいけないから不便じゃない？　もしかして普段生徒が通つてる時期の生徒が学校にいる時間はオート機能的なものは解除してるとか？」

「そんな便利な機能はありませんよ。最初に先生達がドアを開けた後はこの玄関のドアは開きっぱなしなんです」

守織はアハハと苦笑を浮かべる。

「でも間違えてドアを閉めちゃう生徒や悪戯する生徒が多いから近々このドアは変えるみたいですけどね。いちいち鍵を開ける為に先生が呼び出されてるみたいですし」

便利そうだから取り入れてみたが、よくわかっていなかった技術なので逆に不便になってしまったという事か。ちよつと間抜けな感じは魔法世界らしいと僕は思う。

「二人共、そろそろお話は終わってたでございますか？」

「あ、ごめんなさい」

ロマネ・シャトーは既に鍵を開けて、ドアが閉まらないように外側に向かって大きく開いて閉じないようにして、玄関内に入っていた。守織は謝りながら小走りでシャトーに続き、僕は普通に歩きながら中に入る。

その時、ドアをちらりと見たらノブの部分が紐で外に繋がれているのを発見した。どうやら普段はこれで固定しているらしい。なんか原始的だ。

「お姉様ー、いきますよぉー」

「……ああ、う、ん？」

急かす守織の声で僕は移動速度を上げる。が、しかし足元に紙切れが落ちてるのが気になり、そこで足を止めた。

拾い上げてみるとそれはただのノートの切れ端のようなもの。ぐちゃぐちゃにしてから捨て、ちぎれてこの部分だけ残ったのか少しだけシワシワになっている。

「夏休み前にちゃんと掃除してなかったのかな？」

僕は紙切れを床に落としながらぼつりと呟く。良い子は真似をしてはいけません。ゴミはちゃんとゴミ箱へ入れましょう。



「……お姉様？」

二度目の催促の言葉。守織は愛と勇気だけが友達のパロディのよう  
に頬を膨らませながらぶんすかぴーと怒っていた。

僕は「すみません」と思わず敬語になりながら返事をし、先を急  
ぐ。

シャトーや守織に続いて玄関を進むと地面がタイル張りの床の廊  
下に変わった。視線を先へ進めると中庭が見える。どうやら中央に  
ある中庭をタイル張りの床が四角形で囲んでいるみたいだ。

「私の教室は2階なので階段上りますけど、結構古いですから気を  
つけてくださいね？」

守織はそう言ってシャトー教員を追い越して先を進む。

階段とやらは中庭の中、廊下側に2ヶ所あるようだ。僕達はその  
場所まで廊下を歩いていく。ちなみに僕は上履きに履き変えたりす  
るのは日本だけなのかなあ、なんて守織に着いていきながらどうで  
もいい事を考えていた。

そしてそのまま階段を上っていく。金属製の板を踏みながら進ん  
でいくと、とんとんと規則的な軽い音が響いてきた。

確かに階段は古びて、錆びている部分もあるがなかなか頑丈な作  
りをしている。これなら落ちる心配はなさそうだ。

「やっぱり麻帆良とは違いますか？」

階段を上り終え、またタイル張りの床の廊下を踏み締めた時、守織がそう問い掛けてきた。

「うん、中庭を中心に廊下とかがあるのって珍しいね。真ん中にある大きい樹ってなんか大事なもの？」

「あれはアリアドネー（うち）の霊樹でございますよ。結構立派なものでございますでしょ？」

僕と守織の話にシャトーが割り込む。

「へえ……」

僕は手摺りから身を乗り出してソレを見た。麻帆良のアレに比べたら劣るが大きさや感じる魔力はなかなかのものだ。

「でもあんな中庭だったら上空から侵入されて霊樹に何かされちゃったりするんじゃない？」

「それなら問題ございません。上からの侵入なんて監視魔法と結界で無理ございますから。アリアドネーの学区エリア自体にも不法侵入は困難ございますし」

関西呪術協会もそうだったけどやっぱり何処も結界とかちゃんとやってるんだなあ、と僕は当たり前前の事に納得しながら視線を元に戻す。

「では行きましょうか」

そして僕はまた歩き出した。四角形の廊下を進んで行く。中庭

側の反対側は教室があるのかと思いきや、一定感覚で窓が取り付けられた壁が広がっている。窓から中を覗いてみると奥には教室が、床は教室のような木製の床で細長い昔小学生の時に遊戯とかで使った多目的ホールのような印象を受ける。

窓自体は腰の辺りから首の辺りまでの横に長い長方形の窓、その上の壁の上にも方にも正方形の小さな窓上下二段構えで、それがずらりと並んでいる。

侵入するなら長方形の窓を破壊して入る手段が一番かな？　ってそんな事考えなくていいか。泥棒じゃないんだし。

「ここを開けたら私は待っているのです。ですから教室へはお二人でどうぞ」

そんな余計な事を考えてる内に到着したようだ。窓がずらりと並んだ壁の一番端に扉がある。どうやら両端に扉がある形式のようだ。

シャトーはまたポケットから鍵を取り出し、そのまま扉を開いた。

ってあれ？

「教室のドアは開けてくれないの？」

「教室は基本的に鍵開きっぱなしですよ、お姉様。教室に行く前に内ホールに入る場所があつて、入るには今みたいにここの鍵を開けなきゃいけませんし」

何だか無用心だなあ。わざわざ教室に入り込む人間はいないと思っっているのだろうか。縦笛を舐めようと思春期男子がこの女子学区

エリアに侵入するかもしれないのに。男は狼なのよ？ 気をつけなさい。

「お姉様？ 先生を待たせるのもアレですし早く行きましょう？」

なんだか今日は人（特に守織）を待たせてばかりだ。少し申し訳ない気持ちになるのも無きにしもあらずかもしれないような気がしないでもない。

僕は先に内廊下とやらに足を踏み入れた守織に続いて足を進めていく。

「私ここで勉強してるんですよー」

どうやら守織の教室は真ん中の方にあるらしくどんだん中央に進んでいく。正直さつき階段上り終えた場所が真ん中だったから無駄に歩かされている気分だ。真ん中にもドアを付ければいいのに。

そんな事を考えながら歩いていく。

「あ、ここですー！」

そしてようやく守織の教室に到着したようだ。守織は鍵が掛かっていない事を疑わずにすつとドアを横にスライドさせて中に入っていく。僕もそれに続いて教室に足を踏み入れた。

そしてそれを見た。

「お、お兄様……これって……」

動揺からか、守織はお兄様と僕を呼びながら視線を向けた。叫び声一つあげないのは年頃の女の子としてはどうかと思うが家賊らしいと言えば家賊らしい。

「行く先々で人が死ぬなんて僕は死神か疫病神か何かかい？ 神様に転職した覚えはないんだぜ」

そこにいた いや、あつたのはアリアドネーの制服らしきものを着た少女の、自ら首にナイフを突き立てて命を絶っている死体、赤黒い液体で彩られた冷たい肉の塊だった。

幕間四 登校と学校（後書き）

全体

外 外

関 玄

外 外

真ん中が中庭。中庭にある二つの四角が階段。中庭を囲んでいるのが廊下。廊下から入るのが内廊下、もしくはホール。ホールの奥が各教室。

通常

教室 教室 教室

ホール

廊下

			庭 中		庭 中
			階 段	中 庭	階 段
		廊 下			
	ホー ル				
教 室	教 室	教 室			

黒くて太い横棒（ ）は窓。開いた空間はドア。

## 幕間五 自殺と他殺

探偵には事件と犯人と被害者が必要。そこに証拠があると物語は  
ストーリー  
良い方向に進む。

犯人には動機と凶器と被害者が必要。そこに証拠があると物語は  
ストーリー  
悪い方向に進む。

僕は殺人鬼だけど犯人ではなくて、事件に巻き込まれたけど探偵  
ではなくて、ただの観客で終わる程単純なキャラでもなくて、殺人  
を悲しむ事も喜ぶ事もできない。不幸でも幸福でもない。

ただ一言。

「めんどくせえ」

第一発見者としていろいろな人に話をした後、守織と一緒に寮に  
戻った僕は自分で殺さなくても死者が関わってくる鬼生じんせいにうんざり  
しながら呟いた。

自殺していた少女の名前はブリジット・ストーン。アリアドネー  
に通う二年生で生前はいつも笑顔のおっとりガールだったそうだ。

死因なんかの詳しい話は聞いていないが死亡推定時刻は昨夜の深  
夜2時辺り。玄関の鍵も、内廊下に入る鍵も、窓の鍵も全て施錠が  
確認されていて、ぶっちゃけ完全に密室。上空からの侵入は魔法に  
より不可能で正面からは前述の通り無理。自殺にしろ他殺にしろど  
うやって入り込んだてめえ、なんて感じらしい。



現場の教室の黒板には『ごめんなさい』と大きく書かれていて、何か謝罪が必要な事に対して自殺で罪を償おうとしたのではないか、だそうだ。

「捜査中断ですか……」

守織が溜息混じりに呟く。

スパイ捜査については事件の調査の方が優先度が高いらしく一旦中断。連絡があるまで勝手に動く事自体禁止、とはセラスの談だ。

「守織もあの事件はやっぱり自殺だと思う？」

僕はそうは思わないけど。

「自分でナイフを握ってノドを突き刺して死亡。現場に魔法の痕跡なし。外からの侵入は不可能。これならやっぱり自殺なんじゃないですか？」

守織は不思議そうに首を傾げる。

この国が日本なら指紋とかで簡単解決できたのだろうがここはアリアドネー。魔法が豊かな、外国よりも科学技術が劣る別世界。早期解決は難しいようだ。

「……ブリジット・ストーンさんとやらはどうやって侵入不可能な学校に入って自殺したのかな？」

「え、えっと……私達みたいに宿題忘れたとかで中に入ってそのまま学校に残っていたとかじゃないですか？ 誰かに協力しても

らって自分は先生に気付かれない内に入るみたいな。内廊下の鍵は中からなら閉められますし」

なるほど。その方法なら自殺もできるかな。

「でもわざわざ学校を選ぶ理由がわからない。自分の寮でやつちゃえばいいじゃん。それに仮に協力者がいたとして何故協力したのかな？」

守織はうんうんと唸った後、僕の質問に吃りながら答えた。

「が、学校で悪い事しちゃったからみたいな感じですかね？ 協力者さんは必死に頼み込まれたから？」

一応納得はできる。けれど僕の中の何かがそれを受け入れてくれなかった。

「ちなみに自殺の動機に心辺りは？ あの教室で死んでたって事はたぶん同じクラスでしょ？」

「ありますよ。私も関係してますし」

そう言って守織は悲しそうな表情をする。

「一年前の話です。私とブリジットさんとあと二人、その四人で課外授業の一環で討伐任務を受けたんですよ」

おおっ、なんだか魔法世界っぽい。

「それでその時に運悪く竜種の群れに遭遇しまして……逃げ遅れた

一人の少女が死んでしまったんです」

そしてよくありそうな話。

「後から調べた結果、その少女は竜ではなく魔法で足を傷付けられて逃げられなかったみたいです。犯人は不明のままですが誰かが囹にする為にやっただけみたいですね。その犯人がブリジットさんだったのではないのでしょうか」

「それなら敵討ちの可能性もあるんじゃない？」

「いえ、その少女は孤児院育ちで家族もいないし、暗い性格だから友達もいなかったんですよ」

なんていうか不幸な人間だね。家族も友達もなく、短い人生で、最後には裏切られて死んじゃうなんて。

「ちなみにブリジットさんとやらが怨まれてた可能性は？」

「ありませんよ。彼女は誰にでも優しいほんわかした女性でしたし」

守織の話を聞けば聞く程自殺の可能性が高くなっていく。罪を償う為とかで協力者に協力してもらえそうだし。

「むむむ……」

顎を手で押さえながら事件について考える。

鍵は全てセラスが保管。けれどその時間はセラスは仕事でアリアドネーから離れていたらしい。

もし犯人がいるとしたら侵入方法がわからない。守織の言ったやり方で犯人と一緒に隠れてたとかなら協力者とやはすぐに名乗り出て犯人を報告するだろう。共犯？ それなら可能か？

でも単独犯なら？ どうやって中に入る？ どうやって誘い出す？ いや、誘い出すのは適当な理由でも大丈夫か。

玄関自体はオートロックだから出てから密室を作るのは簡単。教室の窓を割ってその後入って魔法で直し　　そういえば痕跡は見付からなかったって言ってたっけ。上も前後左右も無理なら下？ 穴を掘るとかどれだけ時間がかかるんだよ。

「……ダメだ。さっぱりわからない」

僕は諦めて後ろに倒れ込む。

だいたい僕は何故こんな無意味な考え事をしていたんだ。探偵でも警察でもなければ冤罪も今回はない。身内が傷付けられた訳でもない。仕事が中断されて帰れないのは面倒だがわざわざ解決させてまで仕事したいとは思わない。人が死んだ事自体何も感じない。

結論　僕に損得ないから放置でいいや。

「じゃ、明日何する？」

「へっえ？ あっ、えつと……」

急に話を振られて守織は慌てる。

それから深呼吸をして心を落ち着かせてから返事をした。

「一時中断ですし……その、街を探索とかどうでしょうか。お、美味しいケーキ屋さん知ってますよ私！」

なにそれデートみたい。口には出さないが僕はそう感じた。まあこんな女男<sup>ほく</sup>に惚れる人間なんていないから違うのはわかるけど。

経験ないからわかんないけどこれが仲良し兄妹なのかな？

「ならそれでいいや。どうせ今はやる事ないんだし」

仕事は中断、帰還は無理、自由に生きる（ころす）のもダメ、アリアドネーから出る事もアウト、変装をやめるのも問題あり、完全にやる事がなくなった。

このまま夏季休暇が全て潰れると麻帆良に帰ってから仕事三昧になりそうだがそれだけは勘弁してほしい。残党さんが自分から名乗り出てくれな あつ。

そこで僕はある事に気が付いた。

「捜査を一時中断させる為にスパイが殺したって可能性は？ わざわざ密室にしてさ」

「あつ、え、あ……でもどうやって密室を？」

「それは……スぺアキー作ってたとか？」

「学校の鍵は複雑で複製するのは不可能ですよ」

でもスパイ犯人説自体の可能性はなくてもない。その間自分は注目されずに済むし。

「よし。そうとなったら明日」

「お姉様？ 言っておきますけど明日現場を見に行くとか言い出したら怒りますからね？ お姉様は守織とちゃんとして約束したんですから」

「はちゃんと約束通り街を散歩しよう、うん」

守織にジト目で睨まれて僕は何故か逆らう事ができずに目を逸らしながら守織が望み通りの返事をした。

あれ？ 僕って一応この娘の憧れの人でお兄ちゃんだよね？

「楽しみですね、お姉様」

「アハハ……」

守織はいつものように純粹そうな笑顔を見せてそう言った。けれど今の僕には守織の笑顔には裏があるようにしか見えない。もしかしてお腹の中は真っ黒？

僕は守織のお腹をじっと見つめる。

すると守織は何故か真っ赤になり、その赤くなった顔を両手で覆い隠した。

「お、お兄様つたら……そ、そそそんなにスカートの中が気になりますか？」

「見てねえよ」

僕は無表情で即答する。十年早えよ。

てゆうーかなんだか演技臭く見えるのは気のせいだろうか。いや、聞くのはなんだか怖いからやめておこう。

僕は兄歴5日にて妹の怖さを少し体験したのだった。

## 幕間六 本物と偽物

アリアドネー女子学区エリアの寮の付近にもお店はたくさんある。何故か男がいないところ以外は麻帆良と一緒にいる。

そんな街中を僕は『姉』として妹と一緒に歩いている。一応言うておくがブラコンでもシスコンでもロリコンでもない。

「ケーキ美味しかったですね」

「まあまあかな」

一日限定品とかでもないただのケーキ、しかもチェーン店の並べルのケーキは普通に美味しかった。けれど僕はやっぱり日本のケーキの方が好きだ。本番の、フランスとかのモノには劣るのだろうが、細かいデザインや日本人好みの味はやっぱり日本人の作るモノが良いと思う。

「もっと美味しいケーキを食べた事があるんですか？」

「まあね。一応いろいろ食べてきたし」

前の世界でだけど。それでもたぶん旧世界の方が美味しいケーキがある気がする。

「羨ましいです」

守織はきらきらと輝く笑顔でそう言った。



魔法世界人でも人間なら旧世界に行けるんだっけ？ 亜人がダメなんだっけ？ なんかそんな縛りがあったような気がする。けどいつか家賊みんなでケーキを食べたり何でもない事を楽しめる時がくればいいなあ。

そんな事を考えながら僕は街を歩いていく。

すると、前方に何処かで見た事あるような不思議な雰囲気を纏った小柄な少女の姿が見えた。

「あれ？ アレってシュレディンガーさんじゃないですか？」

守織がそう言って指差した方向にいたのは残党候補、スパイ容疑者の一人、コレット・シュレディンガーらしき姿だった。

彼女はこちらに向かって歩いてくる。

「あー、ここって何処なの？ 学校に向かっていたのにいつまで経っても辿り着けないの」

コレットは僕達の目の前に来るとえへへと笑いながらそう言った。

アリアドネーの制服を着て、胸元に赤い宝石を身につけた少女。彼女は悪人にはどうしても見えない。けれど見た目と性格や性質は一致しないから僕達は彼女の事も疑っている。

「学校に何か用があるんですか？ たぶん今は入れませんよ？」

「あー、うん。知り合いに不幸があったみたいなの。零崎ちゃんも聞いてない？ 私はその関係で話が聞きたいって言われて学校に向

「かってるの」

「ああ、そういう事でしたか」

「ブリジットちゃんは孤児の私にも優しくしてくれたの。だから少しでも力になりたいなあ、って」

僕を蚊帳の外にして続く会話。それを聞いて彼女も死者の関係者な事を知る。

しかも彼女も『一年前の事件』の死者も孤児。これは何か関係があるのではないだろうか。僕はコレット・シュレディングーを見つめ あれ？ いつの間にかコレット・シュレディングーは目の前から忽然と姿を消していた。

「学校でしたら あれ？」

守織もそれに気付いたみたいでキョロキョロと辺りを見回す。

「また消えちゃいましたか」

「また？ どういう事？」

「あの人は天性の迷い人、迷子の天才のような方なんです。いつの間にか現れていつの間にか消えちゃうんですよ」

「なにそれ不便」

「この前は散歩してただけなのに最終的に旧世界で発見されたとか」

せっかく詳しい話を聞いて事件解決に役立てようとしたのに、そういう事情だと彼女を再度見付けるには時間が掛かるという事か。

「でも誰かが道案内をすれば彼女も大丈夫ですよ？ 普段はサルバトルさんがその役目をしてるみたいです。寮も一緒の部屋ですし」

「エルザ・サルバトル？」

「ええ、候補の一人の。彼女が一緒じゃなかったという事はまだ落とし物とやらを探してるんですかね？」

容疑者がお互い関係者になってるような気がする。もしかして他の容疑者も？

僕はふと感じた疑問を解消するべく守織に尋ねる。

「ねえ、もしかして候補の人間ってみんな知り合い？」

「クロエ・ラプソディさん以外全員同じ学年の同じクラスですよ。でもクロエ・ラプソディさんは違います。けど彼女はブリジット・ストーンさんの姉の友達らしいですし、全員が全員知り合いかもしれないです」

守織も含めてある程度固まっている関係者達。スパイと今回の事件が関係している説が正しい可能性が更に高くなったような気がする。

「ブリジット・ストーンの姉は？」

「クロエ・ラプソディさんの取り巻きの一人ですよ。姉妹仲は普通

で彼女自身は候補から外れています」

姉が妹を殺すパターンではないのかな。よくありそうだと思うのだが。

「零崎、何の話をしているんだ？」

話し合いに集中し過ぎてしまっていたのか僕はその声を聞くまで誰かが近くにいる事に気付いていなかった。

目の前、半径5メートル以内にいたのは僕も知っている少女。先程まで話をしていたエルザ・サルバトルル本人がそこにいた。

エルザは魔法で成長した僕よりも高い身長で僕達を見下げながら中性的な凛々しい顔を不機嫌に歪ませている。

「あはは……さっきシュレディンガーさんが迷子になってたからエルザさんはまだ用事があるのかなーって」

「……そうか。一緒に行くから待っていると言ったのだが全く……」

守織は渴いた笑いでごまかそうとし、エルザはそれを聞いて疲れた表情で頭を押さえた。

一応バレないように話していたがどうやら聞かれてはいなかったらしい。もしくは守織のごまかしが成功したのかな。

「と、ごまかされてやってもいいのだが残念ながらブリジットは私の知人だ。死人の噂話は感心しないぞ。それに探偵ごっこなら余所でやれ」

そう思っていたのだが、どうやらそれは勘違いだったみたいだ。  
バツチリ聞かれていたらしい。

「じ、ごめんなさい……」

守織が謝ると同時に僕も頭を下げる。

エルザは僕達の謝罪を聞くと、

「すまん。言い過ぎだな」

と、苦笑しながら軽く頭を下げた。

「だがブリジットは詳しくは言えないが私の恩人なのでな。出来ればあまり妙な噂を広げなくてくれ」

「……はい、わかりました」

守織はしょんぼりしながらそう言った。僕もそれに頷く。

「ではな。私もコレット同様学校に呼ばれているから失礼する。じやあな、零崎と……ダルクだったか？ 私はもう行く」

エルザはそう言って去っていった。

守織はエルザが見えなくなってから大きく息を吐く。

「相変わらずサルバトルさんは怖いです」

怖いというのには僕も同意できる。整った顔の美人が怒ると普通よりも怖く感じる。それに彼女はきまじめそうな性格だったし。でも女子校では『お姉様』とか慕われそうな気がする。

まあ、どうでもいい事だ。それよりもさっきエルザ・サルバトルが言った事には気になる事がある。

「ねえ、守織。ブリジット・ストーンが恩人、っていうのに心辺りある？」

「あつ、えー……あー………」

僕が尋ねると守織はあたふたと慌て出し、それからうんうんと唸りながら考え事をする。

そして数秒経った後にようやく口を開いた。

「すみません。心辺りがありません」

が、僕の期待通りの答えは得られなかった。

「ねえ、守織。もし『恩人』が『一年前の事件』とやらに關係しているのなら、ブリジット・ストーンが『犯人』でそれをエルザ・サルバトルが知っていたのなら、『恩人』の意味がわかりそうじゃないかい？」

「えっ？ あ、でも……」

「ちなみに僕の予想ではエルザ・サルバトルが『一年前の事件』の最後の一人」

「た、確かに合ってますけど……」

「ならまだ事件が終わっていないなら、あれが事故ではないのなら……次に狙われる可能性があるのはエルザ・サルバトルか……もしくは君か」

守織はごくりつと息を飲む。

この推論は憶測だらけ予測だらけの不確かなもの。自殺でないと決まった訳でもないから本当に不確かだ。けれどもしそれがあっていたなら

「気をつけてね？ 守織」

「は、はい」

事件はまだ終わらない。

途中で雰囲気が悪くしてしまってもデートモドキは続く。コレット・シュレディングー、エルザ・サルバトル　スパイ候補であり、ブリジット・ストーンが死んだ事件の関係者である二人と遭遇してから僕達は街を歩いた。

いろんなところへ行き、いろんなところを見て、いろんなものを食べて、いろんなものに触れて、世間一般では楽しいと呼ばれる時間を過ごした。

けれど守織の表情はずっと暗い。それにずっと上の空で何か考え事をしているみたいだ。

おそらく僕の発言が原因だろう。自分が狙われるかもしれないなんて零崎なのに零崎らしくない性格の彼女なら恐れるのは当たり前だ。少し配慮が足りなかったらしい。もう少し事前に考慮しておけば良かった。

「……………」

守織はずっと黙っている。僕は提供すべき話題を思い付かない。だから気まずい空気は消えない。けれどいつまでもこのままではいけないので僕は口を開いた。

「あー……うん。守織？」

「は、はい、何ですか？」

「えーっと……………」

呼びかけて返事もちゃんと返ってきた。けれど僕は何も思い付かず黙り込むしかなかった。見切り発車は失敗してしまったようだ。

「ふふ、うふふ……あははははははは」

僕がずっと黙っていると守織は突然笑い出した。僕は目を丸くし



てその様子を見る。

「すみませんお姉様。気を遣わせてしまって……」

守織はそう言ってぺこりと頭を下げた。本当に零崎らしくない良い娘だ。

「別に自分が殺されるかもしれないから悩んでいた訳ではないんです。ただ、少し気になる事があって……」

「気になる事？」

僕は首を傾げる。何か考えなければいけない事なんてあったらどうか。

「孤児で家族もない、暗い性格で友達もない『一年前の事件』の被害者の敵討ちをするのは……企むのは誰なのかって事です」

先日、答えの出なかった疑問。僕も気になっていたそれを守織も考えていたみたいだ。

「もし自分が狙われているなら、その相手や理由ぐらい知っておきたいですしね」

理由なく殺す殺人鬼らしくない言葉だ。

……しかし敵討ちか。もしそれが理由なら必然的に仲の良い人物がいたはずだ。けれど守織の話だと今回の被害者は仲の良い人物はいるが、一年前の被害者には存在しない。それなら誰が？

「同じ孤児が同情して反抗に至ったとかどうかな？」

僕はふと思い付いた事を口に出す。

すると守織は、

「それなら候補はたくさんいますよ。残党候補のシュレインガーさん、サルバトルさん、ロングゲートさん、ウェアハウスさんも孤児ですし、あの雌豚クロエ・ラブソディも今はお嬢様ですが昔は孤児だったなんて噂がありますし、アリアドネーにはそんな人たくさんいます」

と苦笑しながら言った。

動機がわからない。密室のトリックがわからない。犯人がわからない。そもそも犯人がいるのかすらわからない。

温泉旅館の時もそうだったが、僕には探偵は向いていないようだ。閃きも観察力も推理力も何もかもが足りていない。

でも別に僕が解決しなくても、事件現場を調査した人が解決するだろうし、あんまり関係ないんだよね。

それでも実際に遭遇してしまったから気になって考えてしまうのだけれど。モヤモヤを解消する為に脳が働いてしまうのだけれど。

……はあ、何か少しヒントが有れば良いのだが。嘔吐きの天敵（嘉穂ちゃん）でもいればすぐに解決するのに。

僕は大きく溜息を吐いた。

「やっぱり情報が少ないね」

「……そうですね。明日セラスさんに聞きに行ってみましょう」

僕は無言で頷いた。

その時、僕の携帯がブルブルと振動し、何か連絡がある事を伝えてきた。僕はポケットからそれを取り出す。どうやら一件のメールが届いたようだ。

僕はメルマガだったらうざいなあ、なんて思いながらそれを確認する。

【DATE】 8 / 16 16 : 21

【FROM】 一ノ宮嘉穂

【sub】 アドバイス！

鬼に注意 d ( \* )

それと『本物』と『偽物』  
を間違えないようにねーっ

「……鬼に注意？」

僕はメールを確認した後、返信してもあの性悪が答えを教えにくれるはずがないから携帯をポケットにしまった。それからメールの文面にあった『鬼に注意』と言う言葉について考える。

僕（殺人鬼）、守織（殺人鬼）、エヴァ（吸血鬼）、それと東洋の鬼。思い付いた鬼について考えてみるが意味も意図も全くわから

ない。

守織が裏切るのかぞくは考えたくもないし、エヴァ（ともだち）は遠く離れた空の下。

「どうかしましたか？」

「ううん、何でもない」

いろいろ考えてみたが結局何も思い付かないので僕は考える事をやめた。

「そうですか。……あれ？ あそこにいる二人ってウエアハウスさんとロングゲートさんじゃないですか？ しかも雌豚クロエ・ランディに絡まれてるみたいです」

守織が指差した方向を見ると確かに彼女達はいた。調査初日に出会った金髪ドリルと見た事のない女性の二人に絡まれている。

……今日はよく関係者に会う日だ。

「もう一人はロール・ストーンさんみたいです。ほら、教室で死んでたブリジット・ストーンさんのお姉さんですよ」

言われてみれば死体アレの顔に確かに似ている気がする。

「行ってみましょう」

守織はそう言って騒動の渦に歩いていった。僕も少し遅れてそれを追う。

「庶民の分際で私に逆らうの!？」

「く、クロエさん。もうその辺りで……」

「何を言っんですの!？ まだ謝罪を聞いておりませんわ!」

「ほら、ロングゲートさん。面倒だから謝っちゃいなさい」

「……不要。アリアドネー（ここ）は身分の差は関係ない。私はただ道を歩いていただけ」

騒動の中心に近付くと四つの声色の騒音が僕の耳に入ってきた。しかも争っている内容は僕が初日に絡まれた内容と同じようだ。

「あちらに先生がいましたからあまり騒いでいるとこちらに来ますよ?」

そんな渦中に飛び込む守織。そしてそんな守織の言葉を聞いてクロエ・ラブソディはぴたりと止まる。

「……ふんっ、今日のところは見逃してあげるわ」

そして負け犬のような言葉を残して去っていく。ロール・ストーンも「あっ、待ってください」と言いながらそれを追いかけていった。

急展開で話が進みマッティナー・ウェアハウスはぽかんとした表情で固まる。そして数秒後、再起動して守織の方を見た。

「あ、ありがとう零崎さん。なんか変な人に絡まれていたのよ。ほら、ロングゲートさんもっ」

「……感謝する」

「いえいえ、気にしないでください」

守織は照れ笑いしながらそう言った。

僕は何も言わずに守織の背後に背中を向けながら立って『ただそこににいるだけの人外』ごっこをしながら聞き耳を立てる。

「あの高慢なのがラプソディ先輩ですつと暗い表情をしていたのが『例の彼女』のお姉さんよね？」

「……知ってるんですか？」

「ラプソディ先輩は悪い意味で有名だもの。ストーン先輩は妹さんに不幸があつたから今日呼び出されたしね」

疎外感を感じながら僕は口には出さずに黙って聞き続ける。

「そつちも知ってるんですね」

「私達も同じクラスだから話をしに行ってたのよ。で、その帰りにあの人達に会ったって訳。……それより一ついいかしら？」

「はい、何ですか？」

「確か後ろの人って体験入学生徒よね？ 何をやってるの？」

今日初めて僕を気にしてくれた事に感謝しながら僕は振り向く。  
するとマッティーナ・ウェアハウスの『何してんだコイツ』という  
感じの視線とスノウ・ロングゲートの冷たい視線、そして守織の何  
とも言えない視線が僕に突き刺さった。

「あー、はい。あまり気にしないでください。あ、私達そろそろ行  
きますから」

守織は僕の手を引いて愛想笑いを浮かべながら二人から離れてい  
く。

僕はせっかく出番が来たのに活かせない事に少し不満を感じなが  
らおとなしく守織に付いていった。

せっかく楽しくお話でもできそうなチャンスだったのに……。

混乱気味のマッティーナ・ウェアハウスと僕の事を全く気にして  
いないスノウ・ロングゲートは何とも言えない空気になりながら別  
れの挨拶を返す事も忘れて棒立ちその場に残る。

## 幕間七 会談と密談

翌日。昨日、話を聞く為にセラスに電話して待ち合わせ場所として伝えられたお店に僕達はやって来ていた。

店の中には鍵の閉まるドア付きの個室があり、どうぞ密談を楽しんでください、なんて店側からのメッセージが感じとれそうだ。もちろん僕の勝手な想像だがあながち間違いでもないだろう。

今回僕とセラスと守織で話す内容は機密情報、それに先日あった事件の内容だ。つまり一般人には聞かせられない内容。

そんな会談を希望してセラスが選択した場所がこのお店なのだからこのお店は普段からそういう少し危ない会話、所轄裏の人間がよく使うお店なのだろう。個室に案内される時にすれ違ったスーツ姿の女性なんてモロにそんな感じを醸し出していた。

閑話休題。

案内され、個室で一息吐き、飲み物や軽食の注文を済ませ、それが届いた後に鍵を閉めて、漸く話し合いの準備は整った。

それからまず、口を開いたのはセラスだった。

「それでどちらの話から聞きたいのかしら？」

どちらの話というのは二択だ。今回話すべき内容は二つあり、そのどちらから話す方が良いのかとセラスは僕達に選択を委ねている。



「……」

控えめというか僕に気を遣う守織は黙って僕をジーツと見つめる。

これは僕が選択するしかないようだ。別にどちらから話しても、どちらを選んでもあまり変化はないのだろうが少し緊張してしまうのは何故だろう。

そんな疑問を感じながら僕は選んだ。

「先日の事件かな」

そう言っ て息を吸い込む。

「ブリジット・ストーンが死んでいた事件についての話からお願いしよう。僕は一度読んでしまった漫画や見てしまったドラマなど……それも少しでも面白いと感じてしまったものは続きが気になる性質<sup>チ</sup>だね。週刊誌なんて一度でも読んでしまえば、次号から毎回購入しちゃうような販売側に嬉しい存在なんだ。だから……いや、だからと言う訳ではないけど事件なんて……しかも目の前で起こってしまったなら気にならない訳がない。火事に集まる野次馬の如く何があったか知りたくて知りたくてしょうがないのさ」

純粹に好奇心の問題だね。

「だから『事件』の方から聞かせて」

言い終え、ぽかーんと目を丸めるセラスと守織。そんなに僕が話す姿が珍しかったのだろうか。

いや、よく考えたらアリアドネーに来てから人見知りキャラのよ  
うに話す機会が少なくなっていた。だから昔から知り合いだがあま  
り話し合った事のないセラスにも、そして四六時中一般にいた守織  
にもただ『うん』と言うだけで済む内容でここまで話す姿は珍しか  
ったのだろう。

更によく考えてみたら前の世界では戯言での時間稼ぎ、もしくは  
曖昧なまま目的達成を歪めて自分に都合の良いように嘘で塗り替え  
るのが得意な、それが特技だったはずの僕が、直接的に終わらせら  
れる戦闘能力を手にしたせいで口数自体減っている気がする。

本性を隠すなんて、しかも口数が少ないなんて本当に人見知りキ  
ャラっぱいな、僕。付属のオプションはもうお腹いっぱいなんだぜ。

「え、ええ、そうね、そうしましょう」

そんな事を考えている内にセラスは再起動。そのセラスの言葉に  
よって守織も再起動。協道に逸れていたが漸く本題が始まる。

「まず、被害者の……もしくは加害者であり被害者の名前はブリジ  
ット・ストーン。家族構成は両親と姉一人の四人家族で、姉の名前  
はロール・ストーン、彼女より一つ年上でアリアドネーに通ってい  
るわ」

「普通としか言いようがない平凡な人間だね。羨ましいよ」

「ええ、そうね。成績も普通、交遊関係は広く浅く、優しい性格で  
他人に恨まれているという話は聞いた事がないわ。でも自殺の動機  
がないのよねえ……遺書のようなものも見付からなかったし。それ  
に自殺にしては不自然な死に方だから」

「……不自然な死に方？」

「死後硬直っていうのは死んですぐになる訳じゃないのよ。だから『祈るように片膝を付いて、ナイフを首に刺したまま自殺した』なんて考えられないわ。他にも不自然な部分はあったようだし」

「で、でも黒板にあった『ごめんなさい』はどうなんですか？ あれは私が知る限りブリジット・ストーンさんの字ですよ？」

「筆跡的には彼女のもので間違いないと思うけれど、真似る事なんて容易でしょう？ だから決定的な証拠にはならないわ」

セラスはお手上げよ、とばかりに降参するように両手を上にあげ、首をふるふると横に振る。

そんなセラスの様子を見て守織が話に割り込んできた。

「……じゃあ他殺ですか？」

「それも難しいのよね。なんと言っても現場は密室だし」

「玄関には鍵、教室には鍵が掛かってないけど教室に入る為に通過しなければいけない内廊下に入る扉も窓も施錠、教室自体の窓にも鍵、上空からの侵入は困難、穴を掘って入るなんて奇天烈な手段も不可能、魔法を使った痕跡もなし、鍵を唯一持っていたセラスは出張でいなかった……まさに不可能犯罪だね」

ちなみに魔法を使った痕跡は消せない。どんな実力者でも魔力を使えばその痕跡が残ってしまう。そしてその残留魔力は個人によっ

て指紋のように違いが出る。だから魔法さえ使っていれば、それに犯人がいたとすればすぐにわかるのだが、流石はアリアドネーの住人、そんな初歩的なミスはおかしていない。

「で、でも方法がない訳ではないですよ？ ほ、ほら……前日に協力者が忘れ物をしたとかで玄関と内廊下への扉を開けてもらってその間にストーンさんがバレないように侵入するとか」

守織は決して自殺は不可能ではないと意見を出す。

その場合、共犯者は日本の法律では自殺幫助罪とやらになるんだっけ？ アリアドネーの法律ではどうなるのか知らないけど。

守織は自信なさ気にセラスを見つめる。

セラスはティーカップを掴んで口元へ運び、一口飲み物 確か  
紅茶だったかな を飲んだ後にそれに答えた。

「それこそ不可能よ」

「不可能？」

僕はその答えを聞いて首を傾げる。何故そこまで自信満々に答えられるのだろうか。僕達が学校に行った時の感じでは決して不可能ではなかったと思うのだが。

「まず死亡推定時刻は発見された日の深夜2時。つまり前日にその方法で侵入しなきゃ行けないんだけど、私は死亡推定時刻の前日の朝から発見された日の朝までアリアドネーにいなかったのよね。ちなみに鍵は私以外持ち出し不可能よ」

「それなら死亡推定時刻の前々日にやればいいんじゃない？ 何故一日待ってから死んだのとか謎は残るけど不可能ではない」

だからこそ自信満々に不可能と言い切るのは僕には不自然に感じた。けれどセラスはまだ自信満々に否定する。

「いいえ、不可能よ。確かに前々日に学校に用事で訪れた人間は複数いるわ。けれど、それでも不可能なのよ」

「どうしてですか？」

守織もわかっていないようで不思議そうな表情をしていた。僕もたぶん同じような表情をしているのだろう。

そんな不思議表情兄妹の疑問を解消するべくセラスは口を開いてくれた。

「玄関から学校内に入るのは簡単よ。開けた後はオートロックで閉まらないように開いたまま固定するのだから。でも教室への侵入は不可能なのよ。だって 教師は内廊下の鍵を開けた後は鍵を閉めるまでその扉の前で待機する決まりなのだから」

その言葉を聞いて僕は学校へ登校したあの日を思い出す。確かに教師、ロマネ・シャトーは僕達が死体の発見を告げるまで内廊下の扉から離れていなかった。

たぶん何事もなく用事を済ませていたのなら鍵を閉めるまでそのままだったのだろう。

「悪戯防止の為の対策なのよ。守織が言ったような方法で教室を荒らした生徒が昔いたからそれでね。ちなみに深夜の時間帯に長時間……だいたい5時間ほど学校に残っている人間がいたら警報機が鳴るわよ？ 死体には反応しないけれど。だから学校への居残り自体無理ね」

セラスは言い終えた後、疲れたように大きく溜息を吐いた。

自殺も他殺も不可能。知れば知るほど不可思議な事件に思えてくる。いつその事『天罰』や『祟り』、もしくは『呪い』なんて言葉で済ませてしまった方が楽になれる気がする。

魔女なんて、魔法なんてない事を、『ベアトリーチェ』を否定しようとした時の右代宮戦人くん（本名は戦人と書いてバトラ）以外の登場人物の気持ちがよくわかる。思考停止した方が楽だ。チェス盤をひっくり返したら対戦相手に怒られちゃうんだぜ？

でもここで思考停止するのは負けたする気がするから嫌だ。

魔法は存在する。けれど痕跡が残っていないのなら『コレ』は現実で解決できる事件なのだ。自殺であれ他殺であれ迷宮入りするようなトリックが隠されているようにも  これは人間が行った推理可能な謎だという事はわかっているのだ。

僕にはほとんど無関係な事件だけど無関心では面白過ぎる問題だ。このまま中途半端に話を聞いて終わるのはつまらない。

「とりあえずわかってる事だけ話し合おう。不可能犯罪だろうが可能犯罪だろうが、まずは全部話し終わってからだぜ？」

「流石です愛識お兄様！ 格好良いです！ どんな困難もお兄様には関係ないのですね！！」

そう言つて、守織は満面の笑みで僕に微笑んだ。僕は何故か恥ずかしい気持ちになつてくる。

何故守織はこんなに『愛識あげあげ』なのだろう。

「……貴方達仲良いわね」

セラスは呆れたような、けれど嬉しそうな表情で僕達を、正確には守織の方を見つめながらそう言つた。

人死にの話をしているシリアスになつていた空気は一時和む。けれどセラスがまた真剣な顔付きになつたところでまた空気はシリアスなものに戻つた。

僕は紅茶　もちろん砂糖と牛乳を加えたミルクティー　を飲んで一息入れる。普段は手軽なティーバック(Tea bag)で済ませているがこのお店は違つらしい。味も香りも段違いだ。色の付いたお湯なんて戯言はコレを飲んだら珈琲派の人間も言えないだろう。

そして僕がカップを机に置いた瞬間、タイミング良くセラスが続きを話し始めた。

「……まず死亡推定時刻前に学校に用事で訪れた人間は八人よ。スノウ・ロングゲートとマッティナー・ウェアハウス、エルザ・サルバトル、コレット・シュレディンガー、最後にクロエ・ラブソディとストーン姉妹、付き添いは全部ロマネ・シャトー先生ね。全員責

方達が見付け出した完全なる世界のスパイ候補なんて面白い偶然ね」

「全員の理由と順番、それに日程は？」

「スノウ・ロングゲートとマッティーナ・ウエアハウスが最初。日程は夏期休暇最初の日ね。理由はマッティーナ・ウエアハウスが忘れ物をしたからでスノウ・ロングゲートは付き添いね」

「私と同じですね」

守織が恥ずかしそうに照れ笑いをする。

「次はエルザ・サルバトル。日程は8月12日。理由は捜し物があるかもしれないからとか言ってたわね。コレット・シュレディングーも同じ日よ。彼女も忘れ物だったかしら」

「忘れ物が多いクラスだね。担任の顔が見てみたいよ」

「担任はロマネ・シャトー先生よ。見た事あるでしょ？」

冗談に本気で返されると何も言えなくなる。それがわかっているのかセラスは軽く笑った。けれどすぐに咳ばらいで気持ちを切り替えて続きを話す。

「最後はクロエ・ラプソディとストーン姉妹ね。日程は8月13日。死亡推定時刻の日の前々日ね。理由はブリジット・ストーンの忘れ物。ああ、本当に忘れ物の多いクラスね。守織、宿題をやるのは忘れちゃダメよ？」

「わ、わかってますよソレは！」



「あら、ごめんなさいね」

セラスはクスクスと静かに笑った。

昔はきまじめなミ―ハー騎士だったからかわれる側のセラスもからかう側に成長しているとは、時間というのは人を変えるものだ。少し時間移動を経験しただけで実際に生きている時間は少ない僕にはとても不思議だ。

僕はセラスをじっと見つめる。

「あ、死体の状態を話すのを忘れていたわね」

セラスは「うっかりしてたわ」と少し笑った。大切な話なのに遠坂してんじゃねえですよ。

「ブリジット・ストーンは首の下の方から峰に返しのついたナイフで一突きしての即死。ナイフは魔法で貫通力が高められているタイプみたいで頸椎……首の後ろにある運動神経の束のどこまで貫通していたわ」

いきなり人体の急所なんてやられたら抵抗する前に即死だね。てゆうかそのナイフ欲しい。返しが付いて抜けにくく、しかも深くまで刺さるとか最凶ではないか。ナイフ使いとしては是非手に入れておきたい。

「それで教室の真ん中にナイフを握った状態、首に刺したままの状態で片膝を付きながら死んだみたいよ。写真もいくつか持ってきたけど見るかしら？」

セラスの問いに僕は大きく頷いた。けれど守織は暗い表情で「私は遠慮しておきます」と断った。同級生の死体を見るのは辛いなんて零崎らしくない事でも思っているのだろうか。

ちなみに僕が気になるのは死体よりもナイフの方だ。

セラスは鞆をがさごと漁った後、何枚かの写真を取り出して机の上に広げた。僕はそれを手に取って見つめる。

まず最初に見たのは死体の全体写真。首からの出血のせいで大量の血に失われているせいか肌の色が青白い。そんな青白い手でナイフを首に突き刺している。

死後硬直するまで腕が離れなかったなんて考えられないからやはり他殺だろう。しかし何故犯人は凶器を残し、しかもこんなに不自然な殺し方をしたのだろうか。何かのメッセージ？

次に見たのは死体の手や腕が撮られた写真。それを手にとるとセラスは「それも不自然なところの一つよ」と僕に教えてくれた。

不自然なところ　ブリジット・ストーンの青白い手の甲に残されたいくつもの小さな切り傷を僕はじっくり見る。

何処か見覚えのある傷だ。確かこれは

「なんか特殊な形のナイフですね」

守織の言葉を聞いて僕は「見せて！」と叫んで少し困惑気味の守織から写真を受け取った。

「おおーっ」

血で汚れたナイフは凶々しい形をしていた。基本的にはシンプルなデザイン、銀色の刃物に黒い柄が付いているだけなのだが、銀色の部分が変わっている。峰の部分に返し、矢のように引き抜きにくくする為のものがいくつか付いていて、切る為の道具ではなく、刺す為の凶器みたいな感じだ。

魔法で貫通力を上げているところといい投げナイフのように使うのが正しいのだろう。個性的で魅力的で僕の心を揺さ振ってくる。

「凶器<sup>凶器</sup>貰えないかな？」

「大事な証拠品を渡せる訳ないでしょ？」

セラスはニツコリと笑ったが目は笑っていない。その瞳から『常識で考える』と伝わってくる。

僕は「はい」と子供のように拗ねて頬を膨らませながら返事をした。

すごく残念だ。でも諦めない。帰ってからタカミチに同じものを買ってもらえばいいのだから！

「うふふふふふ……」

「あー……、写真はもういいのかしら？」

「あ、ダメダメ！ まだ一枚見てないのが残ってる！」

僕はそう言って表情も感情も切り替えて最後の一枚の写真を手に取った。

それは被害者の首を後ろから撮った写真だった。確かに貫通していて刃が首の後ろから突き出ている。魔法製品だから骨も貫けるのだろうが切るのではなく刺したのだから……しかも突き出るまでだったのだから有り得ないけど自殺だったのならよっぽど『恐怖』や『痛み』に勝る想いがあつたのだろう。

予想通り他殺ならその想いは『憎しみ』かな？ それとももしかしたらヤンデレ的な『愛』だろうか。

どっちにしても『一年前の事件』について深く知らない理由は見えてこないだろう。あの『ごめんなさい』についてもただ自殺に見せかけたかっただけならわざわざあんな姿で死なせる事はないし。

僕は写真を全てまとめ、それをセラスに返した後、真剣な表情で対面に座るセラスと守織を見る。

「有り得ないけど自殺なら……動機は守織が言ってた『一年前の事件』の犯人がブリジット・ストーンで、良心が耐えられなくなった説、なのかしらね？」

「どちらにしても『一年前の事件』ってのがキーワードだよ。そこに何かあるのは間違いない」

僕は頷いてからそう言い、更に

「だから詳しく教えてくれないかな？」

と言葉を続けた。

僕の言葉を聞いてセラスも守織も暗い表情に変わる。

だいたいの内容は守織から聞いて知っているが、彼女達には当然の如くあまり良い内容ではないらしい。

何もしなくても周りの人間を死に追いやる、何かしたら当然の如く周りの人間を死に追いやる、世界に異常ぜいじょうを作るキツカケを与えた殺人鬼。人の死に悲しみも喜びも感じない壊れた僕には理解できない話だ。

昔の愛姫へいなら親しい人が死んだ時なら悲しみを感じる事ができたのだが、今の愛識ぼくには無理だ。

だから僕は彼女達の心情を無視して話を促す為にじっと見つめる。

そして口を開いたのは

「私が話すわ」

セラスだった。

## 幕間八 真実と虚実

「あれは、一年前の春頃の事だったわね」

大きく息を吐き出して、謝罪するかのように暗い声でセラスは語った。

魔法世界ではよくある討伐依頼クエストを四人一組で行い、教師が試験官として同行して評価を付ける課外授業。

零崎守織、エルザ・サルバトル、ブリジット・ストーン、そして一年前の被害者『ティファ』。その四人で付近の村に現れた低級な魔獣の討伐。教師が諸事情により同行できなかったが、問題ないと彼女達を送り出した。けれどそれが間違いだった。

生物の中でも強さでは上のランクに位置付けられる竜種、その亜種であるワイバーンが群れで現れたそうだ。

しかもその群れが討伐後の疲労した彼女達に襲い掛かってきたのだ。

頼る大人きょうしも不在、自分達は疲労困憊で満足に動けない。そんな状態で襲い掛かる脅威。

そしてそこで起きた悲劇。逃げ遅れた少女が竜の群れに捕まった。そして教師達が駆け付けた時には丁度丸呑みされてしまっていた時だったようだ。

もちろんまだ生きている可能性を信じて教師達は少女を救出しよ

うとする。腹を切り裂いて少女を救い出した。群れを退け無事生還した。

けれど少女は既に息耐えていた。

食べられる前に傷付けられて死んでいたそうだ。

その時に発見されたのが魔法で傷付けられた傷跡。混戦の最中に誰かが魔法で攻撃して彼女を囚にしたのか、足と顔、それに『首』にもそれがあつたらしいが、逃げる時の混戦故の事故と判断。生徒には混乱させない為に魔法の事自体報告なし。悲しい事故が起こったただけ報告。

『事件』の可能性は消去され、『事故』として幕を閉じた。

これが一年前に起きた事件の全て。

「で、あつてゐるわよね？」

セラスの言葉に守織は「はい」と小さな声と共に頷いた。

何故わざわざ『不自然な状態の死体を作った』のかはまだわからないが『首を狙った理由』<sup>メッセージ</sup>は理解できた。

『一年前の事故』は『事件』だったと知っている。お前達の『罪』を知っている。事情を知る人間にだけ自分の『憎しみ』を伝えているのだ。

だから犯人は事情を知る人間のみに絞られる。教師と、被害者以外の死者を含む三人、『足に傷』とだけ少ない情報を伝えた守織も

含まれる限られた人間だ。

事情を知ってる人間から聞いた可能性もあるから昔から知っていた人間とは限らないけどね。

僕は守衛にちらりと視線を向けた後、話し終えたセラスに顔を向け、それから口を開く。

「魔法は誰のだったの？ 残留魔力でわかるでしょ？」

「調べてないわ。アレは『事件』ではなく『事故』として処理したから」

死人に口なし。家族も友達もない孤児の為に評判を下げるような危険<sup>リスク</sup>を背負って調査する必要はないか。

なるほど。合理的だね。正義の味方<sup>ヒーロー</sup>なら嫌いそうな終わらせ方だ。自分と家賊以外どうでもいい戦争の英雄<sup>ヒーロー</sup>の僕は何も思わないけどね。

むしろ

「 最初から食べられたままで助けずに切り捨てたらいいのに」

他人はどうでもいいで終わらせられないからこそその立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指す魔法使い達を育てる教育者だと思っただけだね。

「貴方は死んだまま、食べられたままで終わりたいの？ そんな被害者の気持ちがわかる？ 私なら嫌ね。死ぬ時ぐらい安らかに死にたいわ」



少し責めるような言い方のセラス。優しく正しい正義側の人間らしい反応だ。

最終的に事故として片付けた人間の言葉ではないけどね。説得力に欠ける偽善者の言葉だ。

「わかるはずないじゃん。僕は無神論者だぜ？ 死んだ後の魂の概念すら否定してるのに死んだ後の気持ちなんてわかるはずがないよ。喰われて死んだ人間の気持ちを知りたいのなら実際に喰われて一回死んだ人間、もしくは食べた側の肉食獣か食人鬼にでも聞いてくれ」

僕の言葉を聞いてセラスは少しムツとした表情で僕を睨んだ。

僕はどうでもいいとばかりに欠伸をする。

「……………」

「……………」

険悪な雰囲気のまま沈黙が流れる。

「や、やめましょうよ」

それからそんな嫌な沈黙を終わらせ、雰囲気を変えたのはやっぱりというかなんというか癒し系代表の守織だった。

「もう終わった事で……関係ない事で二人が言い争っても仕方ないですよ。ねっ？ 仲直りですー」

そう言つて僕とセラスの手を強引に掴み、握手させるように手を合わせ、その上から握り締めてぶんぶんと上下に振り回した。

それだけでセラスは親バカな母親のような表情で「仕方ないわね……ごめんなさいね」と頭を下げた。

僕も一応「ごめんね」と明るく謝る。

それで守織は満足したようだ。

「さあ、今回の事件の話も昔のじけ 事故の話も終わりです！気分を変えて完全なる世界のスパイの方の話でもしましょう！」

守織はおどけた笑顔でそう言った。

僕はすっかり温くなった紅茶で喉を潤しながらセラスからが話し出すのを待つ。

「そうね、そうしましょうか」

そこでセラスは一息吐く。

「貴方達が調べてくれた候補、灰色から白と断定出来た残りの灰色は現段階ではスノウ・ロングゲート、マッティーナ・ウエアハウス、コレット・シュレディングー、エルザ・サルバトル、クロエ・ラプソディの五人よ。この中の誰かが黒のはずね」

犯人候補とスパイ候補の名前が被っている。僕が予想した通り今回の事件とスパイの関連性がありそうだ。

「クロエ・ラブソディ以外全員同じ学年の同じクラス。クロエ・ラブソディ以外二人部屋の寮暮らし。部屋はスノウ・ロングゲートとマッティーナ・ウェアハウスが同じ、コレット・シュレディングーとエルザ・サルバトルが同じ……ちなみにブリジット・ストーンとロール・ストーンは姉妹で同じ部屋よ。クロエ・ラブソディは特例で特別に一人部屋ね」

「事件の話に戻るんだけどそれならロール・ストーンがブリジット・ストーンの不在に気付くんじゃない？」

「ああ、その件を話していなかったわね。ブリジット・ストーンは死亡推定時刻前日の夜までちゃんと部屋にいたそうよ。でもロール・ストーンは最近不眠症気味で薬で毎日正確な時間、夜の１１時には眠っていたから死亡推定時刻前にいつ部屋から、何故消えたのかはわからないみたいね」

セラスはそう言つて溜息を吐く。

「……彼女、自分が起きてたらつて自分を責めてたわ」

そりゃあそうだろうね。僕は罪悪感を感じるという当たり前の事に納得する。

しかし夏休みは夜更かしするのが学生の基本と思っていたのだがロール・ストーンはその基本から外れているみたいだ。

それに睡眠薬服用か。それなら物音で起きるなんてないだろうね。でも何故学年が違うのに姉妹だからと同じ部屋なのだろうか。

僕は感じた疑問をそのままセラス達に尋ねてみる。するとすぐに

返事が返ってきた。

「ブリジット・ストーンと住んでいたのが一年前に死んだ彼女だからよ。本当はクロエ・ラブソディとロール・ストーンが同室だったのよ？　けど同室の人が死んだ妹が心配だってね」

「仲良し姉妹で有名でしたしね」

セラスに続いて守織も言葉を紡ぐ。

優しい姉って事か。ブリジット・ストーンも誰にでも優しい人間だったらしいし素晴らしい姉妹だね。

まあ、性格が良くないとクロエ・ラブソディみたいな性悪の友人にはなれないだろうけど。

僕は心の中でクスツと笑う。

「さて、これで現在の事件、昔の事件、貴方達の搜索活動……重要な話は全部終わっちゃった訳だけどまだ他にも何かあるかしら？」

セラスは鞆を掴みながらそう言った。それに「私も忙しいからこの後用事があるんだけど」と続ける。

携帯を取り出して時間を見るともうすぐ正午。セラスと話す内容もないし、そろそろお腹も減ってきたし、ここらでお開きが妥当かな。

「そうだね。僕もやりたい事あるし」

「やりたい事？」

セラスは立ち上がりながら僕に尋ねた。さりげなく伝票を掴んでいるところが大人らしい。

「うん、学校の鍵貸してくれない？」

僕はそう言って右手を差し出した。それだけでセラスは察してくれたようでいくつも鍵が付いた束を差し出す。

僕はそれを受け取って「ありがとう」と笑った。

「なくさないでね？ それと学校に悪戯もしないようにね」

「わかってまーす」

「どれがどの鍵かは貼ってあるシールでわかるから……じゃあね」

そう言っただけでセラスは去っていく。守織はその後ろ姿に「ご馳走様です」と告げた。どうやら守織も伝票を取ったセラスに気付いていたらしい。

「私達も行きましょうか」

僕もセラスに「ゴチになりまーす」とお礼を言った後、守織も立ち上がりながらそう言った。

僕は「そうだね」と頷きながら立ち上がる。

さあ、密室の謎のヒントを探しに学校へ行こう。

## 幕間九 教室と密室

「ここからは別行動」

そう言い出したのは誰だろうか。もちろん僕だ。記憶を辿って口調や声を思い出してみると僕の口から守織に向かって発せられた言葉だった。ついさっき言った言葉だ。記憶力に絶対的な自信がなくても思い出せる。昨日の晩御飯をすぐに思い出せない人間でもさっき言った言葉ぐらい数瞬で思い出せる。

つまり間違いなく間違えようがなく僕が考え提案した言葉なのだ。そして殺人鬼に憧れる守織が僕のお断りを断るはずがなく、残念そうな表情をしていたが了承された提案なのだ。

しかしトイレやお風呂、寝る時以外は四六時中一緒だった守織から別れ、久しぶりの単独行動を取る事になった僕は、自分の提案を撤回して守織と一瞬に行動したい気持ちでいっぱい、いっぱいだった。

何か不幸な出来事に遭遇した訳ではない。誰にも会っていないし何も起こっていない。僕は何事もなく無事に学校前に辿り着いていた。

それだけなら問題ない。無問題と書いてモーメントと読んでもらって結構な感じだ。何事も起きていないなら、何事も起きていないと認識しているなら僕の心情も普通なら変化せずに、問題なく僕の人生という物語は進むはずだ。

けれど過去や現在に問題はなくても未来にはある。他人にとって

は無問題だけど僕には大問題な未来が待っている事がわかってしまう、考えてしまう。僕は気付いてしまった。そう、つまり僕の状況は、心情が変化するキツカケは過去や現在ではなく未来を想像したからというネガティブ思想からきた問題という訳だ。

ここは何処だ？

アリアドネーの女子学区地区。

目の前にあるのは何だ？

アリアドネーの女子校。

僕は何をする？

女子校に入って事件のヒント探し。

僕は何だ？

女装して変装した変態。

別に女装にも搜索にも変態的な目的がある訳ではない。けれど一人で夏季休暇中で誰もいない学校に侵入する女装した成人していると偽造している男、しかも他の学校の教職員。言葉だけで説明すれば、事情を知らない人間が僕を見ればそう受け取られてしまうのだ。

個人行動でゆっくり観察したいと思いついた事が裏目に出た。一人になると、話し相手がいなくなると考え事がしやすいのが逆効果だった。守織と一緒になら思いついてしまう事がなかった事だ。

けれど今僕は一人で、考えるだけで変わらないのは当然の事で、学校に入らずに逃げ帰るなんて選択肢はないのだ。

僕は何も考えないようにして校門を通り過ぎ、まず最初に密室の

原因となっているオートロックで閉まる扉の前に辿り着いた。

オートロックというのは犯人には便利な道具だ。入りさえすれば出る時は鍵がなくても自動的に施錠してくれる。つまり出る時の問題は考えずに済む。マンションのオートロックなんかがそうだ。アレがあれば安心できる人がいるらしいが僕は安心できない。住人が入る時に何食わぬ顔で侵入して、そのまま反抗に及び、閉じ込められる事なく容易に脱出できる。絶対に攻略不可能な関門ではない。

だから難しい問題でも考えれば答えを思い付くはずだ。僕は問題のオートロックの扉を観察する。現実世界の、日本の技術には劣っている印象を受ける。たぶんアイデアだけ得て独自開発したのだろう。一昔前の技術が使われているような感じだ。

「もしかしたら外せるかな？」

扉は新しくても校舎は歴史ある、悪く言えば古びた建造物。ならば強引にやれば取り外せるのではないかと僕は扉を掴んで試行錯誤する。

けれど扉は外れず開かず壊れず、単純な方法では侵入できないとアリアドネー女学生には安心できる証明をしてくれた。

次に鍵を取り出してみる。複雑な形だ。大量生産なんて考えず、複製なんかさせてたまるかという職人の気持ち伝わってくる一品だ。まあ、オートロックなんて技術を使っているところは少ないから大量生産なんか考えていないだけで勘違いかもしれないが。

つまり鍵自体をどうにかするのも不可能って訳だ。そして鍵を持ったセラスは扉を開かなければいけない瞬間にはアリアドネーにい



なかった。だから事件に鍵が使われていない可能性が高い。

「とりあえず開けてみるかな」

少し感じる寂しさを紛らわすように独り言を呟く。そして複製困難な鍵を鍵穴に差し込んで扉を開いた。それからそのまま入らずに扉を閉めてみた。鍵を使わずに扉を開けようと試みてみる、がやはり開かない。僕はオートロックが間違はなく稼働している事を確認した後、再び扉を開けた。そして誰も入って来ないように紐でノブを固定する事はせずにそのまま中に入る。すると後ろで扉が閉まった。オートロックによって施錠されているのだらう。

誰もいない学校は静かだった。誰もいないからこそ普段は騒がしいだらう学校は静寂に包まれていた。

広大な密室。二重に施錠された侵入困難な学校。此处で殺人事件は起きた。

事件現場に向かう。玄関を過ぎ、中庭を横目に階段を上がり、そして密室を作り出した二つ目の場所に辿り着いた。教室は施錠されていないから玄関の扉から侵入でき、この扉も開く事ができれば問題は解決される。

まずは玄関の時と同じように強引に扉を外そうとした。が、少し揺れるが外す事は鍵のせいでは不可能だった。窓があるならと窓も試してみたが同じ。グラグラと不安定なのに、の形をした、鉄杭にバーの付いた持ち上げ式の鍵のせいで壊す以外に入れそうもない。どちらも単純な方法では侵入できそうにない。

「諦めて普通に入ってみるか」

また独り言。独りになるといついつい出てしまつて聞かれてないか少々不安だ。

鍵穴に差し込んで回して、鍵があれば簡単に中に入る事ができた。そしてそのまま教室に向かう。

「W A W A W A 忘れ物」

誰もいない教室に入つても『ごつ、ごゆっくりにいい』と叫ばなくてもいい展開にはならなかった。

施錠されていない教室の扉は簡単に開いた。犯行現場となつたであろう場所はある事があったのは嘘であつたかのように死体も血痕も、黒板にあつた文字も当然のように消えている。

そんな教室の中に入つてまず確かめたのは窓。ここが簡単に開けば少し難しいけれど侵入自体はできそうだ。けど窓はびくともしなかった。講義を行う教室に隙間風を許してはいけないのか、内廊下の窓よりも頑丈なものだった。

鍵を開けて窓を開いて外を見る。魔法なしでは危険な高さだ。落ちたら無事には済まないだろう。そう確認すると僕は窓を閉めて施錠した。

ここまでいろいろ見たが予想の範囲内の、現実世界でも常識の範囲内である事しか収穫がなかった。

『零崎愛識』なら侵入も容易で、推理も簡単に的確に見事に行えるのだろつ。けれど零崎愛識には無理だった。そう結論を出さざる

をえない。

内廊下へ入る扉を施錠して、階段を降りて、中庭に出て芝生に寝転ぶ。屋上の床部分になっているのであるう硝子の天井から差し込む光が気持ち良　屋上？

僕はもしかしたらと思い、先程降ったばかりの階段を駆け上がった最上階から屋上へと続く階段を見付けて、そしてその階段も息を切らしながら駆け上ると外に出る為の扉を発見した。

けれど僕の思い付きは無駄だった。

屋上に出る為の扉は太い鎖で頑丈に固定され、完全に開かないように処理されていた。つまり魔法を使って上空から侵入できないなら魔法を使わずに、校舎を攀じ登って屋上から入るという男らしい肉体派な、僕には絶対できない方法すらも無理だったという事だ。

それから約4時間。無駄に頑張って搜索してみたが、この日の僕には何も収穫はなく、結局何も得られるものはなかったのだった。

## 幕間九 教室と密室（後書き）

ここまでの話でブリジット・ストーン殺人事件のヒントは終了。  
漸く最初の謎解きが始められる段階になりました。

見事解き明かした方には安い茶葉で淹れた紅茶とクッキーでも御馳走しましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8926x/>

---

バラバラマジカル～魔法使いと殺人鬼～

2011年12月17日20時55分発行